

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

内 閣 文 書	
函	三九六
架	冊
架	冊

九六二力之二

施政年報

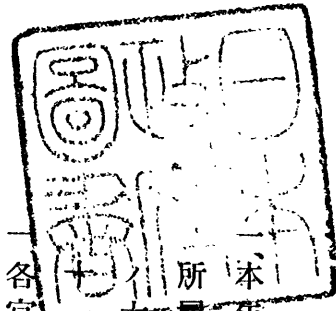
明治

内	閣	文	原
和	書	二九六八	雨
類	冊	架	

統監官房

317-921

317
29680
384



凡例

和九〇八。號

本年報ハ明治三十九年統監府開應ヨリ同四十年末ニ至ル期間統監府同所屬官署ニ於テ施行シ及韓國政府ノ各機關ヲシテ施行セシメタル政務大綱ヲ起述スルヲ目的トスト雖其以前ニ遡リテ沿革ヲ略説シ且同四年ノ施設ニ亘リテ記述シタル所少カラス

各官廳ノ豫算決算及通信鐵道等ノ作業其他會計年度ニ關係アル事項ニ就テハ四十年末迄ニ亘リテ記述セリ但韓國政府ノ會計年度ハ曆年ト同一ナルヲ以テ四十年末迄トス

一年號ハ主トシテ日本年號ヲ用ウ其韓國年號ヲ用ウル場合ニハ大抵日本年號ヲ併記シテ對照ニ便ス尙最近數年ニ於ケル兩國年號ヲ對照スレハ左ノ如シ

凡例	日本年號	韓國年號	西曆
	明治三十七年	光武八年	一九〇四年
	明治三十八年	光武九年	一九〇五年
	明治三十九年	光武十年	一九〇六年

凡例

二

明治四十年 隆照元年(八月改元) 一九〇七年
明治四十一年 隆照二年 一九〇八年

一、韓國外交ノ統轄監督ハ統監府所掌事務ノ最重要ナルモノナリト雖未タ詳細記述ノ時機ニ達セサル事項多キヲ以テ外國及外國人關係事務ノ一端ヲ録スルニ止メタリ
一、附録ハ明治四十年末迄ニ發表セラレタル重要ノ條約並統監府及韓國政府ノ發布シタル重要法令ヲ舉ク但右法令ニ對スル改正ハ明治四十一年中發布ノ分ヲモ採リテ之ヲ補ヘリ

明治四十一年十二月

目次

第一章 協約及議定書	一
第二章 統監府ノ組織	六
第一節 統監府	六
(一) 官制	六
(二) 事務分掌	一〇
(三) 韓國顧問制度	一二
(四) 臨時間島派出所	一四
第二節 理事廳	一五
(一) 官制	一五
(二) 位置管轄區域並定員	一七
(三) 理事廳支廳	一九
第三節 所屬官廳	二一
(一) 通信官署	二一
目次	二一

目次

(一) 勸業模範場	二三
(二) 鐵道管理廳	二四
(三) 法務院	二五
(四) 財政監査廳	二五
(五) 觀測所	二六
(六) 營林廠	二七
(七) 營林廠	二七
第四節 經費	二八
(一) 豫算ノ所管	二九
(二) 統監府	二九
(三) 通信及鐵道	三一
(四) 營林廠	三一
(五) 韓國政府立替金	三二

第三章 韓國ノ制度

第一節 制度ノ沿革	三四
第二節 內閣付中樞院	三五

(一) 內閣官制	三六
(二) 內閣ノ更迭	三九
(三) 中樞院	四一
第三節 各部	四二
(一) 明治四十年協約後ニ於ケル官制改正	四二
(二) 各部官制通則	四三
(三) 各部官制	四四
(四) 日本人任用	四九

第四節 地方	五〇
(一) 從來ノ地方行政	五〇
(二) 明治三十九年ノ改正	五二
(三) 明治四十年ノ官制改正	五五

第五節 官規	五七
(一) 官吏ノ俸給	五八
(二) 任用	五九

第六節 軍制	六〇
(一) 解散前ノ軍隊	六〇

目次

目次

(一) 近衛ノ編制.....六二

第四章 宮中制度

第一節 宮中及府中.....六三

第二節 宮中肅清.....六六

第三節 宮内府官制.....六九

第四節 帝室財産整理.....七四

(一) 帝室財産.....七四

(二) 驛屯土處理.....七五

(三) 參政及雜稅處理.....七七

(四) 財産整理局.....七八

(五) 帝室財産ノ移屬.....八〇

第五章 外國及外國人關係事務

第一節 在外韓國公館ノ撤廢及在韓外國公使館ノ撤退.....八一

第二節 外國及外國人關係事務.....八二

(一) 旅券.....八二

(二) 護照.....八四

(三) 移民保護.....八四

(四) 歸化.....八六

(五) 外國人ノ利益.....八七

第六章 司法付法制

第一節 司法事務ノ改善.....八九

(一) 從來ノ裁判.....八九

(二) 補佐官ノ配置.....九一

(三) 法令ノ補修.....九二

第二節 裁判所ノ設置.....九四

(一) 裁判所ノ構成.....九四

(二) 裁判所ノ開廳.....九七

(三) 司法事務ニ關スル法令.....九八

第三節 法制.....九九

目次.....五

目次

六

(一) 不動産法規……………九九

(二) 鑛業法規……………一〇三

(三) 法典ノ編纂……………一〇三

第四節 監獄……………一〇四

第七章 警察

一〇六

第一節 韓國警察……………一〇六

(一) 從來ノ警察制度……………一〇六

(二) 警務顧問備聘……………一〇七

(三) 第一期警務擴張……………一〇九

(四) 第二期警務擴張……………一一一

第二節 日本警察……………一一三

(一) 日本警察ノ起原……………一一三

(二) 統監府設置後ノ日本警察……………一一四

第三節 日韓警察ノ共助及合一……………一一六

(一) 兩國警察ノ共助……………一一六

第四節 憲兵

一一八

(一) 兩國警察ノ合一……………一一八

(二) 新官制ト警察……………一二〇

第四節 憲兵……………一二二

(一) 日露戰役前後ニ於ケル憲兵隊……………一二二

(二) 統監府設置後ニ於ケル憲兵隊……………一二三

(三) 憲兵ノ増派……………一二五

第八章 治安

一二八

第一節 地方ノ民擾……………一二八

(一) 民擾ノ種類……………一二八

(二) 閔宗植ノ亂……………一三〇

(三) 崔益鉉ノ亂……………一三一

第二節 明治四十年下半年以後ノ各地暴動……………一三三

(一) 京城ノ騷擾……………一三三

(二) 京城ノ小戰……………一三五

(三) 地方ノ暴徒……………一三八

目次……………一三八

七

目次

(四) 暴徒ノ討伐……………一四一

(五) 暴徒鎮定ト韓國政府……………一四六

第三節 新聞紙及結社……………一四八

(一) 新聞紙……………一四八

(二) 結社……………一五〇

八

第九章 財政金融

第一節 財務ノ機關

(一) 財政顧問……………一五二

(二) 徵稅機關……………一五三

(三) 稅關……………一五七

(四) 金庫……………一五九

(五) 會計檢査局……………一六二

第二節 歲計……………一六三

(一) 整理以前ノ財政狀態……………一六三

(二) 會計法規ノ整備及施行……………一六六

(三) 光武十年度(明治三十八年)豫算……………一六九

(四) 隆熙元年度(明治四十年)豫算……………一七二

(五) 隆熙二年度(明治四十一年)豫算……………一七七

第三節 租稅

(一) 租稅制度……………一八三

(二) 稅制整理……………一八五

(三) 宮内府雜稅ノ移屬……………一八九

(四) 手数料付印紙收入……………一九〇

(五) 徵稅制度……………一九一

第四節 國債

(一) 起債……………一九二

(二) 使途……………一九三

(三) 用途……………一九五

第五節 貨幣

(一) 幣制ノ紊亂及整理……………一九八

(二) 舊白銅貨ノ還收……………二〇一

(三) 其他舊貨ノ還收……………二〇五

(四) 新貨ノ流通……………二〇八

目次

九

目次

第六節 金融

- (一) 金融資金……………二二二
- (二) 共同倉庫會社……………二二五
- (三) 政府倉庫……………二二五
- (四) 普通銀行……………二二七
- (五) 農工銀行……………二二八
- (六) 手形組合……………二三〇
- (七) 地方金融組合……………二三二

第十章 産業

第一節 農業

- (一) 勸業模範場……………二三四
- (二) 園藝模範場……………二三九
- (三) 棉花栽培事業……………二三三
- (四) 人蔘事業……………二三三
- (五) 未墾地利用法……………二三四

第二節 林業

- (一) 植林ノ經營……………二三七
- (二) 成林地ノ保護……………二四一
- (三) 營林……………二四一

第三節 水産業

- (一) 韓海通漁ノ沿革……………二四四
- (二) 朝鮮海水産組合……………二四五
- (三) 捕鯨取締……………二四七
- (四) 製鹽業……………二四七

第四節 鑛業

- (一) 法規……………二四九
- (二) 事業……………二五二
- (三) 鑛業ト外國人……………二五五
- (四) 官營鑛山……………二五八

第五節 工業

- (一) 官業……………二五九
- (二) 工業ニ關スル施設……………二六一

目次



目次

第六節 商業

(一) 京城博覽會

(二) 度量衡

(三) 其他ノ施設

第七節 外國貿易

(一) 貿易ノ發達

(二) 日韓貿易

(三) 船舶

(四) 貿易ニ關スル施設

第八節 觀測

第十一章 公共事業

第一節 道路

第二節 水道

(一) 仁川水道

(二) 平壤水道

(三) 釜山水道

第三節 港灣

第四節 燈臺

第十二章 通信

第一節 日韓通信機關合同

(一) 韓國通信事業ノ沿革

(二) 通信機關引繼

第二節 引繼後ノ施設

(一) 通信機關ノ擴張

(二) 取扱事務ノ擴張

第三節 管理局設置後ノ施設

(一) 管理機關ノ設置

(二) 現業機關ノ増設

第四節 通信事業ノ發達

(一) 事業ノ發達

目次

目次

(二) 韓國國庫金取扱ノ成績……………三三三
 (三) 事業ノ收支……………三二五
 (四) 通信事業ノ事變……………三一九

第十三章 鐵道

第一節 韓國鐵道ノ沿革

(一) 京釜線……………三三二
 (二) 京仁線……………三三四
 (三) 京釜鐵道買收……………三三四
 (四) 軍用線……………三三五
 (五) 韓國鐵道ノ統一……………三三六
 第二節 建設及改良……………三三七
 (一) 京釜線復舊工事……………三三七
 (二) 京釜線建設及改良工事……………三三八
 (三) 舊軍用線建設及改良工事……………三二九
 (四) 復舊建設及改良費……………三三一

(五) 工作……………三三四

第三節 作業……………三三五

(一) 線路車輛及建設費……………三三五
 (二) 運輸ノ施設……………三三九
 (三) 運輸ノ成績……………三四一
 (四) 收支……………三四八
 (五) 事故……………三五〇

第十四章 教育

第一節 教育制度……………三五三

第二節 初等教育……………三五五

(一) 從來ノ初等教育……………三五五
 (二) 改正初等教育令……………三五七
 (三) 普通學校ノ經營……………三五八
 (四) 修學院……………三六三
 第三節 高等教育……………三六四

目次

(一) 師範學校……………三六四

(二) 高等學校……………三六七

(三) 外國語學校……………三六八

(四) 農商工學校……………三七〇

第四節 臨時學事擴張ノ成績……………三七一

(一) 臨時學事擴張費ノ使途……………三七一

(二) 官公立學校ノ現況……………三七三

第五節 學部所管以外ノ教育機關……………三七六

(一) 農林學校……………三七六

(二) 工業傳習所……………三七八

第十五章 衛生

三八〇

第一節 大韓醫院……………三八〇

第二節 明治四十年防疫……………三八四

第十六章 居留帝國國民ニ對スル施設

三八九

第一節 施設

三八九

(一) 居留民團法ノ施行……………三八九

(二) 教育事業ノ獎勵……………三九三

(三) 金融機關ノ監督……………三九四

(四) 布教ノ取締……………三九六

(五) 保安規則ノ制定……………三九六

(六) 居留帝國國民ニ對スル裁判……………三九八

第二節 現況

三九九

(一) 戶口及其分布……………三九九

(二) 民團……………四〇九

(三) 學校……………四一二

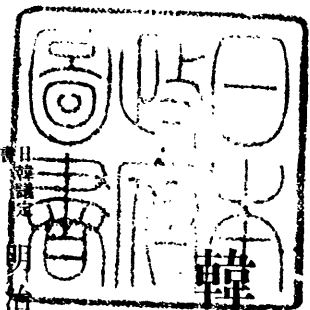
(四) 銀行……………四一八

附錄

韓國施政年報

明治三十九年
明治四十年

第一章 協約及議定書



明治三十七年二月在京城ノ帝國代表者ハ韓國政府ト重要ナル協商ヲ遂ケ
同二十三日兩國代表者ニ於テ議定書ノ調印ヲ了セリ時ニ帝國ト露國トノ
戰端既ニ啓ケ韓國ハ滿州ト共ニ東洋事務局ノ中心タリ帝國カ政治上外交上
並ニ軍事上ノ見地ヨリ韓國政府ト特別ノ協商ヲ爲スノ必要ハ素ヨリ言テ
俟タサル所ニシテ本議定書ハ則チ日韓兩國ノ關係ヲ一新シ其後ニ於ケル
兩國關係推移ノ端ヲ爲スモノトス

日韓議定書ハ前文及六箇條ヨリ成リ(一)韓國政府カ帝國政府ヲ確信シ施政
ノ改善ニ關シテ其忠告ヲ容ルルコト(二)韓國皇室ノ安全康寧ノ保證(三)韓國
ノ獨立及領土保全ノ保證(四)第三國ノ侵害若クハ内亂ニ依リ韓國皇室ノ安
寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ニ帝國政府ハ臨機ノ措置ヲ取り韓國政
府ハ之ニ對シテ十分ノ便益ヲ與フルコト並ニ帝國政府ハ軍事上必要ノ地

協約及議定書

協約及議定書

日韓協約

點ヲ收用シ得ルコト(五)兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ本協約ノ趣意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルヲ得サルコト(六)帝國代表者ト韓國外部大臣トノ間ニ未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコトヲ定ム

超エテ同年八月廿二日ニ至リ日韓兩國政府代表者ハ京城ニ於テ協定シタル協約ニ調印セリ本協約ハ三項ヨリ成リ財政外交兩顧問ノ傭聘並ニ韓國政府カ外國トノ條約締結其他重要ナル外交案件即チ外國人ニ對スル特權讓與若クハ契約等ノ處理ニ關シテ豫メ帝國政府ト協議スヘキコトヲ規定ス蓋シ二月ノ議定書ニ依リ日韓兩國ノ關係大ニ進ミタリト雖韓國ニ於ケル施政改善ノ事タル決シテ容易ニアラス且ツ外交ニ關スル議定書ノ取極ハ韓國政府カ同議定書ノ趣意ニ反スル協約ヲ第三國ト締結スルヲ得サルノ一項ニ限り一般外交ノ處理ニ亘リテ詳言スル所ナシ是レ即チ本協約ヲ以テ更ニ兩國ノ關係ヲ一層明確ニ規定シタル所以ナリ

本協約ノ結果トシテ大藏省主稅局長目賀田種太郎ハ韓國政府財政顧問ニ米國人ヂーダブリュー、スチーヴンスハ同外交顧問ニ何レモ帝國政府ノ推薦ニ依リテ就任セリ次テ警視丸山重俊モ亦韓國政府ノ傭聘ニ應シテ警務

財政外交
顧問
及警務
顧問

ポーツマ
ス條約
韓國

顧問ノ職ニ就キ其他日本人ノ韓國政府ニ傭聘セラレルモノ漸ク多ク施政ノ改善徐々其緒ヲ啓カントシ外交上ニ於テモ能ク帝國ノ利益及主張ト諧調ヲ失セサルヲ得タリ

明治三十八年九月日露兩國間ニ締結セラレタル「ポーツマス」條約第二條ニ於テ露國政府ハ帝國カ韓國ニ於テ政事上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ帝國カ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導保護及監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻害シ又ハ之ニ干渉セサルヘキヲ約シタリ之ヨリ先キ同年八月十二日調印セラレタル日英同盟約款モ亦日本國ハ韓國ニ於テ政事上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進セムカ爲メ正當且ツ必要ト認ムル指導監理及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ承認スト規定シ即チ一方ニ於テハ日英同盟約款ノ支持他方ニ於テハ日露講和條約ノ承認ニ依リ日韓兩國ノ關係ハ日露戰爭終結ト前後シテ大進歩ヲ來タシ韓國ニ對スル帝國ノ地位益々鞏固且明確ヲ加フルニ至レリ帝國政府ハ乃チ此新關係ニ基キ韓國ニ對スル保護指導ヲ完ウシテ益々兩國ヲ結合スル利益共通ノ主義ヲ鞏固ナラ

協約及議定書

明治三十
八年日韓
新協約

シメシタリト欲シ此目的ヲ以テ同年十一月十七日謂ユル日韓新協約ヲ締結シタリ同協約ハ前文及五箇條ヨリ成リ(一)外交權ノ收受(二)統監ノ駐劄(三)日韓兩國間現存條約及約束ノ効力繼續(四)韓國皇室ノ安寧及尊嚴維持ノ保證ヲ約セリ本協約ハ日露戰役中ニ於ケル議定書及協約ヲ享ケテ之ヲ大成シタルモノニシテ永ク日韓兩國關係ノ基礎タルヘキモノナリ

統監府設
置

此ニ於テ帝國政府ハ愈々在京城公使館ヲ撤廢シテ統監府ヲ置キ統監ヲ駐劄セシムルニ決シ同年十二月二十日勅令第二百六十七號ヲ以テ統監府及理事廳官制ヲ公布シ統監府及理事廳ハ翌明治三十九年二月一日各其事務ヲ開始セリ

明治四十
年日韓
協約

統監府既ニ設置セラレ韓國ノ外交ハ擧ケテ帝國政府ノ管理ニ歸シ之ヲ内ニシテハ施政ノ改善漸ク其緒ニ就クト雖一朝ニシテ數百年ノ積弊ヲ一洗シ保護ノ實ヲ擧ケンコト固ヨリ容易ニアラス加フルニ維新更始ノ際ニ當リ上下ノ人心動モスレハ其嚮フ所ヲ誤リ各般ノ妨碍百出セリ偶々明治四十年夏ニ至リ海牙密使事件ノ起ルアリ統監ハ更ニ韓國政府代表者トシテ協約ヲ訂立シ日韓兩國ノ關係ヲ一層密邇セシムルノ必要ヲ認メ同七月廿

四日兩國代表者ノ調印ヲ了セリ同協約ハ前文及七箇條ヨリ成リ先ツ前文ニ於テ兩國政府カ韓國ノ富強ヲ圖リ韓國民ノ幸福ヲ増進セントスルノ目的ヲ有スルコトヲ宣明シ(一)韓國政府カ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト(二)法令制定及重要ナル行政上ノ處分ニ付豫メ統監ノ承認ヲ受クヘキコト(三)司法事務ト普通行政事務トノ區別サルヘキコト(四)高等官吏ノ任免ニ統監ノ同意ヲ要スルコト(五)統監ノ推薦ニ依リ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコト(六)統監ノ同意ヲクシテ外國人ヲ僱聘セサルコト(七)明治三十七年八月調印日韓協約第一條即チ財政顧問僱聘ノ廢止サルヘキコトヲ約ス此協約ハ明治三十八年ノ新協約ト互ニ相補ヒ特ニ韓國ノ内政改善ニ關シテハ既往三種ノ協約ニ規定スル所ニ比シ一層我保護權行使ノ範圍ヲ擴張シ其効果ヲ的確ナラシメンコトヲ目的トシテ日韓兩國ノ關係ニ一新紀元ヲ劃シタルモノトス

第二章 統監府ノ組織

第一節 統監府

(一) 官制

明治三十八年十一月勅令第二百四十號ヲ以テ協約ニ基キ統監府及理事廳ヲ韓國ニ置クノ件發布セラレ次テ同年十二月二十日勅令第二百六十七號ヲ以テ統監府及理事廳官制ヲ定メラル

統監府ハ韓國京城ニ之ヲ置キ府ニ統監ヲ置ク統監ハ親任トシ天皇ニ直隸シ外交ニ關シテハ外務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經其他ノ事務ニ關シテハ内閣總理大臣ヲ經テ上奏ヲ爲シ及制可ヲ受クルモノトス統監ノ職權左ノ如シ

(一) 統監ハ韓國ニ於テ帝國政府ヲ代表シ帝國駐劄外國代表者ヲ經由スルモノヲ除クノ外韓國ニ於ケル外國領事館及外國人ニ關スル事務ヲ統轄シ併セテ韓國ノ施政事務ニシテ外國人ニ關係アルモノヲ監督ス

統監ハ條約ニ基キ韓國ニ於テ帝國官憲及公署ノ施行スヘキ諸般ノ政務ヲ監督シ其ノ他從來ノ帝國官憲ニ屬シタル一切ノ監督事務ヲ施行ス(舊統監府及理事廳官制第三條)

(二) 統監ハ韓國ノ安寧秩序ヲ保持スル爲メ必要ト認ムル時ハ韓國守備軍ノ司令官ニ對シ兵力ノ使用ヲ命スルコトヲ得(同第四條)

(三) 韓國ノ施政事務ニシテ條約ニ基ク義務ノ履行ノ爲必要ナルモノハ統監ニ於テ韓國政府ニ移牒シテ其ノ執行ヲ求ムヘシ但シ急施ヲ要スル場合ニ於テハ直ニ韓國地方官憲ニ移牒シ之ヲ執行セシメ後之ヲ韓國政府ニ通報スヘシ(同第五條)

(四) 統監ハ帝國官吏其ノ他ニシテ韓國政府ノ傭聘ニ係ル者ヲ監督ス(同第六條)

(五) 統監ハ統監府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得(同第七條)

(六) 統監ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ條約若ハ法令ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ

又ハ取消スコトヲ得(同第八條)

(七)統監ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス(同第九條)

統監ハ内閣總理大臣ヲ經テ所部官吏ノ叙位叙勳ヲ上奏ス(同第十條)

右ノ外明治三十九年法律第五十七號ヲ以テ韓國ニ關スル事項ニシテ法律ノ規定ニ依リ内國官憲ノ管掌ニ屬スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ統監ノ職權ニ屬セシムルコトヲ得ト定メラレ同年勅令第六十七號ヲ以テ其ノ事項ヲ指定セリ即チ居留民團法、清國及朝鮮國在留帝國臣民取締法、戶籍法、在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法、外國領海水產組合法、郵便法、電信法及電信線電話線建設條例中各省大臣ノ管掌ニ屬スル事項是レナリ其ノ他法律又ハ命令ノ規定ニ依リ統監ノ職權ニ屬セシメラレタル事項尙多シト雖今一々之ヲ擧ケス

統監府職員

統監ノ外統監府ノ職員ハ初メ總務長官(勅任)、農商工務總長、警務總長(勅任)又ハ奏任、秘書官(專任一人奏任)、書記官(專任七人奏任)、警視(專任二人奏任)、技師(專任五人)、通譯官(專任十人奏任)、屬警部、技手、通譯生(專任四十五人判任)ヲ定員ト

シタルカ明治四十年三月勅令第十五號ヲ以テ官制ヲ改正シ外務總長(勅任)又ハ奏任)ヲ置キ同時ニ書記官(專任七人)ヲ六人ニ減シ次テ同年三月勅令第六十五號ヲ以テ技師定員五人ヲ十人、内一人ヲ勅任ト爲スコトヲ得トナシ判任官四十五人ヲ五十九人ニ増加セリ

外ニ明治三十九年勅令第十五號ヲ以テ統監附陸海軍武官官制ヲ定メ陸海軍武官各一名ヲ置キ陸海軍少將又ハ佐官ヲ以テ之ニ補シ統監ノ命ヲ受ケテ事務ニ服セシム

明治四十年官制改正

明治四十年七月日韓新協約ノ締結アリ韓國ニ對スル帝國ノ地位更ニ一進シタルヲ以テ乃チ之ニ應シテ統監府及理事廳ノ組織ヲ改メ同年九月勅令第二百九十五號ヲ以テ官制ヲ改正セラル其要點左ノ如シ

(一)統監ノ職權ヲ擴張シ其第三條ニ於テ統監ハ韓國ニ於テ帝國政府ヲ代表シ條約及法令ニ基キ諸般ノ政務ヲ統轄スト規定ス

舊官制第五條及第六條ハ右改正ノ結果削除セラル
(二)新ニ統監府ニ副統監ヲ置ク副統監ハ親任トシ統監ヲ輔佐シ統監事故アルトキ其職務ヲ代理スルモノトス

(三)統監及副統監ノ外統監府ノ職員ハ總務長官勅任、參與官專任二人勅任、秘書官專任二人奏任、書記官專任六人奏任、技師(專任四人)、通譯官專任九人奏任、屬、技手、通譯生(專任四十三人判任)トシ尙韓國宮内府及各部ノ次官タル者ハ之ヲ統監府參與官トス之ヲ舊官制ニ比スレハ外務、農商工務警務三總長ハ廢官トナリ新ニ參與官二人ヲ置キ秘書官ハ一人ヲ増シ書記官ニハ増減ナク技師ハ六人、通譯官ハ一人、判任官ハ十六人ヲ減シ警視及警部ハ總テ之ヲ廢官トセリ

同時ニ所屬官廳官制ノ改廢亦少カラス後節ニ詳記ス

(二) 事務分掌

統監府開

明治三十八年十二月侯爵伊藤博文統監ニ任セラレ次テ總務長官鶴原定吉以下夫々任命セララル乃チ同三十九年二月一日ヨリ統監府及理事廳ノ事務ヲ開始セリ

事務分掌

事務ノ分掌ハ官制ノ改定ニ伴ヒ且ツ處務ノ便宜上時ニ多少ノ變更ヲ經タルモ明治四十年九月官制改正當時ニ至ル迄遵據シタル規定ニ據レハ府ニ總務部、外務部、農商工務部及警務部ヲ置キ總務長官、外務總長、農商工務總長

事務分掌
規程改正

及警務總長之ヲ掌理シ部ハ之ヲ課ニ分チ課長ヲ置キテ事務ヲ分掌セシム即チ總務部ニハ秘書課、人事課、文書課、會計課、地方課ノ五課ヲ外務部ニハ韓國課、外國課ノ二課ヲ農商工務部ニハ商工課、農林課、水産課、鑛務課ノ四課ヲ警務部ニハ警務課、保安課、衛生課ノ三課ヲ置キ別ニ法制審查會ヲ置キ府ノ高等官中ヨリ命セラレタル委員長及委員若干名ヲ以テ之ヲ組織セリ

明治四十年九月官制改正ノ結果、同十月府訓令第十號ヲ以テ統監府事務分掌規程ヲ改正シ府ニ統監官房、外務部、監査部及地方部ヲ置キ統監官房長ハ總務長官、各部長ハ總務長官又ハ參與官ヲ以テ之ニ充テ各其ノ事務ヲ掌理セシム統監官房ハ之ヲ文書課、人事課及會計課ニ分チ課長ヲ置キテ其ノ事務ヲ分掌セシメ外務部ニ於テハ領事館及外國人ニ關スル事項、韓國移民ニ關スル事項、條約及取極書ニ關スル事項、儀式並叙勳ニ關スル事項ヲ掌リ監査部ニ於テハ法令及處分ノ審査ニ關スル事項ヲ掌リ地方部ニ於テハ地方行政ニ關スル事項、殖産及金融ニ關スル事項、宗教及教育ニ關スル事項、司法及警察ニ關スル事項ヲ掌ル

參與官會議
及大臣會議

統監ハ定期及臨時ニ參與官會議ヲ召集シ統監府總務長官及各參與官ヲシ

統監府ノ組織

テ重要事項ヲ審議セシメ又韓國内閣總理大臣及各部大臣ヲ定期及臨時ニ召集シテ施政改善ニ關スル協議會ヲ開クナ例トス

(三) 韓國顧問制度

統監府設置以前ヨリ顧問若クハ參與官トシテ韓國政府ニ備聘セラレタル帝國官吏若クハ官吏ニ非サル帝國臣民モ亦甚タ少カラス其重ナルモノハ財政顧問、警務顧問、軍部顧問、宮内府顧問、學政參與官等ニシテ或ハ協約ノ結果、帝國政府ノ推薦ニ依リタルモノアリ或ハ韓國政府ノ發意ニ基キ帝國政府カ好意上推薦ノ勞ヲ採リタルモノアリ各就職ノ事情ヲ異ニスト雖モ統監府設置ト同時ニ擧ケテ統監ノ監督ニ歸シタルニ至リテハ則チ一ナリ此等ノ顧問若クハ參與官ハ概チ補佐官、教官其ノ他ノ名義ヲ以テ多數ノ帝國官吏若クハ邦人ヲ部屬トシ特ニ財務、警務兩顧問部ハ其ノ所轄事務ノ繁多ナルニ比例シ最多數ノ邦人ヲ備聘シテ部務ヲ分掌セシメタリ

統監府設置以前ニ於ケル顧問

統監府設置以後ニ於ケル顧問制度

與セシムルニ至レリ今統監府設置後ニ於ケル韓國政府備聘日本人ノ重ナル配置ヲ擧クレハ宮内府ニハ顧問及補佐官アリテ宮中ノ議ニ參與シ軍部ニ顧問及陸軍教官アリテ軍政ノ諮問並軍隊訓練ノ事ニ與リ度支部ニ於テハ財政顧問及多數ノ邦人アリテ顧問本部並同地方支部ニ分屬シ政府全般ノ財政、徵稅及金融ノ事務ヲ監督シ又別ニ水道局ヲ設ケテ仁川、平壤及釜山ノ水道事業ヲ指揮監督セシム其ノ他稅關、航路標識等ノ事業ニ從事スル邦人モ亦少カラス學部ニハ參與官及事務官アリテ學政ニ參與シ並ニ教科書編纂ノ業ニ從ヒ内部ニハ參與官及囑託アリテ内務行政及地方行政ノ議ニ參與シ別ニ警務顧問及補佐官以下多數ノ帝國警察官ヲシテ警察機關ノ整備皇宮ノ警衛並一般治安ノ維持ニ當ラシメ外ニ道路開鑿ノ事務ヲ掌ラシムル爲メ治道局ノ設アリ日本人技師及事務官專ラ其ノ局ニ當レリ法部ニハ參與官及補佐官アリテ司法ノ事ヲ指導セシムル外尙各道裁判所ニ帝國裁判官ヲ補佐官トシテ配置シ裁判ノ公正ヲ保タシメ農商工部ニハ鑛務技監其ノ他ノ囑託員アリテ鑛山、園藝及移民ノ事務ニ與ル等韓國政府ノ各部各局ニ亘リテ備聘日本人ノ參畫干與セサル所ナク而シテ統監府ノ指導方針

顧問制度ノ廢止

ヲ承ケ有効ニ其ノ成績ヲ舉クルヲ得セシメタリ
明治四十年七月日韓新協約成立シ其ノ第五條ニ於テ日本人ノ韓國官吏ニ任用セラルヘキヲ規定スルニ至リ此等顧問若クハ參與官制度ヲ繼承スルノ必要ナク備聘日本人ハ概テ引續キテ韓國政府ノ官吏ニ任セラレ統監府ノ官制改正ト相俟ツテ韓國ニ於ケル施政改善ノ機關ハ此ニ一層ノ進境ヲ見ルニ及ヘリ

(四) 臨時間島派出所

豆滿江流域ニ在ル間島一帶ノ地方ハ多年清韓兩國ノ係争地トシテ境界明確ナラス然カモ所在韓民ハ清國移住民ニ比シテ多數ナルニ拘ラス近年清國政府ハ同地方ニ政廳ヲ設ケテ韓民ヲ征シ加フルニ馬賊ノ跳梁清人ノ抑壓ヲ以テシ韓民ノ窮狀甚々憐ムヘキモノアリ地方人民ヨリ狀ヲ具シテ韓國政府ニ保護ヲ求メタル結果統監府ハ則チ其依頼ニ應シ取敢ス所在韓民ヲ保護シテ其途ニ安ンセシムルノ必要ヲ認メ豫メ清國政府ニ知照シテ明治四十年九月陸軍歩兵中佐齋藤季治郎ヲシテ少數ノ憲兵及警察官ヲ率キテ同地ニ前往シ六道溝龍井村ニ駐留シテ地方撫綏ノ任ニ當ラシメ又同十

月一日ヨリ郵便局ヲモ設置セリ清國地方官憲ハ之ニ對シ數々撤退ヲ求メタレトモ我ハ當然之ヲ拒絕シ延テ間島ニ關スル問題ハ日清兩國政府ノ懸案トナリシモ目下尙交渉中ニ在リテ之ヲ記述スルノ時機ニ達セス因ニ明治四十一年四月ニ至リ勅令ヲ以テ統監府臨時間島派出所官制ヲ定メラレタリ

第二節 理事廳

(一) 官制

明治三十八年十二月勅令第二百六十七號統監府及理事廳官制ニ據リ韓國内樞要ノ地ニ理事廳ヲ置キ其職員ハ理事官、副理事官、奏任、屬、警部、通譯生、判任トシ一理事廳ニ副理事官二人以上ヲ置ク場合ニ其一人ハ主トシテ法律事務ヲ掌ルモノトス尙統監ハ統監府技師、通譯官及技手ヲシテ理事廳ニ在勤セシメ其必要ト認ムル理事廳ニハ警視ヲ置クコトヲ得ヘク而シテ各理事廳ニハ巡查ヲ配置シ後必要ニ應シ併セテ看守ヲモ置クヲ得トセリ

統監府ノ組織

明治四十年九月官制改正セラレ理事廳職員中警察官ヲ全廢シ同時ニ各理事廳ニ看守長及看守ヲ置ク是レ韓國政府ト警察事務ノ執行ニ關スル取極ヲ爲シ理事廳ニ警察官ヲ特置スルノ必要ナキニ至リタルニ依ル今現行官制ニ依リ理事官ノ職權ヲ舉クレハ左ノ如シ

(一)理事官ハ統監ノ指揮監督ヲ受ケ從來韓國在勤領事ニ屬シタル事務並條約及法令ニ基キ理事官ノ執行スヘキ事務ヲ管掌ス(統監府及理事廳官制第二十四條)

(二)理事官ハ安寧秩序ヲ保持スル爲緊急ノ必要アリト認ムル場合ニ於テ統監ノ命ヲ請フノ違ナキトキハ當該地方駐在帝國軍隊ノ司令官ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得(同第二十五條)

(三)理事官ハ韓國ノ施政事務ニシテ條約ニ基ク義務ノ履行ノ爲必要アルモノニ付事緊急ヲ要シ統監ノ命ヲ請フノ違ナシト認ムルトキハ直ニ當該韓國地方官憲ニ移牒シテ之ヲ執行セシメ後之ヲ統監ニ報告スヘシ(同第二十六條)

(四)理事官ハ理事廳令ヲ發シ之ニ罰金十圓以内、拘留又ハ科料ノ罰則ヲ附

スルコトヲ得(同第二十七條)

尙理事廳ハ別ニ記スル所ノ如ク其管轄區域内ニ於ケル訴訟事件ノ始審及非訟事件ノ事務ヲ行フモノトス其他法律又ハ命令ニ依リ理事廳又ハ理事官ノ職權ニ屬セシメラレタル事項アリト雖今一々之ヲ舉ケス

(二) 位置管轄區域並定員

理事廳ノ位置及管轄區域ハ統監ノ定ムル所ニ依ル明治三十九年二月一日統監府開廳ノ際ニ於テ釜山、馬山、群山、木浦、京城、仁川、平壤、鎮南浦、元山及城津ノ十箇所ニ理事廳ヲ置キ同八月大邱、同十一月新義州、同四十年十二月清津ノ各理事廳新ニ設置セラレ同年末現在理事廳ノ數ハ合計十三トナレリ其管轄區域左ノ如シ

理事廳管轄區域

釜山理事廳

慶尙南道南部一帯ノ地域

慶尙北道東部沿岸一帯ノ地域

馬山理事廳

江原道沿岸一部ノ地域

群山理事廳

慶尙南道西南部一帯ノ地域、中釜山大邱兩理事廳管區以外ノ部

木浦理事廳

全羅北道一帯ノ地域

忠清南道南部一帯ノ地域

統監府ノ組織

統監府ノ組織

統監府ノ組織

京城理事廳 京畿道東部一帯ノ地域 江原道西部一帯ノ地域
 忠清北道東北部一帯ノ地域 忠清南道西北部一帯ノ地域
 黃海道東南部一帯ノ地域 黃海道南部一帯ノ地域
 仁川理事廳 京畿道西部一帯ノ地域 黃海道東部一帯ノ地域
 平壤理事廳 平安南道東北部一帯ノ地域 黃海道東部一帯ノ地域
 鎮南浦理事廳 黃海道西北部一帯ノ地域 江原道東北部一帯ノ地域
 元山理事廳 咸鏡南道一帯ノ地域 咸鏡北道東南部一帯ノ地域
 城津理事廳 咸鏡北道西南部一帯ノ地域 忠清北道東南部一帯ノ地域
 大邱理事廳 慶尙北道沿岸ヲ除キタル一帯ノ地域
 江原道南部一帯ノ地域 忠清北道東南部一帯ノ地域
 新義州理事廳 平安北道一帯ノ地域
 咸鏡北道北部一帯ノ地域
 清津理事廳 咸鏡北道北部一帯ノ地域
 理事廳職員ノ定員ハ當初ノ官制ニ於テ理事官及副理事官通シテ三十人警
 祝通シテ五人屬警部通譯生通シテ九十人又統監府及理事廳巡查ノ定員ハ
 明治三十九年四月統監府令第九號ニ依リ通シテ五百人ト定メラル其後時

々多少ノ改正アリ同四十年末ニ於ケル定員ハ理事官副理事官通シテ三十
 人屬看守長通譯生通シテ七十六人トス而シテ理事廳警察官定員ニ關スル
 規定ハ同四十年九月官制改正ノ結果全部削除セラレタリ

(三) 理事廳支廳

韓國地方政務改善ノ急務タルヤ敢テ言ヲ俟タズ即チ一面ニ於テ中央各部
 局ニ對スル指導ヲ怠ラサルト同時ニ他ノ一面ニ於テハ速ニ地方ノ弊政ヲ
 刷新スルノ必要アリ明治三十九年九月地方制度ノ改正發表セラレ官守ノ
 系統領域ヲ正シ府郡ノ境界ヲ改メ官吏ノ俸給ヲ加ヘ銓考ノ規程ヲ設クル
 等漸次地方政務ノ進捗ヲ期セリト雖、漫然其實行ヲ韓國官吏ニ放任スルハ
 決シテ當初ノ目的ヲ達スル所以ニアラス此ニ於テ十三道觀察府所在地ニ
 日本官吏ヲ駐在セシメ以テ該地方官憲ノ指揮監督ニ當ラシムルヲ適當ナ
 リト認メ同年九月二十六日統監府令第三十七號理事廳支廳分掌規程ニ依
 リ理事廳管轄區域内ニ同支廳ヲ置クコトトセリ次テ同年十一月ニ至リ理
 事廳支廳執務規程韓國地方施政ニ關スル理事官ノ執務規程ヲ發布シ同時
 ニ理事廳支廳ノ名稱位置及管轄區域ヲ定ム此等ノ規程ニ據リテ理事官及

韓國地方
政務改善
本官吏

理事廳支廳ノ副理事官ハ韓國ノ地方施政ニ關シ當該地方官憲ニ對シテ意見ヲ述ヘ其事務ノ施行ヲ幫助監視シ外國人(韓國人以外ノ)ニ關スル事務ニ付テハ上官ノ命ヲ受ケテ韓國地方官憲ヲ指揮監督シ且其區域内ニ於ケル韓國僱聘日本人職員ノ事務ヲ幫助注視スルノ職務ニ服シタリ然ルニ明治四十年日韓新協約締結ノ結果日本人ヲ韓國官吏ニ任用スルノ途啓ケ支廳在勤ノ副理事官ハ何レモ道書記官ニ任セラレ直接施政ノ任ニ當ルコトトナレルヲ以テ爾後理事廳支廳ノ存在ヲ必要トセス同年十二月三十一日限リ各支廳トモ凡テ廢止セラレタリ今理事廳支廳ノ名稱並ニ其設置廢止年月ヲ記スレハ左ノ如シ

支廳名	管轄本廳	設置	廢止
水原	京城	三十九年十一月十八日	四十年十二月三十一日
忠清	京城	四十年六月八日	同
海州	仁川	三十九年十一月十八日	同
公州	群山	同	同

第三節 所屬官廳

(一) 通信官署

韓國ニ於ケル帝國通信事業ハ遠ク明治九年ニ其ノ端ヲ啓キ同年十一月一日釜山郵便局ノ開設ヲ以テ在韓帝國通信官署ノ嚆矢トス爾來日韓兩國ノ關係親密ヲ加ヘ韓國ニ於ケル邦人發展ノ歩ヲ進ムルニ隨ヒ遞次郵便官署ヲ増設シ明治三十八年三月末日ニ於ケル在韓帝國郵便局所ノ數ハ郵便局十、郵便局出張所六、郵便電信受取所一、郵便受取所四十四、電信取扱所十合計

統監府ノ組織

支廳名	管轄本廳	設置	廢止
全州	群山	同	同
光州	浦山	同	同
晉州	馬山	同	同
咸興	元山	同	同
鏡城	津山	同	同
清津	津山	四十年七月三十日	同
新義州	新義州	四十年六月三十日	四十年十二月三十一日

七十一箇所ノ多キニ上レリ同年四月一日韓國通信機關委託ニ關スル日韓兩國政府ノ協定成立シ同五月十八日ヨリ七月一日ニ至ル迄ノ間ニ韓國通信機關一切ノ引繼ヲ了ス次テ統監府設置セララルニ及ヒ在韓國通信官署ヲ舉ケテ統監ノ管理ニ屬セシムルコトトナリ同十二月二十日勅令第二百六十八號ヲ以テ統監府通信官署官制ヲ定メラル其ノ要領ヲ舉クレハ統監府通信官署ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國内ニ於ケル郵便郵便爲替郵便貯金電信及電話ニ關スル事務ヲ掌リ明治三十九年五月勅令第五百五號ヲ以テ更ニ統監ノ指定ニ依リ韓國國庫金ノ出納保管ニ關スル事務ヲ掌ルコトトナレリ通信管理局ハ之ヲ京城ニ置キ郵便局及郵便所ヲ全國ニ配置シ其職員ハ通信管理局長勅任又ハ奏任、同事務官專任三人奏任、通信事務官專任七人奏任、通信事務官補專任十三人奏任、通信技師專任六人、通信屬專任二百八十八人判任、通信技手專任三十二人、通信手專任三百二十二人判任、郵便局長及郵便所長ヨリ成リ明治四十年末現在局所數ハ郵便局五十一、郵便電信取扱所二十五、郵便取扱所百十七、郵便所七十二、電信取扱所五十、郵便繼立所一、郵便所百六十六、郵便交換所七、郵便受渡所三、合計四百九十二箇所ヲ算ス

(二) 勸業模範場

統監府勸業模範場官制ハ明治三十九年四月勅令第九十一號ヲ以テ公布セラル同場ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國産業ノ發達改良ニ資スル模範及試驗韓國物産ノ調査並産業上必要ナル物料ノ分析及鑑定、種苗、蠶種、種禽、種豚等ノ配付、産業上ノ指導、通信及講話ヲ掌リ場長、技師(專任六人)、技手(專任八人)書記(專任四人)判任ヲ置ク同六月十五日京畿道水原ニ開設シ次テ棉花栽培協會ノ委嘱ニ應シテ木浦ニ出張所ヲ設ケ韓國ニ於ケル棉花栽培事業ヲ獎勵監督セリ

同十月日韓兩國政府間ニ勸業模範場ヲ韓國政府ニ讓渡スノ議起リ同月二十六日韓國政府參政大臣ヨリ統監府ニ照會スル所アリ十一月同場ノ事業ハ從來經營ノ方針ヲ變更セサルヘク且同場ニ屬スル土地ハ官有財産管理規則第七條第一號及第二號ニ依リ其借受期間即チ十箇年間、又建物器具器械書籍等ハ同第四號ニ依リ先ツ三箇年ヲ限リテ無料貸付シ期限滿了後ハ更ニ更新繼續貸付スヘキヲ條件トシテ明治四十年四月一日以後愈々之ヲ韓國政府ノ管理ニ移セリ韓國政府ハ則チ同三月二十二日勸業模範場官

制ヲ發布シタリ

(三) 鐵道管理局

明治三十九年七月京釜鐵道買收ニ先チ同六月勅令第百七十六號ヲ以テ鐵道管理局官制ヲ定メ同鐵道ノ管理ヲ統監府ニ屬セシメラル同九月京義馬山兩軍用鐵道線ノ統監府管理ニ歸スルト同時ニ勅令ヲ以テ特ニ管理局内ニ臨時鐵道建設部ヲ置キ專ラ右兩線ノ建設及改良ニ關スル事務ヲ掌理セシメ同四十年三月更ニ官制ヲ改正シ同時ニ建設部ニ關スル勅令ヲ廢シ管理局官制中ニ併合セリ

統監府鐵道管理局ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル鐵道ノ建設改良保存運輸及附帶ノ事務ヲ掌ルモノトシ長官(勅任)事務官專任十人奏任、事務官補(專任八人奏任)技師(專任二十五人)内二名ヲ勅任トナスコトヲ得、通譯官(專任一人奏任)書記專任二百二十二人判任、技手(專任六十五人)通譯生(專任二人判任)ヲ置キ尙臨時建設部ヲ附屬セシメ單リ京義馬山兩線ノミナラス汎ク建設及改良工事ヲ掌ラシム之カ爲メ事務官專任四人奏任、事務官補專任四人奏任、技師專任十九人、内一人ヲ勅任トナスコトヲ得、通譯官專任三人奏任、書

記專任七十四人判任、技手專任九十人、通譯生專任六人判任ヲ増置ス

(四) 法務院

從來韓國在勤領事ノ裁判ニ對シテハ長崎控訴院並ニ大審院ニ控訴上告スルコトヲ得ルノ規定アリシモ韓國ノ現情ニ照シ寧ロ二級審制ヲ採用シ高等裁判所ヲ韓國ニ設置スルノ便宜且必要ナルヲ認メ明治三十九年六月法律第五十六號ヲ以テ韓國ニ於ケル裁判事務ニ關スル制、同勅令第百六十六號ヲ以テ韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則、同勅令第百六十四號ヲ以テ統監府法務院官制ヲ定メ法務院ハ終審トシテ理事廳ノ裁判ニ對スル上訴ヲ管轄セシメラル

法務院ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル司法事務ヲ掌ルモノトシ院長、評定官專任四人奏任、内一人勅任、檢察官專任一人奏任、書記專任五人判任ヲ置キ院長ハ勅任評定官ヲ以テ之ニ充テ院務ヲ總理シ司法事務ニ關シテ理事官ヲ指揮監督ス

(五) 財政監查廳

日韓協約ニ依リ韓國政府ニ備聘セラレタル財政顧問ハ統監府設置以後統

監ノ監督ノ下ニ韓國ノ財政ヲ指導監督シ來リシカ明治四十年三月勅令第十九號ヲ以テ統監府財政監查廳官制ヲ定メラレ韓國財務顧問タル者ヲ以テ監查長官トシ統監ノ指揮ヲ受ケ協約ニ基キ韓國財務ニ關スル事項ヲ掌理セシム其職員ハ監查長官勅任並ニ財政監查官專任二十人奏任内一人ヲ勅任トナスコトヲ得ヨリ成リ同五月十日統監府訓令第十三號ヲ以テ事務分掌規程ヲ定メ廳ニ總務稅關理財稅務主計ノ五部ヲ置ク尙財政顧問本部ハ財政監查廳ト互ニ表裏シテ韓國財政指導ノ任ニ當ルモノナルヲ以テ同部ニ於テモ監查廳官制及同事務分掌規程ニ準由シテ事務ノ整理及統一ヲ圖ルコトトシ同月財政顧問本部事務分掌規程ヲ定メ部課ヲ分テリ此二者ハ畢竟事實ニ於テ同一ノ組織ニ外ナラス只韓國財政ニ對スル指導及監督上官守ノ系統ヲ正シタルニ過キサルナリ同四十年九月統監府官制改正ト同時ニ統監府財政監查廳官制モ亦廢止セラレ

(六) 觀測所

明治三十七年戰役ニ際シ我文部省ハ軍事當局者ノ要求ニ應シ仁川其他韓國沿岸樞要ノ地點ニ臨時觀測所ヲ設置シタルカ明治四十年三月勅令第七

十號ヲ以テ統監府觀測所官制ヲ定メ同三月三十一日ヨリ之ヲ施行セリ官制ニ依レハ觀測所ハ統監ノ管理ニ屬シ氣象觀測ノ事務ヲ掌ルモノトシ所長技師專任一人技手專任十八人書記專任一人判任ヲ置キ所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ此新官制實施ノ結果在仁川臨時觀測所ヲ觀測所ト定メ同時ニ釜山木浦龍岩浦元山城津ノ各臨時觀測所ハ何レモ觀測所支所トナセリ超エテ同四十一年三月勅令第五十六號ヲ以テ同官制ヲ廢止セラレ同四月一日以後韓國政府ノ觀測所ニ於テ其事務ヲ繼承ス

(七) 營林廠

鴨綠豆滿兩江ノ沿岸ハ森林ニ富ムヲ以テ有名ナルモ從來組織的經營ヲ爲シタルコトナク或ハ徒ニ荒廢ニ委シ或ハ空シク天與ノ利源ヲ放棄シテ顧ミサルノ狀態ニ在リ日韓兩國政府ハ則チ協同シテ沿江森林事業ヲ起スヲ可ナリトシ明治三十九年十月十九日兩國代表者間ニ協同約款ヲ締結シタリ其要ハ經營資本金ヲ一百二十萬圓トシ日韓兩國政府各六十萬圓ヲ出資シテ特別會計ヲ立テ事業ノ損益ハ出資額ニ應シテ之ヲ分配スヘク尙事業ノ進行ニ從ヒ兩國人民ノ加入ヲ待セシムル爲メ會社組織トナスノ必要アリ

ル場合ニハ兩國政府協定シテ其方法ヲ定ムト云フニ在リ帝國政府ハ明治四十年法律第二十四號ヲ以テ韓國森林特別會計法ヲ公布シ次テ同三月勅令第七十二號ヲ以テ統監府營林廠官制ヲ定メタリ

營林廠ハ統監ノ管理ニ屬シ協約ニ基キ鴨綠江及豆滿江沿岸ニ於ケル森林經營ニ關スル事務ヲ掌ルモノトシ廠長勅任又ハ奏任、事務官專任五人奏任、技師(專任二人)屬技手、通譯生(專任二十五人判任)ヲ置ク尙同時ニ公布ノ勅令ニ依リ營林廠長及事務官ハ陸軍將校同相當官ニシテ森林事務ニ從事シ又ハ從事シタル者若クハ森林行政ニ關スル高等文官ノ職ニ在リ又ハ在リタル者ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得ト規定シテ選叙ノ範圍ヲ擴張セリ之ト前後シテ韓國政府モ亦西北營林廠官制ヲ發布シタルモ森林經營ノ事業ハ專ラ我營林廠ニ於テ之ヲ擔任シ西北營林廠ハ少數ノ官吏ヲシテ日本官憲ト協同シテ執務セシムルニ過キス

第四節 經費

(一) 豫算ノ所管

統監府、理事廳、法務院、勸業模範場及觀測所ノ豫算ハ共ニ大藏省ノ所管ニ屬シ統監府之カ執行ニ當ルモ通信管理局及鐵道管理局ノ豫算ハ日韓交通事業經營ノ便宜及事業用品需給ノ關係等ヨリ當分之ヲ遞信省ノ所管ニ屬セシメ尙京義馬山兩鐵道ハ明治三十九年ノ央ニ引繼テ了シタル爲同年度限リ其豫算ヲ陸軍省ノ所管ニ存置シ統監府ハ此等ニ對シテ專ラ行政ノ管理ヲ爲スニ止メタリ此ノ如ク行政ノ管理ト豫算ノ執行トヲ各別ノ機關ニ委スルハ監督ノ統一上不便且不利ナルカ如シト雖前述ノ理由ニ基キ且過渡ノ際ニ於テ寧ロ機宜ノ措置タルヲ認ム

(二) 統監府

明治三十八年度及三十九年度ノ經費ハ臨時事件費ノ支辨ニ係リ其現計額三十八年度二十七萬三千二百六圓、三十九年度二百一萬二千八百五十二圓ニシテ三十八年度ニ於テハ統監府ノ外、理事廳ノ經費ヲ、三十九年度ニ於テハ尙其外ニ法務院及勸業模範場ノ經費ヲ含ミ且通常經費ノ外、營繕創立等ニ要シタル一切ノ支出ヲ包含セリ

四十年年度經費ハ經常部現計百三十六萬七千八百七十三圓ニシテ統監府、理事廳、法務院及觀測所ノ經費ヲ含ム又其臨時部ニ屬スルモノハ營繕費、臨時事件費、傳染病豫防費其他ヲ合シ四十三萬七千四百四十圓ニシテ外ニ在韓國居留民教育費補助二萬圓、朝鮮海水產組合補助二萬圓ノ支出アリ教育費補助ハ三十九年度ニ於テ始メテ一萬五千圓ヲ支出シ又水產組合補助ハ三十九年度以前ニ於テハ農商務省ノ所管ニ屬シタリ

四十一年年度豫算ハ經常部百二十二萬五千四百一十一圓ニシテ統監府、理事廳及法務院ノ經費ヲ含ム又其臨時部ニ屬スルモノハ營繕費四十九萬七千三百九圓ニシテ外ニ補助費五萬圓、內教育費補助三萬圓、水產組合補助二萬圓ヲ計上セリ

統監府及所屬官廳(鐵道及通信ヲ除ク)ノ經費並前記補助費ノ外四十年年度ニ於テ韓國政府立替金百七十六萬九千五百三圓、營林廠出資金三十萬圓、四十一年度ニ於テ韓國政府立替金五百二十五萬九千五百八十圓、營林廠出資金三十萬圓ノ支出アリ以上ヲ合計シテ統監府關係ノ國庫支出ハ鐵道及通信ニ關スルモノヲ除キ概要左ノ如シ

統監府
關係
經費

通 常 經 費	三十八年度(現計)				三十九年度(同上)				四十年年度(同上)				四十一年度(豫算)				
	臨 時 費	立 替 金	出 資 金	合 計	臨 時 費	立 替 金	出 資 金	合 計	臨 時 費	立 替 金	出 資 金	合 計	臨 時 費	立 替 金	出 資 金	合 計	
		二九三,二〇六		二九三,二〇六		二〇四,七七八		二〇四,七七八	一,三六七,八七三	一,八四五,三二三	一,七六九,五〇三	三,〇〇〇,〇〇〇	一,二二五,四一一	一,七七二,七二〇	五,二五九,五八〇	三,〇〇〇,〇〇〇	一〇,二五七,六一一
									四七七,四四〇				五四七,三〇九				一,〇〇〇,〇〇〇
																	五,五五九,五八〇
																	七,三三三,三〇〇
																	二,九一四,八一六
																	二,〇四七,七八二
																	二,九三二,二〇六

備考 三十八年度ニハ農商務省所管水產組合補助二萬圓、三十九年度ニハ同上二萬圓及教育補助費一萬四千九百三十圓ヲ含ミ又四十年年度臨時費中ニハ同上補助費二件四萬圓、四十一年度臨時費中ニハ同五萬圓ヲ含ム

(三) 通信及鐵道

通信管理局及鐵道管理局ノ豫算ハ遞信省ノ所管ニ屬シ此等事業ノ收支ハ別ニ詳記スルヲ以テ略ス

(四) 營林廠

明治四十年法律第十五號韓國森林特別會計法ニ依リ鴨綠江及豆滿江沿岸森林經營ノ爲特別會計ヲ設定シ四十年及四十一年度ニ於テ資本ノ半額即チ六十萬圓宛チ日韓兩國政府ヨリ受入レタリ而シテ右兩年度ニ於ケル特別會計豫算ハ資本勘定歳入各六十萬圓、歳出創業費四十年及十四萬六千圓、四十一年度一萬九千二百二十九圓、收益勘定歳入森林收入四十年及二十四萬一千二百圓、四十一年度五十四萬四千九百七十圓、歳出同森林作業費及豫備金四十年及四十五萬三千八百七十圓、四十一年度七十七萬五千二百七十一圓ナリ

(五) 立替金

新協約ノ施行ニ伴ヒ韓國政府歳計ノ膨脹ハ已ムヲ得サルノ勢タリ然カモ韓國ノ財政状態ハ到底急劇ニ歳入ノ増加ヲ期ス可カラス依テ帝國政府ハ明治四十五年度迄ヲ限リテ財政上ノ補助ヲ韓國政府ニ供與スルノ必要ヲ認メ豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スヲ要スル件トシテ明治四十一年二月第二十四帝國議會ノ協賛ヲ經明治四十年以後韓國ノ歳計不足ヲ填補スル爲總額千九百六十八萬二千六百二十三圓ヲ限リ左ノ年割及條

件ニ依リテ立替金ヲ爲ス

- 金百七十六萬九千五百三圓 明治四十年度
- 金五百二十五萬九千五百八十圓 明治四十一年度
- 金三百六十五萬三千五百四十圓 明治四十二年度
- 金三百萬圓 明治四十三年度
- 金三百萬圓 明治四十四年度
- 金三百萬圓 明治四十五年度

計金千九百六十八萬二千六百二十三圓

兩國政府ノ協議ニ依リ年割額ヲ變更スルコトアルヘシ

立替金ニハ利子ヲ付セス又償還ハ兩國政府ノ協議ニ依ルモノトス

即チ明治四十一年二月中追加豫算ヲ以テ四十年度分立替金ヲ支出シ四十年年度分ハ同年度總豫算ニ計上セリ

第三章 韓國ノ制度

第一節 制度ノ沿革

明治三十
八年ノ官
制改正

開國五百四年即チ明治二十八年日本ノ制度ニ模倣シテ中央及地方官制ヲ定メタル以來時々ノ小改正ハ枚擧ニ違アラスト雖其大體ニ於テハ則チ渝ラス明治三十七年ニ至リ日韓議定書及協約ニ基キ韓國政府ニ於テ施政ノ改善ニ著手スルヤ又官制改定ノ必要ヲ認メ同三十八年二月内閣中樞院各部以下政府ノ各部署ニ亘リテ改正ヲ加エタリト雖是レ又要スルニ冗官冗局ヲ廢シ較々機關ヲ緊縮シタルノミ大綱ニ於テハ尙舊制ヲ踏襲セリ

統監府ノ設置ニ當リ現ニ行ハレタル官制ハ則チ右ノ改訂ニ係ルモノナリ其規定未タ全カラスト雖略々體様ヲ具フルヲ以テ暫ク其舊ニ從ヒ敢テ急劇ノ變更ヲ加ヘス徐ニ實効ヲ期スルノ方針ヲ採レリ當時韓國政府ノ官制外ニ於テ協約ニ據リ若クハ我勸告ニ原キ韓國政府ノ備聘セル顧問參與官等アリテ施政改善ノ實行之ニ俟ツモノ多カリシハ又急遽官制ヲ改正スル

顧問
ト官制

ノ必要ナカリシ所以ノ一トス

現行官制
ノ由來

然レトモ時勢ノ變遷及施政改善ノ進捗ニ伴ヒ舊來ノ制度ヲ變更シ行政組織ノ完備ヲ期スルノ必要アルヤ又素ヨリ言テ俟タス此等ハ時ニ應シテ其宜ヲ制スルニ努メタリ明治三十九年九月ニ於ケル地方制度改正ノ如キ明治四十年六月ニ於ケル内閣官制ノ發布ノ如キ即チ其最も重要ナルモノトス次テ同年七月日韓協約締結セラレ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコトトナルヤ始メテ各部各局ニ涉リテ官制ノ改正ヲ行ヒ同年十二月迄ニ略々其發布ヲ了シ而シテ先ノ内閣官制ト相俟ツテ現行ノ制度此ニ全ク成立セリ

此次ノ改正モ亦行政組織ノ大綱ニ於テ多ク更改スル所ナシト雖從來韓國官制ノ外ニ特立セル各種ノ機關及吏員ヲ舉ケテ之ヲ官制ノ明規ニ入レ組織ノ單純ト官守ノ統一トヲ加ヘタルノミナラス之ヲ帝國ヨリ見レハ韓國保護ノ一目的ニシテ且其必要條件タル施政改善ノ實行ニ一步ヲ進メタル所以ト爲スヘシ

第二節 内閣付中樞院

(一) 内閣官制

内閣ハ從來議政府ト稱ス明治三十八年二月改正ノ議政府官制ニ於テハ議
 政、參政、外部、内部、度支部、軍部、法部、學部、農商工部ノ九國務大臣ヲ以テ議政府
 ナ組織スト規定スルモ同年十一月新協約締結ノ結果韓國政府ニ外部ヲ置
 クノ必要ナキニ至リ國務大臣一員ヲ減シ同時ニ議政府ニ外事局ヲ附設セ
 リ之ヨリ明治四十年六月内閣官制ノ公布ニ至ル迄内閣制度ノ上ニ何等ノ
 變更ナシ

内閣官制

内閣官制 (光武十一年即明治四十年六月勅令第三十五號)

- 第一條 内閣ハ國務大臣ヲ以テ組織ス
- 第二條 國務大臣ハ即内閣總理大臣及行政各部大臣ヲ云フ
- 第三條 内閣總理大臣ハ大皇帝陛下ヲ輔弼シ國政ヲ掌理スル責ニ任ス
- 行政各部ノ統一ヲ保持ス
- 第四條 内閣總理大臣ハ内閣主管ノ行政事務ヲ處理シ必要ナル閣令ヲ
 發シ所屬判任官ヲ專行任免ス

- 第五條 内閣總理大臣ハ必要ト認メタル場合ニハ行政各部ノ處分又ハ
 命令ヲ中止セシメ勅裁ヲ請フコトヲ得
- 第六條 法律勅令ハ總テ内閣總理大臣及關係大臣此ニ副署ス
- 第七條 左開事項ハ内閣會議ヲ經ヘシ
 - 一、法律案 勅令案
 - 二、豫算案 決算案
 - 三、豫算外支出
 - 四、各部間主管權限ノ爭議
 - 五、文武勅奏任官ノ任命進退
 - 六、叙品及叙勳
 - 七、大赦及特赦
 - 八、其他各部主管事項ニシテ事體稍重キモノ
- 第八條 軍機軍令ニ關シ上奏スヘキ件ハ軍部大臣豫メ内閣總理大臣ニ
 告知ス
- 第九條 内閣總理大臣又ハ各部大臣事故アル時ハ他大臣臨時承命シ該

事務ヲ署理ス

第十條 本令ハ頒布ノ日ヨリ施行ス

第十一條 光武九年勅令第八號議政府官制ハ廢止ス

改正ノ要點ハ(一)議政府ヲ内閣ノ舊稱ニ復シタルコト(二)行政各部大臣ノ外從來議政參政ノ兩國務大臣アリテ參政大臣ハ議政大臣事故アルトキ代リテ其事務ヲ行ヒ恰モ副總理ノ地位ニ在リシヲ廢シタルコト但實際ニ於テハ久シク議政大臣ヲ缺キ參政大臣議政府ノ首班タリシヲ以テ參政大臣ヲ内閣總理大臣ト改稱シタルニ等シ(三)議政大臣カ凡百職務ニ付主務大臣ト奏宣ヲ共行ストアリシヲ内閣總理大臣職務ヲ奏宣シ云々ト改メタルコト(四)内閣主管事務ニ關シ内閣總理大臣ノ權限ヲ明ニシ閣令發布ノ權限ヲ規定シタルコト(五)内閣會議ヲ經ヘキ事項ヲ改定シ舊制ノ繁褥ヲ去リ併セテ必要ノ事項ヲ加ヘタルコト例ヘハ文武官吏ノ任免進退ニ就テ舊制ノ缺ヲ補ヒ新ニ敍品敍勳大赦特赦並各部主管事務中事體稍重キモノノ閣議ヲ經ヘキヲ定メ同時ニ國債條約官廳廢置其他各列記事項ヲ削除セルカ如シ(六)軍機軍令ニ關スル上奏ニ就テハ豫メ軍部大臣ヨリ内閣總理大臣ニ告知ス

内閣官制
改正ノ要點

ヘキヲ定メタルコト(七)舊制ニ定ムル不必要ノ條項ヲ削除シ規定ヲ簡明ニシタルコト等ヲ其重ナルモノトス更ニ之ヲ我内閣官制ニ比較スルニ大體ニ於テ範ヲ此ニ取ルト雖又多少ノ差ナキニアラス是レ畢竟國情及政治上ノ現勢ニ鑑ミ其宜ヲ得セシメントスルニ外ナラサルナリ

内閣官制ニ引續キ内閣會議規程ノ公布アリ舊議政府會議規程ニ比シ多ク増減スル所ナシ

内閣所屬
職員官制

内閣所屬職員官制ハ明治三十九年一月外部ノ廢止ト同時ニ内閣ニ外事局ヲ置キ同年十二月法制局ヲ置ク同四十年六月内閣官制ト同時ニ又内閣所屬職員官制ヲ改正セリ其要ハ參贊ヲ内閣書記官長ト改稱シ且敍品敍勳ニ關スル事務ヲ加ヘタルコト等ニ過キス又表勳院官制ハ光武九年即チ明治三十八年二月改正ノ舊ニ依リ之ヲ更改セス

(二) 内閣ノ更迭

内閣ノ更迭頻繁ニシテ起仆朝夕ヲ測ラサルハ從來韓國ニ於ケル政弊ノ一ナリ之ヲ内ニシテハ宮中府中ノ別明ナラス宮内ノ勢力動モスレハ政府ヲ歴スルアリ之ヲ外ニシテハ權臣勢家ノ爭鬪日モ亦足ラサルアリ加フルニ

閣下内
閣爭ト内

列國勢力ノ消長亦自カラ影響スル所ナキニアラス此等各般事情ノ錯綜スル所權勢ノ轉變端倪ス可カラスシテ其結果常ニ頻繁ナル内閣ノ更迭ヲ現出セリ

新協約後
第一内閣

帝國保護權ノ確立ハ此等ノ因襲ヲ除却シ近時韓國内閣ノ起仆ハ從前ノ如ク頻繁ナラス明治三十八年新協約締結後改造セラレタル朴齋純内閣ハ中頃軍部大臣李根澤辭去シ農商工部大臣權重顯軍部ニ轉シ京畿道觀察使成岐運其後ヲ襲ケル外閣員ニ異動ナク以テ明治四十年五月ニ至レリ統監府設置後ニ於ケル第一次ノ韓國内閣ハ此ノ如ク一箇年半ニ亘リテ其地位ヲ保チ更ニ加フルニ新協約締結前ニ於ケル各大臣ノ勤績年數ヲ以テスレハ閣員カ其地位ヲ保持シタルノ長キ從來多ク見サル所トス

同第二次
内閣

明治四十年五月學部大臣李完用參政大臣ニ親任セラレ閣員全部交迭シ以テ今日ニ至レリ之ヲ統監府設置後ニ於ケル第二次ノ内閣トス同四十一年五月ニ至リ軍部學部兩大臣ヲ除キ他各部大臣ノ更迭アリシモ是レ唯閣員間ノ異動ニ止マリ爲ニ一人ノ新閣員ヲ加エタルコトナシ今ヤ各般施政ノ改善ヲ期スルニ當リ頻繁ナル内閣ノ更迭ハ能ク之ヲ庶幾スル所以ニアラ

ス韓國從來ノ政弊ハ此點ニ於テ漸ク匡正ヲ得ントスルカ如シ

(三) 中樞院

中樞院
閣員

從來中樞院ニ於テハ濫殺ノ弊頗ル甚シカリシヲ以テ明治三十八年ノ官制改正ニ於テハ主トシテ定員ヲ限リ任用ノ資格ヲ定メ較々其弊ヲ匡正スルヲ得タリ明治四十年六月内閣官制ノ改定ニ引續キテ更ニ中樞院官制ヲ改正シ從來ノ定員ノ外顧問六人ヲ置キ軍國重要ノ事項ニ參與セシム今此等數次ノ改正ヲ經タル現行中樞院制度ノ梗概ヲ舉クレハ中樞院ハ(一)内閣ヨリ諮詢スル軍國重要事項及法律勅令ノ制定廢止或ハ改正ニ關スル事項(二)法律勅令實施ノ效果並其不備ヲ認メタル事ニ關シ建議ノ事項(三)法律勅令其職員ハ議長副議長各一人賛議八人副賛議十五人並書記官及主事ヨリ成リ賛議ハ勅任在職二箇年ヲ經タル者ヲ以テ之ニ任スルノ制ナリ外ニ四十年ノ改正ニ依リ増置セラレタル六人ノ顧問ハ親任トシ一箇年以上政府大臣ノ親任職ヲ經タルモノヲ以テ之ニ任シ内閣ヨリ諮詢スタル軍國重要事項アル時議長ハ顧問ヲ會同收議スルヲ要スト規定セラレ當時恰モ明治三

前大臣
閣下ナル

十八年協約締結前後ヨリ持續シタル朴齋純内閣ノ更迭アリ前大臣ハ皆中樞院ニ入りテ顧問トナリ内一人ハ副議長ニ任セラレタリ

第三節 各部

(一) 明治四十年協約後ニ於ケル官制改正

明治四十年七月締結ノ新協約ニ據リテ韓國ノ施政改善ヲ指導シ從來ノ監督的顧問制度ニ一步ヲ進メテ日本人ヲ韓國官吏ニ任用シ直接責任ノ地位ニ就カシムルコトトナルヤ先ツ各部官制並地方官制ノ改正ニ著手シ此等ハ概ネ同年末迄ニ公布セラレタリ從來ノ制度ニ於テハ動モスレハ機關ノ重複ヲ免レス事ニ當リテ隔靴搔痒ノ憾ナキヲ得サリシカ此ニ至リテ機關ハ統一シ職守ハ明確ニ施政改善ノ事業一層敏活ヲ期スルヲ得ヘキヲ信ス而シテ新舊官制ヲ對比スルニ新官制ハ一見大ニ機關ヲ膨脹シタルカ如シト雖是レ唯從來ノ顧問制度ニ依リ官制ノ表面ニ現ハレスシテ存立シタル諸種ノ機關及吏員ヲ官制中ニ掲載記入シタルカ爲ノミ事實ハ則チ主トシ

新官制ノ
目的

テ舊狀ヲ繼續シタルニ過キサルナリ蓋シ今次ノ改正モ亦行政組織ノ大綱ニ於テ多ク變改スル所ナク其目的ハ從來ノ備聘者ヲ韓國官吏ニ任用スル爲ニ必要ナル機關ヲ設備シ併セテ行政組織ノ統一及各機關ノ連絡上必要ノ整理ヲ期スルニ外ナラス且今次ノ改制ハ各部以下ニ限リ内閣制度ニ就テハ全ク更改ヲ加フルコトナク僅ニ從來内閣ニ屬シタル大韓醫院ノ所管ヲ内部ニ移シ及從來内閣ニ存置シタル不動産法調査會ヲ擴張シテ法典調査局ヲ設置シタルニ止レリ

(二) 各部官制通則

明治四十年六月内閣官制ノ改正ニ伴ヒ更メテ各部官制通則ヲ發布シタルモ其内容ニ於テハ協辦ヲ次官參書官ヲ書記官主事ヲ書記郎ト改稱シ其他舊制中二三不必要ノ條項ヲ削除シタルニ過キス同年十二月公布新協約後ニ於ケル改正ハ又再ヒ之ヲ踏襲シテ多ク變改スル所ナシ即チ從來各部ノ職員ハ次官局長書記官書記郎ナリシニ加ヘテ新ニ秘書官事務官及翻譯官ヲ置キ書記郎ヲ主事ト改稱シ又各部會計局ヲ廢シタル結果トシテ大臣官房ニ會計事務ヲ移シタル等其重ナルモノナリ

(三) 各部官制

各部官制ハ明治三十八年ノ改定後時ニ多少ノ變更ヲ加ヘサルニアラサルモ大要其舊ニ依リ必要ニ應シテ各種ノ機關ヲ附設シタルニ過キス例ハハ内部所管治道局、度支部所管水道局、同管稅官官制等ノ如シ明治四十年新協約締結後ニ於ケル官制改正ハ主トシテ各部ニ關係スルコト上述ノ如ク其規定頗ル煩細ニ亘ルヲ以テ以下部ニ依リテ之ヲ分チ單ニ其梗概ヲ記スルニ止ム

新官制梗概

内部

一、内部 從來地方警務、會計ノ三局ヲ置ケルモ會計局ハ之ヲ廢シ更ニ土木局及衛生局ヲ置キ土木局ハ舊内部所管治道局及舊度支部所管水道局ノ事務ヲ併セ管シ衛生局ハ前ニ警務局ノ掌理ニ屬シタル衛生事務ヲ割キテ之ヲ掌ル又新ニ内部ノ所管ニ移サレタル鐵道、軌道及電氣ニ關スル事項ハ土木局ヲシテ、移民ニ關スル事項ハ警務局ヲシテ之ヲ掌ラシメ前ニ内部ノ所管タリシ監獄ニ關スル事項ハ裁判所設置ノ結果司法部ノ系統ニ屬セシムルヲ便利ト認メ之ヲ該部ニ移シタリ内部ノ職員ハ大臣、次官及局長、四、秘書官一、書記官十二、事務官五、警視五、技監一、技師四、翻譯官三並主事、警部技手ヨリ

度支部

成リ外ニ巡查ヲ置キ尙地方土木工事ニ關スル事務ヲ處理スル爲工事豫算範圍内ニ於テ臨時ニ事務官、技師、主事及技手ヲ増置スルコトヲ得
警視廳ハ明治四十年七月新協約締結後舊警務廳ヲ改稱シ官制ヲ定メタルカ此ニ至リテ更ニ管轄區域ヲ京畿道全部ニ擴メ尙宮内府ノ依頼ニ由リ舊顧問警察ノ事務ヲ繼承シテ宮中警察事務ヲ管ス
前ニ内閣所管タリシ大韓醫院ハ移シテ内部大臣ノ管理ニ歸セシム
二、度支部 度支部及同所屬官制ノ改正ハ此次官制改正ノ最重要ナル部分ヲ占ム即チ(一)新ニ關稅局、稅關、臨時稅關、工部及燈臺局ヲ置キ度支部大臣ノ管理ニ屬シ舊總稅務司所管ノ下ニ全然特別ノ會計ヲ以テ經營シ來レル海關事務及海關工事ヲ掌理セシメ(二)新ニ財務監督局ヲ京城、大邱、平壤、全州及元山ニ置キ其下ニ多數ノ財務署ヲ全國樞要ノ地ニ配置シ舊財政顧問部、地方監部以下ニ於テ處理シ來レル徵稅事務及地方ノ財務ヲ監督セシメ(三)從來度支部内ニ置キタル印刷局ヲ獨立ノ一局トシ(四)會計檢査ノ事務ヲ嚴重ニ執行センカ爲新ニ會計檢査局ヲ設置シ隨テ從來ノ度支部檢査局ヲ廢シ(五)各部ノ建築事務ヲ合一處理シ以テ之カ改善ヲ計ラン爲從來ノ建築所

ヲ擴張シ同所附屬舊工業部ヲ煉瓦製造所ト改稱シ主トシテ政府建築事業ノ材料ヲ供給セシメ其他舊顧問本部ニ於テ處理セル財源調査ノ事務ヲ繼承シテ臨時財源調査局ヲ度支部内ニ置キ土地測量事務ニ從事セシムル爲度支部ニ臨時職員ノ増置ヲ認ムル等更改スル所甚々多シ然レトモ實際ニ於テハ重ニ舊財政顧問部及總稅務司廳ノ事務ヲ度支部ニ移シタルニ外ナラス度支部本廳ニ於テハ右等各機關ノ整備ニ伴ヒ舊來ノ五局ヲ減シテ司稅司計理財ノ三局トシ其職員ハ大臣次官ノ外局長三、秘書官一、書記官十三、事務官七、翻譯官二並主事ヨリ成リ別ニ臨時財源調査局ニ局長、書記官一、事務官三、技師五、主事及技手ヲ置ク

法部

三、法部 裁判所ノ新設及監獄事務ヲ加ヘタル等ノ爲、所管事務自カラ膨脹シ隨テ職員増加ノ必要ヲ生シ大臣次官ノ外局長二、秘書官一、書記官九、事務官四、翻譯官三及主事ヲ置クコトトナレリ

裁判所ノ設置ニ伴ヒ法官養成所ヲ擴張シ監獄ハ全國八箇所ニ之ヲ置キ凡テ之ヲ控訴院檢察長ノ監督ニ屬セシム

學部

四、學部 ニ於テハ改正スル所甚々少シ曆ノ編纂ヲ同部管掌事務ノ中ニ加

ヘ從來ノ觀象所ヲ廢シ本廳ニ於テハ職員ヲ増加シテ大臣次官ノ外局長二、秘書官一、書記官七、事務官四、技師三、翻譯官二及主事ヲ置キ豫算範圍内ニ於テ圖書ノ編纂及檢定ノ爲委員ヲ置クヲ得セシム

直轄學校官制ニ於テハ從來分立シタル在京城各外國語學校ヲ合一シテ漢城外國語學校トナセリ

農商工部

五、農商工部 鐵道事務ヲ内部ニ移シタル結果、鐵道局ヲ廢シ商務局及工務局ヲ合併シテ商工局トシ農務局及鑛務局ハ舊ニ依リ新ニ山林、水産ノ二局ヲ置ク其職員ハ大臣次官ノ外局長五、秘書官一、書記官八、事務官五、技師一、技師十四、翻譯官一、主事及技手ヨリ成リ尙豫算範圍内ニ於テ技師、技手及主事ヲ増置スルコトヲ得セシム

平壤鑛業所ニハ專任所長ヲ置キ特別作業會計ノ下ニ其事業ヲ經營セシム

以上明治四十年末ニ於テ制定公布シタル官制ヲ舉クレハ左ノ如シ

法典調查局官制 (明治四十年十二月二十六日韓國官報)

各部官制通則 (明治四十年十二月十八日韓國官報)

内部官制

同 上

韓國ノ制度

四七

韓國ノ制度

漢城府官制 (同上)

警視廳官制 (同上)

地方官官制 (同上)

大韓醫院官制 (明治四十年十二月二十九日韓國官報)

度支部官制 (明治四十年十二月十八日韓國官報)

建築所官制 (同上)

印刷局官制 (同上)

關稅局官制 (同上)

稅關官制 (同上)

財務監督局官制 (同上)

財務署官制 (同上)

臨時稅關工事部官制 (同上)

燈臺局官制 (同上)

土地測量事務ニ從事セシムル爲度支部ニ臨時職員ノ増置ニ關スル件 (同上)

會計検査局官制 (明治四十年十二月二十九日韓國官報)

煉瓦製造所官制 (同上)

法部官制 (明治四十年十二月十八日韓國官報)

監獄官制 (同上)

法官養成所官制 (同上)

學部官制 (同上)

學部直轄學校及公立學校官制 (同上)

農商工部官制 (同上)

平壤鑛業所官制 (明治四十年十二月二十九日韓國官報)

軍部官制

此次ノ官制改正ハ軍部ニ及ハス之ヨリ先キ韓國軍隊ノ大部分ヲ解散シ僅ニ侍衛隊ノ一部ヲ殘スコトトナルヤ軍政モ亦隨テ縮少シ同年八月二十八日軍部官制ヲ改正シタルヲ以テ再改正ノ必要ナキニ依ル

(四) 日本人任用

明治四十年新協約ニ據ル日本人ノ任用ハ同八月二日警務顧問丸山重俊ノ警視總監ニ任セラレタルヲ初トシ同八月日宮内府次官鶴原定吉、内務次官木

韓國ノ制度

内重四郎學部次官俵孫一、同十三日内部警務局長松井茂、同十五日各道事務官及警視ノ任命アリ、九月度支部、農商工部、法部各次官任命セラレ、十二月改正宮内府官制ノ實施ニ伴ヒ日本人ノ宮内府官吏ニ任用セララルモ、多ク明治四十一年一月各部新官制實施後ニ至リ日本人ノ任用更ニ増加シ、前顧問、補佐官、參與官若クハ其附屬員トシテ韓國政府ノ事務ニ從ヒタルモノハ概テ相當官職ニ就ケリ

第四節 地方

(二) 從來ノ地方行政

從來漢城府ノ外、全國ヲ十三道、一牧、三府、三百四十一郡ニ分チ、道ニ觀察使、牧ニ牧使、府ニ府尹、郡ニ郡守ヲ置キ、別ニ開港市場ニ監理ヲ置キ、其職權ハ各官制ノ上ニ明規セラレ、アリト雖五百餘年、因襲ノ久シキ絶テ其實施ヲ見ス、唯舊慣故例ヲ踏襲シ、地方官吏ハ人民ノ膏血ヲ搾リ、公金ヲ私シ、自己ノ財囊ヲ肥ス、才能事トスルノミ勸業、教育、土木、衛生等ノ地方政務一トシテ見ル可キ

地方政治ノ頹廢

モノ、ナシ、冤枉ヲ伸フヘキ裁判ハ、人民ノ財産ヲ横奪スルノ手段ニ用ヒラレ、人民ヲ保護スヘキ警察ハ、之ヲ迫害スル機械トナリ、幾多無名ノ誅求盛ニ行ハレ、而カモ其大部ハ國庫ニ收納セラレス、人民ハ地方政務ノ舉否ヲ憂ヘスシテ、一意唯豺狼ノ如キ地方官吏ノ暴戾ト苛征トニ戰慄スルニ至リ、テ地方政治ノ腐敗實ニ極度ニ達スト謂フヘキナリ、要之、スルニ地方官吏ハ租稅其他ノ名義ヲ以テ人民ノ財産ヲ強徵スル爲、裁判及警察ヲ其手足トナセリト云フモ、決シテ誣言ニアラス

地方政治ノ頹廢ノ原因

地方行政ノ頹廢此ノ如キ所以ノモノハ、其由テ來ル久シト雖、近接ノ原因ト認ム可キモノヲ舉クレハ、賣官ノ陋弊久シク風ヲ爲セルハ、其一ナリ、中央政府カ觀察使、郡守ニ對シテ何等ノ監督ヲ加ヘス法規訓令ノ如キ一モ地方官吏ノ眼中ニ在ラス、換言スレハ中央ノ政令都門ノ外ニ出テスシテ、地方官吏カ却テ中央權勢ノ意ヲ迎合スルニ專ナルハ、其二ナリ、觀察使カ地方行政ヲ統轄スルト同時ニ裁判權ヲ有シ、郡守亦或範圍ノ裁判ヲ爲シ、司法行政ヲ混淆セルハ、其三ナリ、租稅ニ常規ナク、無名ノ徵收頻ニ行ハレ、人民モ亦慣レテ之ヲ怪マス、怪ムモ之ヲ拒ム能ハサルハ、其四ナリ、官吏ノ給與菲薄ニシテ不

地方制度
調査委員

正ヲ誘フノ原因ヲ作スハ其五ナリ其他人文ノ程度低ク人民ニ權利ノ觀念
 ナク官吏ノ不法越權ヲ以テ不可抗力ト作シ輒ク之ニ服従スルカ如キ地方
 政務ニ關スル法令ノ具ラサルカ如キ其原因一々ニシテ數フ可カラズ
 統監府設置後地方政務ノ改善一日モ苟ニス可カラサルヲ認メ積極的ニ地
 方制度ヲ改正スルノ議ヲ決シ明治三十九年五月韓國政府ハ地方制度調査
 委員ヲ設ケ日韓兩國官吏數名ニ同委員ヲ囑託シテ調査ヲ遂ケシメ同九月
 二十八日新官制及附隨ノ勅令ヲ發シ同十月一日ヨリ之ヲ實施セリ之ヨリ
 先キ財政警務兩顧問部ハ各所掌事務ニ付地方政務ニ對スル施設改善ノ端
 ナ啓ケリト雖、事草創ニ屬シ未タ其績ヲ收ムルニ至ラザリシカ恰カモ之ト
 前後シテ其施設亦漸ク進ミ相待ツテ地方行政ニ一道ノ曙光ヲ認ムルニ至
 レリ

(二) 明治三十九年ノ改正

地方制度
改正ノ要
領

明治三十九年九月公布ノ地方官官制及附隨ノ法令ニ依リテ斷行シタル改
 革ハ頗ル多岐ニ亘ル其要項左ノ如シ
 一、行政區畫及名稱 十三道ノ制ハ其舊ニ依ルト雖從來郡ノ區域頗ル犬牙

錯雜シ甚シキハ飛地ノ他郡内ニ在ルアリ斗入地ノ深ク他ニ侵入スルアリ
 其最モ甚シキモノニ就テ整理ヲ加ヘ隨テ各道ノ(面)村數ニ多少ノ異動ヲ生
 セリ

從來濟州島ニハ之ヲ收ト云ヒ廣州、江華、開城ニハ之ヲ府ト稱シ他ハ之ヲ郡
 ト名ケタルヲ改メ新ニ開港市場所在地ノ郡ヲ府トシ其他ハ總テ郡トセリ
 即チ仁川、沃溝、群山、務安、木浦、昌原、馬山、東萊、釜山、德源、元山、城津、三和、鎮南浦、慶
 興、豆滿、江下、流露、國境、義州、龍川、鴨綠、江下、流清、國境ノ十一府ヲ置キ開港市場
 所在地中獨リ平壤ニ限リ之ヲ郡トシ其結果韓國ノ地方行政區畫ハ十三道
 十一府、三百三十三郡トナレリ

二、官廳 各開港市場ニ置キタル監理署及濟州牧使廳ヲ廢シ監理ノ事務ハ
 府尹ニ濟州牧使ノ事務ハ全羅南道觀察使ニ引繼カシメ濟州島ニハ單ニ郡
 衙ヲ置ク但平壤ニハ府ヲ置カサルヲ以テ同監理ノ事務ハ平安南道觀察使
 ニ引繼カシム

三、官制 新定ノ地方官官制ハ觀察使ノ掌理ス可キ事務ヲ舉示シ内部、度支
 部兩大臣ノ定ムル所ニ依リ地方稅ヲ賦課スル權ヲ認メ觀察使及府尹郡守

ニ命令ヲ發スル權限ヲ附與シ觀察使ノ外道ニ參書官、警務官及通譯官ヲ新置シ府ニ府尹ノ外、參書官、通譯官ヲ新置シ府郡ノ郷長及巡校ヲ廢ス而シテ觀察使ハ勅任二等以下ニ限リ以テ從來大臣等カ觀察使ニ轉シ中央ノ命令ヲ遵奉セサリシ弊ヲ防ケリ

外國及外國人ニ關スル事務ハ觀察使ニ於テ取扱ハシメ府尹ハ觀察使ノ委任ヲ受ケテ之ヲ取扱ヒ關係郡守ヲ指揮スルヲ得セシメ尙内部大臣ヲシテ統監ハ外國及外國人ニ關スル事項ニシテ緊急ヲ要シ若クハ事態重大ナルモノハ直接關係觀察使、府尹又ハ郡守ニ指揮命令スル所アルヘキニ依リ之ヲ執行シタル後所管府部ニ報告スヘキ旨ノ訓令ヲ發セシメタリ

四、監督 内部ニ參與官(日本人)ヲ置キ專ラ地方行政ノ監督ヲ掌ラシムルノミナラス各觀察府所在地ニ理事廳又ハ支廳ヲ置キ我理事官又ハ副理事官ヲシテ地方政務ノ改善ニ就テ幫助監視セシムルコト既ニ記シタル所ノ如シ

五、任用給與 地方官詮考規程及同細則ヲ制定シ地方官タルニ必要ナル資格ヲ定メ任用ニハ銓考委員ノ調査ヲ要シ試驗ヲ行フ觀察使以下ノ給與ハ

凡テ中央官吏ト同額トシ内部大臣ノ必要ト認ムル觀察使、府尹及郡守ニハ交際費ヲ給シ之ト同時ニ地方官衙ノ經費ヲ增加セリ但地方官銓考規程ハ明治四十年六月ニ至リ之ヲ廢止シタリ

以上各項ト同時ニ裁判制度ヲ改正シテ司法行政分立ノ素地ヲ爲シ又管稅官官制ヲ制定シテ徵稅事務ヲ地方官ヨリ分離スルノ端ヲ啓ケリ何レモ別章ニ詳説ス

裁判及徵稅事務ノ分離

(三) 明治四十年ノ官制改正

地方ニ於ケル稅務警務及法務ノ改善ハ各其條下ニ詳記スル如ク漸ク以テ進捗シ觀察使郡守ハ又從前ノ如ク威權ヲ擅ニスルヲ得ス中央ノ政令ヲ全國ニ敷クノ途自カラ啓カルト雖制度ノ大綱ニ於テハ未タ大ニ變スル所アラズ觀察使ハ稅務監トシテ管下ノ徵稅事務ヲ綜攬シ兼ネテ道裁判所ノ判事トシテ司法ノ事ヲ執リ警察權ノ其手中ニ在ルハ素ヨリ言ヲ俟タス唯事ノ實際ニ於テ此等事務ヲ處理スル爲、財政警務兩顧問支部以下各觀察道所在地其他ニ配置シ法務ニ關シテハ法務補佐官ヲ置キ且理事廳若クハ理事廳支廳ノ一般地方行政ヲ幫助監視シ韓國地方官吏ノ非違ヲ制スルアリ

地方行政顧問制度

地方制度
ノ大成

以テ漸次地方ニ於ケル施政ノ改善ヲ進メタルニ外ナラサルナリ
 明治四十年十二月制定公布セラレタル中央及地方官制ハ地方制度ノ上ニ
 重大ナル効果ヲ及セリ即チ觀察使ヲ以テ稅務監ヲ兼ヌルノ制廢セラレ國
 稅徵收及地方財務ニ關スル事項ハ全然地方官ノ權域ヨリ脱シテ度支部ノ
 直轄ニ移リ控訴院、地方裁判所及區裁判所ノ設置ニ依リ司法ニ關スル事項
 ハ全ク行政官ノ手ヲ離レ警務ニ關シテハ其觀察使ノ管理ニ屬スルコト依
 然タリト雖事務ノ執行ハ警察署、同分署以下ノ警視、警部、巡查之ニ當リ郡守
 ナシテ之ニ干與セシメス中央ニ於テハ内部ニ警務局ヲ置キ全國各道ノ警
 務ヲ監督掌理セシム要之スルニ從來一時ノ權宜ニ從ヘル地方制度ハ此ニ
 至リテ始メテ大成シタルモノトス

改正地方
官制ノ大
要

警察

觀察使ノ
職權

今改正官制ノ大要ヲ舉クレハ道ニ觀察使、書記官、事務官各一人及警視、主事、
 警部、巡查ヲ置キ警視ハ各道ヲ通シテ二十七人、主事ハ七十八人、警部ハ一百
 四十七人トス觀察使ノ權限ハ從來頗ル廣汎ナリシカ兵事、收稅、鑛業、度量衡
 等ニ關スル事務ヲ削除シテ之ヲ適當ニ限定シ道書記官、事務官及主事ヲシ
 テ一般內務行政ニ當ラシメ警察事務ハ上記ノ如ク警視以下ナシテ之ヲ掌

府郡

理セシム府郡ニ於テハ從來ト大差ナク其職員中、府ニハ參與官ヲ置クノ制
 ナリシヲ必要ニ應シ府郡ニ事務官ヲ置クヲ得ルコトトス其他觀察使、カ道
 ノ官吏、府尹、郡守又ハ警察署長ニ其職權ノ一部ヲ委任シ以テ事務處理ノ便
 宜ヲ計レルコト道令發布ノ權ヲ存置スルモ府郡令發布ノ權ヲ認メサルコ
 ト下級ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止シ施政ノ監督ヲ爲スノ權ヲ觀察
 使ニ與ヘタルコト目下地方稅ノ制度ナキニ依リ之ニ關スル條項ヲ削除シ
 タルコト等ヲ改正ノ重ナル點トス

漢城府

地方費ノ
増加

漢城府官制ハ明治三十九年地方制度改正當時ニ於テモ更改ヲ加フルコト
 ナク今次ノ改正ニ於テハ唯多少職員ヲ増加スルニ止マレリ
 地方行政ノ發達ニ伴ヒ經費ノ膨脹ハ已ムヲ得サルノ數タリ道府郡及漢城
 府經費豫算ハ明治三十八年ニ於テ八十二萬三千餘圓ナリシカ同三十九年
 ニハ減シテ七十四萬三千餘圓トナリ同四十年ニハ再増シテ七十八萬七千
 餘圓ニ上リ同四十一年ニハ一百九萬九千餘圓ニ劇増シタリ

第五節 官 規

(一) 官吏ノ俸給

官紀ノ紊亂、吏風ノ頹廢ハ其由テ來ル所多シト雖官吏ノ俸給非薄ニシテ自奉ニ足ラサルハ亦其一因ト爲ササル可カラス況ンヤ韓國ノ物價ハ貨幣其他ノ關係ヨリ頻年大ニ騰貴セルニ於テチヤ是ヲ以テ明治三十八年中財政顧問ハ韓國政府ニ勸告シテ中央行政官吏ノ増俸ヲ行ヒ次テ宮内官及軍人ニ及ホシ特ニ下級官吏ノ俸給ニ就テハ著シク其額ヲ増シタリ從來ノ規程ニ於テ勅任官ノ俸給ハ年額最低七百五十圓ヨリ最高二千五百圓ニ至リ奏任官ハ最低二百四十圓ヨリ最高八百五十圓ニ至リ判任官ハ最低六十圓ヨリ最高二百五十圓ニ至ル韓國人ノ生活程度ヲ以テスルモ自奉ニ足ラサルヤ明白ナリ依テ三十八年ノ改正ニ於テ勅任官ヲ千六百圓乃至四千圓奏任官ヲ五百圓乃至千四百圓判任官ヲ百二十圓乃至六百圓トシ即チ判任官ノ如キハ最高最低トモニ從來ノ倍額以上、勅奏任官ニ於テモ略々之ニ準スルコトトシ先ツ之ヲ一般行政部局ノ官吏ニ適用スルヤ宮内官及軍人等囂々トシテ政府ニ薄リ終ニ宮中經費ノ増加セラレサル限リ臣子ノ義、増俸ヲ受クルニ忍ヒスト稱シ爲メニ官吏一般俸給ノ受領ヲ拒絕スルニ至リシカ此

明治三十八年ノ増俸

滑稽ナル紛擾ハ久シカラスシテ止メリ爾後大體ニ於テ當時ノ制ヲ踏襲シテ渝ラス

地方官吏ノ増俸

明治三十八年ノ増俸ハ地方官吏ニ及ハス依テ明治三十九年地方制度改正ノ當時、一般地方官吏ノ俸給ヲ中央官吏ト同一ナラシメタルハ既ニ記述スル所ノ如シ

新官制下俸給

明治四十年官制改正ノ當時ニ於テモ内閣總理大臣及各部大臣ノ増俸其他已ムヲ得サル少數者ヲ除キ官吏ノ俸給ハ一般ニ舊制ヲ踏襲セリ日本人官吏ノ俸給カ韓國人ト同一ナルヲ得サルハ無論ナルモ日韓人各別ノ俸給令ヲ設クルハ事情可ナラサルヲ以テ本俸ヲ同一トシ日本人ニ限リテ相當ノ手當ヲ支給スルノ制ヲ採ル而シテ韓國官吏タル日本人ノ俸給及手當合計額ハ略々在韓帝國官吏特ニ統監府官吏ノ本俸及在勤俸合計額ヲ標準トシテ之ヲ定メタリ

(二) 任用

賣官ノ陋弊、緣資ノ惡習多年風ヲ爲シ甲午(明治二十七年)改革以來任用銓考ニ關スル多少ノ規程ヲ存スト雖殆ント空文ニ止マレリ明治三十八年俸給

令改正ノ當時任用選叙ノ例規ニ多少ノ補修ヲ加ヘ同三十九年文官任用令
日本人任
用規程ヲ公布シ同四十年官制改正ノ當時ニ於テモ姑ク其舊例ニ據リテ改メス日
 本人官吏ノ任用ニ就テハ内規ヲ以テ一定ノ任用資格ヲ設ケ漫ニ無資格者
 ナ登用スルコト莫カラシム同四十一年ニ至リ文官任用令ヲ制定公布シ其
 規程始メテ備レリ
 君主自カラ微官卑職ヲ任免スルカ如キ從來甚タ稀ナリトセス此等ノ弊習
 ハ今ヤ全ク除カレ官吏ノ地位ハ著シク安固ヲ加ヘタリ

第六節 軍 制

(一) 解散前ノ軍隊

甲午ノ改革ニ當リ日本ニ倣ヒテ新軍隊ヲ編成シ其後數次ノ更改ヲ經明治
法文上ノ
兵數四十年八月軍隊解散前ニ於ケル韓國軍隊ハ法文上左ノ如ク定メラレタリ

侍衛步兵聯隊 二箇聯隊

侍衛騎兵隊

侍衛砲兵隊

侍衛工兵隊

輜重兵隊

以上京城駐屯(近衛)

鎮衛步兵大隊 八箇大隊

京畿道水原、忠清北道清州、慶尙北道大邱、全羅南道光州、江原道

原州、黃海道海州、平安南道平壤、咸鏡南道北青駐屯(地方軍隊)

侍衛步兵聯隊ハ三箇大隊、十二箇中隊ヨリ成リ一箇中隊ノ將校士卒ハ百五
 十一人ヨリ成ル侍衛騎砲工兵隊ノ將校士卒ハ百四十人乃至二百六人ニシ
 テ略々我中隊ニ匹適ス又鎮衛步兵大隊ノ編制ハ侍衛步兵大隊ニ準シ即チ
 四箇中隊ヨリ成リ一箇中隊ノ將校士卒ハ同シク百五十一人ナリ以上ヲ通
 算スルニ侍衛各隊四千餘人、鎮衛隊四千八百餘人、合計約九千ノ軍隊ハ京城
 及地方ニ分屯シタルヘキ筈トス然レトモ實際ニ於テハ遙ニ定數ニ下リシ
 ノミナラス侍衛騎砲工兵隊及輜重兵隊ノ如キハ殆ント其存在ヲ認メ難ク
 若クハ全ク實在セサル狀態ニ在リタリ

軍政及軍令ノ機關トシテ軍部アリ元帥府アリ各種ノ軍事教育機關アリ軍
 政及軍令ニ關スル各種ノ法令條規アリ明治四十年募兵令ヲ發布シ國民皆

軍隊ノ實

兵ヲ宣言スル等、法文ノ上ニ於テ備ハラサルニ非サルモ其内容ニ至リテハ一トシテ見ルヘキナク兵士ハ悉ク傭兵ニシテ軍隊ナルモノハ畢竟徒ニ國財ヲ糜スルニ止マレリ同四十年八月將來正規兵ヲ徵募シ有力ノ軍隊ヲ再建スルノ目的ヲ以テ韓國政府自ラ之ヲ解散スルニ至レル蓋シ偶然ニアラサルナリ

(二) 近衛ノ編制

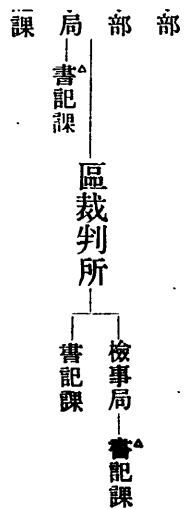
解散後ノ軍隊 地方駐屯ノ鎮衛歩兵大隊ハ盡ク之ヲ解散シテ又軍隊ヲ置カス中央ニ於テハ侍衛隊解散後別ニ左ノ諸隊ヲ編成シ皇宮守衛及儀仗ニ當ラシム

近衛歩兵大隊、四箇中隊、一箇中隊ハ百五十七人、總計六百四十四人(明治四十年八月編制發表)

近衛騎兵隊、九十二人(明治四十年十二月編制發表)

軍部ハ之ヲ廢止セス其機關ヲ縮小スルニ止メ別ニ侍從武官府官制及陪從武官府(東宮武官)官制ヲ發布シ軍部大臣例トシテ侍從武官長ヲ兼ヌルコトトシ其他陸軍武官學校官制、親王附武官官制等ヲ制定シ之ト同時ニ軍部所管官廳官制及條規ノ不必要ナルモノヲ廢止シタリ

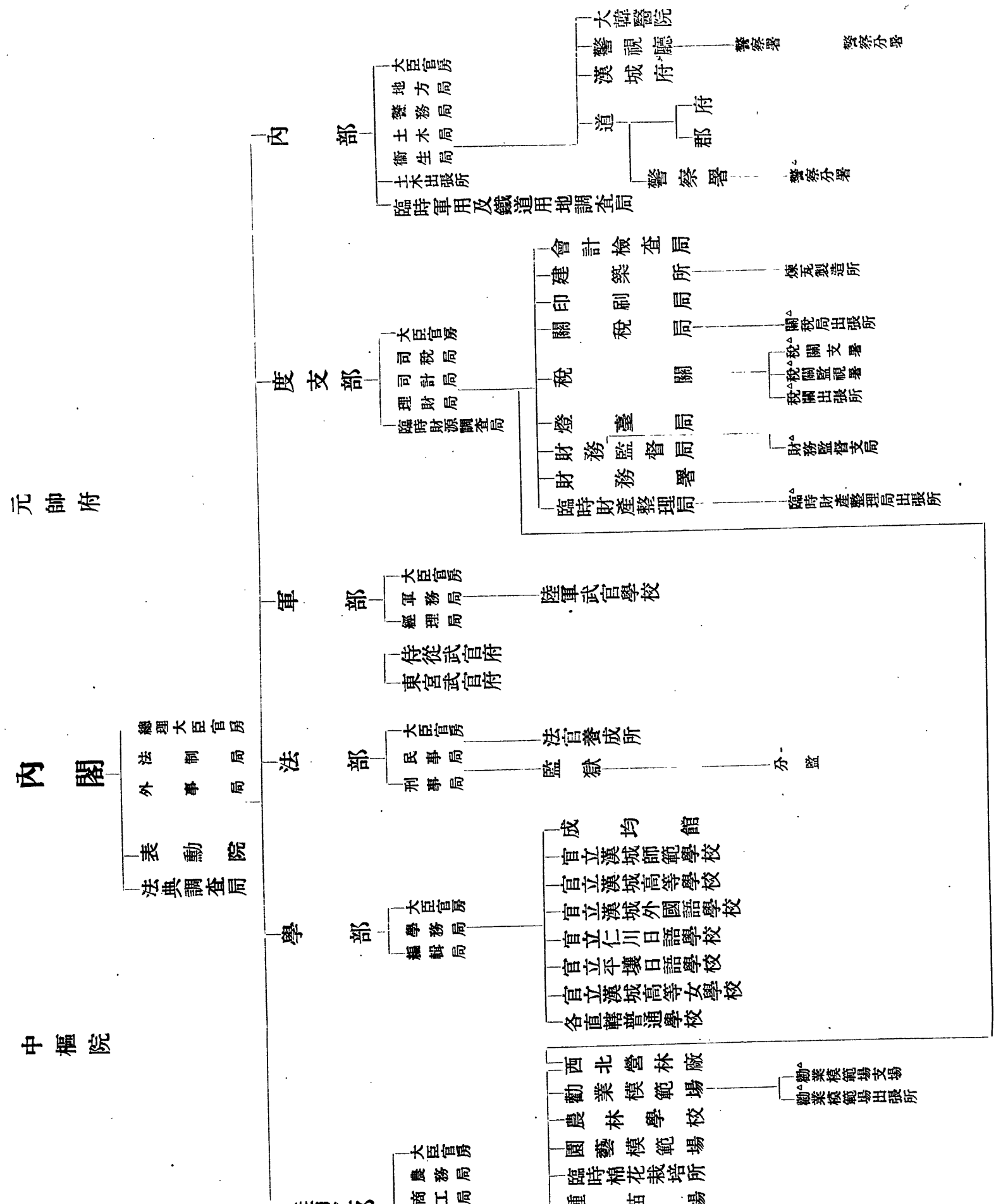
軍部大臣
侍從武
官長例兼



制ニ於テ認メタルモノトス

韓 國 政 務 機 關 一 覽

(查 閱 月 十 年 一 十 四 治 明)



元帥府

內閣

中樞院

官制條例 管官廳官制及條規ノ不必要ナルモノヲ廢止シタリ

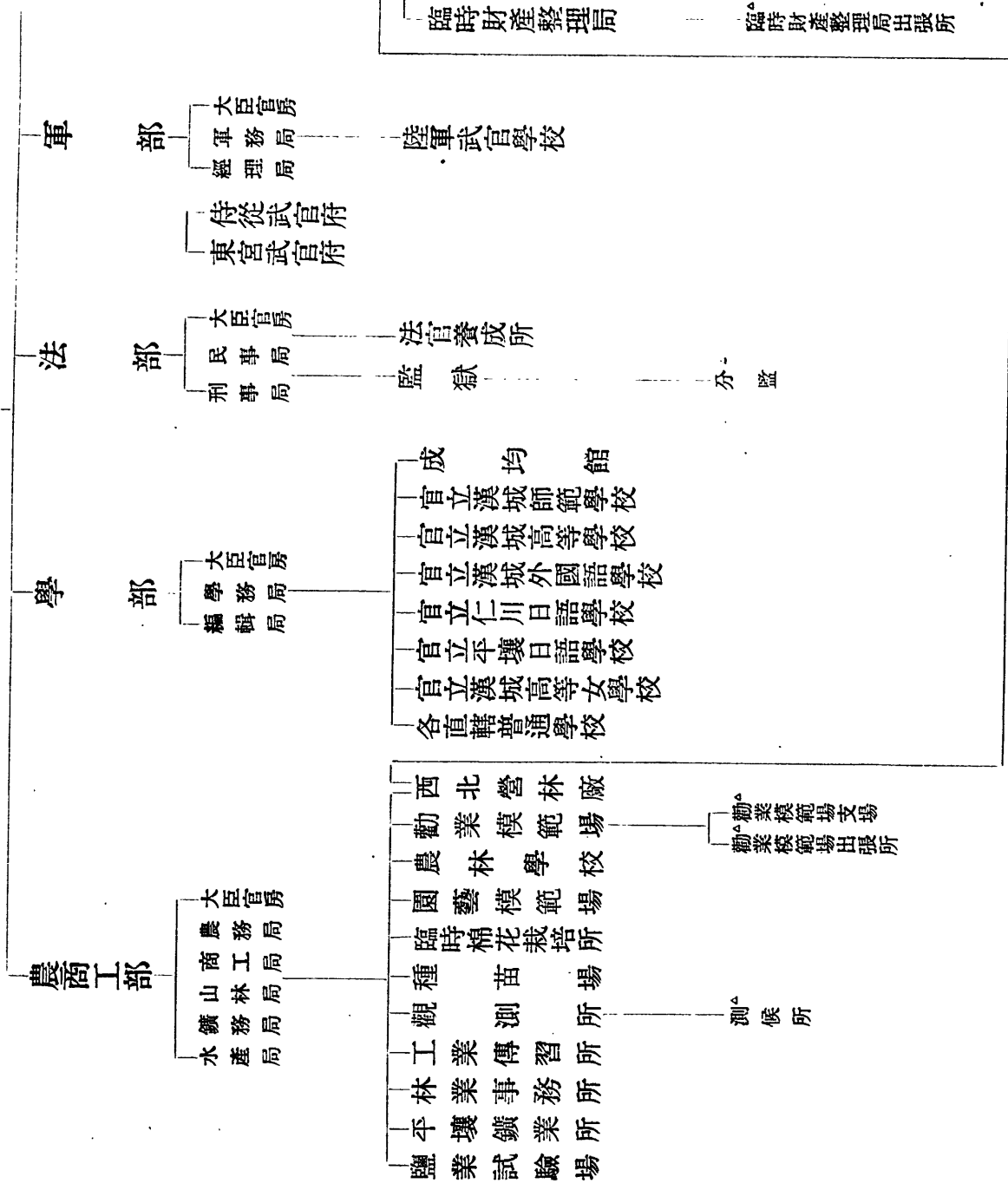
韓 國 政 務 機 關 一 覽

(查 閱 月 十 年 一 十 四 治 明)

中 樞 院

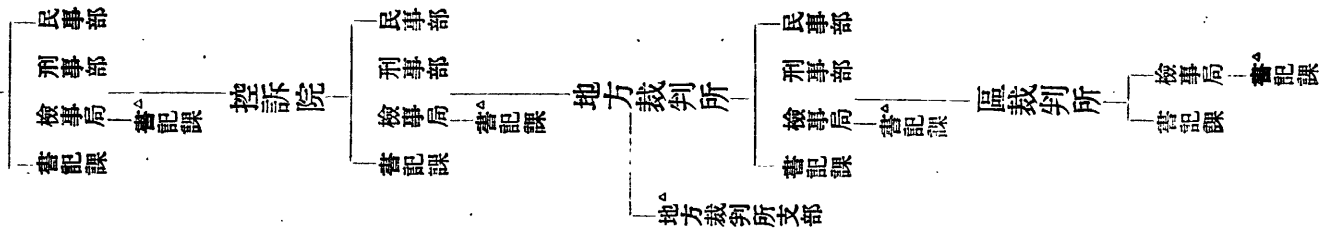
內 閣

- 總理大臣官房
- 法 制 局
- 外 事 局
- 表 勳 院
- 法 典 調 查 局



臨時財産整理局
臨時財産整理局出張所

大 審 院



(備考) 本表中△印ハ必要ニ應ジ豫算ノ範圍内ニ於テ設置スルコトヲ官制ニ於テ認メタルモノトス

第四章 宮中制度

第一節 宮中及府中

宮中府中混淆シテ其別明ナラス宮中ヲ以テ府中ヲ制シ政府責任ノ歸スル所罔然トシテ知ル可カラサルハ韓國古來ノ因襲ニシテ近年益々其甚シキヲ加ヘタルノ跡アリ今其最顯著ナル點ヲ舉クレハ

宮中上官
吏任免

上ハ大臣ヨリ下ハ郡守若クハ其以下ニ至ル迄任免黜陟一ニ宮中ノ意ニ出テサルハナク卑官微職ノ進退尙且君主之ヲ親ラシ若クハ君主ノ直接命令ノ名ノ下ニ宮中權勢ノ意ノ如クニ行ハレ隨テ大小ノ官吏ハ唯宮中ノ意ヲ迎合シテ自己ノ地位ヲ衛ルニ汲々トシ又他ヲ顧ミルニ違アラス政府當然ノ畛域ヲ舉ケテ多々益々宮闈ノ裏ニ委スルノ勢ヲ馴致シ

宮中下官
家財政

財政上ニ於テ宮中ハ國家以外別ニ徵稅ノ主體ヲ爲シ自ラ徵稅官ヲ派シテ各種ノ雜稅ヲ徵收シ無名ノ賦課ヲ強ヒ隱然國庫ニ對立スルノ地步ヲ占ムルノミナラス皇室ニ係ル新費目アル毎ニ其額ノ大小ヲ問ハス年々ノ皇室

費定額外ニ國庫ニ向テ之ヲ要求シ國庫ノ餘力全部ノ支出ヲ許サレハ殘額ハ之ヲ國庫ノ負債トシテ將來ニ還收ノ餘地ヲ作り或ハ度支部大臣ニ命シ人民ニ租稅受領書ヲ賣渡シ之ヲ買受ケタル私人ヲシテ將來ノ國庫收入ヲ直接取立テシムルノ方法ニ依リ謂ユル外割制度ヲ國庫ニ強制シ甚シキハ國庫收入ノ資源タル或稅種ヲ奪ヒテ宮内府ニ移付セシメ或種類ノ營業免許若クハ特許ニ就テハ宮内府自カラ之ヲ處分シテ手數料、免許料ノ如キヲ人民ヨリ徵收シ地方所在陵園其他ノ修築費ノ如キヲ恣ニ附近人民ニ賦課シ

宮中ト外國人

外國人ト各種ノ契約ヲ締結シ其履行ニ伴ヘル義務ハ政府ヲシテ之ニ任セシメ

宮中ト裁判

特赦ノ濫用ニ依リテ裁判ノ結果ヲ無効ニ歸シ

宮中ト政府以上ノ政府

其他政府各部局ノ行政ニ干與シ若クハ自カラ政府ニ代リテ直接ニ行政權ヲ行使シ事實ニ於テ宮中ハ政府以外ノ政府若クハ政府以上ノ政府タル觀ヲ呈シ大臣以下府中ノ官吏之ヲ何如トモスル能ハス官制法規ノ如キ殆ント宮中ノ自恣ニ對シテ何等ノ威力ヲモ有セサル狀態ニ在リ

宮中ト濁

而シテ宮中自體ニ在リテハ雜輩挾雜ノ徒妄ニ君側ニ近キテ國政ヲ左右スルノミナラス幾千無用ノ冗員其内ニ充滿シテ徒ニ皇室費ヲ消糜スルノミ先ツ以テ宮中府中ノ別ヲ明ニシ根本ノ禍ヲ芟除スルニアラサレハ庶政改善ノ如キ素ヨリ之ヲ期スルヲ得サルヤ明ナリ

宮中ト別

財政顧問設置以後國家財政ノ處理ト關聯シテ宮中財政ノ整理ニ及シタルコトナキニ非スト雖多年ノ積習紛糾シテ手ヲ下スニ所ナカラントジ一方明治三十八年ノ日韓協約ニ依リ外國人ニ關係スル宮中ノ擅恣ハ漸次ニ之ヲ減スルヲ得タリト雖尙動モスレハ事端ヲ滋生セントスルノ勢ナキニ非ス而シテ此間帝國ノ保護ニ慊焉タル民間ノ不平分子カ暗ニ宮中ノ勢力家ト提携シテ各般ノ煩累ヲ生スルアリ統監府設置以來益々宮府ノ別ヲ明ニスルノ必要ヲ認メ政府ヲ指導シテ漸次宮中ノ羈絆ヲ脱シ責任ノ所歸ヲ明ニシテ以テ乘スルノ餘地ナカラシムルト同時ニ宮中ヲ肅清シ宮中ノ雜輩ヲ遠ケ其他宮中ノ廓清ニ必要ナル指導勸告ヲ與ヘ漸次舊習ヲ一洗センコトヲ努メタリ其行政各部ニ關スルモノハ他各章ニ詳述スルヲ以テ之ヲ省キ宮禁令發布ノ如キ帝室財產處理ノ如キ宮内府官制改正ノ如キ日本人任

宮中關係ノ施設

用ノ如キハ其外面ニ現ハレタル最重要ノ事實ニシテ甲午改革以來常ニ施政改善ノ前提トシテ最大必要ヲ感セシメタル宮府ノ別モ今ヤ漸ク其實ヲ舉クルニ至レリ而シテ之カ爲ニ施政改善ノ事始メテ其妨礙ヲ除去シ得タルノミナラス韓國帝室モ亦其尊嚴ヲ永久ニ維持スルノ途ヲ確立シタルヲ認ム

第二節 宮中肅清

宮中ノ狀

韓國ノ宮廷ハ從來隱然政治ノ中心ヲ爲シ隨テ百般政弊ノ根源タリシノミナラス多年ノ因習風ヲ爲シテ宮閣ノ規律甚シク壞廢シ内外ノ雜輩奸細ハ妄ニ宮中ニ出入シテ各種ノ陰謀ヲ企テ皇帝ノ耳目ヲ壅蔽シ帑金ヲ詐取スル等、爲ニ韓國ノ秩序ヲ紊亂シ安寧ヲ妨クルコト少カラス術客巫女ノ徒亦頻ニ宮中ニ入りテ妖言ヲ恣ニシ宮中些細ノ事一ニ此輩ノ卜筮祈禱ニ依リテ決スルハ勿論、彼等ハ策士ノ操ルカ儘ニ若クハ自カラ進シテ政治ニ容喙シ其害毒一ニシテ止マラス宮中ノ風氣ヲ一新スルニアラサレハ啻ニ宮府

顧問警察
衛ノ宮中警

ノ別ヲ正シ政弊ノ一原由ヲ芟除スル能ハサルノミナラス從來ノ狀況ハ實ニ皇室ノ尊嚴及利益ヲ傷フノ甚シキモノタリ此ニ於テ統監ハ宮中ノ現狀永ク之ヲ放任ス可カラサルヲ認メ明治三十九年七月特ニ皇帝ニ謁見シ顧問警察ヲシテ皇宮ノ警衛ニ當ラシメンコトヲ奏上シ陛下ノ嘉納ヲ得タリ警務顧問ハ則チ日本警察官ヲ宮中各門ニ配置シ韓國巡檢及兵士ト共ニ宮殿及各門ノ取締ニ任セシム次テ委員ヲ設ケテ宮中肅清ニ關スル重要ノ事項ヲ審議セシメ宮禁令ヲ發布シ門鑑ノ制ヲ定メ漸次積習ヲ一洗スルノ方針ヲ取レリ

宮禁令

宮禁令ハ明治三十九年七月七日ノ韓國官報ヲ以テ公布セラレ(一)宮禁ノ出入ハ宮内府大臣ノ監督ニ屬シ宮殿ハ侍從院卿、宮門ハ主殿院卿之ヲ管掌スルコト(二)宮殿宮門ノ出入ニハ門票ヲ用ウルコト(三)宮殿門票ノ交付ハ侍從侍陪從武官其他殿内ノ職務ヲ帶フル者及各官衙長官ニ限り又宮門門票ハ官吏及其使役者ニシテ宮門出入ノ必要アル者ニ限ルコト(四)但議政以下各大臣、中樞院議長、副議長、侍陪從武官長及召命ヲ承ケタル元老、大臣、特進官、承候官ハ宮殿出入ニ門票ヲ要セス又現職軍人警察官ニシテ制服ヲ着用スル

宮禁令施行ノ結果

者ハ宮門門票ヲ要セサルコト(五)宮中ヨリ物件ヲ搬出スルニハ物件票ヲ用
 ウヘキコトヲ規定シ付スルニ罰則ヲ以テセリ次テ門票並物件票交付規則
 ヲ發布シ宮殿門票ハ侍從院卿ヨリ宮門門票及物件票ハ主殿院卿ヨリ交付
 スルコトヲ規定シタリ

要之スルニ宮禁令ノ施行ハ一定ノ官職ヲ有スル者ノ外宮中ニ出入スルヲ
 禁シ加フルニ其出入ハ必ス門票ニ依ラシメ而シテ門票ノ發給ハ事實ニ於
 テ顧問警察之ヲ管掌スルヲ以テ彼ノ挾雜奸細ノ輩妄ニ宮中ニ竄入セント
 欲スルモ到底之ヲ敢テスルノ餘地ヲ剩サス宮中ノ風氣爲ニ肅然タルニ至
 レリ

之ヨリ先キ丸山警務顧問カ警察官吏ヲ引率シ始メテ宮中ノ警衛ニ任セン
 トスルヤ宮中ノ官吏ハ種々辭柄ヲ設ケテ之ヲ拒ミ門票ノ制ヲ敷クニ當リ
 テモ亦多少ノ犯則者ヲ出シ宮中ノ不安危懼ニ至リテハ當初最モ盛ナリシ
 ト雖久シカラスシテ各般ノ物議漸ク鎮マリ宮殿宮門ノ警衛共ニ我警察官
 吏ノ誠實ナル服務ニ依リテ全キヲ得ルニ至レリ其結果トシテ内外各地ニ
 散在シ陰謀ヲ事トスル策士ト宮中トノ往來ハ漸次減少ヲ見ントスルノ趨

勢ヲ呈セルノミナラス皇室尊嚴ノ保持ニ於テモ亦大ニ加フル所アルヲ得
 タリ

第三節 宮内府官制

官制沿革

明治四十年ノ官制改正

甲午改革ノ際始メテ宮内府ヲ置キ大要日本ノ制度ニ模倣シテ官制ヲ定ム
 爾後其改正頻々相次キ最近ニ於テハ光武九年即チ明治三十八年三月官制
 ノ全體ニ亘リテ改正ヲ加ヘタリ

明治四十年新協約締結後政府各部ト同シク宮内府ニ日本人官吏ヲ任用ス
 ルコトトナルヤ先ツ官制改正ノ必要ヲ認メ同年十一月他ノ各部ニ先チテ
 新官制ヲ發布セリ從來宮内府官制ハ頗ル複雑ニ亘リ多數ノ院司雜然併立
 シテ其間事務ノ連絡ヲ缺キ各院司財產ヲ分管シ獨立ノ會計ヲ組織スル等
 之ヲ約言スレハ唯多數官廳ノ集合ニ過キササルノ觀アリシヲ以テ新官制ニ
 於テハ一方無用ノ院司ヲ廢シ冗員ヲ淘汰スルト同時ニ他方ニ於テハ専ラ
 事務ノ連絡及統一ヲ計リ帝室ニ關スル一切ノ事務及所屬官吏ノ總理統督

宮中制度

ヲ舉ケテ宮内府大臣ノ責任ニ歸シ以テ名實トモニ一官廳タルノ體用ヲ全カラシメンコトヲ期セリ

從來宮内府ニ大臣官房及各種ノ名稱ヲ有スル二十五個ノ官廳ヲ置キ以テ帝室ニ關スル事務ヲ分掌セリト雖モ新官制ニ於テハ減シテ大臣官房ノ外十二廳トシ適宜其事務ヲ併合セリ即チ新舊制度ヲ對照スレハ左ノ如シ

宮内府所管官廳ノ聯合

新制

大臣官房	大臣官房	大臣官房調査課ニ事務ヲ移ス
侍從院	侍從院	侍從院ニ併合ス
掌禮院	掌禮院	侍從院及主殿院ニ併合ス
承奉府	承奉府	掌禮院ニ併合ス
皇宮	皇宮	
東宮	皇太子侍講院	
奎章閣	奎章閣	

舊制

弘文院	奎章閣ニ併合ス
宗簿司	同上
敦寧司	同上
内藏司	内藏院ニ併合ス
尙方司	同上
營繕司	同上
典膳司	同上
主殿院	主殿院ニ併合ス
太僕司	
帝室會計審査局	
皇室會計監査院	
皇族家職員	
親王府	
内廷司	
帝室財産整理局	
經理院	帝室財産整理局ニ事務ヲ移ス

承奉府ハ太皇帝宮ニ關スル事務ヲ掌ル
奎章閣ハ我圖書寮ニ當ル
宮中制度

但シ從來モ實際ニ之ヲ罷カス

宮中制度

帝室財産整理局ハ宮内府官制ト別箇ノ官制ヲ以テ定メラル
 大臣官房ニ人事庶務調査主馬ノ四課ヲ置ク
 帝室財産整理局ハ宮内府大臣ノ管理ニ屬シ帝室所有動産及不動産ノ整理維持及經營ニ
 關スル一切ノ事務ヲ掌リ整理農林測量主計ノ四課ヲ置ク
 帝室財産整理局ハ明治四十一年六月廢止セラル

宮内府ノ職員

宮内府ノ職員ハ府ニ大臣次官秘書官二人書記官三人ヲ置キ侍從院以下所
 屬各官廳ノ長官ハ侍從院掌禮院主殿院及帝室會計監查院ニハ卿ト云ヒ承
 寧府ニハ總管ト云ヒ奎章閣ニハ大提學ト云ヒ皇后宮東宮ニハ大夫ト云ヒ
 典膳司ニハ司長ト云ヒ宗親家職ニハ總辦ト云ヒ以下侍從禮式官理事技師
 典醫長樂師長其他ノ職員ヲ置キ帝室財産整理局ニハ長官次長事務官技師
 等ヲ置ク

各宮事務
整理所及
供進所

一司七宮(内需司龍洞宮於義宮明禮宮壽進宮毓祥宮宣禧宮景祐宮)ニ屬スル
 土地ノ管理ハ各宮事務整理所ヲ廢止スル結果同シク帝室財産整理局ニ移
 シ又供進所ヲ廢シテ從來其管掌ニ屬セル御供事務ヲ典膳司ニ祭祀事務ヲ
 掌禮院ニ移セリ

祭祀關係
各官制

祭祀ニ關係アル壇廟社殿宮及各陵園墓ノ官制ハ一時其舊ニ仍リシモ明治
 四十一年一月ニ至リテ改正ヲ加ヘタリ

日本人任

新官制ハ明治四十年十二月一日ヨリ施行セラレ同時ニ日本人ヲ官吏ニ任
 用シ漸次事務ノ刷新ニ着手セリ而シテ官制ノ結果ニ依リ廢官又ハ退官ト

冗員淘汰
ノ賜金

ナリタル者ニ對シテハ同四十一年一月退官恩賜金支給規程ヲ制定シ之ニ
 依リテ恩賜金ヲ授ケタル額同年上半季ニ於テ勅任官以下百六十六人此金
 額二萬千八百餘圓ニ上ル若シ夫レ多年宮廷紀綱ノ弛廢ニ乘シ漸次増加セ
 ル員役ニ至リテハ其數實ニ四千餘名ニ上リ其大多數ハ何等掌務ノ存スル
 ナク眞ニ宮闈裡ニ於ケル無用有害ノ冗員タリ淘汰ノ必要素ヨリ言テ俟タ
 ス然レトモ一時ニ之ヲ斷行スルハ徒ニ人心ヲ聳動スル所以タルヘキヲ以
 テ官制改革以後時機ヲ見テ數回ニ之ヲ罷免シ其人員約二千四百此一時賜
 金額十七萬九千六百餘圓別ニ宮中祀祭官ノ罷免三百餘人ヲ合セテ賜金額
 二十萬三十圓ニ上リ此等ノ中ニハ世襲ノ者スラ在リタルニ拘ラス圓滿ニ
 其處分ヲ了スルヲ得タリ其結果將來多額ノ經費ヲ減スルヲ得ヘシ

宮中制度

第四節 帝室財產整理

帝室財產ノ種類

國家及帝室ノ觀念混亂セル中世の國家ニ於テ國有財產ト帝室有財產トノ混同アルハ當然ノ傾向ニシテ韓國ノ如キ亦實ニ之ヲ免レス從テ今遽ニ兩者ヲ甄別スルハ甚タ困難ナリト雖現ニ帝室ニ收入ヲ供シ宮内府管理ノ下ニ在リタル財產又ハ資源ヲ舉レハ土地アリ家屋アリ幾多ノ雜稅アリ又曩ニハ鑛山アリ土地ハ宮殿陵墓ノ基址ハ勿論トシ全國ニ亘リテ田畑山林荒蕪地沼澤等有ユル地目ヲ含ミ初ヨリ帝室ニ屬シタルモノト近年國有ヨリ移付シタルモノト又其管理ニ就テモ經理院ニ於テスルモノ各宮ニ於テスルモノ親王府ニ於テスルモノ等頗ル多岐ニ亘リ帝室財產ノ最重ナル部分ヲ形成セリ隨テ其所屬ノ判明ヲ缺クモノ又最モ多シ家屋ハ各宮殿ヲ始トシ京城市中其他ニ散在スルモノ甚タ少シトセス是レ亦所屬ノ判明ヲ缺クモノ滔々トシテ其類ナリ雜稅ニ至リテハ其收入多カラスト雖亦宮内府ノ一資源タリ而シテ地方派出徵稅官等ノ權ヲ挾ンテ橫暴ヲ極ムルハ人民ノ

宮内府ノ負債

最モ苦ミタル所トス宮内府ノ負債モ亦決シテ少カラス中ニ就テ外國人關係ノ案件モ又之レアリ其他ハ宮内府カ物資ノ購入等ニ依ル支拂ノ一部又ハ全部ヲ延期シタルニ出ツト雖從來ノ積習ヲ穿鑿スレハ果シテ其債權ヲ承認スヘキモノナルヤ否ヤ多少ノ疑ナキニアラス要之スルニ宮内府ノ財政ハ多年ノ情實因襲シテ殆ント手ヲ著クルニ途ナカラントシ財產ノ管理及處分ニ至リテ最モ妄濫ヲ極メタリ此ノ如キハ獨リ帝室ノ利益ト合致セサルノミナラス國家帝室ノ財政互ニ紛淆スルノ宮中府中混同ノ一弊源タルニ於テ到底之ヲ放任スルヲ得ス是レ則チ帝室財產整理ノ已ムヲ得サリシ所以ナリ

(二) 驛屯土處理

光武十一年即チ明治四十年七月勅令ヲ以テ臨時帝室有及國有財產調查局官制ヲ發布シ内閣ニ隸屬シテ帝室有財產及國有財產ノ調査及其所屬整理ニ關スル事務ヲ掌ラシメ委員ヲ任命シ尙日本人官吏ニモ委員ヲ囑託シ委員會ノ決議ハ内閣總理大臣ニ報告ノ上閣議ニ附シテ上奏裁可ヲ經ルノ制ヲ定ム

臨時帝室有及國有財產調查局



同調査會ノ決議ニ依リ實行セラレタルモノノ中其最モ重ナルハ驛屯土ノ處理ニ關スル件トス今之ニ先チテ帝室財產ノ大部分ヲ管理スル經理院ニ就テ多少記述スルヲ便トスヘシ

經理院沿革

經理院ノ創始ハ開國五百四年即チ明治二十八年ニ在リ李容翊其卿タリシ時代ニ驛田屯土ヲ同院ノ所管ニ移シ又人蔘事業及全國四十餘箇所ノ鑛山ヲ收メ其結果頓ニ所管ノ財產ヲ増大シ最近ニ至ル迄宮中ニ於ケル不明支出ノ財庫タリ官制ニ依レハ經理院ハ世傳莊園鑛業蔘政及主管ニ屬スル財產ヲ掌理スル宮内府管下ノ一官廳ナリト雖事務ノ執行ニ付テハ殆ント全ク宮内府大臣ノ節制ヲ受クルコトナク常ニ皇帝ノ直命ヲ受ケテ隨時之カ處理ヲ爲シ其間弊害百出シテ殆ント收拾スヘカラサルニ至レリ而シテ同院財產ノ巨擘タル驛田屯土ノ賭粗(小作料)並各種雜稅ノ徵收ハ每年新ニ任命セラレタル收租官及委員派員等各其分擔區域ヲ定メ各道ニ出張シテ之ヲ收納セリ其間人民ニ對シテ非常苛酷ノ誅求行ハレタルヤ知ルヘキノミ明治四十年十一月臨時帝室有及國有財產調查局ノ決議ニ依リ閣議ヲ經テ上奏ノ結果經理院收租官ヲ廢シ同年度ニ於ケル驛屯土ノ收租ハ之ヲ度支

驛屯土收租依託

部ニ依託セリ即チ未タ財產ノ處分ニ涉ラスト雖其管理事務ノ一部ヲ國家ノ機關ニ移シ以テ從來收租ノ弊竇ヲ除却シタルモノニシテ正ニ一進歩ト云ハサル可カラス度支部ハ即チ各財務署ヲシテ之カ徵收ニ任セシメ其間各種ノ困難ナキニ非サリシモ漸次良好ノ成績ヲ舉ツツアリ之ヨリ先同年三月宮内府内ニ各宮事務整理所ヲ置キ謂ユル一司七宮ノ田畝園林其他財產管理ニ關スル事務ヲ管掌セシメタルカ驛屯土ト同シク是レ亦其收租ヲ度支部ニ依託シ度支部ハ併セテ其事務ニ任スルニ至レリ

宮内府處

(三) 蔘政及雜稅處理

驛屯土ヲ除キ經理院ノ財產若クハ資源ノ重ナルモノハ蔘政、雜稅及鑛山ニシテ鑛山ハ曩ニ既ニ宮内府ノ所屬ヲ解キ餘ス所ハ他ノ二者ニ過キス之ニ對シ臨時帝室有及國有財產調查局ハ更ニ處理ノ方ヲ立テ閣議ヲ經テ上奏スル所アリ隆熙元年即チ明治四十年十二月勅令ヲ以テ經理院所管雜稅處理ノ件ヲ發布シタリ其要項左ノ如シ

雜稅處理要領

- 一、蔘稅及紅蔘專賣事業ハ國庫ノ收入ト定メ度支部ニ移屬ス
- 二、各種名稱ヲ有スル土地附帶ノ雜稅ハ國庫ノ收入ト定メ度支部ニ移屬ス

三、**庖稅、銅鑛稅、鐵鑛稅、鑛店稅、水鉛稅**ハ國庫ノ收入ト定メ農商工部ニ移屬管理セシム

四、**鹽稅、水產稅、船稅、浦稅、紙稅**其他生産營業ニ賦課スル諸雜稅、**沓稅**及各項殖利錢名邑ハ並ニ廢止ス

從來經理院雜稅ノ如何ニ煩細ナリシカハ上記第二項土地ニ關スル稅目ノミニテモ十四ヲ算スルニ依リテ之ヲ知ルヘク此等雜稅ハ將來國家ノ機關ニ依リテ相當ニ改廢整理セラルルヲ必要トス可シ右ノ如クニシテ宮内府カ國庫ニ對立シ徵稅ノ主體タル關係ハ此ニ全ク廢絶ニ歸シタリ

(四) 財產整理局

皇室財產
整理ノ機關

明治四十年十二月宮内府官制改正セラレ皇室財產整理局ヲ置キ宮内府大臣ノ管理ニ屬シテ皇室所有動產及不動產ノ整理維持及經營ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ラシム即チ舊經理院及各宮事務整理所ノ事務ヲ引繼キ主トシテ日本人官吏ノ手ヲ以テ皇室財產及債務ノ整理ニ着手シタリ當時宮内府財產ノ大宗タル驛屯土及宮庄ノ收租ハ既ニ度支部ニ依託セラレタリト雖其以外ニ於テ皇室ニ屬スル動產不動產ハ尙廣ク全國ニ散在シ其管理經營

皇室財產
整理ノ機關

ハ最モ慎重ノ措置ヲ必要トセリ依テ財產整理局ニ於テハ一方各種ノ調査ヲ進ムルト同時ニ先ツ京城附近所在ノ分ヨリ始メテ漸次土地建物其他ノ整理ニ着手シ明治四十一年上半季ニ亘リテ大要左記ノ事務ヲ取扱ヒタリ

- 一、**債務ノ調査** 皇室ノ債務ハ從來種々ノ事由ニ依リ漸次累積シ來リ其額頗ル巨額ニ上リ皇室財產整理上ノ一大難件タリ依テ先ツ之ニ對シテ慎重ノ調査ヲ加ヘ債務ノ額ヲ測定シ多年ノ宿題タリシ舊經理院對外國人案件ノ如キモ夫々債務ヲ完済シ其解決ヲ了セリ

- 二、**土地建物處分** 皇室有土地建物ノ管理ハ從來最モ放漫ヲ極メタルヲ以テ新ニ土地建物貸給内規ヲ制定シ相當條件ノ下ニ貸下處分ヲ爲シタルモノ數百件ニ上レリ

- 三、**宮庄整理** 各宮事務整理所ヨリ引繼キタル一司七宮庄土ノ調査ニ關シテハ暫ラク舊來ノ方針ヲ繼承シ宮庄監理及宮庄諸收入徵收機關ニ關スル規程ヲ定メ蘆田草坪其他特種ノ收入アル庄土ニ對シテ先ツ整理ヲ爲スノ方針ヲ取レリ

- 四、**漁基整理** 漁基即チ各地方ニ於ケル特別ノ漁場ニ對シテモ整理ヲ加フ

ル豫定ヲ以テ現ニ處分ヲ爲シタルモノ數件アリ

(五) 帝室財産ノ移屬

帝室財産
處理ノ大
段落
明治四十一年六月勅令ヲ以テ宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動産並從來宮内府ニ於テ徵收シタル諸稅ヲ舉ケテ國有ニ移屬シ帝室債務ノ整理ニ關スル事務ハ度支部ヲシテ之ヲ掌理セシムルコトナリ帝室財産整理ノ案件ハ此ニ大段落ヲ劃シタリ即チ臨時帝國有及國有財産調査局並帝室財産整理局ヲ廢シ爾後度支部ニ特別ノ機關ヲ設置シ其事務ヲ掌理セシメ驛屯土ヲ始メトシ帝室有ヨリ國有ニ移屬シタル財産ノ處理ハ目下漸次ニ進捗シツツアリ

第五章 外國及外國人關係事務

第一節 在外韓國公館ノ撤廢及在韓各國

公使館ノ撤去

外交權ノ
收受
明治三十八年十一月締結ノ日韓協約ニ依リ帝國政府カ韓國ノ外交權ヲ收受シタル結果韓國政府ノ代表者其他韓國官憲ヲ外國ニ駐留セシムルノ必要及理由ナキニ至リ外國ニ在ル韓國公館ハ全部之ヲ撤廢シ外國駐在ノ韓國官憲ハ其任ヲ去リ此等ニ關スル處置ハ同三十九年二月統監府開廳前ニ於テ略々之ヲ了シ爾後多少ノ殘務ヲ理シタルニ過キス

政府外交
機關ノ廢止
在外公館ノ撤廢ト相對應シ韓國政府ノ外交ニ關スル機關モ亦之ヲ存續スルノ必要ナキニ至リタルヲ以テ明治三十九年一月外部ヲ廢シ又各港市監理署所掌事務中外國人及外國人居留地ニ關スル一切ノ事務ハ之ヲ各理事廳ニ引繼クコトナリ同二月十五日統監府ヨリ參政大臣ニ宛テ各監理ニ相當ノ訓令ヲ下サンコトヲ照會シ同二月二十日先ツ元山監理署ノ事務ヲ引繼キ同五月二十五日迄ノ間ニ悉皆之ヲ完了シタリ

各國公使館ノ撤去

在京城ノ各國公使ハ明治三十八年日韓協約締結後漸次本國ニ歸還シ各國政府ハ爾後京城ニ總領事館又ハ領事館ヲ置クニ止メ統監府開廳ノ前後ニ於テ何レモ總領事領事ヲ派駐セリ
京城其他韓國各地在勤外國總領事ノ認可狀ハ明治三十八年協約締結後總テ帝國政府ヨリ之ヲ發給ス

第二節 外國及外國人關係事務

(一) 旅 券

韓國人外
國旅券規
則

韓國ニ於ケル外國及外國人關係事務カ舉テ統監ノ統轄監督ニ歸セラレタル結果外國旅行ノ韓國人ニ旅券ヲ發給スルノ事務モ亦當然統監府ニ移リ明治三十九年九月府令第三十四號ヲ以テ韓國人外國旅券規則ヲ發布セリ此規則ニ依リ外國へ旅行スル韓國官吏ニ對スル旅券ハ統監又ハ理事官同韓國臣民ニ對スル旅券ハ理事官之ヲ發給シ日本國並外國ニ於テ旅券ノ發給若ハ查證ヲ請フ者ハ日本國ニ於テハ地方長官外國ニ於テハ帝國大使公

外國旅券
規則

使總領事領事又ハ貿易事務官ニ出願スルヲ要スルコトナリ之ト同時ニ韓國政府ヲシテ其譯文ヲ韓國官報ニ掲載シ且韓國臣民ニシテ外國ニ旅行セントスル者ハ同規則ヲ遵守スヘキ旨一般ニ告示セシメタリ
韓國在留帝國臣民ニ對スル旅券ノ發給ハ從來領事館ニ於ケル取扱ノ例ニ依リシモ明治四十年三月外務省令第一號ヲ以テ外國旅券規則改正ノ結果右ハ統監ノ定ムル所ニ依ルコトナリ即チ同四月二十日府令第十六號ヲ以テ新ニ日韓人共通ノ外國旅券規則ヲ發布シタリ同規則ニ於テ旅券ハ其韓國在留帝國臣民ニ對スルト將韓國臣民ニ對スルトヲ問ハス總テ統監之ヲ發給スト定メ事實ニ於テハ各理事應ニ於テ下附事務ヲ取扱フコト從前ニ同シク尙北韓方面ニ於テハ露領出稼民ノ出入頻繁ナルヲ以テ韓露境上ナル慶興府尹ニ所轄理事應ヨリ之ニ關スル事務ヲ委託シ次テ同規則第十條ニ依ル同一旅券ヲ以テ數次往復シ得ヘキ地ヲ清國盛京吉林及黑龍江省露領薩哈噠島同沿海州及黑龍州ト指定セリ而シテ今回モ亦韓國政府ヲシテ其譯文ヲ官報ニ掲載シ且同規則ノ遵守スヘキコトヲ一般ニ告示セシメタルコト前令制定ノ時ニ同シ

(二) 護照

給護照ノ發
從來外部ヨリ韓國内地旅行ノ外國人ニ發給シタル護照モ亦統監府設置以後統監府及理事廳ニ於テ之ヲ發給スルコトニ改メ明治三十九年二月韓國政府ヲシテ地方官ニ對シ右ノ趣ヲ訓令セシメタリ

護照ノ査
條約ニ據リ各其本國領事ニ於テ發給スル憑單ニ對シテハ從來韓國官憲之ヲ査證シ來リシモ是レ亦韓國官憲ニ代リ統監府及理事廳ニ於テ之ヲ査證スルコトトナレリ

(三) 移民保護

韓國移民
韓國人カ移民トシテ海外ニ渡航シタルハ明治三十五年米國人某ノ周旋ニ依リ男約八千人女約四百人ノ布哇ニ移住シタルヲ嚆矢トス次テ墨國人某ノ周旋ニ依リ同國ユカタン州麻耕地從業ノ目的ヲ以テ韓人一千三百名同州ニ渡航シタルモ言語不通ノ爲雇者被雇者間ニ誤解ヲ生シ且雇主ノ待遇契約ニ反ストシテ屢々紛擾ヲ醸シタリ然ルニ當時海外ニ於テ彼等移住韓國人ヲ保護スルノ官憲ナク移民ノ困難ヲ來サシコトヲ慮リ將來移民ニ關スル完全ナル規則ヲ制定シ其保護ノ途ヲ確立スルニ至ル迄暫ク之カ渡航

ヲ許ササルノ趣旨ヲ以テ韓國政府ハ明治三十八年四月勞働者ノ海外渡航ヲ禁止スルニ至リ布哇及墨國ニ出向スヘキ移民ハ一時全然杜絶スルニ及ヘリ

然レトモ全然移民出向ヲ禁スル如キハ事ノ當ヲ得タリト爲スコカラス韓國人ヲシテ海外ヨリ其蓄積シタル所得ヲ母國ニ送ラシムルハ又以テ韓國資源ノ一ト爲スヘク寧ロ韓國人ノ自然的歸向ニ任スルヲ良トス依テ一方ニ於テ勞働者海外渡航ノ禁ヲ解キ他方ニ於テハ此際相當ナル法規ヲ施行シテ移民保護ノ途ヲ完カラシメ公益上移民周旋者ノ取締ヲ嚴ニスルノ必要ヲ認メ明治三十九年七月韓國政府ヲシテ移民保護法ヲ發布セシメ同九月十五日ヨリ之ヲ施行セリ

移民保護法

移民保護法ノ要項ヲ舉クレハ(一)移民ハ農商工部大臣ノ許可ヲ受クルニ非レハ外國ニ出向スルヲ得ス同大臣ハ必要ト認ムルトキ移民ノ出向ヲ差止メ又ハ其許可ヲ取消スノ權ヲ有ス(二)移民取扱人タラントスル者ハ農商工部大臣ノ許可ヲ受クルヲ要シ移民取扱人ニ非サレハ移民出向ノ周旋又ハ其募集ヲ爲スヲ得サラシメ(三)移民取扱人ハ一定ノ保證金ヲ納入スルノ義

務アリ且其周旋シタル移民カ疾病ニ罹リ其他困難ヲ極ムル場合ニ在リテハ之ヲ救助シ又ハ歸國セシムルノ義務ヲ負ヒ(四)移民取扱人ノ周旋シタル移民出向地ニハ其代理人又ハ代表者ヲ在留セシメテ移民ノ保護ニ當ラシメ(五)移民取扱人ハ認可ヲ得タル手数料ノ外何等ノ利益ヲモ移民ヨリ受クルヲ得ス(六)契約移民ニ關シ移民取扱人カ移民ノ募集又ハ周旋ヲ爲サントスル時ハ豫メ農商工部大臣ノ認可ヲ得タル契約條件ニ依リ移民ト書面契約ヲ爲スヲ要シ(七)移民取扱人ニシテ不法ノ行爲アルトキハ其營業ヲ停止シ又ハ認可ヲ取消シ若ハ刑罰ヲ加フル等制裁ノ手段ヲ設ケ(八)移民問題ハ事外國案件ニ屬スルヲ以テ之ニ關スル韓國政府ノ處分ハ總テ統監ノ同意ヲ經ヘキヲ明規セリ明治四十年末ニ於ケル官制改正ニ當リ移民ノ事務ハ内部ノ所管ニ移サル

移民取扱人
目下韓國ニ於テ政府ノ許可ヲ得タル移民取扱人ハ日本人ノ經營ニ係ル二箇ノ合資會社アルノミ近時移民ノ出向ハ露領ニ對スルモノノ外殆ント稀ナル狀況ナリ

(四) 歸化

歸化問題ノ起因

從來咸鏡南北道ヨリ露領ニ出稼スル勞働者ハ毎年一萬人ヲ下ラス此等ハ往來常ナク秋冬ノ交大抵郷里ニ歸ルヲ例トスルモ或ハ永ク露領内ニ居住シ露國ニ歸化セリト稱スル者アリ此等韓國人中其所謂歸化ナ理由トシ歸國後ニ於テモ當該外國領事ノ保護下ニ治外法權ノ特典ヲ主張スル者往々之ナキニアラス然レトモ韓國ニ於テハ最初ヨリ歸化ヲ認ムル制度ナク韓國臣民ニシテ任意ニ他國籍ヲ取得スルモ政府ニ於テ特ニ之ヲ認ムルニ非ラサレハ他國籍ノ取得ニヨリ直ニ韓國籍ヲ喪失シタリト解釋スルヲ得ス明治三十九年以來露國及佛國ニ歸化シタリト稱スル韓國人ニ關シ多少ノ交渉ヲ惹起シタルモ右ノ見解ニ依リテ歸化ヲ否認シ越テ四十一年五月ニ至リ韓國政府ヲシテ右ノ趣ヲ關係各官憲ニ訓令セシメタリ

(五) 外國人ノ利益

外國人ノ權利及利益ノ擴張
條約ノ特許其他ノ事由ニ依リ外國人カ韓國ニ於テ有スル各種利益ノ正當ニ保護尊重セラルヘキハ言ヲ俟タサル所ニシテ加フルニ各種ノ立法ハ條約ノ規定以外ニ外國人ノ權利及利益ヲ擴張シタルコト少カラス鑛業法規ノ如キ土地建物證明ニ關スル法規ノ如キ外國人ノ鑛業及土地所有ニ幾多

ノ便宜ヲ供シ又國有未墾地利用森林事業等ニ於テモ韓國人ト外國人トノ間ニ何等差別ヲ設ケス平等ニ其利益ヲ受ケシム韓國ニ於ケル外國人ノ多キハ日本人ヲ最トシ清國人之ニ亞ク隨テ從來此等ノ利益ヲ享受スルノ點ニ於テモ亦自カラ日本人ヲ最大ト爲スヤ論ナシト雖他外國人モ亦當然之ニ均霑シ現ニ鑛業ノ如キ鑛業法規ニ依リ外國人ノ鑛業權ヲ設定シタルモノ少カラス帝國政府カ韓國ニ於テ門戶開放及機會均等ノ政策ヲ維持スルノ實ハ固ヨリ容疑ノ餘地ナシ

第六章 司法付法制

第一節 司法事務ノ改善

(一) 從來ノ裁判

裁判ノ府 建國以來會テ行政司法ノ區別ヲ立テス裁判ハ總テ行政官吏ノ手中ニ兼掌セラレ縱ニ其暴戾ヲ助長スルノ機械ト化シ偏ニ賄賂ノ多寡權勢ノ有無ニ依リテ獄ヲ斷シ甚シキニ至リテハ無辜ノ民ヲ捉ヘテ財産ヲ擄取シ有罪ノ囚ヲ放チテ金品ヲ強要スルカ如キ裁判事務ノ腐敗紊亂名狀ス可カラザリシモノ實ニ舊時ニ於ケル狀態ナリトス

司法制度
沿革ノ概要

明治二十八年始メテ裁判所構成法ヲ制定シ爾後多少ノ改訂ヲ加ヘ制度ノ上ニ於テハ特別法院、平理院、巡迴裁判所、漢城府及各開港市場裁判所、地方裁判所、同支廳ノ如キ各種ノ裁判所ヲ存スト雖一トシテ其實ノ見ル可キモノアラズ特別法院ハ皇族ノ犯罪ヲ裁判スル特別ノ機關ニシテ臨時之ヲ設クルモノナルヲ以テ暫ラク之ヲ除キ上訴ノ機關タル巡迴裁判所ハ會テ一タヒモ之ヲ設ケタルコトナク地方裁判所支廳モ亦同シ初審裁判所タル十四

漢城裁判所及平理院

裁判官以外裁判

地方裁判所各道及濟州島漢城府及十一開港市場裁判所ハ其名ヲ具フルニ止マリ一モ特立ノ裁判所ヲ設ケス假ニ觀察府、牧使廳及監理署ニ之ヲ合設シ觀察使、牧使及監理ニ判事ヲ兼任セシメ濟州地方裁判所ニ專任ノ檢事補一人ヲ置ク外司法事務ノ爲一吏員ヲモ特設スルコトナシ即チ事實上裁判所トシテ獨立ニ存在セシモノハ初審裁判所トシテ唯一ノ漢城裁判所及終審裁判所タル平理院アリシノミ

漢城裁判所ニハ首班判事以下判事四人、檢事二人及主事八人ノ職員アリ平理院ニハ裁判長(院長ニシテ勅任)ノ外、勅任首班判事以下判事四人、勅任首席檢事以下檢事三人及主事十人ノ職員アリテ其構成組織較々備ハレリ然レトモ此等ノ判檢事タル者モ大抵權勢ニ因縁シテ任官シタルニ過キス法律ノ素養殆ント缺如シ韓國唯一ノ成典タル刑法大全ノ如キスラ十分之ヲ理解スル能ハス僅ニ法部ニ請訓シテ其指令下ニ判決ヲ爲スノ狀況ニ在リ地方各道裁判所ノ狀況ニ至リテハ推シテ知ルヘキノミ

然レトモ裁判權ヲ以テ人民ニ臨ムモノ右二箇ノ獨立裁判所ニ止マラス又裁判官ノ名義ヲ有スル觀察使、牧使、府尹及監理ニ止ラス地方郡守モ亦舊慣

ニ依リテ或範圍ノ裁判ヲ爲シ警務廳ノ如キ亦往々事件ヲ裁判所ニ送致セシテ自カラ裁判ニ等シキ決定ヲ與ヘ甚シキハ地方在營ノ軍隊ニシテ恣ニ人民ヲ逮捕監禁シ裁判類似ノ事ヲ爲スニ至ル宮内府ノ如キモ亦然リ其他各官廳皆人民ニ對シテ裁判類似ノ事ヲ敢テシ人民ヲ強要スルノ手段トシテ恣ニ法權ヲ濫用スルヲ其常套ト爲セリ

(二) 補佐官ノ配置

司法ノ紊亂此ノ如キニ當リ若シ其具ランコトヲ求メハ制度改メサル可カラ法令制定セサル可カラス多數ノ法官養成セサル可カラス其他施設ノ多般素ヨリ言ヲ待タス即チ明治三十九年十月地方制度ノ改善ト前後シ先ツ現在ノ制度ニ於テ及フ可キ限リ裁判事務ヲ刷新センカ爲主トシテ日本人ノ參與ニ依リテ徐々ニ其功ヲ收ムルノ方針ヲ採リ根本的ニ裁判制度ヲ確立スルノ事業ハ暫ク之ヲ他日ニ期セリ

施設ノ大

此方針ニ依リ裁判事務改善ノ爲實行シタル施設ノ大要ヲ舉クレハ(一)法部ニ參與官ヲ置キテ司法行政ニ關スル事務ニ參與セシメ且法令改正ノ任ニ當ラシメタルコト(二)平理院及漢城裁判所ニ判事、檢事及主事ヲ増員シ且法

務補佐官トシテ日本人一人ツツ配置シタルコト(三)十三道裁判所ニ觀察使兼任判事ノ外、檢事及專任主事ヲ新設シ法務補佐官トシテ日本人各一人ツツ配置シタルコト(四)濟州島裁判所ニ郡守兼任判事ノ外、專任タリシ檢事補ヲ檢事トシ專任主事ヲ新設シ法務補佐官補トシテ日本人一人ヲ配置シタルコト(五)十一府裁判所即チ舊漢城府及開港市場裁判所ニ檢事ヲ置キ參書官ヲシテ之ヲ兼ネシメ日本人法務補佐官補一人ヲ配置シタルコト(六)法官銓考規程ヲ定メタルコト(七)法部及各裁判所ノ廳費旅費ヲ增額又ハ新設シタルコト等是ナリ此等法部及各裁判所ニ配置セラレタル法務補佐官又ハ法務補佐官補ハ翌四十年一月各其職ニ就キテ韓國官吏ヲ援助シ司法事務ノ改善ニ一新時期ヲ畫セリ

(三) 法令ノ補修

民事訴訟
件ニ關スル

右ノ如ク法務改善ノ施設ヲ爲スト同時ニ民事訴訟手續其他ニ關シ法令ヲ制定スルノ必要ヲ認ムト雖其完キハ之ヲ他日ニ期シ刻下急施ヲ要スルモノニ就テ法律勅令又ハ部令ヲ以テ下記數件ヲ發布セリ

民事刑事ノ訴訟ニ關スル件ハ明治四十年七月法律第一號ヲ以テ公布セラ

レ郡守ノ行フ裁判ヲ一切ノ民事及笞刑ニ該當スル刑事ノ第一審ニ限定シ其裁判ニ不服アル者ハ所管地方裁判所ニ申訴セシムルノ制ヲ立テタリ從來郡守ハ舊慣ニ依リテ或範圍ノ裁判ヲ行ヒ裁判所構成法ノ外ニ立チテ司法事務ヲ兼掌スルノ觀アリ隨テ上訴ノ途明ナラス裁判管轄ノ觀念ノ如キ全ク缺如シ甲ノ郡ニ於テ敗訴スレハ乙ノ郡ニ至リテ再審ヲ求ムル等濫訴ノ弊亦隨テ生ス如斯郡守裁判ノ信賴スルニ足ラサルハ言ヲ俟タスト雖制度上暫ク之ヲ認メタル所以ノモノハ今俄ニ之ヲ全廢センカ人民ノ不便甚シキヲ以テ其範圍ヲ限定シテ成ルヘク弊害ヲ豫防シ他日裁判制度ノ完備ヲ待ツノ意ニ出テタルモノナリ之ト同時ニ民事ニ關シ判決宣示前ニ訴訟關係人ヲ拘置スヘカラサルヲ規定シ尙同時發布ノ法律第二號訊問刑ニ關スル件ニ依リ民事事ニ論ナク訴訟關係人ニ對シ拷問ヲ用ウルヲ禁セリ蓋シ韓國官民一般ニ民事事ノ區別ナスヲ解セサルモノ多ク民事被告人ヲ拘禁スルハ勿論或ハ原告ヲモ併セテ之ヲ拘置スルコトアリ而シテ一ニ自白ニ依リテ事件ヲ斷セントスルノ傾向ハ多年拷問ノ制ヲ馴致シ警察法衙トモニ之ヲ用テ供述ヲ強ウルノ手段ト爲シ慘酷云フニ忍ヒサルモノアリ人

道ノ上ニ於テモ之ヲ看過ス可カラス執法上國情民俗ヲ斟酌スルノ必要ハ敢テ言ヲ俟タスト雖今先ツ其最甚シキモノニ就テ矯正ノ途ヲ講スルノ急務ヲ認メタルニ依ル

此法律ノ發布ト前後シテ同年八月勅令ヲ以テ民事訴訟費用規則ヲ定メ敗訴者ノ負擔スヘキ訴訟費用ノ算定方法ヲ明ニシ同年四月法部令第四號申訴處理規則ヲ以テ上訴事件處理ノ方法ヲ定メタリ

第二節 裁判所ノ設置

(一) 裁判所ノ構成

明治四十年七月締結ノ日韓協約ハ其第三條ニ於テ司法行政ノ區別セラレサル可カラサルヲ明規シ韓國司法制度改善ニ關スル基礎ヲ確立セリ即チ從來ノ制度ヲ一新シ全然文明國ノ範例ニ依リテ完備セル裁判所ヲ設置スルニ決シ同年十二月法律第八號裁判所構成法同第九號裁判所構成法施行法同第十號裁判所設置法ヲ公布シタリ是ニ於テ韓國ノ司法制度ハ劃然新

時期ニ入ル

裁判所ノ構成

裁判所ノ構成ハ大體ニ於テ範ヲ日本ニ取り裁判所ヲ分チテ大審院控訴院地方裁判所及區裁判所ト爲シ三審ノ制ヲ採リ區裁判所ニ於テハ判事單獨ニ裁判ヲ行ヒ其他ニ於テハ數人ノ判事ヲ以テ組織スル部ニ於テ合議裁判スルコト總テ日本ニ同シ其異ルモノヨリ云ヘハ我ニ於テハ控訴院カ區裁判所ノ第三審ヲ行フニ對シ韓國ニ於テハ大審院カ一切ノ裁判ノ上告ヲ審理裁判スルハ其一ナリ部ノ組織ニ於テ韓國大審院ハ五人同控訴院及地方裁判所ハ三人ノ判事ヨリ成リ即チ第二審及第三審ニ於テ彼此判事ノ數ヲ異ニスルハ其二ナリ其他裁判所ニ於ケル檢事局及書記課ノ組織ハ全ク日本ト同シク唯韓國ニ特有ナルハ各裁判所ニ翻譯官又ハ翻譯官補ヲ置クノ一事アルノミ是レ裁判所ノ官吏カ主トシテ日本人ヨリ成リ韓國ノ言語ニ通セサルニ出ツル自然ノ結果ナリ

裁判所ノ配置

裁判所設置法ニ據レハ裁判所ノ所在地左ノ如シ

- 大 審 院 京城
- 控 訴 院 京城 平壤 大邱

司法付法制

地方裁判所

京城 公州 咸興 (京城控訴院管轄)

平壤 海州 (平壤控訴院管轄)

大邱 晉州 光州 (大邱控訴院管轄)

區裁判所

漢城府一、京畿道十二、江原道八 (京城地方裁判所管轄)

忠清南道十二 忠清北道六 (公州地方裁判所管轄)

咸鏡南道五 咸鏡北道三 (咸興地方裁判所管轄)

平安南道七 平安北道七 (平壤地方裁判所管轄)

黃海道八 (海州地方裁判所管轄)

慶尙北道十四 (大邱地方裁判所管轄)

慶尙南道十 (晉州地方裁判所管轄)

全羅南道十一 全羅北道九 (光州地方裁判所管轄)

即チ大審院一、控訴院三、地方裁判所八、區裁判所百十三併セテ裁判所ノ總數百二十五箇所トス

判事、檢事、裁判所書記長、裁判所書記、裁判所翻譯官及裁判所翻譯官補ノ官等定員及俸給ニ就テハ明治四十年十二月勅令ヲ以テ之ヲ規定セリ

(二) 裁判所ノ開廳

裁判所ノ施行法ノ施行

第一次開

裁判所構成法並ニ附屬法令ハ明治四十一年一月一日ヨリ施行セラレタルモ廳舎其他ノ準備容易ナラサルヲ以テ同時ニ全部ヲ開廳スルヲ得ス先ツ大審院、控訴院及地方裁判所ノ全部即チ十二箇所及區裁判所ノ内十六箇所ヲ第一次ニ開廳スルニ決シ同三月大審院長、檢事總長、京城控訴院長、京城控訴院檢事長、京城地方裁判所長及京城地方裁判所檢事長並裁判所書記六人ヲ聘用シ此等ノ職員ハ法部ノ職員ト共同シテ裁判所ノ開廳ニ必要ナル法令ノ立案其他ノ準備ニ關スル事務ヲ擔當セリ其後數回ニ判事七十四人、檢事三十二人、裁判所書記長四人、裁判所翻譯官四人、裁判所書記九十人、裁判所翻譯官補九人ヲ日本人ヨリ又判事三十六人、檢事九人、裁判所書記四人ヲ韓國人ヨリ任用シ八月一日第一次開廳各裁判所ノ事務ヲ開始シタリ
裁判所構成法以下ノ施行期日ヨリ裁判所ノ開廳ニ至ル迄ノ間ハ尙舊來ノ裁判所ヲシテ其事務ヲ繼續處理セシメ其他新舊過渡ノ際ニ於ケル事務ノ取扱ニ就テハ裁判所構成法施行法ヲ以テ之ヲ規定セリ第一次開廳ニ漏レタル各區裁判所管轄區域内ニ於ケル郡守又ハ府尹ノ裁判ニ就テモ亦同シ

(三) 司法事務ニ關スル法令

韓國從來ノ法令中司法事務ニ關スルモノハ刑法大全ノ外二三ノ例規ナキニ非レトモ民事刑事ノ訴訟手續ニ付テ證據スヘキ成規ナク又刑法大全中裁判ノ獨立ト兩立セサル規定官吏職務上ノ過失ヲ罰スル規定ノ如キハ之ヲ裁判所開設以後ニ存セシムルヲ得ス其他裁判所並ニ監獄署ノ事務開始以前ニ於テ法令ノ制定改廢ヲ要スルモノ少カラサルヲ以テ明治四十年末裁判所構成法發布後新聘用ノ判檢事及法部ノ職員ヲ以テ調査委員トナシ民刑訴訟規則案刑法大全中改正案其他重要ノ法令案ヲ編成セシメ簡單ナル法令案ハ法部ノ主管局課ニ於テ之ヲ編成セリ

新法令ノ制定 即チ裁判所開設ノ準備トシテ明治四十一年上半季中制定シタル法令案ハ左ノ如シ

- 一、法律案 六件
- 民刑訴訟規則
- 刑法大全中改正ノ件
- 公貨缺遺處斷例廢止ノ件

裁判所構成法中改正ノ件

未開應區裁判所事務處理ノ件

民事訴訟期限規則

二、勅令案 二件

監獄官服制及提燈徽章ノ件

土地家屋所有權證明規則

三、部令案 十一件

略

右法令ハ同年上半季中概ネ公布ヲ了シタリ

第三節 法制

(二) 不動産法規

不動産法
不備ノ影 韓國現時ノ經濟狀態ハ尙甚々幼稚ニシテ不動産ヲ以テ人民ノ最重要ナル資産ト爲スニ拘ハラシカ權利ノ保障ニ關シ何等法制ノ見ルヘキナシ是

司法付法制

ナ以テ土地ヲ賣買シ又ハ抵當ト爲ス場合ニ於テ人民ハ僅ニ舊習ニ依リ文
記ト稱スル土地賣渡證ヲ綴束シタルモノヲ授受シテ權利ノ移轉及設定ヲ
證明スルノ方法ヲ採ルト雖偽造文記盛ニ行ハレ爲ニ權利ノ紛更絶ユルコ
トナク財産ノ安固ヲ缺クコト甚シ本邦人ノ如キモ亦屢々狡猾ナル韓人ニ
欺罔セラレ不測ノ損害ヲ被レリ

不動産
調査會

此狀態ヲ蓋革スルニハ立法ノ作用ニ依リ公力ヲ以テ不動産上ノ權利ヲ確
認スルノ必要ナルヲ認メ明治三十九年七月韓國政府ハ不動産法調査會ヲ
設置シ不動産ニ關スル舊慣ヲ調査セシメ且急速ニ簡便ナル不動産法ノ制
定ヲ促シタリ即チ梅法學博士指導ノ下ニ土地家屋證明規則ヲ制定シ同年
十月勅令ヲ以テ公布シ次テ同施行細則ヲ公布スルニ至レリ土地家屋證明
規則ノ要項ハ左ノ如シ

土地家屋
證明規則

一、土地又ハ建物ヲ賣買、贈與、交換シ又ハ典當ト爲シタルトキハ其契約書ニ
統首又ハ洞長ノ認證ヲ經タル後、郡守又ハ府尹ノ證明ヲ受クルコトヲ得
郡守又ハ府尹ハ土地建物證明臺帳ヲ備ヘ第一條ノ證明ヲ爲シタルトキ
ハ直ニ其要項ヲ記載スヘシ

一、證明ヲ受ケタル契約書ハ完全ノ證據トナリ且其正本ニ依リ當該官廳ニ
於テ直ニ執行スルノ力ヲ有ス

一、當事者ノ一方カ外國人ニシテ本則ニ依リ證明ヲ受ケタル場合ニ於テハ
日本理事官ニ查證ヲ申請スヘク双方カ外國人ニシテ證明ヲ受ケントス
ル時ハ日本理事官ニ證明ヲ申請スヘシ

外國人ト
土地所有

從來韓國ト各國トノ條約ニ於テ外國人ノ土地所有權ヲ認ムルハ居留地及
其ノ附近一里ノ間ニ限レリ然レトモ事實ニ於テ右範圍外ニ於テ土地ヲ所
有スルモノ多ク特ニ近時農業經營ノ盛ナラントスルニ當リ漸次其ノ多キ
ヲ加フ此場合ニ於ケル條約ト事實トノ相違ハ爲ニ幾多ノ不便ヲ生セシメ
タルカ此規則ニ據リ韓國内地ニ於ケル外國人ノ土地所有ハ始メテ從來ノ
不便ヲ除却スルニ至レリ而シテ本規則中當事者ノ一方若クハ雙方カ外國
人タル場合ニ理事官ノ查證又ハ證明ヲ受ケシムルノ規定ハ協約ニ依リ統
監又ハ理事官ニ於テ外國人ニ關スル韓國ノ事務ヲ司掌スル結果ニ外ナラス
理事官ノ查證及證明ニ關シテハ同年十一月十六日統監府令第四十二號ヲ
以テ土地建物證明規則ヲ發布シ其ノ手續效力等ニ就テハ韓國勅令及法部

土地建物
證明規則

令ヲ以テ公布シタル土地家屋證明規則及同施行細則ノ規定ニ準スルコト
トシ彼此相應シテ其ノ效果ヲ舉ケンコトヲ期セリ

即チ同年十二月一日ヨリ之ヲ施行シ同二十六日韓國勅令第八十號ヲ以テ

土地家屋
典當執行
規則

土地家屋典當執行規則ヲ發布シ土地家屋證明規則ニ依リ證明ヲ受ケタル
土地家屋ノ典當執行ニ關スル規定ヲ設ケタリ其要項左ノ如シ

一、土地建物ヲ目的トスル典當ノ執行ニ付テハ流質契約ヲ結フコトヲ得

一、土地建物ヲ目的トスル典當ニ在リテハ債務者カ債務履行ノ期日ヲ經過

スルモ其ノ債務ヲ償還セサル時ハ別段ノ契約ナキ限り債權者ハ其典當

ノ目的タル土地及建物ヲ競賣ニ附スルコトヲ得

一、競賣ニ際シ競買ヲ申出ツル者ナキ時、又ハ競買ノ申出アルモ其金額カ債

權額及競賣ノ實費額ニ達セサル時ハ債權者ハ其ノ債權ノ辨濟ニ代テ競

賣ノ目的タル土地又ハ建物ヲ取得スルコトヲ得

一、此規則ニ依ル典當ノ執行ニ關シ爭アル時ハ其ノ目的タル土地又ハ建物

ノ所在地ヲ管轄スル郡守又ハ府尹之ヲ裁定ス

債務者カ外國人ニシテ債權者カ本國人(韓國人)ナル時ハ當該ノ郡守又ハ

府尹ノ同意ヲ得テ日本理事官之ヲ裁定ス

債務者及債權者ノ雙方カ外國人ナル時ハ日本理事官之ヲ裁定シ當該ノ

郡守又ハ府尹ニ通知スヘキモノトス

土地家屋典當執行規則及施行細則ハ明治四十年二月一日ヨリ施行セラレ

タリ

(二) 鑛業法規

不動産ニ關スル法規ト相對シ鑛業ニ關スル法規モ亦外國人ノ鑛業權及砂

鑛業權ヲ認メタル點ニ於テ最モ注意ス可シ其ノ詳細ハ別章ニ記述シタル

ヲ以テ省略ニ從フ

(三) 法典ノ編纂

法典調査
局

裁判所ノ新設ト相俟ツテ完全ナル法典ヲ編纂スルノ必要アリ明治四十年

十二月法典調査局官制ヲ公布シ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シテ民法、刑法、民

事訴訟法、刑事訴訟法及附屬法令ノ起草ヲ掌ラシム法典調査局ニ委員長、委

員ヲ置キ別ニ顧問ヲ置クヲ得

第四節 監獄

從來韓國ニ於ケル監獄ノ事務ハ警察官ノ兼掌ニ屬シ内部ニ於テ之ヲ管理シタリト雖其事務ハ裁判所ト密接ノ關係ヲ有スルヲ以テ今回裁判制度ノ完備ト同時ニ移シテ之ヲ法部ノ所管ニ歸セシメ明治四十年十二月監獄官制ヲ公布セリ

監獄官制

同官制ニ依レハ全國ヲ通シ司獄官トシテ典獄九人並看守長、監獄醫及通譯若干名ヲ置キ控訴院檢察長ハ法部大臣ノ命ヲ承ケ其管轄地内ニ在ル監獄ヲ監督ス監獄ノ所在地及名稱ハ法部大臣ノ定ムル所ニ依リ京城監獄ノ外全國ニ七箇所併セテ八箇所ニ之ヲ設置ス即チ典獄以下ニ日本人ヲ任用シ明治四十一年一月從來ノ京城監獄ヲ引繼キタル外、同年七月全國七箇所ノ監獄事務ヲ開始セリ

從來裁判及警察事務ノ腐敗紊亂ニ伴ヒ監獄事務ノ不振モ亦甚シク獨リ懲治ノ目的ヲ達セサルノミナラス囚人ノ既決タルト未決タルトヲ問ハス其取扱ノ慘酷ナル徃々酸鼻ニ堪ヘサルモノアリ警務顧問設置以來其甚シキ

モノニ就テ匡正ヲ怠ラサリシト雖未タ十分ノ改善ヲ加フル餘力ヲ有セス獄舎ノ設備事務ノ改善等今後力ヲ致スヘキ所尙極メテ多シ

第七章 警察

第一節 韓國警察

(一) 從來ノ警察制度

警察ノ舊 京城ニ左右捕盜廳アリテ首府ノ警察權ヲ行使シ各道觀察府亦警察監獄ノ職權ヲ有シテ地方ノ安寧ヲ保持スルノ任ニ當リ古來警察ノ制度全ク備ハラサルニ非サルモ大小ノ官職ハ金錢ヲ以テ賣買セラレ官吏ハ收歛誅求ヲ事トシ黃白ニ依リテ刑罰ヲ加免輕重スル等官紀ノ紊亂其極ニ達シ人民ハ警察ノ怖ルヘキヲ知リテ信賴スヘキヲ思ハス警察アリテ其無キニ若カサリシモノ、實ニ韓國ニ於ケル舊時ノ狀態ナリ

甲午ノ改

甲午改革ノ際捕盜廳ヲ廢シテ警務廳ヲ置キ漢城府内ニ於ケル警察監獄ノ事務ヲ總攬セシメ我警視廳ヨリ警視ヲ聘シテ顧問トナシ各種ノ法令ヲ發布シ警察官ノ服務方法ヲ定メ一定ノ制服ヲ用ヒシムル等全然我制度ニ模倣シ始メテ文明的警察機關ヲ整備セントセリ然レトモ當時警察官署トシ

テ較々其體ヲ爲セルハ唯警務廳及京城内五箇ノ警察署アリシニ過キス別ニ各道觀察府ニ警察官ヲ置キテ警察事務ヲ專擔セシメ又各開港市ニ警察署ヲ置ケリト雖地方警務ノ改善ハ其蹟殆ント認ムヘキナシ後久シカラスシテ我顧問ハ解備セラレ將ニ萌芽ヲ發セントシタル警務改善ノ事業モ亦隨テ頓挫セリ翌開國五百年即チ明治二十八年警務廳ヲ廢シテ警部ヲ置キ警部大臣全國ノ警察權ヲ總攬シ併セテ警務廳ニ代リテ漢城府内ノ警察事務ヲ管掌シタルカ又幾ナラスシテ警部ヲ廢シ警務廳ノ舊制ニ復セリ此ノ如ク機關ノ更改一ナラスト雖事務ノ内容ニ至リテハ殆ント見ル可キモノナク京城ニ於テスラ僅ニ不完全ナル司法警察ノ執行アリシノミ行政警察ノ如キハ全然其注意ノ外ニ在リテ何人モ之ヲ顧ミルモノアラス即チ韓國ニ於ケル警務ノ刷新及擴張ハ明治三十八年警務顧問ヲ傭聘シタル當時ヲ以テ其發端ト爲ササル可ラス

警務廳新及擴張ノ發端

(二) 警務顧問傭聘

日露戰役開始後韓國政府ハ警務刷新ノ必要ヲ認メ我林公使ニ對シ警務顧問トシテ警視一名及巡查四名ヲ日本ヨリ傭聘センコトヲ依囑セリ即チ同

丸山顧問

公使ヨリ外務省ニ稟申ノ結果、明治三十八年一月警視丸山重俊ハ我政府ノ意ヲ承ケテ京城ニ入り同年二月韓國政府ト備聘契約ヲ締結シタリ契約ノ要項ハ(一)警務顧問ハ警察事務ヲ協賛整理シ警察事務ニ關スル諸般ノ設備ニ關シ最誠實ニ審議起案ノ責ニ任ス(二)警察ニ關スル一切ノ事務ハ顧問ノ同意ヲ經テ施行ス(三)顧問ハ警察ニ關スル議政府會議ニ參與シ且内部大臣ヲ經テ警察ニ關スル意見ヲ議政府ニ提出スルヲ得ト云フニ在リ此ニ於テ顧問警察ノ端緒始メテ開ク

警務顧問

警務顧問ハ先ツ京城ニ於ケル警察事務ヲ刷新シ次テ地方ニ及ホスノ方針ヲ取り同三月日本ヨリ警部七名ヲ聘用シテ之ヲ警務廳及漢城五警務署ニ配置シ專ラ韓國人警察官ヲ指導シ舊來ノ積習ヲ一洗スルニ努メ道路警察衛生警察ヲ更張シ其他刑事被告人ノ拷問、罪囚ノ待遇等ニ對シ改善シタルモノ少シトセス而シテ漸次經費ノ許ス範圍内ニ於テ警視、警部、巡查ヲ增聘シ顧問部付トシテ其職務ヲ補助セシメ傍ラ明治三十八年三月以來日本警察官ヲシテ韓國警察官ノ教養ニ當リ漸次韓國警察官ノ資質ヲ改善センコトナ期セリ

地方警務

地方ニ對シテハ明治三十八年三月以來各道觀察府ニ警務顧問補佐官タル日本警察官吏ヲ配置シ警務改善ノ端緒ヲ開ケリト雖其人員ハ各道警視一名、但シ當時地方區劃ヲ改正シ現在ノ十三道ヲ八道ニ減スル計畫アリシヲ以テ八名ニ止メ以下各道警部一名、巡查二名乃至四名ヲ置クニ過キスシテ到底其目的ヲ達スル能ハス唯將來ノ爲ニ基礎ヲ作シ併セテ觀察使以下韓國地方官吏ノ重大ナル非違ニ對シテ監視ヲ加ヘタルニ過キサルナリ

(三) 第一期警務擴張

警務廳官制改正

光武十年即チ明治三十九年豫算ニ於テ始メテ警務整理費十六萬五千餘圓ヲ計上セルモ現状ヲ維持スルノ外擴張ノ餘地ヲ止メス依テ同年一月警務顧問ハ警務廳官制改正ノ意見ヲ議政府ニ提出シ同二月改正官制ノ發表アリ其結果トシテ各課ヲ廢合シ多數ノ冗員ヲ淘汰セリ從來韓國警務官ノ俸給ハ極メテ菲薄ニシテ巡檢ノ如キハ最下級一箇月四圓餘ニ過キス到底自支ニ足ラサルヲ以テ先ツ此次官制改正ニ伴ヘル餘剩ヲ以テ增俸ノ資ニ充テ次テ各道及開港市場警察署ニ於テモ定員ヲ減シ給與ヲ厚フシタリ其結果ハ多少韓國警察官ノ廉潔心ヲ養ヒ非違ヲ少カラシムルヲ得タルカ如シ

韓國警察官ノ増俸

第一期警務擴張

同年統監府設置セラルルニ及ヒ丸山顧問ハ統監ノ承認ヲ得テ第一期警務擴張ノ計畫ヲ立テ警務整理費二十二萬三千餘圓ヲ追加シ同年六月ヨリ之ヲ實施シタリ此次ノ擴張計畫ハ從來我警視ノ配置ヲ缺ケル地方五道ノ觀察府ニモ同シク警視ヲ置キ即チ十三道觀察府所在地ニ各警務顧問支部ヲ設置シ支部ノ下各道平均二箇所即チ全國二十六箇所ノ分遣所ヲ設ケ更ニ之ヲ割シテ百二十二箇所ノ分派所ヲ置キ以テ全國ニ備聘日本警察官ヲ配置スルニ在リ之ニ對ズル要員ハ警視十一名(内五名ハ新設顧問支部附一名ハ顧問本部附五名ハ漢城五署附警部二十六名)巡查五百二十人ニシテ此等新舊備聘ノ日本警察官ハ補佐官(警視)補佐官(補警部)補助員(巡查)ノ名義ヲ以テ韓國警察事務ヲ執行セリ

之ト同時ニ韓國側ノ警察機關トシテハ十三道警務署ノ外二十六箇所ノ警務分署百二十二箇所ノ分派所ヲ置キ新ニ十三道ニ各一名ノ警務官(警務分署長)タル二十六名ノ總巡ヲ增置シ權任巡檢一千名ヲ增員シ從來ノ分ト併セテ巡檢ノ總數二千七百餘名トナセリ而シテ韓國側ノ警務署(警務分署)及分派所ハ事實ニ於テ顧問支部分遣所及分派所ト異名同體ニシテ互ニ相表

備聘警察官吏ノ身分

裏セルコト恰モ財政顧問部ノ組織ト同様ナリ蓋シ顧問制度ニ伴ヘル當然ノ成行ニ外ナラス

韓國政府聘用ノ顧問警察官吏ハ帝國政府ノ方針トシテ現職官吏中ヨリ選拔スルヲ例トセリ隨テ各其身分ノ所屬ヲ異ニシ同一傭聘者ニシテ外務省ノ官吏タル者アリ警視廳其他各府縣ノ官吏タル者アリ多數巡查ノ如キハ其所屬各府縣ニ涉リ隨テ其身分進退ニ關シ監督上甚タ煩雜ナルノミナラス統監府設置セラレ顧問並其附屬員ハ總テ統監ノ監督ヲ受クルニ至リタルヲ以テ警務顧問部員ハ直接統監ニ隸屬スルヲ相當トス即チ明治三十九年六月勅令ヲ以テ韓國政府聘用者ニ關スル件ヲ發布セラレ其結果トシテ顧問以下所屬官吏ハ總テ統監府又ハ理事廳ニ官藉ヲ置キ直接統監ノ支配下ニ屬スルニ至レリ

(四) 第二期警務擴張

警務擴張ノ必要

第一期警務擴張ノ遂行ニ依リ顧問警察官吏ノ總數ハ警務顧問ノ外警視二十一人警部五十二人巡查六百五人トナリ外ニ二千有餘人ノ韓國巡檢アルモ之ヲ韓國ノ全面積ニ配當スレハ二十方里弱ニ一人ノ巡查四方里半弱ニ

一人ノ巡檢アル割合ニ過キス加フルニ明治三十九年秋冬ノ交以來地方各道ニ草賊蜂起シ慶尙北道、忠清南道、全羅南北道ノ方面最モ甚シク韓民ノ被害相次ケルノミナラス爲ニ稅務、通信其他地方政務ノ阻礙セラルコト甚多ク警察力ノ充實一日ヲ緩ウスヘカラサルノ必要ニ迫レリ即チ明治四十年七月警務整理費三十一萬三千餘圓ヲ追加シテ第二期警務擴張ノ計畫ヲ定メ新ニ警部二十六人、巡查六百人ヲ增聘シ警部ハ新設分遣所十四箇所ニ各一人宛ヲ配置シ尙各道支部ニ一人宛ヲ增員シ巡查ハ新設分遣所ノ外從來補助員ヲ配置セサリシ府郡百五十一箇所及脫稅取締等特別ノ配置ヲ要スル十五箇所ニ配置シ尙國庫金取扱所及財務官吏派駐地等百三十箇所ノ分派所ニ增員スル等漸次警察官ノ配置ヲ周密ナラシメ同時ニ通譯官補四人、顧問醫四十七人ヲ增聘シ通譯官補ハ從來未配置ノ各道支部ニ顧問醫ハ從來未配置ノ各道支部並新舊分遣所ニ之ヲ配置シタリ此ニ於テ顧問警察ハ從來ニ比シテ略々其組織ヲ倍加シ同年十月三十日顧問警察廢止ノ際ニ於ケル定員ハ警務顧問ノ外補佐官(警視)二十一人、補佐官(補警部)七十八人、補助員(巡查)千二百五人ニ上リ稍々警察力充實ノ目的ヲ庶幾スルヲ得タリ

第二期警務擴張

顧問警察ノ擴張ト對應シテ同年七月内部令第三號ヲ以テ韓國警察區劃ヲ改正シ同月日韓協約締結後ニ至リ警務廳ヲ改稱シテ警視廳トシ總監、副總監以下ヲ置ク而シテ韓國警察官吏ノ員數ハ爾來漸次増加シ同年十月三十日日韓警察合一ノ際ニ於テハ韓人警視以下三千九十二人ヲ算シタリ

第二節 日本警察

(一) 日本警察ノ起原

從來韓國居留帝國民ノ保護ハ帝國自ラ之ニ當リ且帝國ハ韓國ニ於テ領事裁判權ヲ有スルヲ以テ其執行上警察官ヲ置クノ必要アリ統監府設置以前ニ於テハ外務省ヨリ警察官ヲ韓國ニ派遣シ公使館又ハ領事館ニ屬シテ居留帝國民ニ對スル警察事務ヲ行ハシメタリ之ヲ韓國ニ於ケル日本警察ノ起原トス

外務省派
遣警察官

爾後頻年居留民ノ増加ニ伴ヒ派遣警察官ノ數モ亦漸ク多キヲ加ヘ遂ニ各領事館内ニ於テ一ノ警察署ヲ形成スルニ至レリ特ニ日露戰役開始後ニ於

領事館内
ノ警察署

テハ邦人ノ渡航非常ニ増加シ加フルニ京釜鐵道ノ完成ハ益此趨勢ヲ助長シ三十八年末現在居留民ノ數ヲ前年末ニ比スレハ數ニ於テ約三萬割合ニ於テ十割ヲ加ヘ其他商業費易ノ劇進モ亦之ニ準シ益々邦人ノ保護及取締ヲ必要トスルニ至リ派遣警察官ノ數モ亦隨テ大ニ増加シタリ

(二) 統監府設置後ノ日本警察

統監府設置ノ當時ニ於ケル外務省派遣ノ警察官ハ公使館ニ警視一名領事館ヲ通シ警部二十名、巡查二百五十名ニシテ之ヲ舊時ニ比スレハ非常ノ多數ナリト雖尙益増加スル居留民ノ保護ト日韓兩國間ニ於ケル新關係ノ開展トニ應スルニ足ラス即チ統監府及理事廳官制ニ於テハ府ニ警務總長及警視二人ヲ置キ各理事廳中必要ノ箇所ニ警視五人ヲ配置シ警部ハ統監府理事廳ヲ通シテ五十人トシ巡查ノ定員ハ府令ヲ以テ之ヲ五百人トナセリ即チ新定員ニ依リテ警察官ノ配置ヲ定メ京城、釜山、仁川、元山及平壤ノ五箇所ニ警視ヲ置キ其他從來駐在所ノ設置ナキ場所ニシテ在留邦人ノ數増加シ其保護取締ヲ必要トスル地方ニハ新ニ駐在所ヲ設ケ從來ノ駐在所ニシテ警察事故増加ノ箇所ニハ巡查部長ヲ派出シ若クハ之ヲ改メテ警察分署

統監府警務總長

警察ニ關スル各種例規

ト爲シ其他一般ニ警察官ノ配置ヲ周カラシメタリ

從來警察ニ關スル各種ノ制度ハ任用給與等ニ關スルモノノ外總テ内地ノ制度ニ準據シ明文上、韓國ニ於ケル日本警察制度ト認ムヘキモノナカリシカ統監府設置後ニ至リ始メテ官制ヲ以テ警察官ヲ在韓帝國官廳ニ置キ更ニ勅令ヲ以テ任用令及給與令ヲ定メラレ其他進級、賞罰、服務等ニ關シテモ各般ノ規定ヲ制定シタリ此ニ於テ韓國ニ於ケル日本警察ノ體樣始メテ完キヲ得ルニ至レリ即チ執務ニ關シテハ警察報告例及訓授令ヲ定メ又賞與及懲罰令ヲ規定シ成績優等ナルモノヲ獎勵スル方法トシテ精勤證書ニ關スル規程、巡查部長選任規程、巡查考試規則等ヲ定メ從來自費ヲ以テ調製セシメタル制服ヲ官給トシテ服裝ノ整一ヲ得シメ貸與品規則ヲ設ケ巡查教育ノ爲メ教習規程ヲ設定シタル等是ナリ

警察官ノ給與

外國在勤警察官吏ヲシテ服務上ノ規律ヲ嚴肅ナラシメント欲セハ適任者ヲ採用シ諸制度ヲ完備スルト同時ニ其給與ヲ十分ナラシメサル可カラス依テ統監府設置ト同時ニ巡查ノ給與ヲ厚クシ内地ニ在リテ優秀ナル者ヲ撰拔シ從來ノ職員中罷免ス可キハ之ヲ斷行シ其他ニ對シテハ適當ノ進級

ナ行ヒ宿舍料ノ支給ヲ増シ新ニ特別手當ノ制ヲ設ケテ通譯及刑事專務ノ
巡查ニ對スル給與ヲ増加スル等官紀ノ嚴肅ヲ期シ其他内部ノ諸規程等ニ
就テ釐革スル所多ク以テ益々警察事務ノ舉カランコトヲ期セリ

第三節 日韓警察ノ共助及合一

(一) 兩國警察ノ共助

日韓警察ノ並立 上來叙説スル如ク統監府設置以前ニ於テ一方ニハ日本警察アリ他方ニハ
韓國系統ニ屬スル顧問警察アリ兩々獨立シテ其間適當ノ連絡ヲ缺ケリ然
ルニ統監府官制ハ統監ニ付スルニ韓國政府聘傭ノ帝國官吏並邦人ヲ監督
スルノ權ヲ以テシ警務顧問並屬員一般舉テ統監ノ指揮監督ヲ受ケ兩箇ノ
警察始メテ一ノ監督權ノ下ニ統一セラルルニ至リタリト雖實際ノ執務ニ
至リテハ尙理事廳警察ト顧問警察ト自カラ嚮フ所ヲ異ニシ隨テ事務ノ統
一普及及經費ノ點ニ於テ尙遺憾ナシトセス依テ明治四十年二月韓國政府
ト交渉シ理事廳警察官及顧問警察官ヲシテ左ノ方法ニ依リ相互其職務ヲ

日韓警察
官ノ相互
共助

幫助セシムルニ決シタリ

- 一、統監府及理事廳ノ警視警部及巡查ハ凡テ警務顧問ノ補佐官補佐官補、
助員ヲ囑託セラレタルモノトス
- 二、顧問警察官ハ同時ニ其在官在職タル理事廳警察官ノ職務ヲ執行スヘシ
- 三、特別ノ場合ヲ除キ理事廳及顧問警察官ハ事務ノ性質ニ依リ互ニ指示ヲ
受クヘシ(例之理事廳警視ハ顧問警察事務ニ付警務顧問支部警視ノ指示
ヲ受ケ警務顧問支部警視ハ理事廳警察事務ニ付理事官ノ指示ヲ受クル
カ如シ)

四、警察ニ關スル報告ハ又前項ノ例ニ依ル

五、經費ハ特ニ支出ヲ認許セラレタルモノノ外、事務ノ性質ヲ問ハス凡テ所
屬ノ區別ニ依リテ之ヲ支辨ス

六、地方ノ小市邑ニ在リテ兩者ノ機關併存シ其一ヲ以テ足レリト認ムルモ
ノハ其一ヲ廢シ事務ノ引繼ヲ行フ

乃チ同年三月一日ヨリ之ヲ實行シ越テ四月ニ至リ地方ニ在ル理事廳警察
分署並顧問警察分遣所以下ニ付テ各其一部ヲ撤廢シ相互事務ノ引繼ヲ行

警察官署
ノ廢合

ヘリ此等ノ結果トシテ人員ノ配置經費ノ節約事務ノ統一及簡捷警察力ノ普及等其兩國警察事務ノ發達進捗ニ寄與シタル所甚々大ナリトス

(二) 兩國警察ノ合一

顧問警察ノ廢止

同年七月日韓新協約締結セラレ其第五條ニ依リ日本人ヲ韓國官吏ニ任用スルノ途啓クルヤ同八月警務顧問丸山重俊ハ警視總監ニ各道警務顧問支部補佐官ハ各道警視ニ任セラレ次テ同十月韓國勅令第二十九號ヲ以テ警務顧問部職員ヲ警視警部巡查ニ任用スルノ件ヲ公布シ同十一月一日同部員タル多數ノ日本警察官吏ハ舉ケテ韓國政府ニ任用セラレタリ此ニ於テ從來ノ顧問警察ハ其終ヲ告ケ全國ノ警察ハ内部大臣管理ノ下ニ内部警務局ニ於テ其事務ヲ總攬スルコトナレリ

日本警察ノ廢止

一方ニ於テハ新協約締結後統監府及理事廳官制ノ改正アリ統監府警務總長ハ廢官トナリ統監府及理事廳ニ警視警部及巡查ヲ置クノ條項ハ削除セラレ即チ從來ノ謂ユル日本警察ナル組織モ亦自カラ廢止セラレルニ至リ而シテ在韓國日本臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ付テハ同十月韓國政府トノ間ニ左ノ取極ヲ爲シ以テ執行機關廢止ノ缺ヲ補フノ便方ニ從ヘリ

警察事務ノ執行ニ關スル取極書(明治四十年十月二十九日調印)

警察ニ關スル取極

統監府及韓國政府ハ日本政府カ明治四十年七月二十四日締結日韓協約第五條ニ依リ任命セラレタル韓國警察官ヲシテ當該日本官憲ノ指揮監督ヲ受ケ在韓國日本臣民ニ對スル警察事務ヲ執行セシムルコトヲ約ス即チ同十一月一日改正官制實施ノ日ヲ以テ理事廳所屬警察官吏モ亦舉ケテ韓國政府ニ任用セラレ爾後韓國ニ於テ在留帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ハ韓國警察官吏專ラ之ニ當ルコトナレリ但其日本人ニシテ韓國警察官吏タル者ニ限ルハ勿論理事官カ日本人關係警察事務ニ付右警察官ニ對シ指揮監督ノ權ヲ有スルコトモ亦毫モ從前ト異ナラス畢竟舊顧問警察及理事廳警察ノ間ニ於ケル共助ノ方法ヲ擴張シ新協約ノ實施日本人官吏ノ任用ヲ機トシテ兩國警察ノ執行機關ヲ合一シ冗費ヲ去リ事務ノ簡捷ト統一トナ期スル所以ニ外ナラサルナリ

警察機關ノ統一

此ノ如ク顧問警察ト韓國警察ト合シテ一組織ヲ爲シ理事廳警察ノ機關亦之ト合スルニ至リテ從來區々タリシ韓國ニ於ケル日韓兩國ノ警察機關ハ始メテ統一ヲ得タリト云フ可シ今此合一ノ際ニ於ケル各警察官吏ノ數ヲ

舉クレハ日本警察ハ統監府警務部勤務ノ警部及巡查ヲ加ヘテ警視五人、警部四十二人、巡查五百人、顧問警察ハ補佐官警視三十一人、補佐官補警部七十人、補助員巡查千二百五人、合計日本人警察官警視二十六人、警部百二十人、巡查千七百五人ニシテ韓國人警察官ハ警視二十二名、警部八十八人、巡查二千九百八十二人、外ニ皇宮警察ニ屬スル韓國人警視九人、警部十五人、巡查三百八十二人アリタリ而シテ當時日本警察ノ機關ハ警察署十二、同分署三、駐在所五十九ヲ數ヘタルカ此等ハ適宜韓國警察ニ屬スル警察官署トシテ其事務ヲ繼承シ間々多少ノ廢合ヲ行ヘリ

(三) 新官制ト警察

同年末韓國政府各部官制ノ改正アリ韓國警察ノ組織漸ク整備ニ近ケリ即チ内部ニ警務局ヲ置キテ行政警察、高等警察、圖書出版及著作、戸口及民籍並移民ニ關スル事項ヲ掌ラシメ内部大臣直轄ノ下ニ警視廳、各道ニ警察署ヲ置キ警視廳ハ皇宮、漢城府(京城)及京畿道ニ於ケル警察事務ヲ管シ各道警察署ノ位置及管轄區域ハ内部大臣ノ定ムル所ニ依リ部令ヲ以テ警視廳ノ外、左ノ如ク警察署以下ヲ配置セリ

警察官署ノ配置

警察官署配置表

地方	警察署	分署	署	巡查駐在所	警察署名
京畿道	八	四	四〇	部、中部、東部、南部、西部、北部、水原、開城、仁川	
忠清北道	一	三	一五	忠州	
忠清南道	一	四	四〇	公州	
全羅北道	二	三	二八	全州、群山	
全羅南道	三	四	三〇	光州、木浦	
慶尙北道	一	三	三六	晉州、馬山、釜山	
慶尙南道	三	五	三六	大邱	
江原道	一	四	三三	春川	
咸鏡北道	二	三	一四	咸興、元山	
咸鏡南道	二	三	九	鏡城、城津	
平安北道	二	四	二三	寧邊、新義州	
平安南道	二	四	二〇	平壤、鎮南浦	
黃海道	一	二	二五	海州	
計	二八	四三	三三七		

警察

右新配置表ハ明治四十一年一月一日ヲ以テ施行セラレ其他警察ニ關スル
例規ノ制定實施等ニ依リ漸次新制度ノ實績ヲ舉クルニ努メツツアリ

第四節 憲兵

(一) 日露戰役前後ニ於ケル憲兵隊

憲兵派駐
ノ始

韓國ニ於ケル我憲兵ノ派駐ハ明治二十九年二月臨時憲兵隊ヲ編成シ電信
提理ノ指揮ニ屬シテ專ラ軍用電信ノ守備ニ當ラシメタルニ創マル爾來明
治三十六年末ニ至ル迄其編成ニ大ナル變更ヲ見ス

鐵國駐劄
憲兵隊

明治三十六年十二月日露兩國間ノ形勢切迫ヲ示スニ當リ韓國駐劄憲兵隊
編成セラレ駐劄隊司令部ノ指揮下ニ入ル同三十七年十月京城ニ駐劄軍司
令部ヲ置カルルニ當リ憲兵隊モ亦同司令部ノ指揮下ニ入レリ當時韓國内
ニ於テハ一派ノ韓國人等動モスレハ帝國ノ軍事及外交ニ阻害ヲ加ヘント
スルノ形勢アリ且軍ノ行動上諸般ノ便益ヲ圖リ其阻害行爲ヲ防遏スルノ
必要アルニ當リ到底不確實ナル韓國警察ニ信賴スル能ハサルヲ認メ同七

軍政及軍
施行警察ノ

月當時ノ軍司令官原口中將ハ咸鏡道ニ軍政ヲ布キ京城及其附近ニ軍事警
察ヲ施行シ此等ハ主トシテ憲兵ノ手ニ依リテ實施セラレタリ爾來憲兵隊
ハ電信及鐵道ノ保護ヲ主要ノ目的トシ韓國各地ニ分駐シテ高等警察及普
通警察ニ從事シ事實上韓國ノ安寧ハ我憲兵ニ依リテ保持セラレタリ

(二) 統監府設置後ニ於ケル憲兵隊

憲兵制度
ノ改正關
ノ統監府

韓國ノ治安維持上憲兵隊ノ力此ノ如ク大ナリシト雖其軍司令官ノ指揮下
ニ在ル關係ヨリ全然日本警察及顧問警察ト特立シ日韓警察ノ對立ニ加ヘ
テ韓國ニ於ケル帝國ノ治安機關ハ自カラ三者鼎立ノ形ヲ爲スニ至レリ此
ニ於テ統監府設置後明治三十九年二月勅令ヲ以テ韓國ニ駐劄スル憲兵ハ
軍事警察ノ外、行政警察及司法警察ヲ掌リ行政警察及司法警察ニ付テハ統
監ノ指揮ヲ受クト規定セラレ即チ軍事警察ニ關シ軍司令官ノ指揮ヲ受ク
ル外、一般警察事務ニ就テハ專ラ統監之ヲ指揮スルコトナリ上記顧問警
察ニ對スル統監ノ指揮監督ト相俟ツテ一層警察機關ノ統一ヲ全カラシム
ルヲ得タリ

顧問警察ノ配置周到シ諸般ノ施設完全スルニ至ル迄尙憲兵ノ協同幫助ヲ

必要トシ即チ統監府設置後ニ於テモ憲兵尙各地ニ分駐シテ地方保安ノ任ニ當リ義兵火賊ト稱スル匪徒其他不逞ノ徒ノ憲兵ニ依リテ鎮定セラレタルモノ甚タ多シ然レトモ韓國内ニ於ケル警察ノ本務ハ無論顧問警察ニ於テ之ヲ擔任スルヲ本則トスルカ故ニ軍事上ノ必要ナキ地點ニ於テハ漸次顧問警察ヲシテ之ニ代ラシムルノ方針ヲ採リ明治三十九年八月ニ至リ曩ニ戰時占領地ニ於テ軍ノ必要上發シタル軍律及京城ニ於ケル軍事警察ヲ撤廢シ軍ハ平和克復ノ状態ニ適應セル軍令ヲ發布シタリ

高等警察ノ施行

京城ニ於ケル軍事警察ハ之ヲ廢止シタルモ高等警察ニ至リテハ尙憲兵ノ手ヲ要スルモノ多キヲ以テ顧問警察ト協同シテ其任ニ當ラシメ三十九年八月京城及其附近ニ於テ憲兵ヲシテ高等警察ヲ施行セシムル件ヲ定メタリ當時軍司令官ノ憲兵隊長ニ下シタル命令左ノ如シ

韓國皇室ノ康安ヲ保障シ日韓兩國ノ親交ヲ維持スル爲京城及其附近ニ於テ左ノ要項ニ據リ八月十五日(明治三十九年)以降高等軍事警察ヲ施行スヘシ

第一 高等軍事警察ハ成ルヘク普通警察ノ範圍ニ立入ラサルヲ要ス

第二 高等軍事警察ハ韓國皇室ニ危害ヲ加ヘ朝憲ヲ紊亂シ又ハ日韓兩國ノ親交ヲ阻礙スヘキ非行ノ取締ニ任スルヲ以テ主眼トス之カ爲貴官(憲兵隊長)ハ本職(軍司令官)ノ認可ヲ經テ左記各項ニ關スル必要ノ命令ヲ發スルコトヲ得

一、集會政社ノ取締

二、文書圖書等ノ流布等ノ取締

三、兵器彈藥爆發物其他危險物ノ取締

四、高等軍事警察施行地域内出入ノ取締

第三 高等軍事警察施行上事ノ外國人ニ關スルモノハ速ニ事情ヲ具シ本職ノ指揮ヲ請フヘシ

憲兵減員

之ヨリ先キ韓國駐劄憲兵隊ハ十二箇分隊トシ五十箇所ニ分遣所ヲ設ケタルカ此ニ至リテ現役延期及豫後備役下士百八十四名ヲ解散シテ分遣所ヲ三十二箇所ニ減シ同十月憲兵條例改正ノ結果韓國駐劄憲兵隊ヲ解キ第十

(三) 憲兵ノ増派

暴徒蜂起
憲兵増派

明治四十年七月以來各地ニ蜂起シタル暴徒ノ鎮定其他韓國ニ於ケル治安ノ維持上、憲兵増派ノ必要ヲ認メ同月第十四憲兵隊ノ編制ヲ改正シ從來憲兵隊長ニハ佐官ヲ以テ之ニ補シタルニ代ヘ新ニ少將ヲ以テ之ニ補シ次テ勅令ヲ以テ憲兵條例中改正ノ件並韓國ニ駐劄スル憲兵ニ關スル件ノ發布アリ此次ノ改制ニ依リ韓國ニ駐劄スル憲兵ハ主トシテ治安維持ニ關スル警察ヲ掌リ其職務ノ執行ニ付統監ニ隸シ又韓國駐劄軍司令官ノ指揮ヲ受ケ兼テ軍事警察ヲ掌ルコトトナレリ憲兵隊本部ノ位置、分隊ノ配置及其ノ管區並憲兵ノ服務ニ關スル規定ハ統監之ヲ定メ其軍事警察ニ係ルモノハ韓國駐劄軍司令官之ヲ定ム即チ第十四憲兵隊ヲ韓國駐劄憲兵隊ト改稱シ本部ヲ京城ニ置キ七箇分隊ヲ分チテ全國ニ配置シ其要員ハ十月以來續々内地ヨリ渡來シ漸次憲兵警察ノ周密ヲ期セリ分隊ノ所在地ハ京城、天安、間島、平壤、釜山、咸興及榮山浦ニシテ其分遣所ハ漸次増設セラレ最近ニ於テ四百六十餘箇所ノ多キニ上リ本部及分隊ヲ併セテ將校以下二千四百餘名ヲ算ス而シテ韓國政府ヨリ照會ノ結果、韓國政府ノ警察權施行ニ關シ駐劄憲兵ニ於テ援助ヲ與フヘキコトヲ承認シタルヲ以テ我憲兵ハ日韓兩國警

治安警察
憲兵

軍事警察
兼掌

憲兵ノ實
力

察權ニ干與管掌スルノ權限ヲ有シ韓國ニ於ケル警察力ノ一要部ヲ爲スニ至レリ

憲兵補助
員

韓國政府ハ隆熙二年即チ明治四十一年六月勅令ヲ以テ暴徒ノ鎮壓及安寧秩序維持ノ爲憲兵補助員ヲ募集シ我憲兵隊ニ委托シテ其指揮下ニ職務ヲ行ハシムルニ決シ同九月第一回要員四千六十五名ノ募集ヲ了セリ即チ憲兵將校以下及補助員ヲ合シ現時韓國駐劄憲兵隊ノ使用シ得ル人員ハ六千五百名ニ近ク軍隊ヲ除キ韓國ニ於ケル治安機關ノ最要部ヲ占ム而シテ軍ニ在リテハ其固有ノ性質上、守備區ノ分割、人員ノ配置等甚々細密ニ亘ル能ハサルモ憲兵隊ハ此等ノ點ニ於テ本來ノ長所ヲ有シ隨テ軍ハ之ニ伴ヒテ漸次守備隊ノ配置ヲ變更シ各々其宜ニ遵ヒテ地方安寧ノ維持ニ努メツツアリ尙憲兵補助員ニ關スル詳細ノ報告ハ次回ノ年報ニ讓ル

第八章 治安

第一節 地方ノ民擾

(一) 民擾ノ種類

火賊

警察力十分ナラサル韓國ニ於テ地方民擾ノ頻繁ナル發生ハ殆ント連年ノ常例タリ就中江原道慶尙北道附近一帶ハ火賊ト稱スル匪徒ノ巢窟ニシテ常ニ其横行ヲ絶タス其他各地方ニ於テモ無賴不逞ノ徒或ハ數人或ハ數十人ノ團集ヲ爲シテ鄉曲ニ横行シ良民ヲ劫略スル如キ又往々見ル所ナリ

義兵

口露戰役ヨリ引續キ各種協約ノ締結アリ日韓兩國ノ關係舊態ヲ改ムル毎ニ地方ノ儒生兩班等大勢ニ通セサル徒輩ハ漸次排日ノ氣勢ヲ昂メ中央ニ於ケル政治的陰謀ト暗ニ氣脈ヲ通シ遂ニ明治三十九年五月ニ於ケル洪州亂ノ如キヲ生スルニ至レリ忠清南道ハ古來地方兩班ノ淵藪ヲ以テ稱セラレ其附近一帶ヨリ京畿道方面ニ亘リ排日思想ノ傳播最モ早ク且最モ深カリシカ如シ

新政反抗

財務ノ刷新警務ノ擴張其他諸般施政ノ改善ニ伴ヒ地方ノ小民動モスレハ其趣旨ヲ誤解シ加フルニ新政ノ進捗ト利害相反スル吏胥ノ徒暗ニ之ヲ指嗾スルアリ各地時ニ小騷擾ノ發生ヲ見タリ然レトモ此等ハ箇々偶發ノ事變ニシテ一モ大事ニ至ラス

暴徒

明治四十年七月海牙密使事件ヨリ延テ一大政變ヲ惹起シ遂ニ禪讓ヲ見ルニ至ルヤ或ハ之ヲ以テ日本ノ強壓ニ出ツト誤解シ政治上ニ志ヲ得サルノ輩又熾ニ民心ヲ煽揚シ同月十九日京城ノ街衢ニ流血ノ慘劇ヲ演スルニ至ル次テ新協約ノ締結トナリ韓國軍隊ノ解散トナリ京城八月一日ノ變トナリ餘波全國ニ及ヒテ地方民擾ノ續出ヲ致セリ蓋シ此次ノ暴動ハ排日思想ノ實現ニ兼ヌルニ解散兵士ノ加擔ヲ以テシ地方ノ秩序漸ク壞敗スルニ及ヒテ鄉閭不良ノ輩火賊小匪ノ類亦機ニ乘シテ勢ヲ添ヘ若クハ單獨ニ横行跋扈シ從來稀有ノ凶焰ヲ揚クルニ至レルモノトス

民擾ノ鎮

地方民擾ノ小ナルモノニ對シテハ隨時警察憲兵ノ力ヲ以テ之ヲ鎮壓シ其較々大ナルモノニ對シテハ遂ニ兵力ヲ使用シ特ニ四十年下半年以來ノ暴動ハ全國ノ大部ニ亘リテ兇暴ヲ逞クセルヲ以テ一面警察官及憲兵ヲ增加

スルト同時ニ軍隊ノ増遣ヲ求メ剿討ニ從ハシメタリ此等各般計畫ノ進行ニ伴ヒ今ヤ地方ノ秩序ハ漸ク舊ニ復セントス以下項ヲ分チテ重ナル民擾經過ノ梗概ヲ舉ク

(二) 閔宗植ノ亂

閔宗植

明治三十九年二月忠清南道定州郡人閔宗植ナル者各地ノ有志ト氣脈ヲ通シ亂ヲ作サントスルノ報アリ三月十七日我警察官ノ一隊ハ其合川ニ在ルヲ偵知シ之ヲ捕縛セントシテ果サス爾來閔ハ巧ニ踪跡ヲ暗マシ忠清南道南部一帶日ニ不穩ヲ加フ五月十七日賊藍浦郡衙ヲ襲ヒ郡守ヲ拉去シ越テ十九日勢ヲ合シテ洪州城ニ薄レリ城内ヲ警戒セル二名ノ憲兵ハ四名ノ邦人ト共ニ南門ノ城壁ニ據リ舊式ノ韓國大砲三門ヲ利用シテ防戦ニ努メタルモ賊亦舊式大砲二門及新式小銃ヲ發シテ熾ニ攻撃シ來リ且賊勢漸次増加シテ二百ニ達セリ此ニ於テ憲兵ハ郵便局員及其家族並ニ居留民全員ヲ保護シ北門ヨリ徳山ニ避難ス賊則チ城内ニ入りテ之ヲ占領シ城内外ノ人民ヨリ兵器糧食彈藥等ヲ徵發シ四方與黨ヲ募集シテ數百ヲ得勢日ニ猖獗ナリ之ヨリ數日ノ間我憲兵及警察官ハ數次賊ヲ攻撃シタレトモ目的ヲ達

洪州城占領セラル

出兵

セス警部、巡查及韓國總巡數名行衛不明トナルニ至レリ

洪州城攻撃

賊勢此ノ如キニ至リ統監ハ軍司令官ニ出兵ヲ命シタル結果、同二十九日夜田中少佐ノ指揮ニ屬スル歩兵二個中隊及騎兵一箇小隊京城ヨリ洪州附近ニ到著シ翌三十日月溪村附近ノ賊ヲ掃蕩シテ城砦ニ迫リ機關砲ヲ以テ威嚇射撃ヲ爲ス三十一日午前二時三十分部隊ハ憲兵及警察隊ヲ加ヘ洪州城ニ對シテ攻撃ヲ開始シ同三時二十分騎兵爆破班ノ東門ヲ破壊スルト同時ニ先頭ノ歩兵ハ機關砲ヲ連發シテ突貫シ憲兵及警察隊之ニ續キ次テ北門亦騎兵ノ爲ニ破壊セラル賊ハ一時勇敢ニ抵抗シタルモ午前四時我ハ確實ニ洪州城ヲ占領セリ賊ノ死者約八十、捕虜百五十餘名、鹵獲品亦多シ我ニ於テハ韓國巡檢一名戰死シ步兵二名負傷シタルノミ即チ憲兵及警察官ヲシテ城内外ノ秩序回復ニ從ハシメ捕虜ハ取調ノ結果、七十餘名ヲ釋放シ八十餘名ヲ京城ニ押送シ田中少佐ノ部隊ハ六月五日洪州出發京城ニ引揚ケタリ爾後同方面全ク靜穩ニ歸ス

閔ノ處刑

首魁閔宗植ハ洪州攻撃ノ當時身ヲ以テ遁逃シ久シク踪跡ヲ暗セルカ同年十一月公州郡塔山ニ於テ警務顧問部警部ノ爲ニ捕縛セラレ京城ニ押送セ

ラレ明治四十年七月二日平理院ニ於テ裁判言渡アリ死刑ニ處セラレタル
モ法部大臣ノ奏請ニ依リ一等ヲ減シテ流終身ノ刑ニ處シ珍島ニ於テ執行
ヲ受ク次テ同十二月特赦ヲ以テ釋放セラレタリ

(三) 崔益鉉ノ亂

崔益鉉
忠清南道定山郡人崔益鉉ハ儒生ノ間ニ聲望ナル老儒ナリ明治三十八年日
韓協約ノ締結ニ當リ大ニ反對論ヲ唱ヘ京城ニ儒約所ヲ設ケ通文ヲ十三道
ニ發シテ盛ニ儒生ヲ煽動セリ次テ郷ニ歸リ明治三十九年五月全羅北道ノ
人林炳瓚等ト謀リ徒黨百數十人ヲ嘯集シ郡衙ヲ襲ヒ税金ヲ掠メ銃器ヲ奪
ヒ拘置者ヲ釋放スル等亂形顯然タリ六月五日全州警務顧問支部ハ警察官
ヲシテ同地守備隊兵士數名ト共ニ泰仁郡ニ於テ之ヲ捕縛セシメントシテ
得ス同九日日韓警察官ノ一行九名淳昌ニ於テ之ニ追及シタルモ數百名ノ
賊ニ包圍セラレ辛ウシテ免ルルヲ得タリ即チ南原鎮衛隊及全州鎮衛隊ヲ
シテ之ヲ討伐セシムルニ決シ十二日淳昌附近ニ於テ討伐韓兵ト崔ノ部隊
ト衝突ス賊ハ應戰數刻ニ亘リシモ終ニ力屈シ崔林ノ兩巨魁以下盡ク投降
セリ十六日我憲兵隊ハ全州ニ於テ崔以下十二名ヲ受取リテ京城ニ押送シ

刑ノ處刑

軍司令部ニ於テ審問ノ結果同八月四日軍律違反トシテ首魁崔益鉉ヲ監禁
三年ニ林炳瓚ヲ同二年ニ處シ以下夫々處罰セラレ監禁ハ對馬ニ於テ之ヲ
執行スルコトトナリ崔ハ八月七日京城出發八日對馬ニ著シ同地ニ監禁セ
ラレ次テ病ヲ得翌明治四十年一月一日謫所ニ死セリ

第二節 明治四十年下半年以後ノ各地暴動

(一) 京城ノ騷擾

七月十八日

明治四十年七月先帝讓位ニ先ツ一日即チ同十八日ヨリ京城市中漸ク不穩
ノ徵アリ鐘路附近ノ重ナル街衢ニ於テハ各戸戸ヲ閉シ商業ヲ休止セリ夜
ニ至リテ多數ノ人民鐘路ニ集合シ王城前ニ押寄セントシタルモ十一時頃
ニ至リテ漸ク解散ス蓋シ皇帝ヲ日本ニ誘致ストノ風説一般ニ行ハレ且熾
ニ人民ヲ煽動シタルモノアルニ因ル

同十九日

十九日朝來多數ノ韓民鐘路ニ集合シ激烈ナル路傍演説ヲ試ムル者アリ群
民ハ石ヲ投スル等狂暴ヲ極メ死傷者ヲ生スルニ至レリ午後韓兵ノ一團約

四十名二手ニ分レ一隊ハ鐘路巡查派出所ヲ襲ヒテ之ヲ破壊シ一隊ハ道路警戒ニ從事スル警察官ヲ射撃シ爲ニ日本警察官三名韓國巡檢二名日本人一名韓民二名即死シ日本警察官四名日本人二名重傷ヲ負フ其他韓兵ハ警務廳ニ向テ發砲スル等亂暴ヲ逞クセリ同夜多數ノ暴徒ハ一進會ノ機關新聞タル國民新聞社ヲ襲撃シ建物ヲ破壊シ社員ヲ毆打負傷セシム二十日モ朝來城内各所ニ於テ韓民ノ騷擾未タ休マス韓國脫走兵及群民ト日韓警察官トノ間ニ數回ノ衝突アリ然レトモ軍隊ノ警戒嚴ヲ加ヘタル爲一人ノ死傷者ヲ出スニ至ラス同日一群ノ暴徒ハ李總理大臣邸ヲ燒キ李軍部大臣邸ヲ襲フ越テ二十一日ノ夜東門外ニ在ル前内部大臣李址鎔及前軍部大臣李根澤ノ別莊亦燒カル其他韓民ノ騷擾暴行隨所ニ相次キ韓人街附近ノ日本人ハ一時居留地ニ引揚クルニ至レリ

暴動鎮定ノ委任

京城ノ騷擾此ノ如シ韓國皇帝ハ則チ同十九日夜暴動ノ制止及鎮壓ヲ統監ニ委任セラレ我軍隊憲兵及警察ハ協力シテ城内外ノ秩序回復ニ努メタル結果物情漸ク靜マリ二十三日ニ至リテ殆ント平常ニ復セリ二十四日各機關ノ行動ヲ統一スル必要ヨリ日本側ニ於テハ統監府警務總長京城理事官

衛戍司令官ノ區處

及警務顧問韓國側ニ於テハ軍部協辦侍衛混成旅團長憲兵司令官及警務使ヲシテ一時京城衛戍司令官タル第十三師團長ノ區處ヲ受ケシムルコトトシ一面ニ於テハ之ヨリ先キ新聞紙ノ取締ヲ嚴ニシ銃砲火藥ヲ韓人ニ賣却スルヲ禁スル等秩序ノ維持ニ必要ナル手段ヲ採リ八月一日軍隊解散ニ至ル迄京城ノ天地全ク平穩ニ復シタリ

(二) 京城ノ小戰

軍隊解散

七月三十一日ノ夜韓國皇帝ハ軍隊解散ノ詔勅ヲ發セラレタリ其要現在ノ軍隊ハ備兵ヲ以テ組織シ國家完全ノ防衛トナスニ足ラサルヲ以テ皇室侍衛ニ必要ナルモノヲ選置スル外其他ハ一時之ヲ解散シ他日徵兵法ニ依レル有力ノ軍隊ヲ編成セント云フニ在リ同夜韓國政府ハ軍隊解散ノ際人心ノ動搖ヲ豫防シ暴動ヲ鎮壓センコトヲ統監ニ依頼スルノ勅命ヲ奉承シタル趣公文ヲ以テ統監ニ知照シタリ

京城ノ小戰

翌八月一日日本軍隊監視ノ下ニ先ツ京城屯在諸隊ノ解散ニ着手シタルニ偶々侍衛步兵隊ノ一部暴發シタル爲遂ニ我兵力ヲ以テ之ヲ鎮壓スルノ已ムヲ得サルニ至レリ其戰鬪概況左ノ如シ

八月一日午前八時侍衛第一聯隊第一大隊ノ日本教官ハ同隊ヲ營庭ニ整列セシメ訓練院ノ解散式場ニ誘導セントスル際同大隊長ハ突然兵舎内ニ自殺シ之ト同時ニ整列シタル兵卒ハ沸騰離散シテ教官ニ害ヲ加ヘントシ退營ノ已ムヲ得サルニ至ラシメタリ此時隣接セル侍衛第二聯隊第一大隊ニ於テモ又誘發セラレテ教官ニ暴行ヲ加ヘントシ教官ハ終ニ退營セリ

兩兵舎ノ韓兵ハ直ニ庫内ノ彈藥ヲ奪ヒ武器ヲ携ヘテ營外ニ逸出シ舍營ノ周圍ニ哨兵ヲ張り内外トモニ亂射ヲ始メタリ右兩大隊ノ舍營ヲ受領警戒スル爲前進中ナリシ我歩兵第五十一聯隊第三大隊ノ二箇小隊ハ此際舍營ニ近キタルモ韓兵ノ亂射甚シク到底鎮撫ニ由ナキヲ認メ同九時三十分岡崎第十三師團長ハ第三大隊長ニ對シテ兵力ノ使用ヲ命令セリ十時三十分第三大隊長坂部少佐ハ部下一箇中隊及少數ノ工兵ヲ以テ營外ノ哨兵ヲ驅逐シ直ニ侍衛第二聯隊第一大隊ノ裏門ニ薄ル韓兵ハ舍營ノ壁上及窓戸ヨリ猛烈ナル射撃ヲ爲シテ隘路ヲ前進スル我兵ヲ阻止シ之ヲ爲負傷少カラス同四十分他ノ一箇中隊到着シ協力シテ遂ニ兵營ニ

突入シ四周ノ兵舎窓戸ヨリ集注スル射撃ヲ冒シテ内庭ニ迫リ工兵ハ爆彈ヲ投シテ兵舎ヲ破壊シ歩兵ハ白兵ヲ以テ韓兵ヲ攻撃シ遂ニ之ヲ營外ニ驅逐シ十時五十分全ク同兵營ヲ占領セリ

侍衛第一聯隊第一大隊ノ正門ニ向ヒタル一箇中隊ハ附近ニ散開セル韓兵約二箇中隊ノ猛烈ナル射撃ヲ受ケタルモ先ツ哨兵ヲ驅逐シ漸次正門ニ迫レリ午前十時敵ハ益々増加ノ模様アリ依テ一時地物ヲ利用シテ敵ト近接停止シ十時五十分第一聯隊ノ占領ヲ機トシ直ニ攻撃ニ移レリ此時他ノ一箇中隊並ニ工兵分隊モ到着シタルヲ以テ協力シテ猛烈ニ兵營ニ突入シ十一時四十分確實ニ之ヲ占領シタリ

敗兵ハ四方ニ散亂シ我南大門停車場衛兵其他ノ攻撃ヲ被レリ此戰ニ於ケル損害ハ我ニ於テ戰死中隊長以下四名、負傷將校以下二十一名ニシテ韓兵ノ戰死者ハ將校以下七十餘名、負傷者百餘名、捕虜ハ六百名ニ近シ

其他ノ諸隊ハ訓練院ニ集合シ先ツ各兵士制服ノ徽章ヲ取去リ恩賜金ヲ分配シ無事解散ヲ了シタリ而シテ當日ノ戰鬪ハ一時京城一部ノ巷街ヲ戰場ニ化シ慘憺タル市街戰ヲ現出シタルモ爾後京城ハ永ク靜穩ニ歸セリ

(三) 地方ノ暴徒

地方ノ不 皇帝讓位、京城騷擾ノ報、地方ニ達スルト同時ニ各地亦漸ク不穩ノ徵ヲ呈シ、特ニ觀察府鎮衛隊等ノ所在地ニ在リテハ交通ノ便アルニ件ヒ其ノ感染最モ速ニ官吏ハ危懼シ兵丁ハ同盟脫營シ若クハ規律ヲ失シテ放漫ノ行動ヲ恣ニシ隊長之ヲ制スル能ハス商民ハ戸ヲ閉テ業ヲ休メ不逞ノ徒竊ニ團集スル等人心恟々トシテ寧處ヲ失セリ就中京畿、忠清、全羅ノ方面最モ甚シク此等各地ニ散在スル日本人ハ相戒メテ避難ノ計ヲ爲スニ至ル

暴動ノ先 七月二十二日暴徒約三百京畿道安城郡ニ蜂起シ勢漸ク猖獗ナリシモ警察官ヲ急派シテ首魁ヲ捕縛シ鎮靜ニ歸セシメタリ之ヲ此次暴動ノ第一トス八月一日京城ニ於ケル韓兵ノ暴發ハ更ニ不良ノ影響ヲ各地ニ及ホシ人心益々險惡ヲ加フ然レトモ各地方鎮衛隊ノ解散ハ案外平穩ニ進捗シ八月三日水原鎮衛隊ノ解散ヲ初トシテ九月三日迄ニ全國ノ鎮衛隊及同分遣所ノ解散ヲ了シタリ此間軍隊解散ノ爲事端ヲ生シタルハ江華島分遣隊ノミニシテ外ニ江原道原州鎮衛隊ハ解散ノ命ニ先チ兵丁等暴動ヲ起シ武器ヲ携ヘテ遁逃シ同地方一帯ニ於ケル暴動ノ發端ヲ爲セリ其他各地ニ於テモ解

江華島ノ

散兵丁ノ多數ハ恩賜金ヲ費消スルト同時ニ暴徒ノ群ニ投シテ煽動者ノ手足トナリ或ハ一部隊ヲ指揮シ全國ノ賊焰之ヨリシテ大ニ熾盛ヲ加フ八月十日水原鎮衛隊教官小倉大尉ハ歩兵一箇小隊ヲ率ヒ鎮衛隊大隊長ト共ニ江華島分遣所解散ノ爲出張シ將ニ上陸セントスルヤ韓兵約五十名猛烈ニ射撃ヲ開始シ我下士卒ニ戰死者ヲ出セルモ強行上陸ヲ遂行シ韓兵ハ退テ江華府ニ據リ前日來、島内ニ於テ我居留邦人及警察官ヲ殺傷シタル暴徒ノ群ト合シ其勢力數百名ニ上ル依テ同十一日我軍隊ハ江華府ヲ攻撃シテ之ヲ占領シ島内ヲ平定セリ

原州ノ亂

原州鎮衛隊ハ八月六日早朝ヨリ全ク無節制ノ狀況ヲ呈シ日本居留民ハ危險ヲ慮リテ引上ケタリ兵丁等ハ郵便局及居留民ノ家屋ヲ破壊シ銃器彈藥ヲ奪ヒテ之ヲ附近人民ニ配付シ宛カモ同地ニ來著シタル日本軍ノ小部隊ト交戦セリ此報ニ接シ京城ヲ發シタル下林少佐ノ部隊十日同地ニ至レハ兵營内既ニ隻影ヲ留メス兵丁及暴徒ハ數群ニ分レ四出劫畧セリ之ヨリ先キ原州ヲ中心トシ江原、京畿兩道ノ境上頗ル不穩ノ形勢ヲ呈シ京畿道砥平ニ於テハ三日一群ノ暴徒郡衙ヲ占領ス原州ノ脫走兵丁ハ附近ノ狀況此ノ

江原、京畿兩道ノ暴徒

如キニ乘シテ益其勢ヲ加ヘ十二日約二百ノ韓兵及暴徒京畿道驪州ヲ襲ヒ警務分遣所ヲ包圍シテ日本警察官及其家族合セテ四名ヲ慘殺セリ之ヨリ賊ノ勢力ハ江原忠北京畿ノ三道ニ延ヒ即チ京城ノ東方一帶ハ全ク其巢窟ト化シ且漸次其地域ヲ擴大シテ京城東北方即チ京釜鐵道線路以東日本海ニ至ル一帶南ハ慶尙北道ヨリ北ハ江原京畿兩道ニ亘リ所在蜂起シテ猖獗ヲ極メ交通殆ント全ク杜絶セリ此間日本居留民郵便局員江原道沿岸出漁者等ノ毒手ニ斃ルルモノ少カラス我軍隊ハ必要ノ地點ニ守備隊ヲ配置シ憲兵及警察官ト協力シ四方警ニ應シテ討伐ニ努ムト雖未タ劇ニ其功ヲ收ムルニ至ラス隨テ討テハ隨テ蜂起シ此地域一帶ハ爾後久シキニ亘リテ暴徒ノ中心タリ遂ニ一群ノ暴徒ハ九月京釜鐵道線路ニ進出シ天安停車場ヲ襲ヒテ之ヲ燒キ秋末ニ及ヒテ京城東門外蠶島及其附近ニ出沒スルニ至レリ

京釜鐵道線一帶ノ暴徒

暴徒京釜線ニ進出ス

西海岸ノ暴徒

京釜鐵道線路以西海岸ニ至ル一帶即チ忠清南道及全羅南北道ニ於テモ九月ニ入りテ賊警漸ク多ク十月十一月頃最モ猖獗ヲ極ム就中忠清南道洪州以北即チ京畿道ニ接スル地方忠南全北ノ境上ヨリ全州附近ニ至ル一帶全

羅南北境上ヨリ海岸ニ至ル羅州附近地方等ハ其最モ跳梁シタル區域トス此方面ニ於ケル暴徒ノ勢力ハ東部一帶ノ若クナラスト雖被害亦甚少トセス特ニ邦人ノ在留東部ノ比ニアラサルヲ以テ其影響最モ深酷ナルモノアルヲ認ム轉シテ京城以北ノ形勢ヲ見ルニ京畿道ノ江原道及忠清北道ニ接スル地方ハ最モ早ク賊難ヲ被レルコト上記ノ如ク而シテ餘波ハ漸次延キテ同道ノ北部ニ及ヒ更ニ北シテ黄海道ノ山地一帶ニ亘リ大同江下流載寧地方ノ如キ黄海ニ面スル一二地方ノ如キモ亦漸ク暴徒ノ横行ヲ見ルニ至レリ平安南北道ハ比較的靜穩ナリシモ平壤東北方ノ山地ニ於テ動モスレハ賊警ヲ開ク北韓方面ハ十一月末甲山一帶ニ於テ一進會員ニ對スル暴發アリシニ止マル要之スルニ平安北道咸鏡北道及慶尙南道ヲ除キ暴動ハ遂ニ韓國全部ニ亘レリ特ニ最甚シカリシ地方即チ京畿江原及忠清北道ノ境上ニ於ケル各邑中ニハ此間賊難ヲ被ルコト七八回ニ上レルモノアリ村里肅條トシテ一時慘狀ヲ極メタリ

北韓方面ノ暴徒

京城以北ノ暴徒

暴徒ノ討伐

治安

各地暴徒ニ對スル討伐ハ我軍隊憲兵及顧問警察官之ニ當リ各其性能ニ應



シ協力シテ之カ鎮定ナ期セリ之ヨリ先キ韓國駐劄軍ハ一箇師團ニ減セラレ七月事變ノ際ニ於テハ京城附近ノ守備甚タ薄カリシヲ以テ平壤及北韓方面ヨリ軍隊ヲ招致スル等配備ノ宜ヲ制スルニ努メタリ同月末ニ至リ步兵第十二旅團韓國ニ上陸シ第十三師團ト協力シテ各地ノ守備ニ就ク此ニ至リテ韓國駐劄ノ兵力ハ一箇師團ト步兵一箇旅團トナレリ

步兵第十
二旅團増
強
暴徒ノ狀
況

一時暴徒ノ最モ猖獗ヲ極メタル時期ニ於テ集團ノ大ナルハ五六百名ニ達シ間々千餘名ト聲言ス而シテ韓兵ノ多數ヲ包含セル集團ニ在リテハ武器ノ比較的優良ナルニ加ヘテ其動作亦侮ル可カラサルモノアリ之カ爲屢々我斥候連絡兵及荷物護衛兵ヲ掩撃セラレタルノミナラス時トシテハ我守備兵ニ向ヒ攻撃ナスラ企テ來リ其諜報勤務ノ如キ亦頗ル敏活ニシテ巧ニ我兵ノ出動ヲ偵知シ或ハ散シテ深山幽谷ニ匿レ或ハ衆ヲ頼ミテ險要ヲ扼シ或ハ我軍ノ進路ヲ避ケ却テ空虚ナル守備地ヲ急襲スル如キ奇策ヲ弄シ出沒自在大ニ我軍ノ行動ヲ困難ナラシメタリ且暴徒蜂起ノ當初ハ恰モ炎暑酷烈ノ時季ニ當リ屢々賊警ニ接シテ強行軍ヲ行ヒ討伐ニ從ヘル我軍隊ノ勞苦ハ眞ニ尋常ニアラス夏冬長クシテ春秋短キ韓國ノ氣候ハ又幾ナラ

スシテ寒冷ノ季節ニ入り北韓地方ノ酷寒ハ又少カラス我軍隊ノ運動ヲ沮害セリ加フルニ道路ヲ交通ノ便ナキ韓國ノ僻地ニ在リテ糧秣彈藥ノ運搬ハ夏冬ヲ通シテ最モ困難ヲ極メ暴徒一タヒ過クルノ地ハ邑里蕭條人民概ネ奔竄シ殆ント一物資ノ調辨スヘキナク此等百般ノ不便ハ最モ我軍隊ヲ窘メタリ

守備配置
ノ變更

此等ノ困難アルニ拘ラス我軍隊ノ士氣ハ極メテ旺盛ニシテ賊ノ存在ヲ知レハ時ノ如何ヲ問ハス電馳シテ猛烈ニ之ヲ追窮シ連日連夜殆ト休養ノ違ナク討伐ニ從事セリ而シテ一方ニ於テハ當初守備隊ノ配置ヲ粗ニシ賊警アル毎ニ直ニ駐屯地ヨリ適當ノ兵力ヲ派出シタルノ制ヲ改メ漸次守備隊置ノ箇所ヲ増加シテ兵力ノ配布ヲ密ニシ鎮定擔當區域ヲ定メテ各守備隊ニ配分シ地方ノ鎮撫賊徒ノ討伐トモニ遺憾ナキ時期セリ蓋シ遠隔ノ駐屯地ヨリ賊ノ出沒ニ應シテ軍隊ヲ派スルハ徒ニ兵ヲシテ奔命ニ疲レシムルニ止マリ其効果多カラサレハナリ此等配備ノ變更ハ將士ノ奮勵ト相俟ツテ大ニ其効果ヲ發揚シタリ

憲兵及警
察官

治安

憲兵及警察官ハ軍隊ニ隨伴シ行動ヲ共ニシテ一切ノ勞苦ヲ分テルノミナ

01234567892

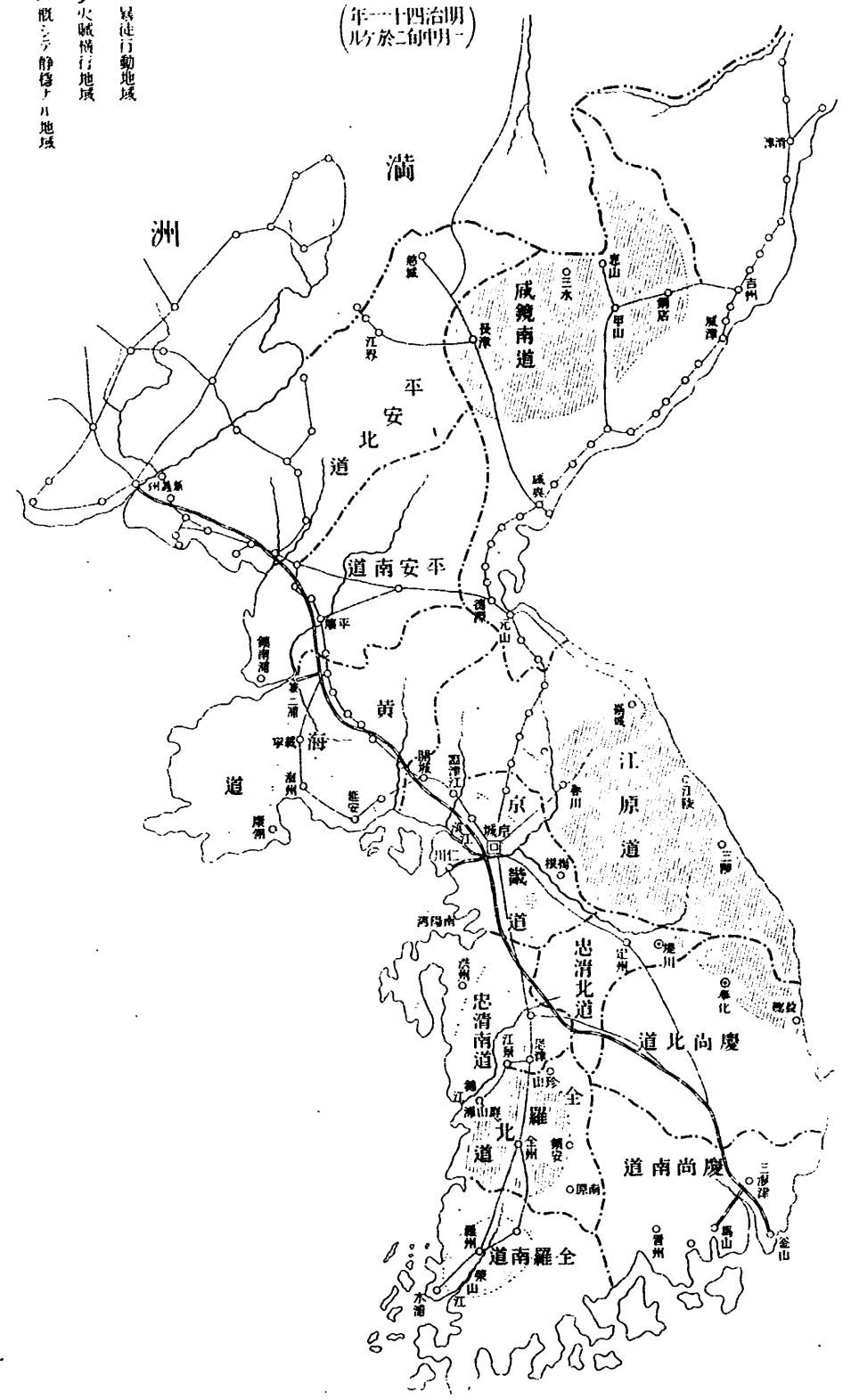
治安

運兵増派
 勅令ヲ以テ駐劄憲兵ニ關スル制度ヲ改正シ且大ニ之ヲ増員シ漸次地方ニ分駐セシムルヤ軍隊配備ノ密ヲ加フルト相俟ツテ暴徒ノ鎮定地方治安ノ維持ニ與ツテ多大ノ力ヲ致セリ

軍司令官
 地方暴民鎮壓ノ作業ハ性質ニ於テ正式ノ戰鬪ト同視ス可カラス土民ノ向背其他種々ノ點ニ於テ軍隊ノ動作ヲ阻害スヘキ事由甚々多シ依テ軍司令官ハ明治四十年九月韓國民一般ニ對スル告示ヲ發シ韓國皇帝陛下ノ聖旨ヲ奉シ匪徒ヲ剿滅シ衆庶ヲ塗炭ニ極ハントスルノ目的ヲ明ニシ匪徒ニシテ歸順スル者ハ其罪ヲ問ハス匪徒ヲ拘拿シ或ハ其所在ヲ密告スルモノハ必ス重ク之ヲ賞セン若シ頑陋悟ラス或ハ匪徒ニ與シ或ハ之ヲ隱避セシメ或ハ兇器ヲ藏匿スル者ニ至リテハ嚴罰毫モ假ス所ナキノミナラス責ヲ現犯ノ村邑ニ負ハシメ部落ヲ舉テ嚴重ノ處置ニ出ツ可キヲ曉諭セリ之ト同時ニ軍司令官又ハ軍參謀長ヨリ討伐部隊ニ對シテ嚴ニ非違ヲ禁スルノ訓

暴徒狀況圖覽

(明治四十四年)
 (於二前明一)



備考
 赤線徒行動地域
 黃火賊橫行地域
 白線テ靜謐ナル地域

令又ハ通牒ヲ發シ以テ多數ノ兵士中萬一軍規ヲ紊ルノ行ナカラシムコトヲ
期シ戒飭數次ニ及ヒタリ

討伐ノ成

討伐ノ成績ハ秋末ニ至リテ漸ク現ハレ來リ各地ノ大集團ハ次第ニ摧破セ
ラレテ又一時ノ勢ヲ有セス然カモ暴徒等ハ幾群ノ小集團ニ分レ我軍隊憲
兵及警察ノ眼ヲ偷ミテ隨所ニ出沒隱現シ明治四十年末ニ至ル迄未タ全ク
廓清ノ功ヲ終ルヲ得サリシハ甚々遺憾トスル所ナリ軍司令部ノ報告ニ據
レハ明治四十年七月暴徒蜂起ヨリ同年末ニ至ル討伐隊守備隊及憲兵ノ損
害ハ戰死三十八人、負傷八十八人、合計百十八人ニシテ暴徒ノ損害ハ明治四十
一年一月二十日迄ニ死者二千九百六十八人、傷者千二百四十八人、死傷不明
八百九十八人、捕虜六百四十七人ヲ數フ右ノ外、軍隊ト共ニ若クハ單獨ニ討
伐ニ從ヒシ警察官ノ被リタル損害並ニ其暴徒ニ與ヘタル損害モ亦甚タ少
カラス若シ夫レ日韓兩國良民ノ損害ニ至リテハ頗ル重大ニシテ所在日本
人ノ暴徒ニ虐殺サレタル數ハ討伐隊戰死者ニ數倍セリ其慘害思フヘシ韓
民ノ損害ニ至リテハ到底精數ヲ知ル能ハサルモ在留邦人ノ損害ニ幾倍ス
ヘキヤ素ヨリ言ヲ俟タサルナリ

(五) 暴徒鎮定ト韓國政府

韓國政府ノ施設

主トシテ日本軍隊、憲兵及警察官ニ於テ暴徒討伐ニ從ヘル間ニ韓國政府カ其鎮定ニ關シ施設シタル所ヲ舉クレハ七月京城騷擾ノ際詔勅ヲ發シテ國民ノ妄動ヲ戒飭シタルコト九月更ニ詔勅ヲ發シテ全國ノ民ヲ諭シ併セテ宣諭使ヲ地方各道ニ派遣シタルコト十二月歸順ヲ勸獎シ歸順者ニ免罪文憑ヲ給付スルノ詔勅ヲ發シタルコト銃砲火藥取締法ヲ制定公布シタルコト地方自衛團規則ヲ設ケ其設置ヲ勸誘シタルコト等之ナリ

宣諭使

歸順獎勵

宣諭使ハ多クハ地方ニ於テ危險ヲ犯シ人民ヲ曉諭スルノ誠意ヲ缺キ其績大ニ見ルヘキモノナシト雖歸順ノ勸獎ハ時宛カモ我討伐大ニ進捗シ暴徒等踟躕ノ境ニ陥リ且天寒行動ノ自由ヲ得サルノ候ニ際シタルヲ以テ翌年ニ亘リテ漸次其成績ヲ現ハセリ今歸順勸獎ノ詔勅ヲ舉レハ左ノ如シ

詔勅

詔勅

嗚呼今茲地方ノ擾未タ寧息セサル是レ豈ニ我赤子偏ニ亂ヲ好ミ禍ヲ樂ムノ心アリテ鋒鏑ノ患ニ罹ルヲ甘ンスルモノナランヤ唯愚迷謬誤是非ヲ顛倒シテ然ルニ過キサルナリ其心ヲ原ヌレハ曷ソ曾テ必誅ノ罪アラ

シヤ其咎素ヨリ教育セサルニ在リ其冥槩ニ任スルハ孺子ノ匍匐シテ將ニ井ニ入ラントスルヲ救ハス又以テ之ヲ擠サントスルナリ況ヤ天寒歲暮ニ値テ氷雪ノ中ニ顛連シ且其父母ハ罔ニ倚テ泣キ妻子ハ飢ニ啼キテ待ツ滿目愁慘在在皆然ルヲ民ノ父母タルモノ念フテ此ニ至レハ惻然トシテ涙ヲ下ササルヲ得ンヤ今ヨリ以後始終梗化スル者ハ法ニ依リテ赦ス罔シ其或ハ前非ヲ覺悔シ誠心歸順シ情確ニシテ疑ナキ者ハ前罪ヲ問ハス地方官憲ノ監視保護ノ下ニ在テ免罪ノ文憑ヲ給與シ其安堵シテ業ヲ樂ムヲ許シ龍蛇ヲシテ化シテ赤子トナラシムヘキナリ咨爾有司諸臣克ク朕カ好生ノ心ヲ體シ布諭施行セヨ

隆熙元年十二月十三日

銃砲火藥取締法

銃砲火藥類團束取締法ハ隆熙元年即チ明治四十年九月法律第五號ヲ以テ公布セラレ銃砲火藥類ノ製造販賣並其受授運搬所有ニ關シテ一般的ノ取締ヲ加フル外安寧秩序ノ保持上必要トスルトキハ内部大臣ニ於テ地域及期間ヲ限リ其受授運搬携帶又ハ所有ヲ制限又ハ禁止シ私ニ之ヲ貯藏スルノ嫌疑アリ若クハ必要ヲ認ムル時ハ警察官家宅ニ臨檢シ其銃砲火藥類ヲ

領置スルヲ得ルコトヲ規定ス此法律ニ依リ多少民間所藏ノ武器危險物ヲ領置シ禍殃ヲ未然ニ防止スルヲ得タリ

自衛團

自衛團規則ハ同年十一月九日内部訓令ヲ以テ發布セラレタリ自衛團ハ地方ノ安寧ヲ保持スル爲必要アルトキ各面(村)ニ之ヲ置キ地方ノ良民ヲシテ警察憲兵又ハ軍隊ノ節制下ニ團體ヲ組織セシメ戸口調査ニ關スル事私藏武器收用ニ關スル事巡邏警戒ニ關スル事賊情ヲ偵察シテ之ヲ官憲ニ報告スルコト火燧又ハ掠奪ノ爲飢寒ニ瀕スル窮民ノ救恤ニ關スル事ヲ擔任シ其組織ニ關シテハ一ニ警察憲兵又ハ軍隊ノ指揮ヲ受ケシムルコトトシ以テ良匪ヲ分チ暴徒ノ鎮壓ニ資スルヲ目的トセリ事情不分明ナル韓國内地ニ於テ此ノ如キ良民ノ團結ハ多少我討伐隊ノ行動ヲ容易ナラシメタルヤ言ヲ俟タス

第三節 新聞紙及結社

(一) 新聞紙

新聞紙ト

京城内ニ於テ韓國人ノ發行スル韓字新聞ニ對シテハ舊警務顧問部ニ於テ原稿ヲ校閲シ事實無根ニ係ルモノ又ハ治安妨害ノ悞アリト認ムルモノハ其掲載ヲ禁シ禍害ヲ未萌ニ防止スルノ方法ヲ取レリ然レトモ此ノ如キハ畢竟臨機ノ處分タルニ過キサレヲ以テ別ニ新聞紙ニ關スル法規ヲ制定スルノ必要ヲ認メ光武十一年即チ明治四十年七月法律第五號ヲ以テ新聞紙法ヲ發布セリ

新聞紙法

新聞紙法ノ内容ハ(一)新聞紙ヲ發行セントスルモノハ觀察使又ハ警視總監ヲ經由シ内部大臣ニ請願シテ許可ヲ受クヘシ(二)發行人ハ請願書ニ添ヘテ保證金參百圓ヲ納付スヘシ但學術技藝或ハ物價報告ニ關スル事項ヲ記載スル新聞紙ハ此限ニ在ラス(三)内部大臣ハ新聞紙ノ記事安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スト認ムル時ハ其發賣頒布ヲ禁止シ之ヲ押收シ又發行ノ停止又ハ禁止ヲ命スルコトヲ得(三)罰則ハ役刑三年以下罰金三百圓以下トス

新聞紙法改正

明治四十一年ニ至リ外國人ノ韓國ニ於テ發行スル韓字新聞及外國ニ於テ發行シ韓國ニ輸入スル韓字新聞ノ發賣頒布ニ關シ取締ノ必要ヲ認メ新聞

紙法ヲ改正補修シタリ

(二) 結社

韓國人ノ政治的結社

政治運動ニ腐心スルハ韓國人、特ニ其上流者ノ痼癖ニシテ從來政治上ノ目的ヲ有スル結社甚タ少ナカラス一進會ノ如キ大韓自強會ノ如キ實ニ其翹楚タリ其他或ハ教育、或ハ宗教ヲ標榜スルモノニシテ隱然政治的結社ノ實ヲ具フルモノ少シトセス之ニ對シ從來我憲兵其他ニ於テ必要ノ注意ヲ怠ラサリシカ明治四十年七月京城事變ニ當リ此等結社團體ノ行動動モスレハ放漫ニ亘リ民心ヲ煽揚スルノ弊少カラサルヲ認メ同月二十九日法律第二號保安法ヲ發布シ必要ノ取締ヲ加フルニ至レリ

保安法

保安法ノ内容ハ(一)安寧秩序ヲ保持スル爲必要ト認ムル場合ニ内部大臣ハ結社ノ解散ヲ命スルコトヲ得(二)同上ノ場合ニ於テ警察官ハ集會又ハ多數ノ運動或ハ群集ヲ制限、禁止又ハ解散セシムルコトヲ得(三)以上二箇ノ場合ニ於テ警察官ハ戎器、爆發物其他危險物件ノ携帯ヲ禁止スルコトヲ得(四)内部大臣ハ政治ニ關シ不穩ノ動作ヲ行フノ虞アリト認ムル者ニ對シ其居住所ヨリ退去ヲ命シ且一箇年以内一定ノ地域ニ入ルヲ禁スルコトヲ得(五)警

結社ノ解散

察官ハ街路又ハ公開ノ箇所ニ文書圖畫ヲ揭示シ又ハ言語形容其他ノ作爲ヲ以テ安寧秩序ヲ紊亂スルノ虞アルヲ認ムル時ハ其禁止ヲ命スルコトヲ得、以上五項ノ場合ニ於テ命令ニ違反スル者ハ笞刑又ハ禁獄ニ處ス(六)政治ニ關シ不穩ノ言論動作ヲ爲シ又ハ他人ヲ教唆、煽動或ハ使用シ又ハ他人ノ行爲ニ干渉シ治安ヲ妨害スル者ハ笞刑、禁獄又ハ懲役ニ處スルニ在リ、同八月ニ至リ内部大臣ハ本法ニ依リ最危險ト認ムル數箇ノ結社團體ニ對シ其解散ヲ命シタリ

第九章 財政及金融

第一節 財務ノ機關

(一) 財政顧問

財政顧問
就職顧問 明治三十七年八月調印ノ協約ニ依リ日本政府カ韓國財政顧問トシテ推薦シタル大藏省主税局長日賀田種太郎ハ同十月十四日就職シ十五日韓國政府ト備聘契約ヲ締結シタリ此契約ニ依リ顧問ハ韓國政府ノ財政ヲ整理監査シ財政上諸般ノ設備ニ關シテ誠實ニ審議起案ノ任ニ當ルモノトシ且財政ノ事ニ關シテハ議政府會議ニ參與シ度支部大臣ヲ經テ財政ニ關スル意見ヲ議政府ニ提議シ財政事務ニ關シテ謁見ヲ乞ヒ上奏ヲ爲スコトヲ得ヘク又韓國政府ハ財政ニ關スル一切ノ事務ニ付顧問ノ同意ヲ經テ之ヲ施行シ議政府ノ議決及各部ノ事務ニシテ財政ニ關係アルモノハ其上奏前ニ顧問ノ同意加印ヲ要スルモノトス職守ノ範圍此ノ如ク廣大ナルヲ以テ顧問ハ多數ノ日本人ヲ顧問附トシテ韓國政府ニ備聘セシメ尙明治三十八年七

備聘契約

顧問本部
及地方支
部

月大邱、全州及平壤ニ顧問支部ヲ設置シタルヲ初トシテ漸次韓國內樞要ノ地ニ顧問支部又ハ分署、分廳ヲ置キテ地方ノ財務ヲ監督セシメ其配置漸ク洽キニ及ヒ更ニ四十年六月ヲ以テ京城、平壤、大邱、全州及元山ニ顧問監部ヲ置キ支部以下ヲ監督シテ地方財務監査ノ任ニ當ラシメタリ之ヨリ先キ四十年三月統監府財政監査廳官制ノ發布ノリ監査廳及顧問部カ事實ニ於テ一體トシテ韓國ノ財務ヲ掌理シタルハ別項既ニ述ヘタル所ノ如シ明治四十年新協約締結後、財政監査廳及財政顧問以下顧問部ノ各部局廢止セラレ財務關係ノ邦人ハ概ネ韓國政府ニ入りテ新官制ノ下ニ各其事務ニ分任スルコトトナリ他ノ各機關ト共ニ財務ノ機關モ亦此ニ一進シタリ

(二) 徵稅機關

顧問部
執行機關 財政顧問部ノ組織ハ漸ク遂フテ頗ル廣汎ニ亘リ顧問本部ノ外、五箇所ノ顧問監部、十三箇所ノ顧問支部及六十九箇所ノ分廳ヲ全國ニ配置シ隨ツテ財政顧問ノ外、四百十餘人ノ邦人附屬員ヲ聘用スルニ至レルモ顧問制度ノ性質上、財務ノ執行ヲ韓國政府ノ機關ニ待ツハ無論トス今韓國ニ於ケル財務ノ機關ヲ見ルニ其最高機關トシテ度支部アリ財務一切ノ事ヲ管掌シ其他

韓國政府
財政ノ紛

徵稅制度
ノ不備

管稅官
制

法制ノ明文ニ於テ頗ル備レリト雖素ヨリ制度徒ニ美ニ實行之ニ伴ハサル
 韓國ノ常弊ヲ脱セス宮中府中ノ財政雜然トシテ明確ノ區別ヲ缺キタル如キ
 豫算ノ編制及執行亂雜ヲ極メタル如キ各部局皆自己ノ收入ヲ以テ直ニ自
 己ノ支出ニ充テ財務ノ統一及振肅ニ慮ラザリシカ如キ歲計決算ノ制ナカ
 リシカ如キ其他舉ケ來レハ財務ノ紛亂殆ント云フヘカラサルモノアリ就
 中徵稅制度ノ不備ハ韓國ニ於ケル凡百惡政ノ源ヲ爲シ國力衰殘ノ因由主
 トシテ地方官吏ノ苛征暴斂ニ存スルヤ何人モ一點異議ナキ所トス蓋シ韓
 國ノ舊制ニ於テ郡守カ租稅ヲ徵收スルノ外宮内府又ハ中央官廳ノ派遣シ
 タル徵稅員等モ亦擅ニ徵收ヲ爲ス等殆ント一定ノ規律ナク郡守其他ハ之
 ヲ奇貨トシテ誅求ニ專ニ積弊風ヲ爲シテ牢乎拔クヘカラサルノ勢ヲ致セ
 リ乃チ先ツ徵稅ノ事務ヲ刷新スルハ財政整理ノ一大端緒ニシテ兼テ韓國
 施政改善ノ第一歩タルヘキモノナリ此ニ於テ財政顧問ハ徵稅機關ノ特設
 ヲ韓國政府ニ提議シ光武十年即チ明治三十九年勅令第五十四號ヲ以テ管
 稅官官制ヲ定メ度支部大臣ノ管轄ニ屬シテ稅務ヲ掌理セシムルコトトシ
 タリ謂ユル管稅官ハ稅務監、稅務官及稅務主事ヨリ成リ稅務監ハ當分各道

顧問
擴張

新官制
財務機關

觀察使ヲ以テ之ニ充テ當初ノ定員ハ稅務監十三人、稅務官三十六人、稅務主
 事百十八人ニシテ地方樞要ノ地ニ稅務官ヲ重ナル各府郡ニ稅務主事ヲ配
 置シタルカ明治四十年六月更ニ之ヲ擴張シテ稅務官ヲ五十人ニ稅務主事
 ナ三百七十人ニ増員シ其配置ヲ洽カラシメ之ト同時ニ顧問側ニ於テハ上
 述ノ如ク地方財政監部ヲ五箇所ニ設置シ後更ニ顧問支部分廳ヲ約三倍シ
 テ一層地方ノ財務ヲ特ニ稅務ノ監視ヲ密ナラシメタリ今四十年十月現在管
 稅官官署ノ數ヲ舉クレハ稅務監府十三箇所、稅務署、稅務官駐在所五十箇所、
 稅務分署(稅務主事駐在所)百八十一箇所ニ上リ又顧問部側ニ於テハ地方財
 政監部五箇所、支部十三箇所、分廳六十九箇所ヲ置ケリ此ニ於テ韓國ノ徵稅
 並其監督機關ハ較々全國ニ普及スルヲ得タリ

新協約後ノ官制改正ハ略々此制度ヲ踏襲シタルモノニ外ナラス即舊顧問
 部側ノ監部ヲ繼承シテ京城、平壤、大邱、全州及元山ニ財務監督局ヲ置キ内國
 稅務及地方ノ財務ヲ監督セシメ舊稅務署及同分署ヲ繼承シテ財務署ヲ置
 キ以テ内國稅務及地方財務執行ノ機關タラシメ財務官定員ヲ六十人、同主
 事定員ヲ五百二十人トシ財務署ノ數ハ舊稅務署ノ五十箇所、同分署ノ百八

十一箇所ヲ其儘繼承シテ二百三十一箇所トシタリ此改正ニ於テ舊制ノ稅務監ヲ全廢シ十三道觀察使ヲシテ名實トモニ全然稅務ニ關係ナキニ至ラシメタルハ最モ注意スヘキ點トス以上數次ノ改正ヲ經テ今ヤ韓國ノ徵稅機關ハ漸ク整備ニ近ツキ一方金庫制度ノ整備ト相俟ツテ彼ノ地方郡守ノ輩カ誅求ヲ擅ニシ中飽ヲ逞フスルノ弊殆ント根絶ニ近ケリ其當然ノ結果トシテ地方官吏ノ輩動モスレハ新制ヲ非トシ種々流言ヲ放チテ無智ノ人民ヲ煽動シ甚シキハ日本人官吏カ租稅ノ收入ヲ本國ニ送致スル如クニ誣ヒ以テ人民ノ納稅ヲ沮止セント試ミタルコトアリ爲ニ往々地方ノ民擾ヲ惹起シタルモ輒近ニ至リテ人民亦漸ク新制ノ眞事相ヲ解シタルカ如シ尙宮内府派出徵稅員ノ非行ハ往々民擾ノ一因ヲ爲シ且僻陬ノ人民ハ國稅ト宮内府賦課トノ區別ヲ解セス延テ稅務一般ニ對スル怨嗟ヲ招キシコトアルモ今ヤ財政整理ノ進行ニ伴ヒ宮内府賦課ノ如キモ自ラ減縮シ隨ツテ此等ノ虞モ亦漸次其少キヲ見ントス

法令周知ノ機關

法令ノ一般ニ周知セザレサルハ韓國ニ於ケル弊源ノ一ニシテ特ニ稅務ニ關スル人民ノ不平官吏ノ專橫ハ法令ノ周知セラレサルニ基因スルコト多

地方委員

シ是レ素ヨリ人文尙低キニ依ルト雖官民ノ間ニ意思疏通ノ機關ナキモ確ニ其一因タリ依テ韓國政府ハ明治四十年五月地方委員會規則ヲ制定シ稅務署所在地ニ地方委員會ヲ置キ相當ノ資産ヲ有シ民情ニ通スル者五名乃至十名ヲ委員トシテ專ラ地方ノ財務ニ關シテ官民ノ意思ヲ疏通シ法令ノ周知ヲ圖リ傍ラ政府ノ諮問ニ應スルノ機關タラシメタリ同年六月八日平壤地方委員會先ツ成リ同年十月迄ニ全國五十箇所ノ地方委員會盡ク成立セリ同會ノ委員ハ稅務監ノ推薦ニ依リ度支部大臣ノ依囑スル所ニシテ即チ官選ノ方法ヲ取ルモ韓國ニ於ケル此種諮問機關ノ濫賜トシテ稅務其他一般政務ニ關シ多少ノ裨補スル所アルカ如シ

(三) 稅 關

稅關ノ創

韓國ニ於ケル稅關ハ明治九年日本人ニ對スル徵稅ノ爲釜山ニ設置シタルヲ嚆矢トシ同十三年同一ノ目的ヲ以テ元山ニ開關シ同十六年獨リ日本人ノミナリス諸外國人ヨリ海關稅ヲ徵收スルニ及ヒ仁川ニ之ヲ設置シ鎮南浦及木浦ハ同三十年、群山、馬山及城津ハ同三十二年、新義州ハ同三十九年、清津ハ同四十一年ヨリ之ヲ設置シタリ而シテ各稅關ヲ管理スル爲京城ニ總

總稅務司

關稅下財
政顧問

關稅局

保稅倉庫

稅務司應シ置キ明治十六年獨逸國人、フオン、モルレンドルフヲ聘シテ總稅務司トシ海關稅ニ關スル一切ノ事務ヲ委囑シ其後總稅務司ノ交迭ヲ見ルコト三回ニシテ英國人、ブラウシ、在任中明治三十九年十一月二十九日ヲ以テ財政顧問目賀田種太郎ニ其事務ヲ引繼キ爾來其管理ニ歸ス同四十年日賀田顧問歸國スルニ及ヒ統監府參與官永濱盛三其事務ヲ署理シ明治四十年新協約後ニ於ケル官制ノ實施ニ伴ヒ同四十一年一月一日ヨリ總稅務司應ヲ廢シ更ニ關稅局ヲ京城ニ置キ度支部大臣ノ指揮監督ノ下ニ關稅總長ヲシテ關稅事務ヲ處理セシメ仁川、釜山、元山、鎮南浦ノ四港ニ稅關ヲ設置シ其他沿海各要港ニ同支署出張所及監視署等ヲ置キ海關稅ノ徵收及監視事務ヲ分掌セシムルコトトナレリ

外國貿易ノ擴張ヲ計リ且韓國ニ於テ最モ缺乏スル倉庫ノ便ヲ供與スル目的ヲ以テ明治三十九年三月京城ニ官設保稅市場ヲ其後京城、仁川、釜山、大邱、平壤及鎮南浦ニ官設保稅倉庫ヲ設備シ又同四十年九月京城博覽會開設前後同會場ヲ保稅倉庫ト見做シ出品物ニ對シテ保稅取扱ヲ爲セリ其後官設保稅市場ハ之ヲ廢止シタレトモ保稅倉庫及保稅制度ハ現ニ實行中ニシテ

貿易上利便少カラス

(四) 金 庫

國庫金取
扱契約

韓國古來金庫ノ制ナシ理財其當ヲ失シ私曲恣ニ行ハルルノ一因亦實ニ此ニ存ス乃チ明治三十八年一月三十一日株式會社第一銀行ト國庫金取扱ニ關スル契約ヲ締結シ第一銀行京城支店ヲ以テ中央金庫トシ其他ノ支店若クハ出張所ヲ支金庫トシ中央金庫ハ同年七月一日ヨリ仁川、釜山、群山、木浦、平壤、大邱、鎮南浦、元山、城津及開城ノ各支金庫ハ同八月十五日ヨリ事務ヲ開始シタリ次テ三十九年十月一日馬山及咸興ニ四十年七月一日鏡城ニ支金庫ヲ置キ尙株式會社十八銀行ノ羅州ニ其支店ヲ開設スルニ當リ第一銀行ハ同行ト協定シテ四十年一月一日ヨリ支金庫事務ヲ取扱ハシメタリ即チ中央金庫ノ外、支金庫ノ數ハ全國ヲ通シテ僅ニ十四箇所ニ過キスシテ其増設ヲ要スルヤ無論トス然レトモ從來銀行ノ設備ヲ缺ケル韓國ニ於テ汎ク適當ナル金庫事務取扱者ヲ得ンコト到底不可能ナルヲ以テ韓國政府ハ之ヨリ先キ其配置全國ニ普及セル我通信官署ニ金庫事務取扱ヲ委託スルニ決シ三十九年四月韓國度支部大臣ト我通信管理局長トノ間ニ大要左ノ如

通信官署
取扱
庫金

キ委託條項ヲ定メテ右ニ關スル契約ヲ締結シタリ

韓國國庫金出納委託要項抄略

韓國國庫ノ設置周カラスシテ納稅其他國庫金支撥ニ不便尠カラサルヲ以テ金庫未設地方ニ於ケル郵便局所ヲ金庫出張所トシテ大韓國國庫金ノ出納ヲ取扱ハシムルヲ利便ト認メ左ノ條項ニ依リ統監府通信管理局長ニ之ヲ委託ス

第一條 統監府通信管理局長ハ韓國國庫未設地方ニ於ケル統監府通信官署ヲ金庫出張所ニ指定シ韓國國庫金ノ出納保管ヲ取扱ハシムヘシ
第二條 韓國政府ハ統監府通信官署ヲシテ韓國國庫金ノ出納保管ヲ取扱ハシムル爲其取扱料トシテ一定ノ金額ヲ統監府通信管理局ニ支拂フヘシ

第三條 韓國國庫金ノ取扱上必要ナル土地建物ハ韓國政府ヨリ無償ニテ之ヲ統監府通信官署ニ供給スヘシ(下略)

第五條 韓國國庫金ノ取扱ヨリ生スル損害ニ關シテハ取扱者ノ故意又ハ甚シキ懈怠ニ起因スル場合ノ外統監府通信官署ハ其責ニ任セス

以下略

取扱手數

前記第二條取扱料ハ一箇年金二十五萬圓ト協定セラレ三十九年度ニ於テハ創業費金五萬圓維持費一箇月ニ付金二萬八百二十五圓ヲ取扱開始當月分ヨリ支拂ヲ受クルコトトシ同年十月一日先ツ三十五箇所ノ通信官署ニ於テ國庫金取扱事務ヲ開始セリ同十二月一日ニ至リ更ニ百二十四箇所ヲ加ヘ合計百五十九箇所トナル爾後金庫設備ノ増加ニ伴ヒテ漸次減少シ明治四十年末即チ同四十一年三月末日ニ於テハ百四十九箇所トナレリ

農工銀行
ノ金庫
事務
取扱

韓國各地農工銀行ノ發達ニ伴ヒ第一銀行ハ之ト金庫事務代理約定ヲ締結シ擔保ヲ徵シ取扱手數料ヲ交付シテ國庫金ヲ取扱ハシムルコトトシタリ其所在地ハ春川、忠州、公州、光州、濟州島、寧邊、全州、晉州及黃州ノ九箇所ニシテ春川、忠州及公州ハ漢湖農工銀行ノ支店、濟州島ハ光州農工銀行ノ支店、寧邊ハ平壤農工銀行ノ支店、他ハ各所在地ノ農工銀行本店之ニ當リ明治四十一年三月一日ヨリ事務ヲ開始セリ以上第一銀行總支店支店出張所、十八銀行支店、農工銀行本支店ヲ合シテ金庫ノ數二十四箇所之ニ加フルニ通信官署國庫金取扱所百四十九箇所ヲ以テシテ國庫金取扱所ノ總數百七十三箇所

金庫ノ
及

ニ上リ其配置略々遺憾ナク今ヤ國庫ニ於ケル現金出納事務ハ全然官廳ト分離スルヲ得タリ

(五) 會計検査局

韓國舊來ノ制度ニ於テハ豫算アレトモ決算ナク隨ツテ検査監督ノ方法ヲ缺ケリ依テ豫算ノ編成及執行ヲ嚴重ニシ會計諸法規ノ勵行ヲ計リ其成績漸ク見ルヘキモノアラントスルニ及ヒ更ニ進ンテ會計検査ノ機關ヲ設ケ検査規程ヲ制定セリ光武十年即チ明治三十九年四月勅令第二十號ヲ以テ度支部官制ヲ改正シ度支部ニ検査局ヲ置キ總決算ノ検査ニ關スル事項其他一般検査事務ヲ掌ラシム同五月検査事務見習ノ爲參書官二名ヲ日本會計検査院ニ派遣スル等諸般ノ準備ニ著手シ同年ヨリ検査ノ執行ヲ開始セシメタリ山來會計法規ノ何タルヲ解セサル韓國官吏ナレハ其初ニ於テハ非違紛出ノ状態ナリシモ爾後漸ク以テ改善ノ徵ヲ示シ不當支出ノ減少濫費ノ防止等其効果顯著ナルモノアリ明治四十年末官制改正ノ際從來ノ検査局ヲ廢シテ度支部大臣管理ノ下ニ會計検査局ヲ特設スルニ至リ其組織亦漸ク完カラントス

會計検査局

會計検査局

第二節 歲計

(一) 整理以前ノ財政狀態

整理以前韓國政府ニハ殆ント財政ナク豫算ナカリシト言フヲ得ヘシ官制ニ於テハ度支部ノ設アリ又毎年豫算ヲ以テ歲計ヲ公示セリト雖畢竟形式ニ止マルノミ各官廳ハ任意ニ出給命令ヲ發シテ其支出ヲ度支部ニ強要シ或ハ自ラ收入シ自ラ支出シテ別ニ一ノ資金ヲ有シ國庫ハ其收支ノ正數ヲ知ラス特ニ宮内府ノ如キハ各道ニ徵稅官ヲ派遣シテ各種ノ租稅ヲ徵收シ隱然國庫ト對立スルノミナラス進ンテ國庫ノ畛域ヲ侵犯スルコト亦少カラス豫算ニ至リテハ只名ノミニシテ年度開始後四五箇月ヲ經過シテ始メテ之ヲ編成發表スルカ如キ計數ノ基礎タル異種ノ貨幣ヲ混同計上スルカ如キ實ニ豫算ナキト一般ナリ若シ夫レ上下官吏ノ私曲ニ至リテハ殆ント習性ナシ敢行シテ更ニ怪ムモノナク國庫金ノ多額ハ徒ニ官吏ノ濫費ニ任セ其結果歲入歲出ノ正數ハ力メテ之カ明示ヲ避ケ證據タルヘキ書類ハ隱蔽シテ官廳ニ保存スルモノ甚稀ナリ即チ財政ナク豫算ナシト云フモ敢

無財政狀態

テ誇張ニアラサルナリ

四歳入ノ基

韓國ノ歳入ハ結稅即チ地稅其大部分ヲ占メ戶稅之ニ次キ其他ハ殆ント云

地稅

フニ足ラス地稅ハ土地ノ正供ニシテ田畑ニ限り結トテ劃定シ定率ニ依リ

戶稅

テ之ヲ賦課ス是レ結稅ノ稱アル所以ナリ現在結數ノ基本ハ三百餘年前ノ

戶稅

調査ニ係リ當時總結數百四十五萬五千餘結ニ上リシカ今ヤ全國ノ結數百

戶稅

萬ニ充タズ隱結ト稱シ課稅ヲ免ルルノ土地其幾何ナルヲ知ラサルナリ戶

戶稅

稅ハ地方在郡ノ一戶ヲ構フルモノニ賦課スル租稅ニシテ是レ亦隱漏戶ノ

戶稅

多數ナルヤ知ルヘシ蓋シ戶籍制度ナキ現狀ニ於テ吏胥ノ私ヲ制センコト

戶稅

到底之ヲ期スヘカラス其他ノ雜稅ニ至リテハ獨リ其收入ノ多カラサルノ

戶稅

ミナジス或ハ宮内府ニ移シ或ハ度支部ニ復歸シ權勢ノ消長ニ隨ツテ轉々

戶稅

其所屬ヲ異ニスル等收入制度ノ亂雜言語ニ絶ス而シテ官吏ノ誅求ハ上ニ

戶稅

記スル所ノ如ク國家ノ收入制度ハ主トシテ官吏ノ私慾ヲ充タスノ手段ト

戶稅

シテ運行セラレルノ觀ヲ呈セリ之ヲ要スルニ韓國國庫ノ收入ハ決シテ國

戶稅

民負擔ノ總額ニアラス又之ヨリ普通ノ徵稅費ヲ控除シタル殘額ニアラス

戶稅

實ニ國民負擔ノ一小部分ニ過キサルナリ國庫匱乏シ人民益々窮苦ニ陥ル

其以ナキニアラスト云フヘシ

支出ノ放

漫ノ放漫不整理モ亦實ニ太シキモノアリ從來法文上會計法ノ嚴存アリ

支出ノ放

ト雖各部大臣其他出給命令官ノ眼中果シテ豫算アリヤ又會計法規ノ存ス

支出ノ放

ルアリヤハ頗ル疑フヘシ出給命令ノ權ヲ有セサルモノ若クハ直接出納ノ

支出ノ放

衝ニ在ル官吏亦妄ニ支出スル如キモ敢テ少シトセス而シテ官吏一般ノ風

支出ノ放

習ハ競フテ自家權勢ノ下ニ新施設ヲ頻繁ナラシメ不急ノ工事ヲ起シ不要

支出ノ放

ノ物品ヲ購ヒ其都度工事請負者若クハ物品供給者ト結託シテ私利ヲ營ム

支出ノ放

ヲ唯一ノ目的トシ一方ニ於テハ宮中府中ノ別明ナラサル爲宮内府ハ國庫

支出ノ放

ノ事情ニ頓著ナク屢過重巨額ノ支出ヲ強ヒ然モ事苟モ宮中ニ關スル限リ

支出ノ放

政府當局者ハ自家ノ權勢消長ニ直接ノ關係アルヲ以テ如何ナル要求モ之

支出ノ放

ヲ拒否スル能ハス其他各般歳出ノ不整理放漫ハ陳々相依リテ一々之ヲ舉

支出ノ放

示スルニ堪エサル状態ニ在リ我財政顧問ハ就職ノ初ヨリ支出ニ伴フ弊害

支出ノ放

ヲ防止スル一手段トシテ財政顧問部ノ證印アル出給命令ノ外一切之ヲ支

支出ノ放

拂ハサルコトトシ一方ニ於テハ豫算ノ編成及執行ノ督勵會計諸法規ノ勵

支出ノ放

行等ニ依リテ漸次之ヲ匡正センコトヲ期シタリ

(二) 會計法規ノ整備及施行

會計法規 韓國ニ於テ從來全ク會計ニ關スル法規ナカリシニ非ス開國五百四年即チ明治二十八年法律第二號會計法、同年勅令第七十一號收入條規、同第七十二號支出條規ハ以テ根本規定ヲ爲スモノト云フヘク其他各種ノ附屬法規アリテ何レモ略々我會計法規ト其規定ヲ同フシ一見頗ル整備セルカ如シト雖畢竟形ヲ法規類編ニ止ムルノミ當局者ニ於テモ其存在スラ知ラサルモ稀ナリトセス苟クモ此等現存ノ法規ヲ完全ニ施行セハ決シテ夫ノ如キ財政狀態ヲ來ササリシナルヘク又當局者モ從來ノ誅求ヲ敢行スルヲ得サリシナルヘシ顧問部ニ於テハ則チ先ツ舊法規ノ適用スヘキモノハ之カ勵行ヲ力メ且各種ノ補修規程ヲ定メ以テ會計ノ法規ヲ整へ整理ノ要旨ヲ確定シ且當局者ノ遵由スヘキ要目ヲ明示セリ其主要ナルモノヲ舉レハ

歳入歳出處理順序 一、歳入歳出處理順序ヲ定メ所屬年度出納機關、出納及整理ノ方法、監督作用等ヲ明確ニシ以テ從來ノ不法徵求、各箇任意ノ收支ヲ禁遏シ又從來支出上ノ最大弊害タル外割制度(外割トハ郡守カ徵收シタル税金ヲ國庫ニ納付スルニ先チ直接第三者ニ給付ヲ爲ス度支部大臣ノ命令ナリ)ヲ根絶シ以テ徵收ノ統一ヲ期スルト同時ニ支出ノ節制ヲ計リ

會計法規補修 會計法規ニ於テハ則チ先ツ舊法規ノ適用スヘキモノハ之カ勵行ヲ力メ且各種ノ補修規程ヲ定メ以テ會計ノ法規ヲ整へ整理ノ要旨ヲ確定シ且當局者ノ遵由スヘキ要目ヲ明示セリ其主要ナルモノヲ舉レハ

金庫事務處理順序

一、金庫事務處理順序ヲ定メ歳出入ノ直接機關タル金庫事務ヲ第一銀行ニ委託シ以テ中央地方ノ金庫事務ヲ處理セシメ各郡守ヨリ度支部ニ直接送付ノ煩ト其弊トヲ避ケシメ

賦價支給規程

一、賦價支給規程ヲ定メ金庫ノ税金運搬費額ヲ統一シ以テ從來各郡守ニ於テ實費ノ所要ナキニ拘ラス豫メ徵税金額ノ幾部ヲ控除シ私服シタルノ弊ヲ防キ

物品會計規程

一、物品會計規程ヲ制定シ政府所屬物品ノ範圍ヲ明ニシ其整理ヲ期シ以テ從來官私ノ區分ヲ混同シ私利ヲ逞フスルノ弊風ヲ矯メ

競争入札

一、政府ノ工事及物品ノ賣買貸借ニ關スル規定ヲ設ケ凡テ政府ノ工事及物品ノ賣買貸借ハ競争ニ附スルヲ本則トシ請負人ノ資格ヲ制限シ契約ヲ嚴明ニシ保證金制度ヲ設ケ以テ從來工事若クハ物品ノ賣買貸借上ノ奸曲ヲ匡シ

現金前後手續

一、現金先授順序ヲ規定シ應費、修繕費、雜給、雜費ノ中、細微ノ費目ニ限り豫算内ニ於テ一ヶ月ノ所要金額ヲ豫定シ現金前渡ノ途ヲ拓キ以テ行政現在ノ情況ニ應シ機宜ニ適セシムルヲ圖リ

會計官更
戒勵

其他時ニ各部會計官吏ヲ召集訓戒シテ其廉潔心ヲ涵養スルト同時ニ事務執行ノ方法ヲ懇示シ一方觀察使ニ對シテハ其歲入事務處理應且ツハ出給命令官トシテノ財政上ノ注意ヲ與ヘ郡守ニ對シテハ其歲入徵收官トシ又收入官吏トシテノ財政上ノ注意ヲ訓示シ以テ專ラ歲入歲出處理順序ノ圓滿ナル施行ヲ期シ地方人民ニ對シテハ納入告知書ヲ用キス又ハ郡守府尹等ノ外收入官吏タル資格ナキ者ニシテ納稅ヲ命スルモ決シテ納付スルニ及ハス若シ又納付スルモ當然無効タルヘキヲ一般ニ公示シ以テ不法徵稅ノ弊ヲ豫防スルニ努ムル等此等各般ノ施設ハ明治三十八年夏秋ノ交マテニ畧々一段落ヲ劃シタリ

特別會計

爾後財政機關ノ擴張特ニ徵稅機關並金庫ノ設備進捗スルニ隨ヒ此等ノ法規モ亦隨時修正補足セラレ三十八年末乃至三十九年ニ亘リテ特別會計ノ制ヲ適用シ又出納官吏身元保證國有財產管理等ニ關スル規程ヲ設ケタリ而シテ會計検査ノ機關並検査規程ヲ定メ決算監督ノ途ヲ啓キタルハ既ニ記シタル所ノ如シ此等ノ結果トシテ不當支出ノ減少、不急事業起工及

不要物件購入ノ減少、物品會計ノ整理等ニ於テ其績大ニ見ル可キモノアリ豫算ノ執行ハ比較的嚴密トナリ款項ノ流用、豫算外支出等モ亦隨ツテ減少ニ傾キ光武九年度即チ明治三十八年豫算執行ノ開始後各部ノ當局者モ漸次豫算範圍内ニ於テ行動スルノ外ナキコトヲ認識スルニ至リ爾後年ヲ逐フテ會計法規ノ體用トモニ漸ク完キヲ得ントシ明治四十年ノ官制改正後ニ於ケル日本人官吏ノ採用ニ伴ヒテ韓國各官廳ノ會計事務ハ更ニ面目ヲ改ムルニ至レリ

(三) 光武十年度(明治三十九年)豫算

財政顧問干與ノ下ニ編成セラレタル韓國政府ノ豫算ハ光武九年度即チ明治三十八年ニ始マルト雖當時財政ノ狀況尙頗ル混沌タルヲ免レス豫算編成上準據シタル計數ノ基礎モ亦甚タ漠然タルヲ以テ光武十年度即チ明治三十九年以降ノ豫算ニ就テ韓國歲計ノ趨向ヲ見ントス因ニ韓國政府ノ會計年度ハ曆年ニ同シ即チ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス

光武十年度即チ明治三十九年豫算ヲ前年度ニ對照スレハ左ノ如シ(△印減)

年次	歳入	歳出		
		經常部	臨時部	合計
光武十年度	七四八四七四四	六三二四三三八	一六四三、〇五〇	七九六七三八
同九年度	七四八〇二八七	七二二三八二二	二四三三、〇二二	九五五六八三三
比較増	四四五七	七九九四七四	七八九九七二	一五八九四四五

歳入ノ基

歳入ノ基因ハ前年度ト大差ナク光武九年即チ明治三十八年勅令第五十號ニ依ル印紙收入ノ新ニ計上セラレタルト通信機關ノ管理ヲ日本ニ委託シタル結果郵便電信及電話ノ收入ヲ削除シタル等ニ過キス次ニ歳出ハ略々前年ノ例ヲ踏襲シテ冗費ヲ省キ一方施政ノ改善ニ必要ナル俸給廳費雜費等ヲ増加シ尙皇室費ヲ増加シタリ即チ前年度ノ皇室費豫算ハ七十二萬餘圓ニ過キサリシモ從來皇室ニ於テ臨時支出ノ要アルトキハ直ニ之ヲ國庫ニ徵求シ其額年々頗ル鉅多ニシテ國庫ニ不時ノ變調ヲ生スル一起因タリシヲ以テ新ニ五十餘萬圓ヲ増額シ毎年百三十萬圓ヲ皇室費ノ既定豫算額トナセリ但シ皇室費中ニ包含セル重建費即チ慶運宮内ノ皇宮再建費十萬圓ハ工事ノ終了ト共ニ當然削減セラルヘキモノトス

歳入成績

同年度ノ歳入成績ハ光武十一年即チ明治四十年六月末日ノ現計ニ於テ左ノ如シ但シ豫算額ハ年度内起業資金ヲ繰入レ更訂シタル額ニ依ル

光武十年度歳入成績 (光武十一年六月末日)

款	項	豫算額	收入済額	收入未済額 (△印紙收入超過)
租 稅	地 稅	六四二二七四四	六四九六八六三	七四、一九
	戶 賭 稅	五二〇八二二八	三八三〇二九六	一三七七九三二
	漁 船 稅	二三四、〇九六	二二八六六一	一五四三五
	驛 稅	一〇五〇〇〇	二七七	一〇四七二三
	漁 船 稅	一三、〇三〇	九三五五	三六七五
	船 稅	一一三九〇	四、一五六	八、二三四
	港 稅	八五〇、〇〇〇	二、四三四、一八	一、五八四、一八
	印 紙 收 入	三〇、〇〇〇	四四、八四三	一四、八四三
	官 業 收 入	七四〇〇〇	一一、四八〇	六一、五二〇
	印 刷 局 收 入	七〇〇〇〇	九四八一	六〇、五一九
官 報 收 入	四〇〇〇	二、九九九	一、〇〇一	
雜 收 入	六〇〇〇	二、四、一三二	二〇、八一三二	
財政及金融			一七一	

財政及金融

一七二

既往年度未納稅收入	既往年度未納稅收入	九五二〇〇〇	三一九五、〇四一	二二四三、〇四一
翌年度租稅收入	翌年度租稅收入	—	一六六、六七六	一六六、六七六
起業資	起業資	一三九一、八四九	一二八三、一〇〇	一〇八七、四九九
火耕稅	火耕稅	—	一、六八四	一、六八四
計	計	八八七、六五九三	一一四、四八八	二五三八、二二五

同年度ノ歲出現計ハ隆熙元年即チ明治四十年末ニ於テ八百六十五萬千六百五圓ヲ示セリ其内譯ハ略ス

(四) 隆熙元年度明治四十年豫算

隆熙元年度即チ明治四十年豫算ハ其編成ニ當リ款項ヲ増加シ各種繼續費ノ年割額ヲ定メ各特別會計收支豫算ヲ別ニ編成スル等豫算ノ形式漸ク複雜ヲ加ヘタリ今同年度豫算ヲ前年度ニ對照スレハ左ノ如シ

年次	歲		入		出	
	經常部	臨時部	計	經常部	臨時部	計
隆熙元年度	九五六、五〇三	三六二、四二三	一三二、八九、三三六	九二、四、三九〇	四七、四八、六四五	一三、九六三、〇三五
同十年	七四八、四七四	—	七四八、四七四	六三、四、三三八	一六、四三、〇五〇	七九、六七、三八八
比較増	二〇八、〇三九	三六二、四二三	五七〇、四九二	二八、九〇、〇五二	三、一〇五、五九五	五、九九五、六四七

豫算形式ノ複雜

歳入ノ増

(備考) 光武十年度ハ當初ノ豫算額ニ依ル

歳入増減ノ主ナル事項ハ經常部ニ於テ隱結隱戸ヲ陞摠スル結果、地稅及戶稅ノ收入ヲ増加シ、鑛稅ヲ創設シ又港稅ハ從來其收入總額ヨリ海關經費其他特別會計ニ屬スル諸經費ヲ引去リ即チ總收入ノ一部ヲ豫算ニ計上シタルヲ改メ本年度ヨリ收入總額ヲ計上スルコトトシ其他印紙收入、既往年度租稅收入等ニ於テモ多少ノ増加ヲ見込ミ又臨時部ニ於テハ始メテ起業資金及海關工事基金繰入三百六十二萬四千餘圓ヲ歳入經常部ヨリ區分シ歳入臨時部ニ計上シタルコト等是ナリ

歳出増加ノ事由

歳出増加ノ重ナル事項ハ經常部ニ於テ一般官吏傭人ノ俸給ヲ増加シ行政整理ニ伴ヘル各廳廳費及旅費ヲ増加シタル等ノ外、左記各般ノ事由ニ依ル

所管	前年度比較増	同	上	事由
皇室費	九〇〇〇	—	—	—
老所	二一八八	—	—	—
議政府	二五五二三	外事局ノ増設	—	—
内政部	三三五二七〇	地方警務擴張費三一三、四六一圓並地方制度改正ニ伴ヘル増額	—	—

財政及金融

一七三

度	支	部	前年度比較増	同	上	事	由
度	支	部	二二、二五七	同	上	事	由
農	工	部	一〇〇、〇七七	同	上	事	由
學	部	部	一三、九一一	同	上	事	由
法	部	部	二四、七六二	同	上	事	由
農	工	部	二四、七六二	同	上	事	由

管稅官創設二四一、一八〇圓、國庫金出納事務委託二五〇、〇〇〇圓、起業資金債利子六五〇、〇〇〇圓、貸整理資金借越金利息三〇〇、〇〇〇圓、並ニ面交付金、京釜鐵道會社立替金償還、鐵道線路買収代金支拂等
地方裁判事務ノ擴張
學制ノ改革、外國留學生派遣
鑛山事務局、移民事務局、園藝模範場、農林學校、工業傳習所、觀測所、勸業博物館、度量衡製造檢定所等ノ創設

之ト同時ニ外部及通信院所管經費ノ皆減、中樞院所管經費ノ減少アリト雖、結局前表ノ如ク前年度ニ比シ二百八十九萬五十二圓ヲ増加シ又歲出臨時部ニ於テハ結局三百十萬五千五百九十五圓ヲ増加セリ今所管別ニ依リ臨時部歲出増加ノ事由ヲ舉クレハ左ノ如シ

所	管	前年度比較増	同	上	事	由	
議	政	府	七七、九五三	同	上	事	由
度	支	部	八三、六七八	同	上	事	由
法	部	部	一八〇、七四六	同	上	事	由
法	部	部	七八、〇〇〇	同	上	事	由

不動産法調査會創設
臨時治道費四五〇、〇〇〇圓、警務整理費三四〇、二二八圓、地方土木費、衛生費等補助
海關工事費一、二九八、三六五圓、水道工事費一、二〇三、六八四圓、大韓醫院建設費二八四、七九圓、財務整理費一、四、一七六圓ノ増加ニ對シ鑛業調査費五萬六千餘圓、歲入不足補填所要額百五萬圓ノ減少アリ差引純増加額
裁判所建築

學	部	前年度比較増	同	上	事	由	
農	工	部	一八〇、三二一	同	上	事	由
農	工	部	二二八、一九〇	同	上	事	由

臨時學事擴張二五五、〇一五圓、地方教育費補助一、二〇〇圓ノ増加ニ對シ語學校増築費、農業試驗所費ノ減少アリ差引純増加額
鑛床地質調査所三四、〇一三圓、農事試驗場二、八六五圓、造林費五六、二四圓、工業傳習所建設費五〇、四〇〇圓ノ増加ニ對シ棉花栽培費ノ減少アリ差引純増加額

以上ノ内臨時治道費、水道工事費、海關工事費、大韓病院建設費裁判所建築費、臨時學事擴張費、工業傳習所建設費ハ前年度以來ノ既定繼續費ニシテ其總額九百八十萬六千九百十八圓ノ内、隆熙元年度年割額三百六十二萬四千二百三十三圓トス又隆熙元年度ヨリ設定シタル特別會計ハ度支部所管印刷局、農商工部所管度量衡製造檢定所、同棉花栽培費、度支部所管煉瓦製造所ノ四ナリ

歲入成績
同年度ノ歲入成績ハ隆熙元年即チ明治四十年十二月末日ニ於テ左ノ如シ
隆熙元年度歲入歲出成績 (隆熙元年十二月末日)

科	款	項	目	豫	算	額	收	入	濟	額	收	入	未	濟	額
租	稅	常	部	八、一八一、六五三	八、四〇四、一四八	二、三二四、九五									
財政及金融															



臨時部	財政及金融											
	地稅	戶稅	驛稅	水產稅	鹽稅	船稅	港稅	鑛稅	印紙收入	官業收入	雜收入	計
地稅	五八六六一〇九											
戶稅		二六九四〇四										
驛稅			一〇五〇〇〇									
水產稅				五二二〇								
鹽稅					一三五四〇							
船稅						一二三九〇						
港稅							一八七〇〇〇〇					
鑛稅								四〇〇〇〇				
印紙收入									一五八〇〇〇			
官業收入										一三四五〇		
雜收入											九四五〇	
計	九五六五、〇三	一二〇〇〇〇	一二〇〇〇〇	一〇八、一七六	一六五、九三四	一〇七、五九二	二六、一六八	七、四二五	四、五八一	二、八四四	一〇八、一七六	一〇三、四〇六
既往年度租稅收入	五、六三九、九六三	三、一七、七三七		四、八一八	六、六二六	六、九七四	二、四〇二、八六三	一〇七、五九二	四、五八一	二、八四四	一〇八、一七六	一〇三、四〇六
既往年度租稅收入	二、二七、二四七	四、八、三三三	一〇五、〇〇〇	三、九二	六、九一四	五、四一六	五、三二、八六三	一、三、八三二	五〇、四〇八	六〇、二五	四、八六九	七、七、八二八

起業資金繰入 起業資金繰入
 海關工事基金繰入 海關工事基金繰入
 計 計
 一三、一八、九三三六 一三、一八、九三三六
 三、三三、〇〇〇 三、三三、〇〇〇
 三〇、一、三三三 三〇、一、三三三
 九九七、二二三 九九七、二二三
 一二、九八、三六五 一二、九八、三六五
 一〇七、三、〇六〇 一〇七、三、〇六〇

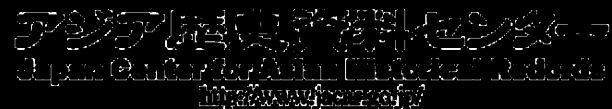
同年度ノ歳出現計ハ隆熙元年十二月末日ニ於テ經常部七百六十五萬七千一百六十九圓臨時部六百六十七萬七千九百五十九圓合計一千四百三十三萬五千一百二十八圓ニシテ之ヲ年度内更訂豫算額ニ比スレハ支出未済額三百五十六萬一千五百十四圓ナリ其内譯ハ略ス

(五) 隆熙二年度(明治四十一年)豫算

隆熙二年度即チ明治四十一年豫算ハ新協約ノ實施ニ伴ヒ著シク歳出入ノ額ヲ増加セリ今年度總豫算歳出入ヲ前年度ニ對照スレハ左ノ如シ

年次	入				出			
	經常部	臨時部	計	經常部	臨時部	計	比較増	
隆熙二年度	一一、四二、四〇〇八	八、八六、二七二四	二〇、二八、六七三二	一三、五九、九〇三一	六、六九、七〇四二	二〇、二九、六〇七三	一、八五、八九〇五	
同元年度	九、五六、五、〇三	三、六二、四二、三三	一三、一八、九三三六	九、二一、四三、九〇	四、七四、八六四五	一三、九六、三〇三五	一、八五、八九〇五	
比較増	一、八五、八九〇五	五、二三、八四九一	七、〇九、七三九六	四、三八、四六四一	一、九四、八三九七	六、三三、三〇三八		

新協約ノ豫算



歳入増加ノ重ナル事由ハ經常部ニ在リテハ租税ニ於テ舊來名義ノミニ止
 マリシ驛賭税收入ノ計上ヲ廢止シタリト雖、地稅、戶稅、關稅ヲ始メ其他各稅
 ノ收入ヲ増加シ印紙收入、官業收入、雜收入ニ於テモ一般ニ增收ヲ見込ミ又
 臨時部ニ在リテハ日本政府ヨリノ借入金收入ノ外、始メテ官殿營造基金及
 金融資金ヲ繰入レタルニ依ル今歳入ノ内譯ヲ示シ併セテ之ヲ前年度ニ對
 照スレハ左ノ如シ

經 常 部	隆 熙 二 年 度		隆 熙 元 年 度		比 較 增 加 (△印)
	租 稅	計	租 稅	計	
地 稅	一〇三、四〇六	四	八一、八一六	五三	二一、五八九
戶 稅	六四、六八九	〇	五八、六六一	〇九	六〇、三七八一
驛 賭 稅	五〇、三九四	七	二六、九四〇	四	二三、四五四
關 稅	二二、七九一	八三	一〇、五〇〇	〇	一〇、五〇〇
鹽 水 產 稅	六五、二四八		一、八七〇	〇〇	四七、四四三
水 產 稅	一〇〇、〇〇〇		五、二一〇		九四、七九〇
鹽 稅	一〇二、〇〇〇		一三五、四〇〇		八八、四六〇

臨 時 部	隆 熙 二 年 度		隆 熙 元 年 度		比 較 增 加 (△印)
	租 稅	計	租 稅	計	
船 稅	一五、〇〇〇		一、二三九	〇	一三、七六一
鑛 稅	八、〇七二		四、〇〇〇		四、〇七二
庖 肆 稅	二二、一六四				二二、一六四
典 當 舖 稅	一、一〇〇				一、一〇〇
既 往 年 度 未 納 稅 收 入	七〇〇、〇〇〇				七〇〇、〇〇〇
印 紙 收 入	一九五、〇〇〇		一五八、〇〇〇		三七、〇〇〇
官 業 收 入	一一八、五六〇		一三、四五〇		一〇五、一一〇
醫 院 收 入	五二、〇五四		九、四五〇		四二、六〇四
官 報 收 入	五、九四六		四、〇〇〇		一、九四六
度 量 衡 事 業 收 入	三五、五六〇				三五、五六〇
鑛 業 收 入	二五、〇〇〇				二五、〇〇〇
雜 收 入	七六、九八四		一、二〇〇		七五、七八四
既 往 年 度 租 稅 收 入	一一、四二四	〇〇八	九、五六五	一〇三	一、八五八
計	三六〇、三三四		三六二、四二三	△	二、〇八九

財政及金融

借入金	借入金		合計
	借入金	入金	
宮殿營造基金繰入	一七二、七〇〇		一七二、七〇〇
海關工事基金繰入	一四一、〇〇九		一四一、〇〇九
起業資金繰入	一七三〇、一九八		一七三〇、一九八
金融資金繰入	二九一、二五五		二九一、二五五
借入金	五二五九、五八〇		五二五九、五八〇
入金	八八六、二七四	三六二、四二二	一二四八、六九六
合計	二〇二八、六七三	一三、一八九三、三六	七〇九七、三九六

(備考) 經常部既往年度未納稅收入ハ前年度ニ於テ款トシ本年度ニ於テ項トスルニ依リ各別ニ之ヲ掲ク其他款項ノ別ヲ改メタル結果直ニ比較ス可カラサルモノ例ハ稅關雜收入ハ本年度ヨリ始メテ雜收入款ノ項トシテ計上シ前年度ニ於テハ港稅ニ包含スル如キアリト雖今必スシモ之ヲ正サス

臨時部ニ於テ起業資金繰入及海關工事基金繰入ハ前年度ニ於テ款トシ本年度ニ於テハ繰入金款ノ項トシタルモ前年度分ヲ相當欄ニ記入ス又本年度ニ於テ始メテ宮殿營造資金繰入及金融資金繰入ヲ見ルハ資金會計ノ方法ヲ改メタル結果ナリ

歳出増加ノ事由

歳出増加ノ重ナル事由ハ改正官制ノ實施其他ニ依リ經常部ニ於テ俸給、廳費、旅費等ノ一般ニ増加シタル外、各般施政改善ノ進行ニ伴ヒ經費ヲ要スルコト自カラ多ク臨時部ニ於テモ廳舎ノ新營其他ニ巨額ノ支出ヲ必要トシ約言スレハ新協約實施ノ結果トシテ韓國政府ノ歲計ハ急ニ膨脹ヲ見ルニ至レルモノトス今歳出ノ所管別ヲ示シ併セテ前年度ニ對スル増減ノ事由ヲ舉クレハ左ノ如シ

經部	常部		同上
	隆熙二年度	前年度比較増	
皇室費	一五〇〇、〇〇〇	一六一〇、〇〇〇	新協約ノ結果ニ依ル中央及地方各官廳經營ノ一般的増加其重ナルハ内部本廳一三、五六六圓、警視廳及地方警察署費五八二、〇三二圓、地方各郡費一九五、五八九圓、地方各道費一、二二、三九〇圓等
内務部	三五二、八六七	一、一六〇、六一三	國庫豫備金七〇〇、〇〇〇圓、國債費六一四、八九二圓、會計檢査院創設一八、八一八圓其他新協約ノ結果ニヨル増加アリト雖度支部本廳及內國稅徵收費、著老所、表動院、中樞院、關稅費等ニ於テ減少シ差引純増加額
度支部	六二五、二八四	一〇八三、九九四	軍部本廳各隊トモ組織縮少ノ結果ニヨル減少
軍部	三四、一九八	一、〇〇六、五八四	新協約ノ結果ニヨル増加
法部	一、一六八、二五二	九八一、七七九	新協約ノ結果並教育制度擴張ニヨル増加
學部	二九八、七三五	九〇〇、九八	新協約ノ結果並各所屬官廳擴張ニヨル増加
農工商部	五三五、五四六	一三四、八五五	

財政及金融

計	臨時部	
	計	部
一三五九九〇三一	三四〇五七五五	
皇室費	四六四〇一	
内務部	四六四六三	治道費、水道費既定年割額ノ減少其他臨時費ヲ要スルコト少キニヨル
支度部	五〇二八五〇	營繕費一、九二五、〇九四圓、海關工事費既定年割額増加一、七二六圓其他ノ増加ニ對シ其他各項ノ減少アリ差引純増加額
軍部	八二一五	皆減
學部	一五四二一五	教育補助費增加六一、六六七圓アリト雖其他臨時費ヲ要スルコト少キニヨル
農工商部	一四六四六三	勸業費八〇、〇〇〇圓其他ノ増加アリト雖其他臨時費ヲ要スルコト少キニヨル
計	六六九七〇四二	
歳出總計	二〇、二九六、〇七三	二、九二〇、二二三

(備考) 前年度比較増減額ノ前表ト符合セサルハ前表ニ於テハ前年度總豫算額ニ比較シ本年表ニ於テハ前年度豫算決定後更正増減セラレタル豫算額ニ比較シタルニ因ル

同年度ニ於ケル繼續費ハ治道費、仁川及平壤水道工事費、釜山水道出資金、海關工事費、西北營林廠費、宮殿營繕費、廳舍及官舍新營費トシ其總額千三百八

十七萬五千三百九十二圓ニシテ内同年度年割額五百三十萬一千一百四十一圓ナリ又同年度ヨリ設定シタル特別會計ハ農工商部所管平壤鑛業所ノ一ニシテ同所管度量衡製造檢定所特別會計ハ之ヲ廢止セリ

第三節 租 稅

(二) 租稅制度

歳計ト租 韓國ノ歳計ニ於テ租稅ノ收入ハ最重要ナル地位ヲ占メ歳入ノ殆ント全部ヲ舉ケテ租稅ヨリ成ルト稱スルモ不可ナシ即チ明治三十八年ノ歳入豫算總額七百四拾八萬圓ニ對シ租稅ノ收入七百三拾五萬圓ニシテ實ニ總收入ノ九割八分強ニ當ル爾後公債收入ノ計上其他ノ事由ニ因リ較々其割合ヲ減シタルモ歳入經常部ニ於ケル其地位ハ依然大差アルヲ見ス明治四十一年豫算歳入經常部總額一千一百四十二萬圓ニ對シ租稅ノ收入ハ一千三十四萬圓ニシテ即チ總額ノ九割強ニ當レリ

租稅ノ種 財政整理着手當時現ニ施行セラレタル稅目中、地稅ハ租稅收入ノ八割強ヲ



占メ之ニ次クハ關稅ニシテ二割強第三位ハ戶稅ナレトモ其收入ハ極メテ僅少ナリ地稅及戶稅ニ就テハ第二節ニ詳記シタルヲ以テ之ヲ略シ今其他ノ各稅ニ就テ稅制ノ梗概ヲ述ヘントス

驛路稅

驛路稅ハ固ト驛土ヨリ收ムル小作料ニシテ開國ノ初驛郵ヲ設置シ各驛站ニ土地ヲ配給シテ驛郵事務ヲ執行セシメタルニ始マル開國五百四年即チ明治二十八年驛馬驛卒ヲ罷メ農商工部ヨリ吏員ヲ派シ賂料ヲ徵收シ後之ヲ軍部ニ次テ度支部ニ移付シ明治三十三年更ニ之ヲ宮内府ニ移セリ

屯稅

屯稅モ亦小作料ニシテ各營各司各郡ニ屬スル屯土ニ賦課ス其創始ハ開國ノ當初ニ在リ明治二十八年屯土ノ制ヲ廢シテ之ヲ度支部ニ屬セシメ同年更ニ宮内府ニ移セリ宮内府ハ驛賂及屯稅ノ代償トシテ毎年銀二十一萬元ヲ國庫ニ回付スルコトヲ約シ爾後年々ノ豫算ニ計上スト雖事實上曾テ宮内府ヨリ代償支出ノ事ナシ

漁稅

漁稅ハ沿海漁業者ニ賦課シテ正供ヲ補スルモノトス開國當初ヨリ存在シ近年一タヒ宮内府ニ移シ更ニ度支部ニ歸屬セシメタリ

鹽稅

鹽稅モ亦開國當初ヨリ存在ス曾テ宮内府ニ移シ更ニ度支部ニ歸屬セシメ

タリ

藿稅

藿稅ハ昆布海苔ノ生産ニ賦課スル租稅ニシテ是レ又開國當初ヨリ存在シ曾ツテ宮内府ニ移付シタルコトアリ

船稅

船稅ハ光武三年即チ明治三十二年勅令船稅規則ニ據ルモノト漁鹽藿業者ノ使用船ニ對シ慣例ニ依リ徵收スルモノトノ二種アリ

關稅

以上漁鹽藿船稅ハ其收入豫算額僅少ニシテ明治三十八年ニ於テ併セテ僅ニ四萬餘圓ニ過キス課稅ノ基礎亦極メテ不確實ナリ其他庖肆稅屠牛稅典當舖稅質屋稅等ノ雜稅アリト雖一々之ヲ舉クルニ足ラス
關稅ハ明治十六年以來特別契約ノ下ニ總稅務司ノ管理ニ屬シ明治三十八年財政整理後ハ特別會計トシテ稅關ノ經費ヲ支辨シ併セテ燈臺開港修築其他貿易機關ノ設備ニ對シ繼續費トシテ之ヲ支出セリ明治四十一年一月新官制實施ニ當リ稅關ノ管理ヲ度支部ニ移シ關稅局ヲシテ關稅事務ヲ掌理セシムルコト既ニ記スル所ノ如シ

稅制整理ノ方針

(二) 稅制整理

稅制ノ狀況上述ノ如シ其整理ノ必要言ヲ俟タスト雖急劇ニ之ヲ實行スル

ハ反テ民心ヲ攪亂シ收入ヲ阻害スル虞ナキニアラス依テ先ツ徵稅制度ヲ革新シテ不法徵收ヲ禁遏シ傍ヲ其手ヲ下シ易キモノヨリ漸次稅制ヲ整理スル方針ヲ取レリ

鹽漁稅

鹽漁稅ノ收入ハ從來一箇年各一萬圓内外ニ止ルト雖韓全國ヲ通スル食鹽ノ產額ハ一箇年少クモ百五十萬石此代價三百萬圓ヲ下ラス又水產物ノ生産額ハ約五百萬圓ニ達ス此兩者ニ對スル一萬圓内外ノ收稅額ハ甚々僅少ニ失スト云フヘシ是レ稅法ノ不完全ナルト官吏中飽ノ結果トニ外ナラス依テ先ツ鹽稅規程ヲ制定シテ從來不文ノ稅制ヲ改正シ漁獲稅ヲ廢シテ水產稅規則ヲ設ケ明治四十年一月一日ヨリ共ニ之ヲ施行セリ鹽稅ハ從來釜座ニ賦課シ殆ント稅率ノ規定ナカリシノミナラス隨時多大ナル無名不正ノ雜稅ヲ徵シタルカ故ニ鹽業者ノ負擔ハ苛重繁雜ヲ極メ公平ヲ失スルコト亦甚大ナリシカ新規規程ニ於テハ製造斤量百斤ニ對シ金六錢ノ率ヲ課シ課稅ノ基礎ヲ明ニシタリ種々ノ調査ニ據レハ新稅率ハ從來ノ正稅及無名雜稅ヲ合セタル製鹽業者ノ總負擔額ニ比シ約三分之一ニ過キス鹽戶ハ事實上顯著ナル減稅ノ典ニ浴シタル結果ヲ生セリ又水產稅ハ從來漁獲稅ノ

鹽稅

水產稅

礦稅

理稅ノ整

賦課不規律ヲ極メタルヲ以テ殆ント新稅ト同様ニシテ當初賦課徵稅ノ困難少カラサリシモ漸次收入ヲ増加スル傾向アリ明治四十一年豫算ニ於テ鹽稅ハ十萬二千圓、水產稅ハ十萬圓ヲ計上スルニ至レリ右ノ外明治三十九年九月ヨリ礦業法規施行ノ結果トシテ礦稅ノ新設アリ其豫算額ハ明治四十年四萬圓、同四十一年八萬一千餘圓ヲ計上セリ
地稅賦課ノ基本タル田畑ノ結數ハ三百餘年前ニ於テ百四十六萬餘結、二百七十餘年前ニ於テ百五十三萬餘結ニ上レルカ其後、年ト共ニ減少ヲ示セリ當初ノ規定ニ據レハ二十年毎ニ改量シ課稅地ヲ整理スル計畫ナルモ爾後曾テ其事ナク官公吏ハ隱結ヲ作リテ私腹ヲ肥スニ汲々トシ人民ハ開墾ノ届出ヲ爲サスシテ只被害地ノ免租ヲ申請シ官民相依リテ結數ヲ減少セシメ今ヨリ四五年前ニ於テ其極度ニ達シタリ隱結ノ整理ハ將來最有望ナル財源ノ一ニシテ當局者ノ最モ意ヲ用ユル所ナリト雖郡ノ吏屬ハ自己收入ノ減少スル爲、極力隱蔽ニ努メ其結果、未タ十分ナルヲ得ス明治四十年中ノ發見結數二萬五千餘結ニ過キサルモ同年ノ總結數ハ舊時ニ比スレハ較々上リテ九十九萬九千餘結トナレリ此等ノ結果トシテ地稅ノ收入額ハ明治

三十八年豫算額四百八十七萬圓ヨリ漸次増加シ同三十九年ニハ五百二十萬圓同四十年ニハ五百八十六萬圓同四十一年ニハ六百四十七萬圓ヲ豫算スルニ至レリ

理月ノ整

戸税ノ逋脱甚多キモ亦争フ可カラサル事實ナリ從來課税ノ標準トシタル全國ノ戸數ハ百三十八萬四千餘戸ニシテ明治四十年五月警務顧問部ノ實查ニ據レハ全國ノ戸數二百三十三萬三千八百七十七戸即チ從來約百萬戸ノ隱漏アリシヲ知ル依テ同年秋期納税分ヨリ大躰新調査戸數ヲ標準トシタルモ急劇ノ負擔増加ヲ避ケ極貧者其他納税資力ナキモノニ對シテハ免税ノ至當ナルヲ認メ酌賦課シタリ是レ戸税ハ一戸三十錢ノ均一税ナルヲ以テナリ此等隱漏整理ノ結果戸税ノ收入モ亦漸次増加シ從來一箇年二十三萬圓内外ニ過キサリシモノ明治四十年豫算ニハ二十七萬餘圓ニ増加シ同四十一年豫算ニ於テハ五十萬餘圓ヲ計上スルニ至リタリ

財源ノ調

財源ノ調査ハ極メテ肝要ナルヲ以テ財政顧問部ニ財源調査局及全國必要ノ地點ニ同出張所ヲ置キ或ハ吏員ヲ派遣シ以テ將來有望ノ財源特ニ鹽及烟草ノ調査及試作ニ當ラシメ又京畿道朱安ニ天日製鹽試驗場ヲ慶尙南道

東萊ニ煎熬製鹽試驗場ヲ設ケタリ韓國ニ於ケル製鹽事業ハ目下極メテ幼稚ノ域ニ在ルモ其製法ヲ改良スレハ將來産業上及財源トシテ共ニ有望ナルヘク烟草ニ至リテハ韓人ノ嗜好最熾ニシテ是レ又好箇ノ財源トスルニ足ル明治四十年下半年季ニ至リ各地暴徒蜂起シ調査ヲ妨ケラレタルコト少カラス甚シキハ出張所ノ閉鎖吏員ノ遭害ヲ見ルニ至リタルモ其調査ハ著々進抄中ニ在リ明治四十年末新官制ノ制定セララルヤ財源調査ノ事務ハ度支部内ニ一局ヲ置キテ之ヲ繼承セシメ製鹽試驗場ハ之ヲ農商工部ノ所管ニ移シタリ

地方税

地方ノ土木教育勸業廳舍營繕慈善事業其他地方公共施設ニ要スル經費ヲ支辨スル爲メ地方税制度ヲ創設シテ一ハ地方事業ノ發達ヲ促シ一ハ國庫經費ノ地方分擔ヲ計リ兼テ地方ニ於ケル不法雜税ノ誅求ヲ杜絶センコトヲ期シ明治三十九年十二月地方税規則ヲ公布シ同四十年一月一日ヨリ施行ノ豫定ナリシモ地方ノ狀況未タ其實施ニ適セサルモノアリテ遂ニ之ヲ延期シタリ

(三) 宮内府雜税ノ移屬

宮内府ノ
徵稅ノ
從來宮内府ハ徵稅官ヲ地方ニ派シテ各種ノ雜稅ヲ徵シ或ハ驛田屯土ノ租
ヲ收メ政府以外ニ課稅ノ權ヲ以テ國民ニ臨ミ其間弊竇一ナラス依テ政府
ハ明治四十年特ニ臨時帝室有及國有財產調查局ヲ設ケ帝室有財產ト併セ
テ雜稅ノ賦課徵收ニ就テ調査スル所アリ其結果或ハ度支部ニ或ハ農商工
部ニ移屬セシメ若ハ之ヲ撤廢シ尙驛田屯土ノ收租ハ之ヲ度支部ニ委託ス
ル等必要ノ措置ヲ取レリ其詳細ハ別章ニ明ナルヲ以テ省略ス

(四) 手数料付印紙收入

度
手
料
制
從來韓國ニ於テハ全ク手数料ノ制度ヲ缺キシニアラサルモ官廳任意ニ之
ヲ徵收シ一定ノ規律ヲ見ス家券交付ノ場合ノ如キ即チ其一例ナリ明治三
十八年十一月京城東門外ニ屠獸場ヲ設立シ警務廳所管ノ下ニ屠獸ヲ官營
セシムルコトトナルヤ始メテ一定ノ規程ニ據リテ屠獸手数料ヲ徵收シ次
ニ家券手数料ノ制ヲ定メ三十九年一月先ツ之ヲ漢城府ニ施行シ次テ平壤
仁川其他ニ及シ後又土地家屋證明規則鑛業法規民事訴訟手数料規則等ノ
施行セラルルニ及ヒ何レモ手数料ヲ徵收スルニ至リタリ

印紙收入

手
料
制
度
印紙收入
八年十一月印紙收入ノ制ヲ定メ同十二月一日先ツ官設屠獸手数料ノ印紙
收入ヲ初トシ漸次之ヲ他ニ及セリ印紙收入ハ光武十年即チ明治三十九年
豫算額三萬圓同四十年十五萬八千圓ニシテ創始ノ年ヨリ豫算額ニ超過ス
ル實收アリ同四十一年豫算ニハ十九萬五千圓ヲ計上セリ

(五) 徵稅制度

徵稅制度
現存ノ各種租稅ニ就テ徵收ノ制度ヲ確立シ不當ノ苛征ヲ禁スルハ歲入ノ
增加及民力ノ休養上最緊要事ニ屬スルヲ以テ一方管稅官官制ヲ定メテ徵
稅機關ヲ特設シ吏人積習ノ廓清ヲ計ルト同時ニ租稅徵收規程ヲ制定シテ
徵稅ノ順序方法ヲ公示シ之ニ據ラスシテ租稅ヲ徵スルコトナキナ一般入
民ニ知ラシメタリ同規程ハ光武十年即チ明治三十九年十月十六日ヲ以テ
公布セラレ其要概ヲ舉クレハ(一)租稅ハ別段ノ規程アルモノ外本人ヨリ
之ヲ徵收スルコト(二)租稅ノ徵收ハ稅務官又ハ各郡派駐稅務主事ヨリ納稅
義務者ニ發布シタル納入告知書ヲ以テスヘキコト(三)納入告知書指定ノ期
日ヲ過キテ租稅ヲ納メサル者ニ對シテハ督促書ヲ發シ尙納付セサレハ別
ニ定ムル所ノ規定ニ依リテ強制徵收スルコト(四)地稅及戶稅ハ面長(村長)ニ

租稅徵收
規程

納入告知書ヲ發付シ面長ハ面内ノ多額納稅者五名以上ヲ任員トシ其協議ヲ以テ面内居住ノ各納稅義務者ニ對スル賦課金額ヲ定メテ納入通知ヲ發シ之ニ依リテ徵收スルコト但現金ハ任員中ヨリ公錢領收員ヲ定メ之ヲ處理セシムルコト(五)徵收シタル現金ハ納入告知書指定ノ場所ニ納付スヘク面ニ於テ徵收シタルモノハ徵收費トシテ其金額ニ對スル百分二ノ金額ヲ該面ニ交付スルコト等ニシテ次テ之ニ對スル細則ヲ發布シ尙法令ノ周知ヲ計ル爲メ別項ノ如ク地方委員會ヲ組織セシメタル外觀察府郡衙及稅務官衙ノ門前又ハ市場等ニ法令揭示場ヲ設ケ人民ヲシテ日夕之ヲ見之ニ熟セシムルノ方法ヲ設クル等諸般ノ注意ヲ加ヘタリ

徵收規程ノ實施ハ徵稅機關ノ擴張金庫制度ノ實施稅制ノ整理等各種ノ施設ト相俟ツテ漸次其效果ヲ收入額ノ上ニ現ハサントス其詳細ハ歲計ノ項ニ明ナルヲ以テ略ス

法令揭示場

第四節 國 債

(二) 起 債

財政ノ整理

一般財政ノ荒廢上述ノ如クナルニ拘ハラズ韓國政府ハ從來曾テ國債ヲ募集シタルコトナク既往ノ債務ハ國庫取引銀行ヨリノ借入金其他流動的性質ヲ有スル少額ノ義務ニ限レリ是レ實ニ韓國ノ幸福ニシテ又其財政整理ノ有望ナル一事由トスヘシ其後財政及一般政務ノ整理改善ニ伴ヒ自ラ資金ヲ要スルコト多ク明治三十八年六月以來前後四回國債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲セリト雖其發行又ハ借入額ハ現在ニ於テ併セテ一千一百五十萬圓ニ過キス其要目左ノ如シ

國債現在額

韓國國債現在調 (明治四十年末)

種 類	發行又ハ借入年月	發行又ハ借入金額	利子歩合	擔保種類	據置年限	償 還 年 限
國庫證券	明治三十八年六月	二〇〇〇〇〇〇圓	年七分	國庫收入	三箇年	明治四十三年六月
貨幣整理資金債	同 年 六 月	三〇〇〇〇〇〇〇	年六分	關 稅	六箇年	同 四十八年六月
金融資金債	同 年 十二 月	一五〇〇〇〇〇〇	無利子	關 稅	同	同 四十五年十二月
起業資金債	同 三十九年三月	五〇〇〇〇〇〇〇	年六分五厘	關 稅	五箇年	同 四十九年三月
計		一一五〇〇〇〇〇〇				

(備考) 本表ノ外貨幣整理資金借越金アリ其額ハ同整理事業ノ進行ニ伴ヒ時ニ依リテ一定セズ

國庫證券

國庫證券ハ舊債ノ償還其他ノ事由ニ因ル歲計ノ不足ヲ填補スル爲第一銀行ヲ以テ引受銀行トナシ東京ニ於テ之ヲ發行セシメタリ蓋シ韓國政府カ公債ヲ募集セルノ嚆矢ナリ當時恰モ日露戰役中ニ當リ東京ノ金融頗ル逼迫セルニ拘ラス募集額ニ對スル約四倍ノ應募ヲ得内四十七萬餘圓ハ募集價額九十五圓以上ノ申込ニシテ意外ノ成功ヲ收ムルヲ得タリ

貨幣整理資金債

貨幣整理資金債ハ第一銀行ヨリ金融資金債ハ日本政府ヨリノ借入ニ係リ前者ハ貨幣整理事業ノ進行ニ伴ヒ第一銀行ヨリ多少ノ借越ヲナシ其額明治三十八年末ニ於テ二百三十三萬三千六百九十九圓餘同三十九年末ニ於テ二百八十七萬九千七百五十五圓餘同四十年末ニ於テ二百八十三萬三千九百六十七圓餘ヲ存セリ又起業資金債ハ日本興業銀行ヨリノ借入ニ係リ明治三十九年三月末總額一千萬圓ノ内五百萬圓此手取九十圓ノ割ニテ四百五十萬圓ヲ受領シ他ハ逐テ必要ニ應シ之ヲ受領スル筈ナリ明治四十年新協約締結後韓國ノ施政改善其歩ヲ進ムルヤ帝國政府ハ韓國

立替金

政府ニ對シテ財政上ノ補助ヲ與ヘ立替金ヲ支出スルコトトナレリ是レ亦韓國政府ノ債務ニ屬スト雖其詳細ハ別章ニ讓ル

(二) 使途

貨幣整理資金ハ其名稱ノ示ス如ク專ラ貨幣整理事業ニ充當シ金融資金ハ共同倉庫會社手形組合普通銀行其他金融機關ノ創設及整理ニ要スル補助金政府倉庫ノ資金等ニ供用セラル今明治三十九年末及同四十年末現在同資金使途現計ヲ舉クレハ左ノ如シ

金融資金使途現計 (各年末)

使途	明治三十九年末	明治四十年末
政府倉庫資金	二八三、八二〇、〇〇〇	一〇〇、八八七、四一八
各地手形組合資金	二二〇、〇〇〇、〇〇〇	三三〇、〇〇〇、〇〇〇
天一銀行貸下	二二五、〇〇〇、〇〇〇	二二五、〇〇〇、〇〇〇
漢城銀行貸下	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇、〇〇〇
共同倉庫會社貸下	一三〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇
地方金融組合資金	一	一七〇、〇〇〇、〇〇〇
財政及金融		一九五

財政及金融

地方倉庫建築費	三〇、三三八四五	一〇六、三八三三七
諸經費	七五、七四一〇	八五、七八二〇
預金	五〇〇、〇九八七四五	三四二、二六〇八八五
計	一、五〇〇、〇〇〇〇〇	一、五〇五、三八九五〇〇

一九六

(備考) 明治四十年末現在政府倉庫資金ノ前年末現在ヨリ減少シタルハ漸次回收シタルニ依ル

明治四十年末現在合計額ノ金融資金債收入總額ヲ超過スルハ預金ノ利子ヲ收入シタルニ依ル

起業資金債ノ收入ハ專ラ韓國ニ於ケル産業、教育其他起業ノ資金ニ充當シ若クハ金融機關擴張補助費ニ充テ以テ利源ヲ開發シ富力ヲ擴張センコトヲ目的トス其手取總額九百萬圓ニ對スル支途ハ當初以來數次ノ改定ヲ經、明治四十年末ニ於ケル計畫ハ左表ノ如シ

起業資金使途現計 (明治四十年末)

使途	支出豫定	明治三十九年支出	明治四十年支出	明治四十一年支出
治道工事	一、四九六、〇〇〇〇〇	—	三、五三四、八〇〇〇三	一、一四二、五一九九九七

仁川水道	二、一七〇、〇〇〇〇〇	九五、二五七八四	四四七、五四七二二	一、六二七、三七〇九四
平壤水道	一、三〇〇、〇〇〇〇〇	三四、二四八七二	一九六、〇九八五三七	一、一〇〇、四七六〇一
學事擴張	五〇〇、〇〇〇〇〇	一〇、一五二七六一三	三五〇、九七六三九八	四七、四九五九八九
農工銀行補助	一、三九五、〇〇〇〇〇	九六、九六四〇〇〇〇	四二五、〇〇〇〇〇〇	三六〇、〇〇〇〇〇
病院建設	三、五七、五七七〇〇	三、三三四、四一〇七	二、五六六、六九四七七	六八、五六三、四一六
平理院建設	八〇、〇〇〇〇〇〇	—	四二、三九五、五五三	三七、六〇四、四四七
工業傳習所建設	一、四九六、五四〇〇〇	四三、六〇〇〇〇〇	九七、三六七、四五〇	八六、八六五、五〇〇
煉瓦製造	二、三四〇、〇〇〇〇〇	—	二、二九五、〇二二三	四〇、四九七、七八
釜山水道出資	一、〇〇〇、〇〇〇〇〇	—	五〇〇、〇〇〇〇〇〇	五〇〇、〇〇〇〇〇〇
營林廠出資	六〇〇、〇〇〇〇〇〇	—	三〇〇、〇〇〇〇〇〇	三〇〇、〇〇〇〇〇〇
印刷局擴張	四、三八、四三八〇〇〇	—	一、六三三、〇三三四	三三二、二三四、九六六
金融組合補助	四〇〇、〇〇〇〇〇〇	—	四〇〇、〇〇〇〇〇〇	—
合計	八、八六〇、六六九〇〇〇	一、二四五、七六二、三三六	二、九〇五、七八七、七八六	四、七〇九、二一八、八三八

右支出豫定額ニ付、使途種類ニ依リテ之ヲ區別スレハ左ノ如シ

土木
教育
財政及金融

五〇、六六〇、〇〇〇〇〇
六四、九六五、四〇〇〇〇
一九七

財政及金融	一九八
金	一四三五〇〇〇〇〇〇
病院	三五七、五七七〇〇〇
官廳建築	八〇〇〇〇〇〇〇
官業	一二七、二四三八〇〇〇
合計	八八六〇、六六九〇〇〇

第五節 貨幣

(一) 幣制ノ紊亂及整理

光武二年即チ明治三十一年發布ノ貨幣章程ニ依リ韓國ハ名義上ノ銀本位國ナリシモ當時政府ハ少許ノ銀銅貨ヲ發行シタルノミ次テ全然之ヲ停止シ獨リ盛ニ白銅貨ヲ鑄造發行セリ是レ其表價ト實價トノ差大ナルヲ利シ鑄造利益ヲ收メントスルニ外ナラス加フルニ民間ノ私鑄及偽造亦滔然トシテ起リ其結果、白銅貨ハ全ク銀貨ヲ驅逐セルノミナラス其價格亦逐次低落シ遂ニ表價ノ半ヲ下ルニ至レリ貨幣ノ狀況此ノ如シ其經濟及財政ニ及ホセル影響ノ深酷ナル知ルヘキノミ此等白銅貨ノ專ラ流通シタルハ京城

革制ノ沿革

白銅貨ノ濫

布幣ノ分

葉錢

貨幣整理ノ必要

貨幣條例

附近及韓國ノ西北部一帶即チ其半部ニシテ他ノ半部、慶尙、全羅兩道、江原道ノ一部及咸鏡道ニ於テハ人民初ヨリ新貨ヲ憚ハス銀貨ハ素ヨリ白銅貨モ亦遂ニ流通スルニ至ラスシテ舊來ノ葉錢獨リ通用セリ葉錢ハ日本ノ舊有孔銅錢ノ類ニシテ要スルニ實價ヲ以テ通用スルモノナレハ其社會ニ及ホス害毒未タ白銅貨ノ如クナラサルモ貨幣タルノ要件ヲ缺クヤ言ヲ俟タス此ノ如ク異種類ノ貨幣各其地域ヲ定メテ流通シ各區域截然別國ノ觀アリシノミナラス通用貨幣アリテ本位ノ制ヲ缺ケルモノ實ニ貨幣整理以前ニ於ケル狀態トス此ノ如キ狀態ヲ改善シ貨幣制度ヲ確立スルハ財政經濟ノ整理發達上、第一ノ要件ニシテ特ニ白銅貨ノ濫鑄ニ伴ヘル弊害ノ如キハ寸時モ之ヲ看過スヘカラス乃チ我財政顧問就職後、第一ニ貨幣ノ整理ヲ遂行スルニ決シ明治三十八年一月ヨリ之ニ着手シタリ

之ヨリ先キ韓國政府ハ光武五年即チ明治三十四年ヲ以テ全然日本ノ制度ニ倣ヒ金本位制ヲ採用セル貨幣條例ヲ制定公布シタリ此條例ハ施行期日サヘ未定ニシテ現在何等ノ効力ヲ有セスト雖、日韓兩國ノ貨幣制度ヲ共通ニシテ兩國間ニ現存スル經濟上及政治上ノ密接ナル關係ニ對應セントス

條例ノ實
日本貨幣
流通ノ公
認

ル今次ノ貨幣整理ニ當リ其儘此條例ヲ活用シ實施ヲ宜言スルヲ捷徑ト認
メ光武九年即チ明治三十八年一月十八日勅令ヲ以テ同條例ノ施行期日ヲ
同年六月ト定メタリ之ト同時ニ同シク勅令ヲ以テ貨幣條例規定ノ貨幣ト
品位、量目及形體ノ同一ナル貨幣ヲ韓國内ニ於テ無碍通用シ公私共ニ使用
ヲ許スノ件モ亦公布セラレ此ニ於テ本位ノ問題先ツ決定シ韓國ノ幣制ハ
全然日本ト同一トナリ且日本貨幣ハ韓國ニ於ケル流通ヲ公認セラレルニ
至レリ而シテ幣制紊亂ノ最大原因タル舊白銅貨ノ還收ニ付テハ國庫金收
納ニ依ルノ外、特ニ交換所ヲ設ケ一般ノ請求ニ應シテ新貨ト交換スルコト
トシ舊銀貨及舊赤銅貨ハ其發行少額ナルヲ以テ漸次還收ノ方針ヲ取り又
葉錢ハ漸チ以テ還收スルモ其一部分ヲ存シテ補助貨ニ充ツルコト日本ノ
制ニ等シカラシムルノ案ヲ立テ此等ハ何レモ貨幣條例施行期日ノ件ト同
時ニ勅令ヲ以テ公布セラレタリ

計畫ト實
行

右ノ如ク貨幣整理ニ關スル計畫成レルヲ以テ同年一月三十一日株式會社
第一銀行ト貨幣整理ニ關スル契約ヲ締結シ第一銀行ヲシテ整理事務一切
ヲ執行セシムルコトニ取極メ同時ニ關稅ヲ擔保トシテ同銀行ヨリ金三百

第一銀行
券公認

萬圓ヲ借入レ貨幣整理資金トシテ更ニ之ヲ同行ニ交付セリ此契約ニ於テ
韓國政府ハ第一銀行券ヲ公認シ公私ノ取引ニ差支ナク無制限ニ通用セシ
ムルコトヲ約シタリ即チ日本貨幣ノ流通公認ト相待チテ韓國ニ於ケル兌
換紙幣ノ制度モ亦確立シタルモノトス第一銀行券ノ發行ハ既ニ我政府ノ
公認ヲ得タルノミナラス之ニ對スル韓民間ノ信用亦漸ク厚ク當時ノ發行
高約三百萬圓、同年六月貨幣條例施行ノ當時ニ於テハ更ニ増加シテ六百萬
圓ニ及ヒ事實上、韓國ニ於ケル唯一本位貨幣タルノ觀ヲ呈セリ補助貨ハ最
初ヨリ凡テ韓國政府ニ於テ發行スルノ方針ナルモ當時典圖局ハ既ニ廢止
セラレタルヲ以テ我大阪造幣局ニ委託シテ至急補助銀貨及白銅貨ヲ鑄造
シ幸ニ新貨幣制度ノ實行ニ支障ナキヲ得タリ

鑄造委託

(二) 舊白銅貨ノ還收

典圖局閉
鎖

舊白銅貨ノ供給所タル典圖局ハ貨幣整理着手ノ前年即チ明治三十七年十
一月ヲ以テ閉鎖シ民間多少ノ私鑄ヲ除キ其新供給略々杜絶シタリト雖、當
時市場ノ現存額其幾何ナルヲ知ル可カラス政府ハ國庫收納ニ依ルノ外、交
換所ヲ特設シテ成ルヘク速ニ還收ヲ了スルニ決シ京城交換所ハ三十八年

交換所

七月一日ヨリ、平壤及仁川ハ同月下旬ヨリ鎮南浦及木浦ハ九月一日ヨリ各交換事務ヲ開始セリ

舊白銅貨交換率

舊白銅貨ノ交換率ハ一枚二錢五厘トシ其品位、量目、印像、形體ノ正貨ニ準スヘカラサル不正貨ハ一枚一錢ノ割ヲ以テ政府ニ買收シ其買收ヲ望マサル者ニ對シテハ政府之ヲ切斷シテ還附スルコトニ定メタリ蓋シ舊白銅貨ノ成分ニハ甚シキ不同アリ大阪造幣局ノ分析ニ據レハ銅及ニツケル分ヲ除キ亞鉛其他ノ雜分ヲ含ムコト千分中二百三十餘ニ上ルモノアリテ到底一律ノ取扱ヲ爲スヲ得ス是レ鑑定ノ煩ヲ避ク可カラサル所以ナリ乃チ鑑定其他必要ノ設備ヲ具シ七月一日先ツ京城交換所ヲ開キタルニ交換ノ請求非常ニ多ク同五日ニ於テ既ニ七百三十餘萬元ヲ數フルニ至レリ當時同交換所ノ設備ハ一日五萬元内外ヲ鑑定シ得ルニ過キス且現ニ白銅貨ヲ有セスシテ交換請求ノ權利ヲ收メ甚シキハ其權利ヲ賣買スル者ヲ生シ弊害ニ堪エサルヲ以テ一ト先ツ交換請求ノ受付ヲ停止シタリ之カ爲一時較々世上ノ疑惑ヲ招キタルモ同時ニ設備ヲ加エテ八月下旬迄ニ停止前受附ノ分ヲ鑑定シ終リ九月一日ヨリ更ニ交換請求ノ受付ヲ開始シ十月ニ至リテハ

舊白銅貨交換ノ狀況

最早大口ノ請求ヲ見サルニ至レリ其他各地ノ交換所モ亦圓滿ニ事務ヲ進捗シ三十八年七月一日交換開始ヨリ翌三十九年末ニ至ル一箇年半ニ於ケル總交換高甲種正貨及正貨ニ準スヘキモノ一億六千六百七十五萬餘枚、乙種正貨ニ準スヘカラサルモノ百七十七萬餘枚、合計一億六千八百五十四萬餘枚ヲ算スルニ至レリ就中其大部ハ三十八年七月乃至十月ニ交換ヲ了シタルモノニシテ其後ハ頓ニ減少シタリ

國庫收納ニヨル還收

納稅ニ依リ國庫ニ收納シタル舊白銅貨ハ再ヒ之ヲ拂出サス交換所ニ交付シテ還收手續ヲ了セリ其額明治三十九年末迄ニ甲種五千八十一萬餘枚、乙種五百三十萬餘枚、合計五千六百十二萬餘枚ニ上ル即チ同期ニ於ケル交換高ニ比シ約三分一ニ當レリ此間國庫收納ノ最多カリシハ三十九年三月乃至六月ニシテ主トシテ租稅納期ノ關係ニ由ル尙交換開始ト同時ニ信用アル商人ニ委託シテ買收ノ方法ヲ併用シ其後一タヒ之ヲ停止シタレトモ交換ノ請求減退スルニ及ヒテ更ニ之ヲ復舊シ又銀行會社ト協定シテ其受入レタル舊白銅貨ヲ中央金庫ニ買收スルノ制ヲ立テタリ然レトモ買收額ハ前後ヲ通シテ甚多カラス三十九年末迄ニ千八百七十三萬餘枚ニ止マレリ

舊貨買收

以上交換、收納、買收及金庫設置ノ當時、度支部ヨリ引繼キタル舊規收入ヲ總計シ明治三十九年末迄ニ還收ヲ了シタル舊白銅貨ハ實ニ二億六千六百四十八萬餘枚、此額而金額一千三百三十二萬餘元ニ上ル當時民間ニハ尙相當ノ流通アリト雖、舊白銅貨整理ノ目的ハ畧々達セラレタルニ近シ乃チ舊白銅貨ノ時價ハ交換開始後久シカラスシテ公定價格ニ近ツキ明治三十八年春夏ノ交二百五十元ニ下レルモノ同八月ニ於テハ二百五十元内外ニ、次テ二百元迄ニ騰貴シ以後事實上全ク動搖ナキニ至レリ今更ニ明治四十年中ニ於ケル還收高並當初ヨリノ累計ヲ舉クレハ左ノ如シ

舊白銅貨還收高表 (明治四十年末調査)

種別	四十年中還收額		還收開始以降累計
	納稅	交換	
納稅	四八八、六六二	五六六、二七二	一、〇五四、九三四
交換	六五一、八一七	一六九、一九八、九七六	二、三二一、〇一五
合計	一一三九、七七九	七三六、四七〇	一、八七六、二四九
舊規收入	二七、七七〇、六〇八	四六、五〇八、五三七	七四、二七九、一四五
合計	一一六七、五五〇	八〇二、九七八	二、〇〇九、二二七

種別	計	
	元ニ換算高	元
納稅	一、四四五、五〇五、八五〇	一、四九七、七〇九、四〇〇
交換	六九一、九七一、五〇〇	七、二一三、五〇四、七二五
合計	二、一四七、四七七、三五〇	八、七一一、二一四、一二五

(備考) 甲種乙種ノ外内種即チ乙種ヨリモ尙劣惡ニシテ全然貨幣ト認ム可カラサルモノヲ含ムモ元數ニ換算セヌ

(三) 其他舊貨ノ還收

葉錢、舊銀貨及舊赤銅貨ノ還收ニ就テハ上記ノ如ク特ニ交換ノ方法ヲ設ケス國庫ノ收納ニ依リ自然ニ其目的ヲ達センコトヲ期セリ是レ葉錢ハ舊白銅貨ニ比スレハ其弊害割合ニ少ク又舊銀銅貨ハ流通甚少額ナルヲ以テ貨幣整理ノ順序上先ツ白銅貨ヲ整理シ次テ之ニ及ハントスルニ外ナラサルナリ然ルニ舊白銅貨ハ國庫收納ニ依リテ還收シタルモノ比較的多額ナルニ反シ葉錢ニ至リテハ其額微々殆ント云フニ足ルモノナシ蓋シ葉錢ノ公定相場ハ一箇一厘五毛ナルニ實際ニ於テハ需給ノ關係ト銅相場ノ騰貴トニ依リ二厘内外ノ時價ヲ持續シ其結果、葉錢ヲ納稅ニ使用スルモノ甚少ク

縦ヒ之アリトスルモ郡守等ハ葉錢ヲ國庫ニ納入セス先ツ新貨ニ交換シテ其差額ヲ私服スルヲ常トシタレハナリ事情此ノ如キヲ以テ四十年二月交換率ヲ高メテ十八割五分トナシ同三月更ニ二十割ニ變更シ國庫收納ノ多カラシコトナ期シタレトモ葉錢時價ノ奔騰ハ更ニ之ニ超エタルヲ以テ其成績尙顯著ナルヲ得サリキ又政府ハ獨リ國庫收納ノ方法ニ依リ葉錢ヲ還收スルノ十分ナラサルヲ察シ三十九年十一月以來人民ノ請求ニ應シテ交換買上ヲナスコトトシタレトモ是レ又同様ノ理由ニ依リテ十分ノ結果ヲ見ルニ至ラス四十年十二月末ニ至ル國庫收納高ニ萬五千四百貫此金額二萬五千四百貫餘同買上高八萬六千七百七十四貫餘此價額十七萬六百三十一圓餘ニ止レリ只海外銅價ノ騰貴ハ葉錢ノ輸出ヲ促進シ同三十九年ニハ前年ノ十萬五千餘圓ヨリ一躍五十四萬九千餘圓ニ上リ同四十年上半季ニ於テハ九十六萬二千圓トナリ此方面ニ於ケル成績意外ニ良好ナリシカ其後銅相場ノ暴落ニ伴ヒ同四十年下半季ニ至リテ頓ニ挫折シタリ然レトモ三十八年一月以降四十年末迄ノ輸出高ハ百六十二萬三千三十一圓餘ニ上リ還收上少カラサル効果ヲ舉ケタルモノト云ハサル可カラス此他政府ハ

葉錢交換買上

葉錢ノ輸出

葉錢還收ノ施設

葉錢ノ通用ヲ一圓以内ニ限リ又各銀行ノ葉錢擔保貸附ヲ廢止セシメ或ハ葉錢手形ノ發行ヲ禁止シ政府事業ノ支拂ヲ新貨ニ限リ成ルヘク銀行ヲ利用シテ葉錢ノ引上及新貨ノ散布ニ努メシメ尙米穀買出商人ニ委託シテ新貨ノ流通ヲ獎勵スル等百方葉錢ノ還收ヲ計リ其成績漸次進捗シツツアリ然カモ葉錢地方人民ノ固陋ナル未タ能ク移ルヲ知ラス葉錢在高ノ減少スルタケ時價ハ益々騰貴ニ向ヒ四十年下半季ノ如キハ實ニ二十四五割即チ葉錢一個二厘五毛内外ヲ唱ヘ恰モ銅價ノ低落ト反比例ノ現象ヲ呈セリ其結果日本其他ヨリ類似貨幣ノ輸入ヲ見ルニ至レルモ此等ハ相當方法ニ依リテ制裁ヲ怠ラス

舊銀貨ハ鑄造額ノ甚タ少カリシト舊白銅貨濫發ノ結果夙ニ市場ヨリ驅逐セラレ其流通殆ト皆無ナルニ依リ又舊赤銅貨モ鑄造額ノ少額ナルニ加エテ銅價騰貴ノ爲メ鑄造サレタルモノ多キニ依リ市場ヨリ還收シタルモノ殆ント之アルヲ見ス

分貨ノ處
交換收納又ハ買收ニ依リテ還收シタル此等舊貨ハ總テ第一銀行貨幣整理部ヲシテ之ヲ保管セシメ其一部ハ大阪造幣局ニ送リテ補助貨ノ材料ニ供

シ他ハ之ヲ賣却シ若クハ保管セリ

(四) 新貨ノ流通

貨幣條例ニ據ル韓國貨幣ハ金貨二十圓、十圓、五圓、銀貨半圓、二十錢、十錢、白銅貨五錢、青銅貨一錢及五厘ノ九種ニシテ其品位量目、形體ハ全ク日本貨幣ニ等シ尙明治四十年八月銀銅價ノ騰貴ニ鑑ミ補助貨ノ品位量目ニ改正ヲ加ヘ以テ其國外流出及鑄潰ノ虞ヲ防キ且日本通貨トノ一致ヲ保タシム貨幣ノ鑄造ハ整理著手ノ當初ヨリ舉テ之ヲ大阪造幣局ニ委託セリ外ニ日本貨幣ノ法貨トシテ流通ヲ公認セラレハ別項既ニ記スル所ノ如シ

明治三十八年七月始メテ新貨ヲ發行シタル當時ニ於テハ其流通較々艱ミ人民或ハ之ヲ嫌忌スルノ傾ナキニアラス蓋シ從來ノ幣制改革ハ曾テ一タヒモ功ヲ奏シタルユトナク徒ニ其弊ヲ殘セルノミ韓國人民カ前弊ニ懲リテ新貨ヲ憚ハサル亦已チ得サルナリ然レトモ一方ニ於テハ舊白銅貨ノ還收、急速ニ進捗シ市場ハ其補缺ヲ必要トスルノミナラス當局者亦百方新貨ノ疏通ニ努メ漸次其發行流通額ヲ増加スルニ至レリ今每半年末現在新貨流通高ヲ舉クレハ左ノ如シ

每半年末現在新貨流通高

	金貨	銀貨	白銅貨	青銅貨	合計
明治三十八年末	—	二四九四二〇〇〇	一一八、二六〇〇〇	—	三六七、六八〇〇〇
明治卅九年上半季末	—	四〇九九七〇五〇〇	一七一、九三〇、七五〇	八三九五〇〇〇	五九〇、二九六、二五〇
明治三十九年末	九五五〇〇〇〇〇	二〇七一、三六七、五〇〇	九五二、二六〇、七五〇	一八〇、七五〇〇〇	二、一三七、五四三、二五〇
明治四十年上半季末	九五五〇〇〇〇〇	一五二八、五〇〇〇〇〇	九八四、七〇〇〇〇〇	九〇〇、二五〇〇〇	二、六九八、七三三、〇〇〇
明治四十年末	九五五〇〇〇〇〇〇	二、二九〇、〇〇〇〇〇〇	一、五一一〇、五〇〇〇〇〇	二〇四、一七五〇〇〇〇	四、一〇〇、一七五〇〇〇〇

(備考) 金貨ハ明治三十九年十月青銅貨ハ同年二月始メテ之ヲ發行セリ

新貨ノ地方的散布

此等ノ新貨ハ主トシテ舊來ノ白銅貨流通地方ニ散布セラレ全羅、慶尙、咸鏡各道並其附近葉錢流通地方ニ於テハ新貨ノ流通未タ洽キヲ得ス當局者ハ葉錢ノ還收ニ努ムルト同時ニ最モ力ヲ新貨ノ散布ニ盡シツツアリ近時此等地方ノ人民モ亦漸ク新貨ニ親マントスルノ傾向アルニ察スレハ遠カラスシテ葉錢ハ補助貨ノ地位ニ落チ主トシテ新貨ヲ用ユルニ至ラン此ニ至リテ貨幣ノ整理始メテ完シト云フヘシ

第一銀行

第一銀行券ハ明治三十八年勅令第七十三號ヲ以テ日本政府ノ承認スル所

財政及金融

トナリ同年韓國政府ト第一銀行トノ契約ニ依リ韓國政府モ亦之ヲ承認シテ本位貨ノ代用タラシム然レトモ其最初ノ發行ハ遡リテ明治三十五年五月ニ在ルコト上ニ記スルカ如シ第一銀行券ノ種類ハ十圓、五圓、一圓、五十錢、二十錢及十錢ノ六種ニシテ五十錢以下ノ小額券ハ漸次之ヲ回收シ補助貨ヲ以テ之ニ代ユルノ方針ヲ取り明治四十年三月一日以降ハ全ク之ヲ發行セス今每半年末現在第一銀行券發行高及流通高ヲ舉クレハ左ノ如シ

每半年末現在銀行券發行高及流通高

時期	十圓券	五圓券	一圓券	五十錢券	二十錢券	十錢券	總計發行高	市場流通高
明治三十八年上半季末	三、六五九、八八〇	二、〇四二、三三〇	六〇、一三三	三、八六〇、四九五	三、七七八、七〇〇	一、五二一、三九九	六、〇六八、八三二	六、〇六八、八三二
明治三十八年下半季末	四、三三六、六八〇	二、一九九、八〇〇	八、〇〇〇	四、三三〇、三三〇	一、四四五、六三二	二、〇三九、九六〇	八、二二二、六七三	八、二二二、六七三
明治三十九年上半季末	三、三三三、〇〇〇	一、六六一、一〇〇	六、三九九、三三九	一、六六六、五五〇	九〇、八五四、〇〇〇	一、三七八、五八〇	五、四二九、八六七	五、四二九、八六七
明治三十九年下半季末	四、七九七、〇〇〇	二、四三三、五〇〇	一、八二九、五〇〇	一、七九二、五〇〇	一、四九〇、〇〇〇	一、六三三、五〇〇	九、三三四、〇〇〇	八、三四三、七七六
明治四十年上半季末	四、五二五、〇〇〇	二、六六七、五〇〇	二、七五五、〇〇〇	四、一七五、〇〇〇	三、二二〇、〇〇〇	四、六二二、〇〇〇	九、五七六、九〇〇	八、八三三、八九二
明治四十年下半季末	五、二二五、〇〇〇	三、八五七、五〇〇	三、三六八、五〇〇	一、七九五、〇〇〇	一、四八〇、〇〇〇	二、一五五、〇〇〇	一、八〇五、三〇〇	一、八〇七、一七四

(備考) 明治三十九年十一月迄ハ各店ニ於テ銀行券ヲ發行シ市場ヨリ受入レタル分ハ即日

回收ス可キ規定ナリシヲ以テ發行高ハ即チ市場流通高ナリシモ三十九年十二月以降發行手續改正ノ結果總發行高中各店手元ニ存スルモノヲ手元有高トシ總發行高ヨリ手元有高ヲ控除セルモノヲ市場流通高トス

目下銀行券ノ流通モ亦未タ葉錢地方ニ洽カラスト雖新貨流通區域ノ擴大ニ伴ヒ其發行高漸次増加スヘキヲ疑ハス而シテ銀行券發行ニ關スル第一銀行ノ業務ハ前記日本ノ勅令ニ依リ日本政府ノ監督ニ屬スルモノトス從來正貨準備ニ據ル發行高ハ總發行高ニ對スル百分ノ三十四即チ三分一強ヲ最低トセリ此ニ謂ユル正貨準備ハ金貨及地金並日本銀行兌換券ナリ韓國ノ半部弱ハ今尙主トシテ葉錢ヲ用ヒ舊白銅貨モ亦相當ノ流通ヲ見ル此等ハ全ク統計ノ徵スヘキモノナク加フルニ日本貨幣ノ出入常ナラサルアリ韓國ノ貨幣流通高ハ到底精密ニ之ヲ知ルヲ得ス第一銀行ノ調査ニ據レハ概算左ノ如シト云フ

每半年末現在貨幣流通高概算

項目	明治三十八年上半季	新貨	銀行券流通高	舊白銅貨	葉錢	日本貨幣流通高	合計
金額	六、三三〇、〇〇〇	六、三三〇、〇〇〇	六、三三〇、〇〇〇	九、八〇〇、〇〇〇	六、五〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	二、一八〇、〇〇〇

銀行券準備
韓國ニ於テ
貨幣流通總高



明治三十
八年ノ京十
城恐慌

ニ配置シ相俟ツテ金融ヲ滑ナラシメ財政經濟兩面ノ急需ニ應セシコトヲ
期セリ偶々明治三十八年貨幣整理著手前後ニ於テ京城商民間ノ金融非常
ニ逼迫シ政治上ノ事情ト貫聯シテ多少不穩ノ形勢ヲ現出セントシ度支部
大臣ハ財政顧問ニ諮ラスシテ擅ニ政府資金三百萬元ノ貸下ヲ商民ニ約シ
國庫ノ現状其能ク行ハル可カラサルヲ見ルヤ蒼皇辭表ヲ提出スル等ノ事
アリ韓國皇帝ハ內帑金三十萬圓ヲ商民ニ貸下シ其急ヲ濟フノ詔勅ヲ發セ
ラレ宮内府大臣ハ更ニ商民ニ對シテ國庫貸下金三百萬元ノ措辦ヲ政府ニ
命スヘキヲ約スル等事情頗ル紛糾セリ財政顧問ハ無論此ノ如キ不條理ノ
支出ニ同意ヲ表セサルノミナラス右ノ皇室内下金ヲ商民ノ隨意處分ニ放
任セハ却テ益々財界ヲ攪亂センコトヲ慮リ右内下金ノ三井物産會社票及
第一銀行小切手ヨリ成レルヲ利シ會社及銀行ニ對シテ其支拂ヲ停止セシ
メ之ト同時ニ豫テ企畫セル共同倉庫會社條例ヲ確定シ同會社ニ内下金ノ
一部十五萬圓ヲ貸下クルノ案ヲ立テ先ツ以テ金融機關設備ノ端ヲ啓キタ
リ

恐慌ノ救
濟

金融必
要整理

當時ノ金融逼迫ハ其原因一ナラスト雖、一般韓人ハ既往ニ於ケル貨幣引上

財政及金融

ノ惡例ニ懲リ舊白銅貨交換ニ對スル政府ノ措置ヲ信用セス特ニ京城鐘路商人ノ如キ競フテ商品ヲ買收シ土地家屋ニ放資シ或ハ濫ニ手形ヲ發行シ其他各種ノ手段ヲ以テ現在所有ノ舊白銅貨ヲ拂出シタルニ其後舊白銅貨交換ノ進捗ニ伴ヒ時價頓ニ騰貴シタル爲、從來濫發ノ手形ニ對シ現貨ノ取付頻繁トナリ隨ツテ白銅手形ノ流通困難ヲ加ヘ固定セシメタル資本ニ對シ金融ヲ得ルノ途ナク加フルニ彼等カ夙ニ舊白銅貨ヲ手放シタル結果交換セラレタル新貨ハ初メ主トシテ日清商民ニ歸シ韓商ハ手ヲ空フシテ金融ニ苦ムノ狀況ニ陥リシモノトス其他韓商從來ノ營業不確實ナリシコト政府事業縮少ノ爲メ御用商人ノ困難セルコト等亦從因ヲ爲セリ兎ニ角當時ノ狀況ハ最モ痛切ニ相當ノ手段ニ依リテ金融ヲ疏通スルノ必要ヲ感セシメタリ

金融資金

然レトモ區々タル内帑貸下金ハ素ヨリ金融機關設備ノ資トスルニ足ラサルヲ以テ同年十二月日本政府ヨリ金融資金百五十萬圓ヲ無利子借入レ一般金融ノ調節ヲ計ラントシ此資金ヲ以テ漢城、天一兩銀行、共同倉庫會社、政府倉庫手形組合及地方金融組合ニ對スル補助貸下金ト爲シ尙明治二十九年

三月起業資金債成立スルニ及ヒ其一部ヲ以テ農工銀行及金融組合ノ補助ニ充テ以テ金融機關ノ擴張及整理ヲ期セリ以下項ヲ分チテ之ヲ記セントス

(一) 共同倉庫會社

倉庫營業ノ嚆矢

漢城共同倉庫會社ハ光武九年即チ明治三十八年九月四日發布度支部令第十四號共同倉庫會社條例ニ據リ一般公衆ノ爲ニ物品ヲ倉庫ニ保管シ且金融ノ便利ヲ計リ乘テ輸入手續未済ノ貨物ヲ保管スル爲、保稅倉庫ニ關スル業務ヲ營ムモノトス其株主ハ京城ノ木棉商、米穀商等有力ナル商民ヨリ成リ資本金十五萬圓、政府補助金十萬圓ヲ以テ明治三十八年十二月業務ヲ開始セリ同三十九年十一月江景出張所開始ノ際、更ニ補助金三萬圓ヲ増加シ翌四十年仁川及平壤ニ出張所ヲ設置ス之ヲ韓國ニ於ケル倉庫營業ノ嚆矢トナス明治四十年一月保稅倉庫ノ開始ニ當リ同會社ヲシテ更ニ保稅貨物ノ取扱ニ任セシメタリ

(二) 政府倉庫

郡守ノ金庫

從來地方郡守ハ税金ヲ商民ニ貸付ケ商民ハ之ヲ米穀其他買附ノ資金ニ供

用シ其代リ金ヲ國庫ニ返納スル習慣アリ其間弊害少カジサルモ又一種ノ金融作用ヲ爲セリ然ルニ徵税法ノ改善、金庫制度ノ實施ハ當然此ノ如キ變則ノ方法ヲ許ササルニ至リ其結果、商民ハ資金供給ノ途ヲ失シ隨テ農民モ亦米穀ノ賣出ニ困難セサルヲ得ス依テ政府ハ各要地ニ倉庫ヲ設置シ米穀ヲ擔保トシテ資金ノ融通ヲ計リ或ハ信用ヲ以テ商民ニ米穀買入ノ資金ヲ貸付スルノ事務ヲ開始セリ乃チ財政顧問ハ其部下タル各地財務官ヲシテ其事務ヲ執行セシムルコトトシ明治三十八年十月平壤倉庫ノ業務ヲ開始シ爾後大邱、忠州、全州、光州、水原ノ各地ニ及シ更ニ鎮南浦ニ平壤倉庫ノ支庫ヲ開始シ其貸附最高額ハ平壤ノ三十五萬六千餘圓ヲ首トシテ一時總額九十八萬六千餘圓ニ上レリ然レトモ倉庫事業ノ官營ハ無論一時ノ便法ニ過キサルヲ以テ同三十九年普通銀行、農工銀行、手形組合等ノ設立、農工銀行附屬倉庫ノ建設等アリテ農工商ニ對スル金融機關畧々整ヒタルヲ機トシ其貸出ヲ停止シ爾來專ラ資金ノ回收ニ努ム

倉庫建築

政府倉庫ノ貸出停止ト同時ニ政府ハ各樞要地ニ倉庫ヲ建設シ貿易及金融ノ利便ニ供センコトヲ期セリ其所在地ハ大邱、平壤、水原、榮山浦、光州、平澤及

江景ニシテ政府ノ保護監督ヲ受クル銀行又ハ倉庫會社ニ無料貸下ヲ爲シ明治三十九年八月水原倉庫ノ業務開始ヲ最初トシテ漸次開業セリ

(四) 普通銀行

漢城銀行

漢城銀行ハ明治三十六年ノ創立ニ係リ從來第一銀行ノ保護ノ下ニ營業シ來レルモ資金乏シク十分ノ發達ヲ期シ難キヲ以テ同三十九年五月金融資金ヨリ十萬圓ノ無利子貸下ヲ爲シ政府監督ノ下ニ同行ノ繁榮ヲ計リ且京城市民金融ノ緩和ヲ期セリ其資本金ハ當初十五萬圓ナリシカ同四十年更ニ十五萬圓ヲ増資シ合計三十萬圓トナシ内拂込七萬五千圓ニシテ水原ニ支店ヲ置ク次ニ天一銀行ハ明治三十三年ノ創立ニ係リ一般ノ信用淺カラカリシモ資金固定ノ結果營業停止ノ狀況ニ在リシヲ以テ三十九年六月政府監督ノ下ニ整理ヲ加フルコトトナリ金融資金ヨリ二十二萬五千圓ヲ無利子貸下セリ其資本金十五萬圓、同拂込五萬一千五百圓ニシテ麻浦ニ出張所ヲ置ク外ニ明治三十九年ノ創立ニ係ル韓一銀行アリ資本金十五萬圓、拂込三萬七千五百圓ニシテ政府ノ補助ヲ受ケス韓國現在ノ普通銀行ハ此ノ如ク僅ニ三行、其拂込資本金併セテ十六萬四千圓ニ過キサルモ京城商民ノ

天一銀行

韓一銀行

金融上、貢獻スル所少小ナラス明治四十年末ニ於ケル預金合計七十八萬四千餘圓、同貸出金百十七萬六千餘圓、同期純益金四萬一千餘圓ニシテ漢城銀行ハ一割五分、他ノ二行ハ各一割ノ配當ヲ爲セリ

銀行法規
銀行ニ關スル法規ハ光武十年即チ明治三十九年勅令第十二號ヲ以テ銀行條例ヲ發布シ同時ニ施行細則ヲ定メ爾後數次細則ノ規定ヲ追加補修セリ

(五) 農工銀行

農工銀行
銀行條例公布ト同時ニ政府ハ勅令第十三號ヲ以テ農工銀行條例ヲ制定公布シ地方農工業ノ開發及一般金融調和ノ目的ヲ以テ漸次全國樞要ノ地ニ農工銀行ヲ設立セシメタリ條例ノ規定ハ範ヲ日本ノ農工銀行法ニ取ルト雖國情人文ノ異ル所自ラ差異ナキヲ得ス就中農工銀行カ度支部大臣ノ認可ヲ得テ條例規定以外ノ普通銀行業務ヲ兼營スルコトヲ得ルカ如キ其最重ナルモノトス事實上、韓國ニ於テハ農工業改良ノ爲、長期ノ資金ヲ需要スルカ如キ場合甚タ少ナク今日ニ至ル迄農工銀行ハ寧ロ普通銀行業務ヲ本體トスル觀アリ其他政府ノ補助監督ノ方法及業務執行上ニ於テモ多少ノ差異アリト雖今詳述セス

農工銀行ノ設立

明治三十九年六月一日漢城農工銀行先ツ設立セラレ平壤、大邱、全州各農工銀行ハ同月中、晉州農工銀行ハ同七月、光州農工銀行ハ同八月、忠州、海州、鏡城各農工銀行ハ同九月、公州農工銀行ハ同四十年一月、咸興農工銀行ハ同年八月開業シタリ其資本金ハ漢城二十萬圓、他ハ各十萬圓ニシテ明治四十年六月忠州及公州各農工銀行ヲ漢城農工銀行ニ合併シ漢湖農工銀行ト改稱スルニ及ヒ同行ノ資本金ハ四十萬圓ニ増加セリ右合併後ニ於ケル農工銀行ハ併セテ九行、此資本金百二十萬圓、明治四十年末ニ於ケル拂込資本金五十五萬九千六百十圓、支店及出張所十七箇所、本支店合シテ農工銀行ノ營業所二十六箇所ニ上ル之ニ對スル政府ノ補助ハ株式引受ニ於テ三十三萬五千九百六十圓、貸下金ニ於テ百五萬八千六百八十圓、合計百三十九萬四千六百四十圓ニシテ盡ク起業資金ノ支辨ニ係レリ

農工債券
農工銀行ノ貸附資本ハ拂込資本金、積立金及政府貸下金ノ外、農工債券收入金及預金ヨリ成ル農工債券ハ明治三十九年十二月日本興業銀行ヲシテ一手ニ引受ケシメ其總額四十五萬圓、年利八分、引受價格額面三箇年据置後五箇年間ニ償還ナ了スヘキ條件ニシテ内漢城及平壤農工銀行十萬圓宛、大邱、

預金

諸貸出金

全州、光州、忠州、晋州各農工銀行五萬圓宛トス預金ハ明治四十年末ニ於テ五十一萬二千餘圓ニ上リ漸次増加ノ傾向ヲ見ル外ニ諸積立金及繰越金ヲ合シ運轉資本金二百二十四萬七千餘圓、而シテ之ニ對スル諸貸出金ハ年賦償還貸附金農業五萬三千餘圓、工業一萬四千餘圓、合計六萬七千餘圓、定期償還貸附金農業八萬六千餘圓、工業三萬六千餘圓、合計十三萬二千餘圓、普通貸附金百二萬餘圓、割引手形九十三萬九千餘圓、當座貸越五萬一千餘圓、總計二百二十萬一千餘圓ニシテ其用途ハ主トシテ商業資金ニ供セラレ農工資金ニ屬スルモノハ商業資金ノ十分一ヲ超エサル現狀ナリ之ヲ要スルニ韓國ニ於ケル銀行事業ハ全ク創始ニ屬シ人民未タ能ク其利便ヲ覺ラスト雖、各所在地附近ニ在リテハ漸時銀行ノ何タルヲ解セントスルカ如シ而シテ明治四十年下半年季ニ於ケル各農工銀行ノ純益金總額ハ五萬五千餘圓ニシテ鏡城及咸興農工銀行ノ無配當、海州農工銀行ノ年一割二分ヲ除キ他ハ何レモ年一割五分ノ配當ヲ爲セリ

(六) 手形組合

於音票

從來商人間ニ於テ於音票ト稱スル手形ノ流通アリト雖其形式極メテ單純

手形法規

手形組合

ニシテ手形タルノ要件ヲ具セサルノミナラス濫發盛シニ行ハレ京城明治三十八年ノ恐慌ノ如キモ實ニ之ニ基ク所多シ依テ同年九月度支部令ヲ以テ約束手形條例及手形組合條例ヲ公布シ同十二月京城及附近ノ重ナル商民四十名ヲ勸誘シテ漢城手形組合ヲ組織セシメタリ組合ハ組合員ノ發行ニ係ル信用確實ナル手形ニ對シテ其支拂ヲ保證シ以テ手形ノ確實ナル流通ヲ期スルヲ目的トシ業務ノ執行ハ政府派遣監理者ノ指導ノ下ニ組合員ノ選舉セル役員之ニ當リ政府ハ支拂保證基金トシテ金融資金ヨリ金十五萬圓ヲ支出シテ之ヲ組合ニ交付セリ組合ハ同三十九年一月始メテ業務ヲ開始シ組合ノ趣旨周知セラレルニ從ツテ加入者漸ク多ク同三月平壤ノ商民モ亦組合ヲ組織シ次テ京城組合ハ麻浦ニ平壤組合ハ鎮南浦ニ支所ヲ置キ爾後四十年一月迄ノ間ニ大邱、晋州、全州、光州等ニモ組合ノ組織ヲ見ルニ至レリ之ニ對シ政府ヨリ交付シタル基金額ハ合計三十三萬圓ニシテ金融資金ノ支辨ニ係ル又組合員ハ其數少キ所十四五名、漢城組合ノ如キハ百九十人ニ上リ隨テ其保證額モ漸次増加シ現ニ明治四十年末ニ於テ其保證高漢城手形組合ノ四十四萬餘圓ヲ首トシテ合計百二萬餘圓、其累計ニ於テハ

數百萬圓ノ多キニ上レルモ會テ一ノ不渡ヲ見ス極メテ良好ノ成績ヲ示セ
 手形條例
 リ尙明治三十九年十一月中約束手形條例ヲ廢止シテ手形條例ヲ公布セリ
 新ニ爲替手形及小切手ヲ公認シ從來手形組合員ニ限リ手形ヲ發行スルヲ
 得タル制限ヲ撤去シ舊來ノ於音又ハ類似手形ノ發行受授ヲ禁止シタル如
 キ改正ノ要旨トス

(七) 地方金融組合

農民ノ金
 各地金融機關漸チ以テ整備スト雖モ地方農民ノ如キニ至リテハ未タ普ク
 之ヲ利用スル機會ヲ有セス依テ農民ノ金融ヲ疏通シ其經濟狀態ヲ改善シ
 兼テ農事ノ改良ニ資スル目的ヲ以テ地方金融組合ヲ設置セシムルニ決シ
 地方金融
 明治四十年五月地方金融組合規則ヲ公布セリ組合ハ一郡又ハ數郡ヲ以テ
 一區域トシ當分稅務官所在地五十箇所ニ之ヲ置キ其業務ハ農業上必要ナ
 ル金融ヲ與ヘ及穀類ヲ倉庫ニ保管シ之ニ對シテ貸付ヲ爲スヲ主トシ附隨
 事業トシテ種子肥料農具等ノ分配貸與及生産物ノ委託販賣ヲ爲スコトア
 ルヘク其資金ハ組合員ヲシテ毎年金二圓ヲ噉出セシムル外共同資金トシ
 テ政府ヨリ各組合ニ金一萬圓ヲ下附シ尙必要ノ場合ニハ度支部大臣ノ認

可ヲ經農工銀行ヨリ借入金ヲ爲スヲ得ルコトトシ倉庫ハ郡衙附屬倉庫ヲ
 修理シ又ハ民間ノ借庫ヲ以テ之ニ充テシムルノ計畫ナリ同年六月二十八
 日光州金融組合先ツ成リ其後暴徒各地ニ蜂起シ爲ニ多大ノ支障ヲ被レル
 モ漸次全國ニ普及ヲ見ントス

金融機關
ノ設備
ノ關係

從來韓國ニ於テハ金融機關ノ見ルヘキモノナカリシト雖彼ノ國庫金ノ一
 時流用ノ如キ自ラ一種ノ金融作用ヲ爲セルコト上述ノ如シ今根底ヨリ此
 等行政上及財政上ノ弊害ヲ除去セントスルニ當リ金融上多少ノ影響ヲ生
 スヘキハ當然ノコトナリ之ヲ救済スルノ途ハ只適當ナル機關ヲ設備シ以
 テ之ニ代ユルノ一アルノミ今ヤ上記各種ノ機關設備セラレ此等ノ機關ハ
 政府ノ嚴重ナル監督ヲ受ケ其運用ハ主トシテ經驗アル日本人ニ當レル
 ナ以テ事業ノ成績漸次見ルヘキモノアラントシ且一方ニ於テハ貨幣整理
 ノ事業モ漸次進捗シ明治三十九年以來ノ金融ハ常ニ能ク平靜ヲ保テリ同
 四十年ニ至リ日本經濟界不振ノ影響ヲ受ケタルト暴徒蜂起ノ爲多少ノ阻
 格ナキニアラザリシモ大體ニ於テハ尙次第ニ改善ノ傾向アルヲ見ル

第十章 産業

第一節 農業

(一) 勸業模範場

勸業模範場設立

明治三十九年四月統監府勸業模範場官制發布セラレルヤ地ヲ京畿道水原ニトシ同六月ヨリ創立準備ニ着手ス其用地面積總テ八十七町餘歩、内畑地二十八町餘歩ハ民有ニ屬シ水田五十九町餘歩ハ宮内府所屬地ト民有地ト錯綜シ調査ニ困難ヲ極メシモ韓國地方官吏其他ノ盡力ニ依リテ漸ク之ヲ結了シ民有地ハ之ヲ買收シ宮内府所屬地ハ之ヲ賃借シタリ此間韓國政府トノ往復ニ無用ノ手續ヲ重ネ時日ヲ經過シタルコト少カラズ其結果同年ヨリ著手ノ豫定ナリシ夏作試験ノ機會ヲ失シタルハ頗ル遺憾トスル所ナリ然レトモ創立準備ハ適當ニ進行シ諸營造物ノ新築工事ヲ始メ水原停車場ヨリ同場ニ至ル道路及場内ノ田畑二十七町餘歩ヲ劃シテ施行セル耕地整理事業等略々同年末迄ニ完成シ其間一方ニ於テハ不便ヲ忍ヒテ能フ限

耕地整理

リ各種ノ調査及試験ニ從ヘリ今同場ニ於ケル重ナル事業ノ梗概ヲ擧ク

一、耕地整理 勸業模範場敷地、特ニ所屬水田ハ有名ナル西湖ノ直下ニ在リテ水利ノ便ニ缺クルナシト雖、其水路ハ殆ント見ルヘキモノナク耕地内ノ道路ハ狹隘ニシテ屈曲凸凹甚シク耕地ノ區劃ハ大小廣狹一ナラスシテ畦畔ハ犬牙錯雜ヲ極メ耕地整理ヲ行フニ非レハ到底模範的耕作ヲ爲スヲ得ス即チ明治三十九年十月整理事業ノ設計ヲ定メ十一月二日工事ニ著手シ十二月末日ヲ以テ略々其功ヲ竣エタリ整理ノ地區ハ北、西湖ヨリ南、新設道路ニ至リ東、鐵道ニ限ラレ西、西湖川ニ接シ内、田二十二反九畝餘歩、畑三町一反餘歩、沼田二町八畝餘歩ヲ整理シテ田二十二町七反餘歩、畑五町三反歩、沼田九反一畝歩トナシ幅三十間、長二十間即チ二反歩ノ區劃ヲ有スル長方形ノ耕地整然トシテ相連リ其間道路、用水路、排水路ヲ通シ截然舊時ノ觀ヲ改ム之ニ要シタル工費五千四百圓面積ニ比シテ較々高キニ失スル如キモ耕地ノ舊態、整理ニ不利ノ點多カリシト必シモ勞費ヲ厭ハス合理的ニ設計シタルト參觀者ノ便ヲ計リ道路ノ幅員及配置ニ特別ノ考慮ヲ加ヘタル等ハ其重ナル原因ヲ爲セリ

二、稻作試験 明治三十九年先ツ日韓人ノ作毛ニ就キ坪刈試験ヲ行ヒテ韓
 國ニ於ケル米ノ收量ヲ調査シ又種類試験ノ爲韓國農民ニ收穫保證ヲ爲シ
 日本種稻ヲ試作セシムル等稻作ニ關スル調査ハ初ヨリ最モ意ヲ用ヒタリ
 同四十年場内耕地ニ於テ始メテ稻作ヲ直營シ若クハ監督ノ下ニ韓人小作
 人ヲシテ耕作ニ從ハシメ特ニ直營田ニ於テハ種類肥料等ニ關スル各種ノ
 試験ヲ遂ク此等ノ成績ニ依ルニ日本種ハ概シテ韓國在來種ニ優リ特ニ早
 神力ト稱スル種類ノ如キハ總テノ試験ニ於テ最モ卓絶セル結果ヲ示セリ
 之ニ依テ考フルニ日本種ヲ以テ韓國在來種ニ代フルノミニテモ韓國ノ米
 産額ハ著シク之ヲ増加セシメ得ヘキカ如シ

肥料試験

三、肥料試験 日本ニ於テ水稻作綠肥トシテ最モ賞用セラルル紫雲英及苜
 蓿ノ韓國ニ適スルヤ否ヤヲ試験セン爲メ三十九年秋季以來其栽培ヲ試ミ
 タルニ此等豆科植物ニ寄生スル根瘤菌ノ土壤ニ存在セサルヲ確メ日本ヨ
 リ土壤ヲ取寄セ施用シ始メテ根瘤ノ附著ヲ認ムルニ至リタルモ季節後レ
 タル爲四十年ニ於テハ遂ニ目的ヲ達セス又堆肥ニ就テモ夫々調査ヲ進メ
 ツツアリ

畑作試験

四、畑作試験 三十九年秋季始メテ麥ヲ播種シ四十年春季以來普通作物、特
 用作物、蔬菜類及果樹類ヲ栽培シテ各種ノ試験ヲ行ヘリ其種類ヲ擧クレハ
 普通作物ニ在リテハ陸稻、燕麥、玉蜀黍、高粱、粟、蕎麥、大豆、小豆、落花生、甘藷、馬鈴
 薯等、特用作物ニ在リテハ亞麻、棉、烟艸、大麻、蠶臺、蛇麻草、糸瓜、除虫菊、杞柳、三椏、
 楮等、蔬菜類ニ在リテハ各種豆類、各種瓜類其他一般蔬菜、果樹類ニ在リテハ
 梨、苹果、桃、葡萄、杏、櫻桃、米桃、油桃等トス

甜菜ノ試作ハ三十九年以來京城東門外蠶島園藝模範場、興業株式會社兼二
 浦出張所、元山愛知農園ノ三箇所ニ耕作ヲ委託シ四十年ニ至リ本場ニ於テ
 モ之ヲ試作シ耕作成績糖分檢定ヲ試ミタリ

養蠶試験

五、養蠶試験 三十九年秋季ヨリ場内桑園及蠶室ノ設備ニ著手シ四十年春
 季以來春夏秋蠶ヲ飼育セリ韓國ノ氣候ハ概シテ養蠶ニ適當シ飼育ノ成績
 極メテ良好ニ日本種ノ能ク韓國ニ適應スルコト亦疑ナ容レス
 柞蠶ハ滿州ニ於テ盛ニ飼養セラル韓國ノ氣候風土ハ又必ス之ニ適應スヘ
 キヲ疑ハス且其飼養原料タル櫟櫚等ハ韓國西北部ノ山野ニ自生スルモノ
 多シ依テ三十九年極メテ小規模ノ筒飼ヲ試ミ四十年ニ至リ較々其規模ヲ

擴張シ春秋二季山野ニ放飼シテ成績ヲ考試セリ其結果ハ概シテ良好ニ將來發達ノ望アリ

害虫試験

六、害虫試験 作物、果樹、桑園、蔬菜等ニ對スル各種ノ害虫ニ就テ四十年春季以來種々ノ試験及研究ヲ爲シ其驅除法ヲ調査シ又蠶蛆ニ就テモ研究シツツアリ

韓國ノ特有産物タル人蔘ニ一種ノ病害發生シ近年特ニ慘害ヲ極ムルヲ以テ四十年以來其病原タル細菌ニ就テ種々研究ヲ爲セリ

家畜飼養

七、家畜飼養 韓國ニ於ケル各種家畜ノ適否、種類ノ選擇等ヲ目的トシテ豚、山羊等ノ家畜、雞、ヘキンダク等ノ家禽ヲ飼育シ又養蜂ヲ試ム

木浦出張所

八、木浦出張所 ハ三十九年以來主トシテ棉花ノ採種栽培ニ從事シ兼テ水稻、麥其他普通農事ノ試験ヲ爲セリ

群山試験地

九、群山試験地 ハ四十年四月土地家屋ノ買收ニ著手シ其他必要ノ設備ヲ具シテ同年ヨリ水稻其他普通農事ノ試験ヲ爲セリ

指導

十、指導 韓國農民ニ對シ農事ノ改良ヲ指導センカ爲メ三十九年冬季以來數回場員ヲ附近郡村ニ派シテ巡回講話ヲ行ハシメタリ又日韓人ノ參觀ハ

嚴寒ノ候ヲ除キ年中絶ユルコトナク時ニ或ハ百餘ノ韓國農民等團體ヲ爲シテ來觀スルコトアリ此等ニ對シテハ力メテ便宜ヲ與ヘ事業ノ現況ヲ觀覽セシム其他韓國ニ於テ農業ヲ經營スル日本人若クハ韓國農民ノ農業ニ關スル諸種ノ質問ニ對シ文書又ハ口頭ヲ以テ説明指導ヲ與ヘタルモノ毎

(二) 園藝模範場

農事試験場ノ廢止

明治三十八年十月韓國政府ハ農商工學校附屬農事試驗場トシテ京城東門外蠶島ニ畑地四百八十町歩ヲ選定シ同學校農科生徒ノ實習ニ兼ネ各種ノ農事試験ヲ行フ目的ヲ以テ官制ヲ發布シ建物ノ建築、諸器械ノ購入等ニ著手シタリ然レトモ同地方ハ農事試驗場トシテ其位置適當ナラス設計ニモ亦缺點アリシヲ以テ寧ロ園藝試驗場ヲ置キテ蔬菜果樹ノ栽培ニ關スル模範ヲ示シ之カ改良ヲ計ルノ優レルヲ認メ明治三十九年五月韓國政府ヲシテ農事試驗場官制ヲ廢止セシメタリ

園藝模範場設立

園藝模範場官制ハ同年九月發布セラレ農商工部管理ノ下ニ專ラ園藝ニ關スル試験及模範の事業ニ當ラシム元來蠶島ハ漢江ニ沿ヘル一平原ニシテ

地味肥沃、最モ蔬菜ノ栽培ニ適シ、附近住民ノ之ヲ生業トスルモノ多シ、蓋シ園藝事業ノ經營地トシテ、京城附近ニ於テ之ニ過キタル所ナシ、五月農事試験場廢止セラルルヤ、殘務ヲ理スルノ旁、著々新方針ニ依リテ、諸般ノ準備ヲ整ヘ、其用地ハ、舊試驗場用地ノ内十三町餘歩ヲ劃シテ之ニ宛テタリ、今同場事業ノ一斑ヲ記スレハ左ノ如シ

菓樹栽培

一、菓樹栽培 明治三十九年四月、苹果及梨ノ一年苗數十本ヲ日本内地ヨリ取寄セ、第一回ノ栽植ヲ行フ各樹ノ發育極メテ良好ニシテ、梨ノ如キハ翌年ヨリ多數ノ結實アリ、四十年ニ至リテ、苹果モ亦多數結實シ、日本ニ比シ遙ニ良好ノ成績ヲ收ム、四十年春季第二回栽植ヲ行ヒ、歐米各種葡萄、苹果、梨、杏、梅、櫻桃、李、桃、柿ノ多種類ヲ移植セリ、其成績ハ、氣候其他ノ關係ニ依リ、一様ナラスト、雖概シテ良好、特ニ或種類ノ菓樹例ヘハ、梨、葡萄ノ如キハ、最モ韓國ノ氣候風土ニ適スルヲ認ム

蔬菜栽培

二、蔬菜栽培 三十九年以來、茄子、豌豆、甘藍、南瓜、葱、葱頭、大根、牛蒡、胡蘿蔔、蕃茄、胡瓜、蕪菁、漬菜類ノ栽培ヲ試ミ、四十年ヨリ更ニ歐米、支那、日本ノ各種蔬菜ヲ加ヘ、其結果ハ、或種類ノモノヲ除キ、一般ニ成績好良、本邦ニ於テ、得難キ結果

ヲ奏シタルモノアリ

花卉栽培

三、花卉ノ栽培 生育一般ニ佳良ナリ

苗木

四、苗木 是レ亦生育一般ニ佳良ナリ

日韓人ノ參觀者常ニ絶ヘス、各種ノ質問問合等ニ對シテハ、成ル可ク満足ヲ與ヘ、指導ノ實ヲ舉ケンコトニ努ム

(三) 棉花栽培事業

棉花栽培協會

韓國ノ風土ハ棉花ノ栽培ニ適スルモ、從來其方法粗放ニシテ、種類モ亦不良ニ随ツテ、收量多カラス、日韓兩國ノ有志者之ヲ憂ヒ、棉花栽培協會ヲ組織シテ、之カ改良ニ任セントシ、韓國政府ニ建議スル所アリ、同政府亦其議ヲ容レ、棉花採種園ヲ置キ、先ツ米國陸地棉種子ヲ輸入、播下シ、其收穫棉ヨリ得タル種子ハ、之ヲ一般ニ配付シテ、漸次米國棉花ノ栽培ヲ擴張シ、又繰綿工場ヲ設ケテ、種子ノ散逸ヲ防クノ方針ヲ定メ、明治三十九年度以降、三箇年繼續事業トシテ、費用十萬圓ヲ支出スルニ決セリ、而シテ、之カ經營ハ、全部棉花栽培協會ニ囑托シ、同協會ハ、更ニ其受任事項ヲ舉ケ、勸業模範場ニ於テ經營センコトヲ出願シタルヲ以テ、同場ハ、同年六月、本浦ニ出張所ヲ置キ、技師、技手等ヲ

派遣シ全羅南道ニ土地ヲ選定シテ棉採種圃十箇所ヲ置ケリ同年度ノ栽培面積ハ總テ五十一町餘歩ニシテ豫定ノ如ク良好ノ成績ヲ舉クルヲ得タリ。明治四十年ニ至リ從來ノ棉採種圃ヲ廢合シ新ニ群山附近外一箇所ニ採種圃ヲ新設シテ合計八箇所トナシ此等作付總反別ハ六十五町步餘ニ達シ播下シタル種子量一萬七百斤別ニ百五十斤ノ種子ヲ地方農事經營者ニ配付シ約一町步ニ作付セシメタリ同年度ニ於テハ栽培者ノ熟練セルト氣候適順ナリシヲ以テ前年ニ優リテ良好ノ成績ヲ收メタリ。明治四十一年三月臨時棉花栽培所官制ヲ發布シ棉花栽培事業ノ全部ヲ舉ケテ政府ノ直營ニ移シ漸次其規模ヲ擴張ス。

(四) 人蔘事業

韓國ノ特産タル人蔘ハ京畿道開城附近ニ於テ最モ巨額且優等品ノ產出アリ政府ハ古來之ヲ以テ清國朝貢品ノ隨一トシ兼テ朝貢使ヲシテ毎年人蔘二萬斤ヲ北京ニ齎シ販賣セシメタリ此等ノ關係ヨリ人蔘栽培及製造ノ事業ハ久シク政府ノ特別管理ヲ受ケ半直營ノ狀況ニ在リ甲午改革ノ際度支部ヲシテ蔘政ヲ管セシメ次テ農商工部ノ所管ニ移シ其翌明治二十九年更

人蔘事業ノ沿革

臨時棉花栽培所

ニ宮内府ニ轉管シ内藏院後經理院ノ管理下ニ蔘政課ヲ開城ニ置キ其事務ヲ掌ラシム

蔘政

當時ノ制ニ據レハ人蔘ノ耕作ニハ別ニ制限ヲ加ヘスト雖毎年四五月頃蔘政課ヨリ吏員ヲ耕作地各郡ニ派シテ蔘圃ヲ調査セシメ臺帳ヲ備ヘ憑券ヲ下附ス人蔘栽植後六七箇年ヲ經過シ之ヲ採收セント欲スルモノハ監採官ノ採決ヲ經タル後憑券ヲ添ヘテ其旨ヲ蔘政課ニ届出テ蔘政課ハ臺帳ト照合シテ之ヲ許可シ吏員ヲ派シテ採取ヲ監督セシム人蔘製造ノ事業ハ名義上政府ノ直營ニシテ生産品ノ製造ハ必其手ヲ經サル可カラズ但事實ニ於テハ或ハ之ヲ蔘政課ノ直營トシ或ハ之ヲ私人ニ委託シタリ明治三十三年ニ至リ内藏院ト三井物産會社トノ間ニ委託販賣ノ契約ヲ締結シ人蔘ノ唯一需要地タル清國ニ輸出販賣スル一切ノ業務ヲ舉ケテ之ヲ同會社ニ委託セリ

三井物産會社ト契約

蔘政ノ制度上ノ如ク而シテ之ヲ管理スルニ腐敗セル韓國官吏ヲ以テス其間幾多私曲ノ盛ニ行ハルルハ勢ノ避ケ難キ所ニシテ人蔘耕作者ハ之ヲ蔘政課ニ納付スルヨリモ寧ロ他ニ密賣スルヲ利益トシ日清兩國ノ奸商之ニ

乘シテ不法ヲ逞クシ一時人蔘ノ密採密造最モ盛ニ行ハレタリ爾後顧問警察ニ於テ宮内府ノ依頼ニ應シ嚴重ニ外國人ノ不法ヲ取締レル等ノ爲漸ク此等弊害ヲ除却シタリト雖一方ニ於テハ蔘圃ノ利益ヲ減シ且近年猛烈ナル病毒ノ發生ニ依リ人蔘事業ハ頓ニ萎靡ヲ極ムルニ至レリ

韓國内ニ於ケル人蔘ノ生産高ハ何等統計ノ徵スヘキナシト雖最近數年ニ於ケル輸出高ハ常年額百萬圓内外ヲ示シ明治三十五年ノ如キハ實ニ百二十萬圓ノ巨額ニ上レリ同三十九年ニ於テハ其額頓ニ減シテ僅ニ一萬餘圓ニ過キサリシモ是レ唯清國市場ノ形勢ニ鑑ミ一時其輸出ヲ見合セタルカ爲ニ外ナラス同四十年ノ輸出高ハ又百二十餘萬圓ニ上リタリ蓋シ韓國ニ於ケル一財源タルヲ失ハサルナリ同年十二月宮内府經理院所管雜稅ヲ整理スルニ當リ人蔘事業ヲ政府ニ屬セシメ度支部ヲシテ之ヲ管理セシムルニ決シ同四十一年ニ至リ紅蔘專賣法及人蔘稅法ヲ發布シ蔘政ヲ確立シタリ

(三) 未墾地利用法

韓國ノ荒地利用法

韓國内地至ル所原野沼澤ノ荒廢ニ委セララルルモノ多ク加フルニ西南沿海

一、帶泥沙遠ク連ナリ僅ニ土工ヲ施セハ數百頃ノ良田ヲ得ヘキ地方相接セリ從來此等遺利ノ未タ開發ヲ得サリシハ蓋シ韓國ノ人口稀薄ナルト農民ノ資力及智識ノ程度低キトニ依ルヘシト雖農政ノ基礎定ラス土地ノ所有權確立セサルコト亦其一因ヲ爲ス依テ此等荒廢ノ土地ヲ利用スルノ途ヲ拓キ企業者ノ利益ヲ尊重保護スルノ必要ヲ認メ光武十一年即チ明治四十年七月法律第四號國有未墾地利用法及農商工部令第五十號同施行細則ヲ制定公布セリ國有未墾地利用法ノ要項左ノ如シ

國有未墾地利用法

- 一、國有未墾地、即チ民有ニ非サル原野、荒蕪地、草生地、沼澤地及干瀉地ノ貸付ヲ受ケントスル者ハ農商工部大臣ニ出願シ許可ヲ受クヘシ
- 一、貸付期間ハ十箇年ヲ超ユルヲ得ス
- 一、貸付ヲ受ケタル者ハ農商工部大臣ノ定ムル貸付料ヲ納付スヘシ農商工部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ之ヲ減免スルコトヲ得
- 一、農商工部大臣ハ國有未墾地利用ノ方法公益ヲ害スト認ムルトキハ其改良又ハ停止ヲ命シ或ハ貸付ノ許可ヲ取消スコトヲ得
- 一、貸付ヲ受ケタル者、豫定ノ事業ヲ成功シタル時ハ農商工部大臣ハ之ニ對

シ其土地ヲ拂下ケ又ハ付與スルコトヲ得
 事業成功後拂下又ハ付與シタル土地ノ稅率ハ其翌年ヨリ五箇年間其土地所在ノ道ニ於ケル最下級ニ屬スル土地ノ負擔ノ三分一トス
 一、本法及施行細則ノ規定ニ依ル處分ハ統監ノ同意ヲ經ルヲ要ス
 一、本法發布前國有未墾地利用ノ許可ヲ受ケ其効力尙存續スルモノニ就テハ本法施行後三箇月以内ニ農商工部大臣ノ認證ヲ請フヘシ其認證ハ本法ニ依ル許可ト見做ス

未墾地
利用額
數

同八月勅令ヲ以テ國有未墾地事務局官制ヲ定メ農商工部大臣ノ管理ニ屬シ國有未墾地利用ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ラシム今同九月十五日法律施行當日ヨリ同年末ニ至ル認證申請及貸付許可ノ出願件數及申請出願ニ係ル未墾地面積ヲ舉クレハ左ノ如シ

區別	認 證 申 請		貸 付		出 願	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積
日 人	一三	一三	二二九	一四一	一四一	一四一
韓 人	五九	四二	一一九	七二	七二	七二
計	七二	五七	三四八	二一三	二一三	二一三
						三〇,一三三.五畝

此等出願ニ對シテハ一面地方官ニ命シテ國有民有ノ區別、利用ノ爲附近人民ニ及ス利害ノ有無等ニ就テ調査セシメ一面ニハ農商工部ヨリ技術者其他ヲ派シテ實地踏查セシメ明治四十一年ニ至リ農商工部農務局ニ於テ國有未墾地事務局ノ事務ヲ引繼キ漸次處分指令中ニ屬ス

第二節 林 業

(一) 植林ノ經營

山林ノ荒

韓國ノ地勢タル頗ル山岳ニ富ミ林地ノ面積概算一千萬町步ヲ下ラスト雖今ヤ荒廢殆ント極度ニ達シ十中八九ハ無立木地ニシテ甚シキハ山骨露出シテ一木ヲ止メサルニ至ル其結果直接ニハ木材薪炭ノ供給ヲ缺キ間接ニハ氣候ノ調和ヲ失シ水旱若リニ至リ農鑛水産諸業ノ發達ヲ妨碍スルコト亦實ニ多大ナリ然レトモ韓國政府ハ從來曾テ意ヲ林政ニ用キタルコトナク日清戰役後日本ヨリ林業顧問ヲ備聘シタレトモ幾ナラスシテ之ヲ解備シ爾後全國ノ山野ハ舊ニ依リ荒廢ニ委シテ顧ミス明治三十九年林業監督

林業監督
備聘

模範林

トシテ斯業ニ經驗アル技師ヲ招聘シ林業事務ニ對スル計畫ヲ立テ翌四十年ヨリ漸次之ニ着手スルニ至リ韓國始メテ林政ノ一端アリト云フヘシ
 林業事務ノ計畫ハ第一ニ模範林ヲ設置シ交通頻繁人目ニ觸レ易キ地點ニ於テ植林ノ模範ヲ示シ兼ネテ韓國ニ於ケル斯業ノ經驗ヲ收メントスルニ在リ最初氣候地質ノ異同ニ應シ京城平壤及大邱ノ附近ニ數箇所ノ林地ヲ撰定シテ造林スル計畫ナリシモ經費其他ノ都合ニ依リ明治四十年ニ於テ先ツ京城白雲洞平壤牡丹臺ノ二箇所ニ事業ヲ開始セリ白雲洞ハ京城彰義門ノ西方城壁ニ沿ヒタル官有山野ノ一部ニシテ全部極メテ孱弱ナル花崗岩ヨリ成リ風化特ニ甚シク全然砂山ノ如キ現狀ニ在リ僅ニ矮松ノ散生スル外何等ノ立木ナシ然レトモ同所ハ京城市内ヲ貫流スル清風川ノ水源ニシテ京城ノ風致衛生ニ關スルコト極メテ大ナルヲ以テ特ニ之ヲ選定シタル次第トス其事業ハ上記ノ如キ土質ナルヲ以テ滋賀兵庫兩縣地方ノ例ニ倣ヒテ先ツ砂防工事ヲ施セリ植林地ノ面積三十町步植付苗木五萬九千本餘内赤松二萬七千本餘山楡一萬五百本樺一萬四千本餘其他ハ山ハンノキ、黒松、桑、櫻、楓等ニシテ此造林費四千五百九十四圓餘内砂防工事七千九百間

砂防工事

牡丹臺

ニ要シタル費用四千二百四十六圓餘ニシテ面積ノ割合ニ多額ノ經費ヲ要シタルハ實ニ之ニ因ル次ニ牡丹臺ハ平壤北方城外大同江ニ沿ヒタル丘地ニシテ現在老松ノ點々タルヲ見ル外殆ント無立木ノ秃山ナリ同所ニ於テハ多少風致ヲ添フルノ目的ヲ以テ寺院周圍城壁全部及牡丹臺頂上ノ背後河流ニ面セル一部ト併セテ約五町步ニ黒松四千三百本餘樺六千五百本餘並ニ多少ノ櫻及楓ヲ植栽シ其經費百九圓餘ヲ要セリ以上ノ一ハ水源涵養的保安林他ハ風致的保安林ニシテ未タ經濟的林地ノ植栽ヲ實行スルヲ得サリシヲ遺憾トスト雖次年度以降漸次模範林ノ完成ヲ期セシトス現ニ明治四十一年春季ニ植栽セル模範林ハ京城平壤及大邱ノ附近ニ於テ合計二百二十四町步餘ニ上レリ
 模範林其他ニ植栽スヘキ苗木ハ日本ノ供給ニ依ルコト敢テ難キニアラスト雖氣候ノ相違運搬ノ不便價格等ノ關係ヨリ不利益タルヲ免レス成ルヘク植栽地附近ニ於テ之ヲ培養スルヲ可トス依テ明治四十年ニ於テ水原大邱及平壤ノ三箇所ニ樹苗養成所ヲ設置シ苗圃其他ノ用地トシテ水原二十町步餘大邱六町步餘平壤四町步餘合計三十一町步餘ヲ買收シ必要ノ廳舎

樹苗養成所

ヲ建築シ技術者ヲ派シ其事業ヲ開始シタリ此等各苗圃ニ播種シ又ハ日本ヨリ一二年生ノ苗木ヲ購入移植セル樹種ハ赤松、黒松、樺、赤楊、山楡、扁柏、枹、落葉松、山赤楊、樅、杉、栗其他併セテ四十六種ニシテ日韓兩國原生種ノ外、外國種ヲモ雜ユ尙樹苗養成所ハ各苗圃ヲ管理スルノミナラス種苗ノ試験及検査附近模範林地ノ管理及保護、附近林野ノ狀況及施業方法調査等當該地方ニ於ケル林業諸般ノ事務ニ當ルモノトス其後ノ成績ニ徴スルニ白雲洞及牡丹臺ノ模範林ヲ始トシ各苗圃ニ於ケル植栽苗木ノ成育ハ意外ニ良好ニシテ韓國ニ於ケル植林ノ好望ヲ示スモノノ如シ

林業法規

林業ニ對スル政府ノ事業ハ以上ノ如クニシテ單ニ斯業ノ模範ヲ示サントスルニ過キス荒廢セル國土ノ大面積ニ對シ植林ヲ普及スル事業ハ之ヲ内外私人ノ經營ニ待タサル可カラサルヤ論ナシ之カ爲必要ノ法規ヲ制定シ一方ニ於テハ林業經營者ニ對シ各般ノ保護ヲ與フル等ノ計畫ハ明治四十年以後ニ於テ漸次進捗セリ今年一月以降公布セル森林法規ヲ擧レハ左ノ如シ

一、森林法(法律第一號)

二、國有森林山野部分林規則(勅令第二十四號)

三、國有森林山野及產物處分規則(勅令第二十五號)

四、國有森林山野處分審查會規則(農商工部令第六十三號)

五、森林法施行細則(農商工部令第六十五號)

(二) 成林地ノ保護

成林

韓國一般ノ山林ハ概シテ荒廢スト雖僻遠ノ地方ニ於テハ尙多少ノ成林ヲ剩ササルニアラス例ハ鴨綠豆滿兩江沿岸ノ森林ヲ除クモ濟州島ノ如キ莞島ノ如キ若クハ智異山、鳥嶺、蔚陵島ノ如キ清川、大同兩江上流地方ニ於ケル森林ノ如キ則チ是ナリ其他現在ニ於テ林相ヲ爲サスト雖天然ノ稚樹密生シ少シク保護ヲ加フレハ十分成林ノ見込アル所亦少シトセス然カモ此等ノ成林ハ從來政府カ何等ノ施設ヲ下ササリシ爲年々漸ク荒廢ヲ加フルノミ上記ノ如ク森林諸法規ヲ制定シ漸次林政ノ振興ヲ期スルモノ一ニハ又成林地保護ノ見地ニ基クニ外ナラス

(三) 營林

明治三十九年十月日韓兩國政府間ニ協定シタル鴨綠江及豆滿江沿岸森林

營林廠

經營協同約款ニ據リ統監府營林廠ヲ置キテ事業ヲ掌理セシム營林廠ハ木材廠トノ關係上之ヲ清國安東縣ニ設置シ明治四十年五月十三日開廳諸設備ニ着手スルト同時ニ木材廠ヨリノ引繼ヲ了シ同三十日伐木事業ヲ開始セリ尙支廳ヲ鴨綠江上流惠山鎮ニ出張所ヲ鴨綠江左岸三箇所ニ置キ惠山鎮ヲ流木ノ起點トシ出張所ニハ移住日本人筏夫及備筏夫ヲ配置シテ流筏事業ヲ容易ナラシメ伐木ハ日本勞働者指導ノ下ニ主トシテ韓人ヲ使役ス明治四十年度ニ於ケル作業ハ準備ノ都合ニ由リ進捗充分ナラサリシ爲當初ノ計畫ヲ變更シ伐木尺ノ十三萬本流筏濟六萬本内外ニ止マレルモ爾後漸次作業高ヲ増進シ四十二年度以降ニ於テハ毎年二十五萬本ヲ流下セシムル計畫トス伐採樹種ハ紅松及落葉松ヲ主トシ製材ハ安東縣對岸北下洞及龍巖浦ニ在ル私人ノ事業ニ委託セリ

資本及收

營林事業ノ資本金ハ百二十萬圓ニシテ明治四十年度ニ於テ日韓兩國政府ヨリ其半額六十萬圓ヲ受入レタリ之ニ對スル資本勘定歳出豫算額ハ十四萬六千圓ニシテ建物、道路、軌條、船舶、電線、機械、器具等ノ購入ニ宛テ歳入出ノ差額四十五萬四千圓ハ即チ流動資本ニ供セラレルモノトス又同年度ノ收

豆滿江方面

益勘定ハ歳入森林收入二十四萬一千圓歳出森林作業費及豫備金合計四十五萬三千餘圓ニシテ翌年度ニ繰越スヘキ生産品豫定價額約十三萬圓ヲ差引キ事業上ノ純損失八萬二千餘圓ニ上ル豫定ニシテ且上記ノ如ク作業ノ進捗意ノ如クナラサリシヲ以テ一時多大ノ損失ヲ期シタルモ其後經營ノ進捗ト事業ノ順境ニ向ヒシトニ因リ損失額四萬六千四百二十六圓餘ニ止マルヲ得タリ四十一年度ニ於テハ作業ノ進捗ニ因リ歳入豫定額五十四萬四千餘圓外ニ次年度ニ繰越スヘキ生産品價額豫定五十一萬圓合計百五萬四千餘圓ニ對シ作業費歳出豫定額七十七萬五千餘圓前年度繰越生産品價額十九萬六千圓合計九十七萬一千餘圓ニシテ即チ差引八萬三千餘圓ノ純益ヲ見ル計算ナリ此益金ハ前年度ノ損失ヲ補填シテ尙餘アルヘシ而シテ今後益々事業ノ發達スルニ隨ヒ益金モ亦漸次増加シ伐木最高標準一箇年五十五萬本ニ達スルニ至レハ資本金百二十萬圓ニ對シ裕ニ五割ノ純益ヲ生シ得ル豫定トス

營林廠臨時出張所ヲ茂山ニ設クルモ豆滿江方面ノ事業ハ明治四十年迄未タ開始セラレス

第三節 水產業

(一) 韓海通漁ノ沿革

韓海出漁 韓國沿海ニ於ケル日本人ノ通漁ハ今ヨリ七十餘年前我西南ノ漁民釜山近海ニ鯛ノ出漁ヲ試ミタルニ濫觴シ維新後ニ至リ安藝、長門、豊後等ノ漁船爭フテ出漁シ其業年々ニ盛ナリ明治十六年日韓貿易規則ヲ協定スルヤ其第四十一款ニ於テ相互通漁ニ關スル規定ヲ約シ越テ二十二年ニ至リ右貿易規則ニ基キテ更ニ兩國間ニ通漁規則ヲ協定シ漁業免許稅ノ件、捕鯨特許ノ件、通漁禁止區域ノ件、脫稅者處分及漁民取締ニ關スル件等ヲ規定シタリ貿易規則ニ依ル通漁區域ハ韓國ニ在リテハ全羅、慶尙、江原、咸鏡四道ノ沿岸トシ之ニ對シテ我ハ肥前、筑前、長門朝鮮海ニ面スル所、石見、出雲、對馬ノ海濱ニ韓國人ノ出漁ヲ許容ス然ルニ我通漁事業ノ盛ナルニ隨ヒ漸次狹隘ヲ感スルニ至レルヲ以テ明治三十三年兩國政府間ノ取極ニ依リ更ニ之ヲ京畿道ノ沿岸ニ及シ向二十箇年間日本人ノ往來捕魚ヲ許シ次テ同三十七年同シク二十箇年ヲ限リテ忠清、黃海、平安三道ノ沿革ヲ加ヘ之ニ對シテ我ハ同

朝鮮漁業協會 期間伯耆、因幡、但馬、丹後及九州沿岸一圓ノ漁業ヲ韓國人ニ許シ此ニ至リテ韓半島ノ全沿岸盡ク我通漁區域内ニ入レリ

朝鮮海通漁組合 我漁民ノ出漁ハ頻年漸チ逐フテ増加シタリト雖從來之カ保護監督ノ機關ヲ缺キ甚タ亂雜ノ状態ニアリ乃チ明治三十年ニ至リ釜山在勤帝國領事及同地ノ有志者相計リテ朝鮮漁業協會ヲ釜山ニ設立シ專ラ韓海漁業ノ獎勵及通漁者ノ保護取締ニ任シ其成績見ルヘキモノアリ次テ我農商務省ハ各府縣ニ朝鮮海通漁組合ヲ組織セシメ同三十三年五月其聯合會ヲ組織シ韓海通漁者ニ對スル獎勵保護ノ機關較々全キヲ得ルニ至レリ同三十五年三月外國領海水產組合法ノ發布アリ即チ同法ニ依リ聯合會ヲ改メテ朝鮮海水產組合ト稱ス

(二) 朝鮮海水產組合

朝鮮海水產組合 朝鮮海水產組合ハ本部ヲ釜山ニ支部及出張所ヲ馬山、木浦、元山、仁川、群山其他ニ置キ大阪、三重以西ノ十六縣(大阪、三重、和歌山、兵庫、岡山、廣島、山口、島根、香川、愛媛、德島、福岡、大分、鹿兒島、熊本、長崎、佐賀)ニ通漁獎勵事務所ヲ設ケ朝鮮海ニ於ケル漁業ノ改良發達ヲ計リ通漁者共同ノ利益ヲ増進スルヲ目的トシ

其業務ハ定款ニ於テ左ノ如ク規定セリ

- 一、組合員ノ保護取締及遭難救済ヲ爲スコト
 - 二、組合員ノ通漁出願其他手續ニ關スル諸般ノ代辨ヲ爲スコト
 - 三、組合員ノ漁業ニ關スル通信報告ヲ爲スコト
 - 四、組合員ノ通信及貯金爲替取扱ノ代辨ヲ爲スコト
 - 五、組合員ノ紛議仲裁及調停ニ關スルコト
 - 六、組合員ノ風儀ヲ矯正シ彼我ノ和親ヲ計ルコト
 - 七、漁獲物販賣ニ關シ便益ヲ計ルコト
 - 八、漁船漁具ノ改良及保管ヲ爲スコト
 - 九、漁業ノ調査探檢及水族ノ保護
 - 十、通漁ニ關シ功績アル者ヲ表彰シ又ハ組合員ノ通漁中特別ノ善行アル者ニ賞ヲ爲スコト
 - 十一、其他組合員ノ共同ノ利益ヲ増進スルニ必要ナル施設ヲ爲スコト
- 組合ハ巡邏船ヲ備ヘ必要ニ應シテ各支部ニ廻航セシメ漁場ヲ巡邏シテ情況ヲ視察シ漁業者ノ保護取締ニ任シ或ハ禁漁區域ヲ指定シテ永遠ノ利益

ヲ計リ漁船ノ集中港タル釜山ニ救難準備ヲ爲シ其他郵書保管函ヲ重ナル漁場ニ設置シ報告通信ノ機關ヲ設ケ漁夫ノ惡弊ヲ匡正スルニ努ムル等各般ノ施設ヲ爲シ韓國通漁ノ中央機關トシテ能ク其任務ヲ盡シツツアリ我國庫ハ舊組合聯合會時代ヨリ之ニ對シテ補助金ヲ下付シ其事業ヲ援ク其額明治三十三年度ニ於テ一萬圓同三十四年度以降ハ毎年二萬圓トス

(三) 捕鯨取締

韓國ノ東海岸ハ世界有數ノ捕鯨漁場ニシテ日露戰役前ニ在リテハ露國會社特許ヲ得テ事業ニ從ヒ近來日本人ノ同事業ヲ經營スルモノ亦少カラス其結果漸次濫獲ニ流レ永遠ノ利益ヲ害スルニ至レルヲ以テ隆熙元年即チ明治四十年十月法律第七號捕鯨業管理法ヲ發布シ漁期根據地、漁業方法等ニ關シテ制限ヲ設ケ若クハ農商工部ニ於テ適當ニ之ヲ取締ルノ方法ヲ設ケタリ

(四) 製鹽業

韓國從來ノ製鹽法ハ頗ル幼稚且不經濟ニシテ其製品モ亦隨テ劣惡ヲ免レズ近時支那鹽及臺灣鹽ノ輸入年毎ニ増加ヲ來タシ韓國ノ製鹽業ハ漸次衰



類ニ傾ケリ然カモ韓國ノ地形ハ決シテ製鹽業ニ適セサルニアラス其東海岸及南海岸一部ノ地質ハ砂地ニシテ從來韓國及日本ニ行ハルル製鹽法ニ適シ西海岸及南海岸ノ東部ハ粘土ニ富ミ彼ノ臺灣及關東州等ニ行ハルル天日製鹽法ヲ施行スルニ適ス若シ勸奨其宜シキニ適セハ獨リ産業ノ開發上、有望ナルノミナラス又以テ一財源ト爲スニ足ルヘシ乃チ財政顧問部ハ明治四十年先ツ製鹽試驗場ヲ設置スルニ決シ京畿道朱安(仁川附近)慶尙南道龍湖(釜山附近)ニ之ヲ設置シ前者ニ於テハ天日法ニ依リ後者ニ於テハ日本入濱式ニ依リ製鹽法ノ試驗及模範事業ヲ開始シタリ

朱安試驗場

朱安ニ於テハ明治四十年五月工事ニ着手シ必要ノ建物及鹽田ヲ築設セリ鹽田ハ堤防(千六百五十坪)海水貯溜池(千三百五十坪)蒸發池二箇(千八百坪及五百八十八坪)結晶池(三百二十坪)鹹水溜(三十六坪)ヨリ成リ九月四日作業ヲ開始シ同月中旬約五千四百斤ノ製品ヲ得十月ハ降雨多ク且冬期ニ向ヒタルヲ以テ千五百餘斤ヲ製スルニ止メ十一月以降ハ作業ヲ中止セリ次ニ龍湖ニ於テハ同年六月工事ニ着手シ同シク必要ノ建物及鹽田(日本式二千八百餘坪)折衷式二千五百餘坪(韓國式千七百餘坪)釜竈ヲ築設シ同年中四千六百

龍湖試驗場

餘斤ノ收量アリ同年中ニ於テハ何レモ作業日數少ク未タ標準ト爲スニ足ラサレトモ其成績頗ル有望ナルヲ認ム
 明治四十年末ノ官制改正ニ當リ農商工部水産局ニ鹽務課ヲ置キ製鹽業ニ關スル行政ヲ管掌セシメ製鹽試驗場モ亦同部管理ノ下ニ其事業ヲ繼承シ且漸次規模ヲ擴張セリ

第四節 鑛業

(二) 法規

韓國ノ鑛産ニ就テハ何等統計ノ徵スヘキナシト雖、金ノ輸出額年々五百萬圓ヲ下ラス其他銀、銅、鐵、黑鉛、石炭等ノ產出アルニ察スレハ一箇年ノ礦物生産總額ハ少クモ六百萬圓ヲ下ラサルヘシ今日ノ幼稚ナル鑛業ヲ以テ尙此ノ如シトセハ前途ノ有望知ルヘキナリ然カモ韓國政府從來ノ鑛業行政ニ至リテハ蕪雜モ亦甚シク殆ント制度法規ノ存在ナキニ等シ或ハ農商工部大臣自ラ鑛山ニ對スル處分ヲ爲スアリ或ハ宮内官吏若クハ地方派遣官擅

從來ノ鑛業行政

ニ之ヲ許否スルアリ直接皇帝ヨリ特許ヲ得タリト稱スルモノノ如キ亦之
 ナキニアラス鑛業權附與ノ手續此ノ如ク亂雜ナルノミナラス故ナクシテ
 一ヒ與エタル權利ヲ取消シ若クハ同一鑛區ヲ前後數人ニ附與スル如キモ
 亦甚々珍トナサス其結果獨リ權利ノ安固ヲ缺キ事業ノ發達ヲ妨クルノミ
 ナラス其既ニ業務ヲ營ムモノニ對シテハ農商工部度支部宮内府等各自隨
 意ニ鑛稅ヲ課シ其間又地方官吏ノ恣ニ誅求ヲ試ムルアリテ到底堅實ナル
 事業ノ發達ヲ期シ難キ狀態ニ在リタリ此ニ於テ先ツ鑛業法規ヲ制定シ鑛
 業行政ヲ確立スルノ必要甚大ナルヲ認メ韓國政府ニ忠告スル所アリ明治
 三十九年七月鑛業法砂鑛採取法並附屬法令發布セラレ同年九月十五日ヨ
 リ之ヲ實施ス此ニ於テ韓國初メテ鑛業制度ヲ有スルニ至レリ

鑛業法及砂鑛採取法ノ内容ハ(一)未採掘ノ鑛物廢鑛及鑛滓ノ所屬判明セサ
 ルモノハ總テ之ヲ國ノ所有ト定メ(二)獨占ヨリ生スル弊害ヲ慮リテ鑛區ニ
 對シ一定ノ制限ヲ定メ鑛業上必要アル時ハ他人ノ土地ヲモ強制使用スル
 コトヲ得セシメ(三)從來不安定ナリシ鑛業權ヲ保護シ法規ニ據ルノ外漫ニ
 許可ヲ取消スユトナク且其權利ハ賣買讓與相續及抵當ノ目的ヲラシメ(四)

鑛業法規

日本鑛業
法規トノ
比較

鑛業稅及鑛區稅ヲ設ケテ從來區々タリシ賦課ヲ一定シ並出願其他ニ就テ
 手数料納付ノ制ヲ立テ(五)競願者ニ對シテハ出願日ノ前後ニ依リテ之ヲ決
 定スルコトトシ(六)國際條約ノ結果トシテ鑛業ヲ營ム場合ノ外外國人ハ直
 接鑛業ノ許可ヲ得ル能ハサリシヲ改メ外國人モ尙本法ノ規定ニ從ヒ直接
 出願許可ヲ得ルノ途ヲ開キ(八)宮内府所屬鑛山ノ錯雜セルモノヲ整理指定
 シテ之ヲ公示スルコトトシタル等其重ナルモノナリ而シテ鑛山ニ對スル
 處分ハ事外國人ニ關スルコト多キヲ以テ其國有タルト宮内府所屬タルト
 ナ間ハス總テ統監ノ同意ヲ要スルコトトシ以テ其妥當ヲ期セリ

更ニ之ヲ日本鑛業法規ニ比較スルニ(一)韓國ノ法規ハ國籍ノ如何ヲ問ハス
 シテ鑛業權者タルヲ得セシメ(二)日本ノ法規ニ謂ユル試堀權ヲ認メス(三)競
 願ノ取扱ニ付願書到達日ノ前後ヲ主トシ其同日ナルモノ及宮内府所屬鑛
 山ニ關シテハ農商工部大臣ニ裁定ノ權ヲ與ヘ(四)鑛業監督ニ關スル規定ノ
 寬嚴ニ於テ異ル所アルヲ見ル

宮内府所屬鑛山
止

鑛業法ニ依リ指定セラレタル宮内府所屬鑛山ハ韓國ニ於テ最モ鑛産ニ富
 メル二十六郡ヲ含ミ其位置ハ咸鏡南道平安南北道黃海道ヲ主トシ江原道

及忠清南道ノ六道ニ跨レリ此ノ如キ廣大ナル面積ニ亘リ宮内府自ラ鑛業ヲ經營スルノ至難ナルハ勿論既ニ未採掘ノ鑛物ヲ一律ニ國ノ所有ト規定スル以上別ニ宮内府所屬鑛山ヲ指定シ別様ノ手續ニ依リテ其經營ヲ民間ニ許可セントスル如キハ徒ニ繁褥ヲ加フル所以ニ外ナラス蓋シ從來國家皇室ノ分界明ナラスシテ動モスレハ混同ヲ免レサリシ餘弊ト鑛山ニ對スル傳來ノ事情之ヲ然ラシメタリト雖法規ノ統一上遺憾ナシトセサルナリ乃チ明治四十年八月ニ至リ鑛業法及砂鑛採取法ヲ改正シ同時ニ宮内府所屬鑛山ヲ廢止シテ之ヲ開放スルニ至レリ此ニ於テ鑛業ニ關スル法規始メテ一貫スルヲ得タリ

(二) 事業

法規既ニ制定セラレタリト雖其運用ハ韓國ノ行政官ニ一任スヘキニアラス依テ農商工部ニ鑛山事務局ヲ置キ明治三十九年九月一日ヨリ其事務ヲ開始シタリ同局ノ總裁ハ農商工部大臣之ヲ兼テ聘用本邦人ヲシテ主トシテ事務ヲ管セシム明治四十一年一月一日農商工部新官制實施セララルニ及ヒ同局ハ廢セラレ農商工部鑛務局ニ於テ其事務ヲ繼承シタリ

鑛山事務局

鑛業出願數

明治三十九年九月十五日鑛業法規施行ヨリ同四十年十二月末日ニ至ル鑛業出願ハ總計五百八十八件ニシテ其内譯左ノ如シ

鑛業出願受理數 (自明治三十九年九月十五日至明治四十年十二月末日)

種別	種別			合計
	日本人	韓人	外國人	
鑛業許可願	三四八	四〇	一五	四〇三
砂鑛採取願	一一八	五七	一	一八五
合計	四七六	九七	一五	五八八

(備考) 本表中日韓人又ハ日本人ト他ノ外國人トノ共同出願ハ日本人出願中ニ合算セリ

前表中、元宮内府所屬鑛山ニ對スル出願ハ左ノ如シ

元宮内府所屬鑛山出願受理數 (自明治三十九年九月十五日至明治四十年十二月末日)

種別	種別			合計
	日本人	韓人	外國人	
鑛業許可願	六二	一三	一三	八七
砂鑛採取願	二七	一七	二	四六
合計	八九	三〇	一五	一三三



外英韓シンヂケートカ殿山ノ代償トシテ要求シタル龜城獨韓シンヂケートカ金城ノ代リニ要求シタル宣川ヲ始メトシテ英國人關係ノモノニ楚山日米人關係ノモノニ熙川佛國人關係ノモノニ昌城伊國人關係ノモノニ厚昌アリ此等ハ何レモ舊宮内府所屬鑛山ニ係リ鑛業法規實施後ニ至リテ許可セラレタリ尙米國人「コーブルラン」ニ對スル咸鏡南道甲山銅鑛ノ處分ハ明治四十一年五月中其協定ヲ終リ上記佛國人及伊國人ハ目下各特許セラレタル方面ニ於テ鑛區ノ選定中ニ屬ス今外國人關係ノ鑛山ヲ列舉スレハ左ノ如シ

外國人關係ノ鑛山

- 一、鑛業法規實施前特許ノ分
 - 平安北道雲山金鑛 米國雲山金鑛會社
 - 忠清南道稷山金鑛 日本澁澤淺野組合
 - 黃海道遂安金鑛 英韓シンヂケート
- 二、鑛業法規實施後許可ノ分
 - 平安北道楚山金鑛(明治四十年三月許可) 英國ハリス
 - 平安北道宣川金鑛(同上及同年五月許可) 獨韓シンヂケート

平安北道龜城金鑛(明治四十年五月許可)

英韓會社

平安北道熙川金鑛(同上)

日本津田鍛雄(米人ト合同)

平安北道昌城金鑛(明治四十年七月許可)

佛國サルタレル

平安北道厚昌金銅鑛(明治四十年八月許可)

伊國鑛山會社

江原道華川郡黑鉛鑛ハ明治四十年五月米國人「コーブルラン」ニ平安北道定州郡石油鑛ハ米國人「マイヤー」及日本人二名ニ江原道江陵郡黑鉛鑛ハ同四十年二月米國人「モリス」ニ慶尙北道咸昌郡黑鉛鑛ハ同三月獨國スキバ會社及日本人一名ニ許可セラレタレトモ手續ニ於テ上記楚山以下ノ分ト異レリ此等ハ舊宮内府所屬鑛山ニアラス隨テ其許可ハ全然一般法規ニ依リタルモノトス以上外國人關係ノ鑛山ハ雲山宣川及稷山ヲ除キ他ハ未タ事業ヲ開始スルニ至ラス若クハ單ニ試掘試鑿ノ狀況ニ在リ

韓國ノ鑛山ハ各國人間ニ於ケル利權競争ノ目的物トシテ曾テ其要求相次ケリト雖上記ノ如ク鑛業法規實施ヨリ明治四十年八月同法規改正ニ至ル迄ノ間ニ略々舊來ノ關係アル鑛山ノ處分ヲ了シ然ラサルモノハ明治四十年ニ入リテ之ヲ終ヘ今後ニ於テハ日本人並ニ他ノ外國人ニ對シテモ韓

韓國鑛山ノ開放

國人ト同シク鑛業法規ノ下ニ鑛業權ヲ許可スルコトナレリ

(四) 官營鑛山

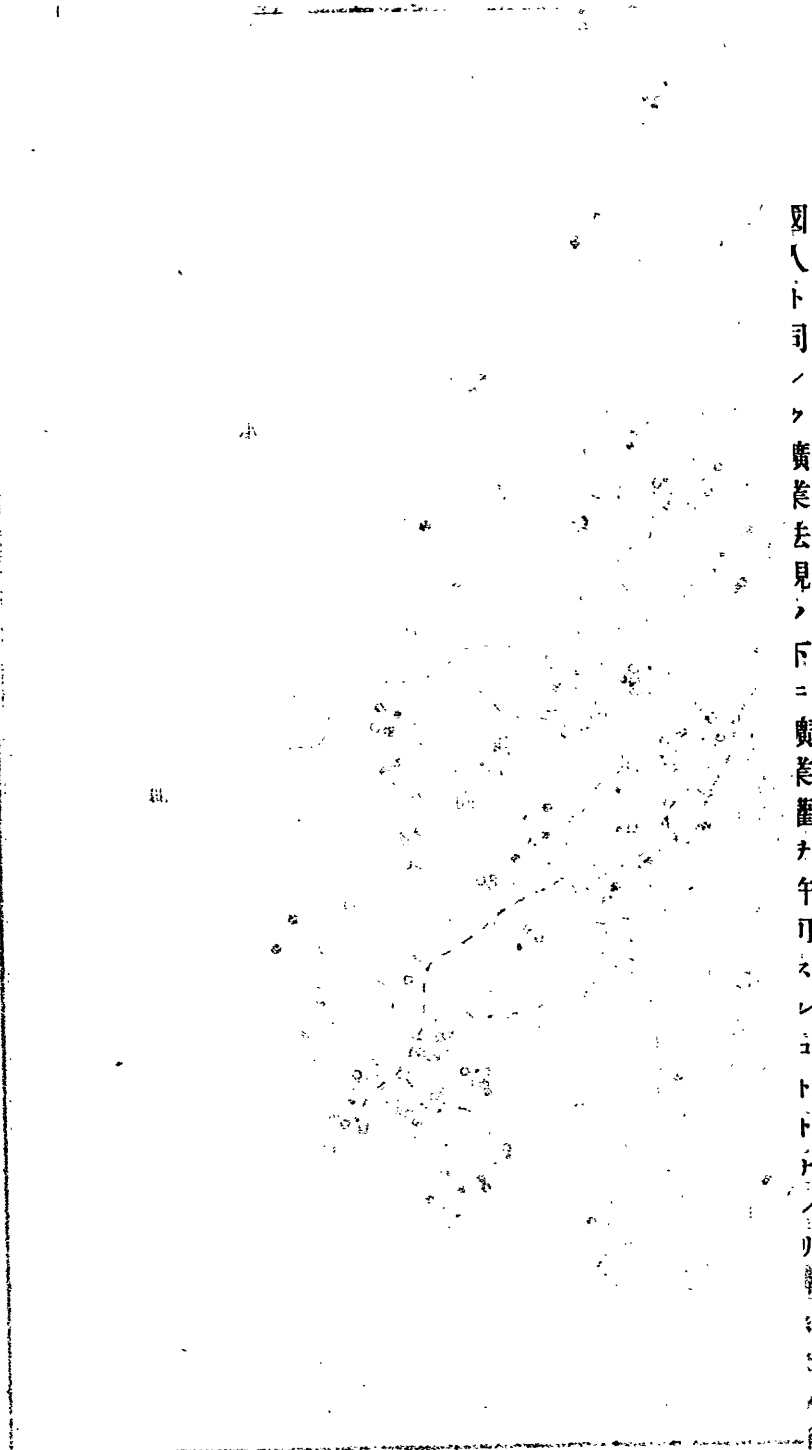
平壤附近ノ無烟炭鑛ハ曾テ其採掘作業ヲ外國人ノ經營ニ委シタルコトアルモ事業久シク中廢ニ歸セリ依テ明治四十年農商工部管理ノ下ニ平壤鑛業所ヲ置キ政府ノ直營トシテ同鑛山ヲ開發シ一箇年三十萬圓ノ支出ヲ以テ六萬噸ノ無烟炭ヲ採掘スルノ計畫ヲ立テ同年八月以來著々事業ヲ進捗シツツアリ同年末ニ至リテ官制ヲ改正シ特別會計ヲ設置シ事業ヲ經營セシム其產出石炭ノ内約三萬噸ハ清韓兩國ニ於テ販路ヲ見出シ得ヘク他ハ海軍省所管徳山煉炭所ニ於テ煉炭材料ニ供スル希望アル由ナレハ此方面ニ於テモ漸次販路ヲ擴張シ得ヘシ其炭質ハ頗ル優良ニシテ炭量モ亦多大ニ將來漸チ以テ事業ヲ擴張スルヲ得ヘキ見込ナリ

咸寧鐵鑛
 黄海道殷栗長連載寧三郡ニ跨レル鐵鑛ハ其質頗ル優等ナルノミナラス地表ノ目算ヲ以テスルモ優ニ三十萬噸ヲ採掘シ得ヘキ望アリ農商工部ハ其鑛業權ヲ收メ作業一切ハ官内府經營ノ舊ニ依リテ請負ニ付スルノ得策ナルヲ認メ明治四十年十二月舊官内府ノ請負者タリシ三名ノ日本人ニ採鑛

平壤無烟炭坑

礦工等ト巨クヘキモノヲ專クレバ價ニ度支部月雇烟玉製造所及印刷局

因ハト司ノク廣差去見ノ下ニ廣差産ヲ午町ニレトトノリ



及運搬ヲ請負ハシメタリ採鑛量ハ毎年載寧郡内ヨリ四萬噸殷栗長連兩郡
ヨリ二萬噸合計六萬噸トシ向後五箇年ヲ期限トス鑛石ハ總テ枝光製鐵所
ニ送附シ農商工部ハ製鐵所ヨリ拂渡ヲ受ケタル鑛產物代金中ヨリ殷栗長
連ノ分毎噸一圓十一錢載寧ノ分毎噸四十六錢ヲ引去リ殘餘ハ請負人ニ給
付スル條件トス右事業監視ノ爲鎮南浦ニ鑛務局出張所ヲ設ケ局員一名ヲ
滞在セシメ且枝光製鐵所ニモ囑託員ヲ駐留セシム同所ノ事業ハ明治四十
一年三月ヨリ著手シタリ

第五節 工業

(一) 官業

工業ノ現 韓國ニ於ケル工業ハ從來極メテ幼稚ニシテ僅ニ家内の手工業ニ依リ日常
必需ノ物品ヲ製造スルノミ日本人若クハ他外國人ノ營メル電燈電力事業
醸造業鐵工業等ヲ除キ國內ニ於テ殆ント一工場ヲ見サル状態ニ在リ若シ
強テ工業ト目スヘキモノヲ舉クレハ僅ニ度支部所屬煉瓦製造所及印刷局
産業

煉瓦製造所

ノ事業ヲ數フヘキノミ
煉瓦製造所ハ初メ度支部建築所ニ屬シ工業部ト稱ス明治三十九年十月ノ創立ニ係ル其事業ハ煉瓦瓦及土管ヲ製造シ主トシテ官公建築並事業ノ需要ニ應スルヲ目的トシ煉瓦工場ハ漢江沿岸麻浦ニ瓦及土管工場ハ京仁鐵道沿線永登浦ニ設備シ前者ハ明治四十年四月中旬ヨリ後者ハ同七月下旬ヨリ瓦ノ製造ヲ同九月ヨリ土管ノ製造ヲ開始セリ蓋シ韓國ノ氣候風土ハ煉瓦造家屋ヲ以テ遙ニ木造家屋ニ優レリトスルモ現ニ民間工場ニ於テ製造セラレル煉瓦ハ品質劣惡ニシテ殆ント實用ニ堪ヘス之ヲ内地ニ仰ケハ運賃其他ノ爲價格頗ル不廉ナリ是レ官公建築ノ需要急ナルヲ機トシ摸範事業トシテ其製造ニ著手シタル所以ナリ瓦及土管ノ製造モ亦大體ニ於テ同様ノ理由ニ出ツ其資本金ハ通シテ二十六萬五千圓内十四萬圓ヲ煉瓦工場ノ固定資本六萬九千圓ヲ瓦及土管工場ノ固定資本トシ五萬六千圓ヲ流通資本ニ宛ツ其生産力ハ煉瓦一日三萬箇瓦一年百萬枚土管一年七萬本トス生産品ハ煉瓦ニ在リテハ大韓醫院議政府平理院工業傳習所ノ建築及稅關工事部水道局等ニ供給シ瓦モ同様官公建築ニ供用シ土管ハ之ヲ民間ニ

印刷局

拂下ケタリ明治四十年官制改正ニ當リ煉瓦製造所ト稱シ依然建築所ニ屬セシム其經理ハ特別會計トシ未タ純益ヲ見サルモ收支相當リテ損失ナシ印刷局ハ在龍山典圖局ノ廢止後其建築物ヲ利用シ度支部所管ノ下ニ印刷製紙及鐵工ノ事業ヲ創メタルニ起ル爾後業務較々其緒ニ就カントスルニ當リ明治三十九年三月不幸ニシテ火災ニ罹リ一時印刷事業ノ全能力ヲ失ヘルモ至急其回復ニ努メ併セテ漸ナリテ擴張ノ方針ヲ取り技術モ亦次第ニ進歩セリ明治四十年更ニ擴張ノ計畫ヲ立テ工場ヲ増築シ機械ヲ増置シ技術者ヲ傭聘シ最精巧ナル印刷物モ亦皆同局ニ於テ製造シ得ル程度ニ進歩センメントス本擴張計畫ニ據ル明治四十年度ノ支出高ハ三萬四千餘圓ニシテ同四十一年豫算ニハ十三萬一千餘圓ヲ計上セリ製紙及鐵工事業モ亦創業以來漸ナリテ進歩シ擴張計畫成功ノ後ニハ印刷事業ト共ニ一層其事業ヲ發達セシメントス印刷局ノ事業モ亦特別會計トシテ經理セララルモ未タ收支相償フニ至ラス明治四十一年豫算ニ於テ七萬圓ノ政府支出金ヲ計上セリ

工業ノ状態上記ノ如クナルヲ以テ工業ニ關シ何等特別ニ施設シタル所ナシ官立工業傳習所ノ創立ハ其一端ト見做スヘキモ別ニ教育ノ項ニ詳記スルヲ以テ略ス

第六節 商 業

(一) 京城博覽會

博覽會、展覽會其他類似ノ施設ハ從來全ク韓國ニ知ラレスト雖、産業ノ促進並一般風氣ノ開發上、裨益スル所小ナラサルヲ認メ、明治四十年五月日韓兩國ノ有志相計リテ京城博覽會ヲ發起シ、同九月一日ヨリ同十一月十五日ニ至ル二箇月半ノ間之ヲ開設シタリ、其經營ハ私立團體ノ名義ヲ以テシタリト雖、韓國政府ハ同會ニ對シテ二萬五千圓ノ補助金ヲ下付シ、日本側ニ於テモ公私各般ノ便宜ヲ供與シ、事實ニ於テ日韓官民合同ノ組織ニ成レリ、偶々其準備期中ニ於テ京城七月ノ政變アリ、引續キ各地方ニ暴徒蜂起シ、出品ノ蒐集、觀覽者ノ招致トモニ障害ヲ受クルコト少ナカラサリシニ、拘ラス出品

日韓官民
合同ノ組
織

點數七萬九千一百二十六點ノ多數ニ上リ、内日本人七萬四千六百餘點、韓人四千五百餘點ニシテ更ニ之ヲ地方別トスレハ、韓國内居住日韓人ノ出品二萬二千六百餘點、日本ヨリノ出品五萬六千五百餘點トス、而シテ内地各府縣中大阪府ノ如キハ二萬六千二百餘點、東京府ハ一萬二千五百餘點、其他富山、京都、兵庫各府縣ノ如キ出品點數最モ多ク、北海道ヨリ臺灣ニ至ル迄各府縣皆多少ノ出品アリ、全然之ヲ缺ケルハ宮崎、沖繩二縣ニ過キス、會場ニ於テハ豫定ノ陳列設備ヲ變更シテ收容ニ努メタルモ尙全部ノ希望ヲ充タス能ハサルノ盛況ヲ呈シタリ、觀覽者ハ最多ノ日ニ於テ一萬人ヲ超エ、總計二十萬八千四百七十七人ニ上リ、内韓人ハ總數ノ七割三分ヲ占ム、又特ニ韓國婦人ノ爲、三回ノ婦人デーヲ催シ、當日ハ婦人ニ限リテ入場セシメ、其觀覽ヲ促セリ、出品物審査ノ結果名譽賞、一等賞、乃至三等賞、又ハ褒狀ヲ受ケタルモノ、日本人一千一百二十一人、韓人一百二人、合計一千二百二十三人ナリ、同會ノ收支ハ收入六萬七千六百四十七圓餘、支出六萬四千八百八十圓餘ニシテ、收入ハ補助金四萬四千五百圓ヲ第一トシ、觀覽料一萬一千八百九十四圓、陳列區使用料四千四百五圓、出品物賣上手數料千六百五十圓、出品物委託料千二百三

十九回、雜收入三千九百五十三圓ヨリ成リ支出ハ事務費二萬千九百二十四圓、設備費二萬千六十九圓、審査費二千二百七十圓、其他諸雜費ヨリ成ル之ヲ要スルニ京城博覽會ハ韓國ニ於ケル此種施設ノ第一著手トシテ豫期ノ効果ヲ擧クルヲ得タルカ如シ

(二) 度量衡

度量衡制
度ノ沿革
由來韓國ノ度量衡制度ハ頗ル不規律不完全ニシテ殆ント計量ノ標準トナスニ足ルモノナシ明治三十五年宮内府ニ平式院ヲ置キ度量衡改正ノ事務ヲ掌ラシメ同時ニ度量衡器專賣ノ目的ヲ以テ同院中ニ度量衡器製造所ヲ設ケ日本人井上宜文ヲシテ專ラ製造檢定ノ事ヲ管セシメ且度量衡規則ヲ制定公布シタリト雖、新制ノ實施全國ニ洽キヲ得ス僅ニ京城、仁川等ノ一部ニ多少新度量衡器ノ販出アリシノミ次テ平式院ヲ廢シテ農商工部ニ度量衡課ヲ置キ明治四十年更ニ官制ヲ改定シテ度量衡事務局トシ井上宜文ノ管理ヲ解キ同年末ノ官制改正ニ於テ再之ヲ農商工部ノ一課ニ復歸セシメタリ法規ニ就テモ其後多少改訂スル所アリシモ不備ノ點尙甚タ少カラス目下法律ヲ改正シ制度ヲ確定スルノ必要ヲ認ムト雖其實施ノ困難ニ慮リ

テ未タ遂行ニ至ラス

(三) 其他ノ施設

韓國ノ商業ハ尙甚幼稚ニシテ國民經濟ノ發達未タ商業時期ニ入ラス隨テ商業上ノ施設トシテ特記スヘキモノ殆ント無シ僅ニ韓人間ニ於ケル商會社ノ設立ニ多少ノ條件ヲ附シ取締ノ一端ヲ行フカ如キ市場、旅閣及客主等特殊ノ商事機關ニ就テ調査ノ歩ヲ進メツツアルカ如キニ過キス

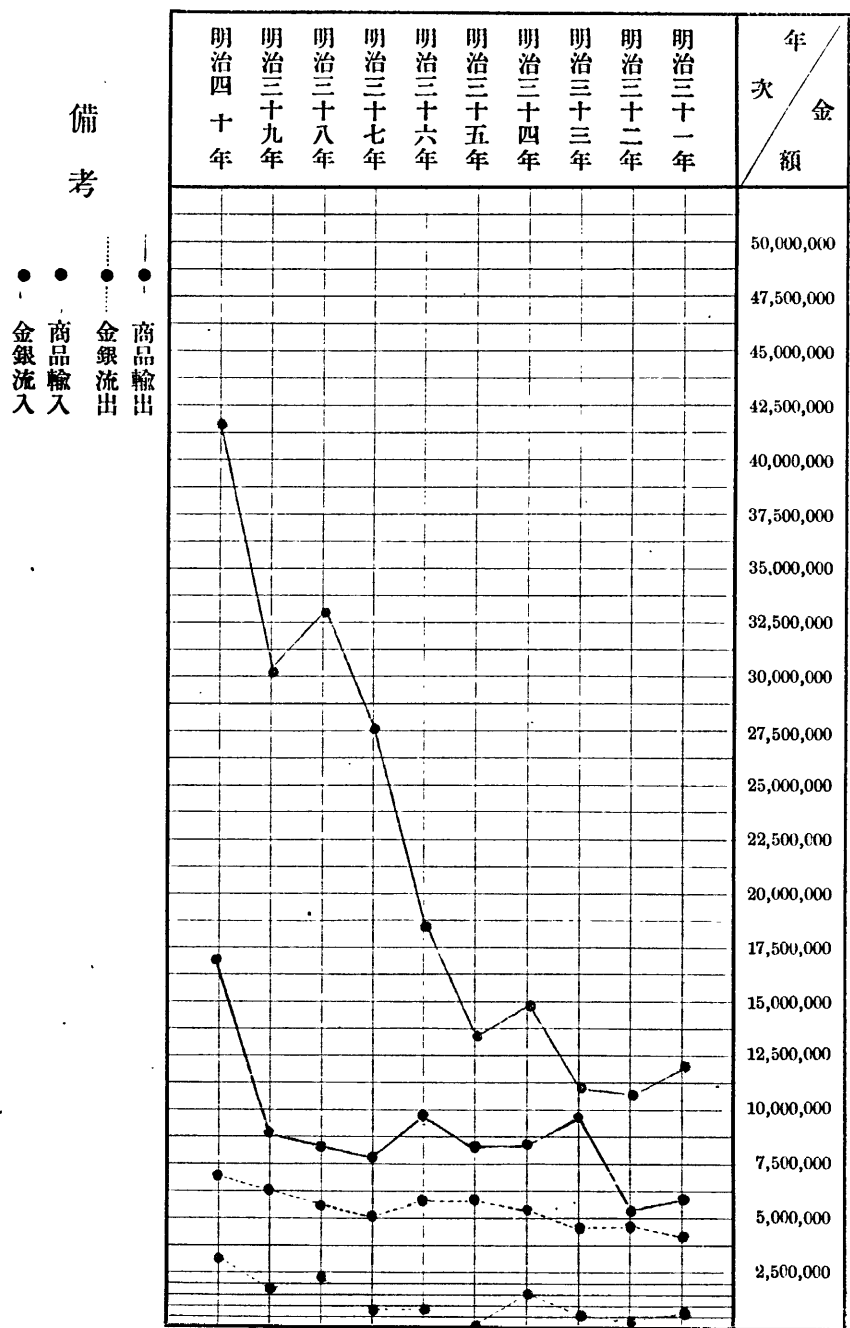
第七節 外國貿易

(一) 貿易ノ發達

貿易ノ發達
韓國ノ貿易ハ年ニ依リ多少ノ消長アリト雖、概シテ發達ノ趨勢頗ル顯著ナリ今最近五箇年ニ於ケル輸出入品及金銀價額ヲ擧クレハ左ノ如シ

種別	明治四十年	明治三十九年	明治三十八年	明治三十七年	明治三十六年
輸出品價	一六九〇〇九二八 <small>圓</small>	九〇三〇四六〇 <small>圓</small>	七九一六五七一 <small>圓</small>	七五三〇七一五 <small>圓</small>	九六六九一三一 <small>圓</small>

最近十年韓國輸出入比較



備考

- 商品輸出
- 商品輸入
- 金銀輸出
- 金銀輸入

輸出 輸入

輸出ハ明治四十年ニ於テ急ニ増加シタル外、從來殆ント停滞ノ域ニ在リ之ニ反シテ輸入ハ日露戰役前後ヨリ最モ急劇ナル發達ヲ示シ明治四十年ナレテ同三十六年ニ比スレハ二倍強、同三十一年ニ比スレハ四倍強ニ當ル是レ第一ニ戰役ノ影響ヲ受ケ第二ニ鐵道通信其他公私企業ノ勃興ニ伴ヒ所要材料其他ノ輸入増加シ軍隊官衙ノ増派増設並日本人ノ在留増加セル結果、各種需用品ノ輸入増加シタル等ヲ主因トス但シ韓國民ノ需要スル物貨

備考 本表ハ再輸入品價ヲ含ム、金銀輸出入ニハ紙幣及銀行券ヲ含マズ

輸入品價	輸出金銀價	輸入金銀價	合計
41,436,653	6,964,246	3,098,778	3,865,468
39,337,581	6,254,295	3,098,778	3,865,468
30,265,178	6,254,295	3,098,778	3,865,468
33,971,852	6,254,295	3,098,778	3,865,468
40,888,423	6,254,295	3,098,778	3,865,468
25,055,281	6,254,295	3,098,778	3,865,468
22,347,218	6,254,295	3,098,778	3,865,468
32,542,956	6,254,295	3,098,778	3,865,468
16,702,223	6,254,295	3,098,778	3,865,468
37,924,517	6,254,295	3,098,778	3,865,468

産業

金銀流出

ノ輸入モ亦連年増進ノ傾向争フ可カラス輸出入ノ狀況右ノ如クニシテ輸入超過ノ甚シキハ韓國貿易ノ一特色ナリ其一部ハ金銀ノ輸出超過ヲ以テ決濟セラルト雖、大部分ハ在韓日本軍隊及官衙ノ經費並官私企業ノ放下資本ニ依リテ國際貸借ノ均衡ヲ得ルモノトス而シテ上表金銀價額中輸出ハ大抵韓國ノ產出ニ係ル地金ニシテ其額毎年四百萬圓乃至五百萬圓臺ヲ往來シ輸入ハ主トシテ貨幣整理事業ノ進行ニ伴ヒ日本ニ於テ鑄造シタル補助銀銅貨ヨリ成ル

輸出品

輸出品ノ大宗ハ米及豆類ニシテ米ノ輸出ハ戰役後甚タ振ハサリシモ明治四十年ニ於テハ一躍七百萬圓ニ上リ同年ニ於ケル輸出劇增ノ一原因ヲ爲セリ豆ハ最近數年常ニ二三百萬圓臺ヲ往來シ四十年ニ於テハ殆ント四百萬圓ニ達セリ其他ハ家畜、牛皮、雜穀及特有產物タル人蔘ノ如キニ過キス要スルニ韓國ノ輸出品ハ粗雜ナル農牧ノ生産物ニ外ナラサルナリ之ニ反シテ輸入品ハ精製品若クハ半製品其大部ヲ占メ綿布、綿絲ハ其大宗タリ其他重ナルハ鐵道及諸工事ノ材料、絹布、絹綿製品、石油、砂糖、烟艸、諸雜貨、木材等ヨリ成ル今一々其數量價額ヲ舉ケス之ヲ要スルニ韓國ノ貿易ハ最近數年ニ

輸入品

於テ異常ノ發達ヲ遂ケタルヲ以テ今後其進歩ノ割合ニ於テ或ハ減退スル
 コトアルヘキモ一方ニ於テ韓國内地ノ産業漸次開發セラレルニ伴ヒ依然
 其發達ヲ持續スヘキヤ明ナリ

(二) 日韓貿易

日韓貿易
 韓國ノ貿易ハ開港以來日本ニ對スル輸出入ヲ以テ其最重ナルモノトス今
 最近十箇年ニ於ケル日韓貿易ノ趨勢ヲ示セハ左ノ如シ

年次	日本へ輸出	日本ヨリ輸入	同上合計	輸出總額ニ對スル割合	輸入總額ニ對スル割合	輸出入總額ニ對スル割合
明治四十年	一、二五五、五三三	二、七三六、三八七	三、九九〇、九二〇	七七	六六	七一
明治三十九年	六、九一六、八四八	二、二九一、四二四	二、九八三、一〇〇	八五	七七	七九
明治三十八年	五、三八九、九一四	二、三五六、一八九	二、八九五、一八三	七八	七三	七四
明治三十七年	五、六九七、三七一	一、九〇〇、七二八	二、四七〇、四六八	八二	七一	七三
明治三十六年	七、五九六、六二四	一、一五五、四九六	一、九一五、一五九	八〇	六三	六九
明治三十五年	六、五四九、六四六	八、六八九、二二〇	一、五二三、八六六	七九	六四	六七
明治三十四年	七、四〇二、二一六	九、〇五一、八八一	一、六四五、三九七	八七	六二	七一
明治三十三年	七、二三三、四一六	八、二四一、二九六	一、五四七、三七二	七七	六二	七五
明治三十二年	四、二〇五、三八二	六、六五八、二〇〇	一、〇八六、三五八	八四	六五	七一
明治三十一年	四、五二二、九六三	六、七七七、七一	一、一三〇、一三四	七九	五七	六四

(備考) 本表ハ再輸出入品ヲ含マズ

日韓貿易ノ進歩

即チ最近十箇年ニ於テ日本ニ對スル輸出ハ總額ノ七割七分乃至八割七分
 ナ占メ日本ヨリノ輸入ハ總額ノ五割七分乃至七割七分ヲ占ム而シテ貿易
 總額ニ於テ日本ニ對スルモノハ實ニ六割四分乃至七割九分ノ間ヲ昇降ス
 日本ニ次テ韓國貿易ノ重位ヲ占ムルハ清國ナレトモ最近十箇年中清國ヘ
 ノ輸出最高額ニ上リシ年ニ於テモ尙日本ニ對スル同年ノ輸出ノ三分一ニ
 足ラス又同國ヨリノ輸入ニ至リテハ曾テ日本ト雁行ノ勢ヲ示サントシタ
 ルコトアルモ近年ニ至リテ停滞ノ狀況ニ陥リ今ヤ日本ニ對比シテ六七分
 一ヲ占ムルノミ其他韓國ノ貿易上有力ノ地位ヲ占ムルモノハ英米兩國ニ
 シテ他ハ未タ云フニ足ラス

明治四十年ノ輸入貿易ニ於テ日本ハ其地位較々退キタルノ觀アルモ是レ
 主トシテ貿易統計調製ノ方法ヲ改正シタルニ依ル蓋シ從來韓國ノ稅關報
 告ハ貨物ノ最近經由港ニ依リテ貿易額別表ヲ作製シタルモ同年以後成
 ルヘク貨物ノ生産又ハ製造地ヲ採ルノ方式ニ改メタレハナリ隨テ右ノ統
 計以外日本諸港ヲ經由シタル多數ノ外國貨物アルヘキハ無論トス

金銀ノ出入ニ至リテハ日本獨リ擅場タリ今明治三十九年金銀出入額ヲ見ルニ輸出六百二十五萬餘圓中日本ハ約五百六十六萬圓ヲ占メ其他ハ銀價ノ關係上清國ニ向テ銀貨五十一萬餘圓ノ流出アリシノミ又輸入ニ至リテハ日本ヨリ鑄造新貨ノ輸入セラレルモノヲ除キ日本及他外國トモ殆ト之アルヲ見ス

(三) 船 舶

貿易額ノ増進ニ伴ヒ出入船舶モ亦逐年増加セリ今最近五箇年ニ於ケル出入船舶隻數及噸數ヲ舉クレハ左ノ如シ

年次	入 港		出 港	
	隻數	噸數	隻數	噸數
明治四十年	一一、一〇	三、〇九二、〇二八	一一、一五四	三、一〇一、四二〇
明治三十九年	一〇、二七三	二、七七〇、一〇九	一〇、二三三	二、七四六、九一九
明治三十八年	九、九四八	二、〇〇六、二二四	九、八八五	一、九五五、二六四
明治三十七年	七、二五九	一、三九二、四七三	七、〇六八	一、三八八、〇三八
明治三十六年	七、一五九	一、七四六、〇〇五	七、一二〇	一、七四一、八八四

〔備考〕 隻數ノ甚タ多キハ日清韓、ジャンクヲ含ムニ因ル

日本航業
韓國沿海ノ航海ハ事實上殆ント日本船舶ノ獨占スル所ニシテ明治三十六年ニ於テハ入港船舶ノ七割八分以上ヲ占メ同三十七年ニハ戰役ノ爲、較々減少セルモ三十八年ニ至リテハ六割八分マテ回復シ三十九年ニハ八割トナレリ

(四) 貿易ニ對スル施設

貿易ニ對スル施設トシテハ税關設備ヲ整ヘ沿岸ニ燈臺其他航路標識ヲ建設シ保稅制度ヲ實行セルコト等ヲ重ナルモノナリトス何レモ別項ニ詳記シタルヲ以テ略ス

第八節 觀 測

韓國航業ノ嚆矢
明治十七年我内務省地理局ニ於テ暴風警報ヲ發スルコトトナルヤ日本海方面及北海方面ニ於ケル暴風雨ヲ前知スル爲、韓國ニ於ケル氣象觀測ヲ必要トシ在釜山我電信局員ニ囑託シ同年六月十七日以來一日三回ノ觀測ヲ

施行セリ之ヲ韓國ニ於ケル氣象觀測ノ嚆矢トス其後韓國各港ニ海關ヲ置クニ至リ清國海關ノ例ニ倣ヒテ英國式觀測ヲ施行シ又帝國各領事館在京城露國公使館殷山嶺山等ニ於テモ觀測ヲ爲シ來レルモ器械ノ裝置觀測ノ方法トモニ未タ宜シキヲ得タリト云フ可ラス或ハ期間ノ斷續セルモノアル等尙遺憾ヲ免レサル狀況ニ在リタリ

戰役ト觀測

明治三十七年戰役起ルヤ我文部省ハ軍事當事者ノ要求ニ應シテ韓國沿岸樞要ノ地點ニ臨時觀測所ヲ設ケ同四十年四月統監府觀測所設置セララルニ及ヒテ其事業ヲ引繼キ同四十一年四月一日ヨリ更ニ統監府觀測所ノ事業ヲ韓國政府農商工部ニ繼承シ韓國政府ハ現ニ仁川ニ觀測所ヲ置キ各地ニ觀測所ヲ設ケ氣象ノ觀測ニ從ハシム其名稱及觀測開始年月左ノ如シ

韓國政府ノ觀測所

觀測所(仁川)	明治三十七年四月十日
釜山測候所	同上
元山測候所	同上
木浦測候所	同年三月二十五日
龍岩浦測候所	同年五月一日
城津測候所	明治三十八年五月十三日

京城測候所	明治四十一年十月一日
平壤測候所	同年一月一日
大邱測候所	同年一月七日

其他觀測所ノ委託ニ依リ現今觀測ヲ施行シツツアルモノ陸軍病院鐵道管理局、度支部財源調查局等凡テ十九箇所アリ以テ韓國各道ノ氣象ヲ調査シ一般實業家ノ參考ニ資スルト同時ニ其直接應用トシテ天氣豫報及暴風警報ヲ發シ且船舶ノ爲仁川觀測所、同月尾島望樓、釜山、木浦、城津、龍岩浦各測候所ニ警報信號所ヲ設置セリ

第十一章 公共事業

第一節 道路

韓國ノ道

治道局

治道事業

韓國ニ於ケル道路ノ荒廢ハ殆ント極度ニ達シ通邑大都ノ間、尙且道路ヲシキ道路ヲ見ス産業及人文ノ發達上、至急之ヲ改修スルノ必要アリ明治三十年三月起業資金債成立スルヤ其一部ヲ割テ重要道路ヲ治ムルニ決シ同四月内部ニ治道局ヲ置キ其事務ヲ管セシム而シテ第一期事業トシテ選定シタル線路ハ鎮南浦平壤元山間六十三里、光州木浦間二十五里、大邱慶州迎日灣間三十五里、全州群山間九里、合計四線延長百三十二里ニシテ工事費豫算百四十九萬六千圓トス但鎮南浦平壤元山間ハ先ツ平鎮間ヨリ著手シ平元間ハ工事費豫算ノ許ス限ニ於テ起工スル豫定ナリ此四線ハ何レモ鐵道ト港灣又ハ鐵道港灣ト大邑トヲ連絡シ韓國内地ニ於ケル縱貫鐵道及沿岸航海ト相待ツテ重要ノ交通路ヲ爲スモノナリ

同年日本ヨリ技師四名、事務官一名、技手八名及熟練ノ工夫十二名ヲ招聘セ

道路ノ設

土地ノ買

工事ノ方

治道功程

シメ韓國ノ技師、事務官、技手及主事ヲ加ヘ統監府技師監督ノ下ニ同八月ヨリ設計及諸準備ニ著手セシメタリ道路ハ分テ二種トシ大邱迎日灣間及木浦光州間ノ道路ハ幅六米突、最急勾配二十五分一、曲線半徑十五米突、群山光州間及平壤鎮南浦間ノ道路ハ幅七米突、最急勾配三十分一、曲線半徑二十米突トシ何レモ兩側ニ一米突ノ下水溝、竝木敷ヲ存ス蓋シ韓國ニ於テ未曾有ノ道路ナリ此等線路ニ當レル日本人ノ所有地ハ大抵無償寄附ヲナシ韓國人民ノ所有地ニ對シテハ政府ヨリ吏員ヲ出張セシメ直接ニ其代價ヲ支拂ヒタリ從來此ノ如キ場合ニ於テ政府ハ多ク土地ノ代價ヲ支拂ハス若クハ中間ノ官吏之ヲ私服スル等、弊害百出ノ狀況ナリシヲ以テ韓民ハ土地代價ノ支拂ヲ受ケテ寧ロ之ヲ怪ムノ色アリ其評價ハ比較的低廉ナリシモ一般ニ之ヲ德トセリ同四十年五月春暖ヲ待テ四線同時ニ起工セリ工事ノ方法ハ京釜鐵道建設當時、請負業者カ往々韓人夫ニ對スル賃金支拂ヲ怠リ且郡守等亦其間ニ乘シテ中飽スル等、弊害甚シカリシニ鑑ミ全部之ヲ直營トシ同年末迄ニ左ノ功程ヲ終レリ

臨時治道功程表 (明治四十年末)

區間	距離	設計距離	竣工距離	設計歩合(千分)	竣工歩合(千分)
大邱迎日灣間	九三二七七 <small>米</small>	七〇二〇〇 <small>米</small>	一六、七五四 <small>米</small>	七五三	一七七
群山全州間	六八二九九	六八二九七	一九七七四	一〇〇〇	二八九
鎮南浦平壤間	五三〇〇〇	五三〇〇〇	六、〇〇〇	一〇〇〇	一一三
木浦光州間	八六九二〇	六三、六六五	二〇、八〇〇	七三三	二三八

臨時治道費ノ會計ハ明治四十年五月公布ノ同會計規程ニ據リテ繼續費トシ總額一百四十九萬六千圓中明治四十年迄ノ支出額六十二萬圓同四十一年度以降支出豫算額八十七萬六千圓ニシテ同四十五年度マテノ年割トス右ノ外同三十九年度ニ於テ日本居留民ノ計畫ニ係ル仁川新道開鑿費補助一萬九千餘圓同平壤道路改修費補助六千餘圓ノ支出アリト雖何レモ一般會計ノ支辨ニ屬シ臨時治道費ニ關係ナシ

第二節 水道

水道事業

韓國ノ都市ハ從來水道設備ヲ有セサルハ勿論地質上適當ナル井水ノ供給

水道局

ヲモ得ル能ハサルモノ多ク衛生上ノ危險甚大ナリ又海港ニ在リテハ船舶給水ノ設備ヲ欠キ貿易ノ發達上其影響少シトセス是ヲ以テ先ツ仁川平壤及釜山ニ水道ヲ設備スルニ決シ明治三十九年四月度支部ニ水道局ヲ置キ事務ヲ管セシム其經費ハ總テ起業資金ヨリ支辨スル計畫ナリ但釜山ハ從來日本居留民團ニ於テ小規模ノ水道ヲ敷設シ恰モ其擴張計畫アルニ際シタルヲ以テ韓國政府ヨリ工費三十五萬圓ヲ出資シテ共同經營ト爲スコトニ協定シ其工事ハ民團ノ委囑ニ依リ水道局ニ於テ之ヲ管理セリ

(一) 仁川水道

仁川水道設計

仁川水道ハ仁川港及其附近樞要村落ノ韓國人諸外國居留民港内船舶ニ給水スルヲ目的トシ將來ニ於ケル人口ノ増殖ヲ見越シ七萬人ニ對スル一日二十八萬立方尺ノ送水量ヲ標準トシテ計畫セリ水源ハ漢江トシ取水場ハ鷺梁津鐵道橋ヨリ上流約十二町漢江ノ中流ニ之ヲ設ケ江ノ左岸臺地一萬五千坪ヲ水道用地トシテ此ニ唧筒室沈澱池瀘過池事務所等ヲ設ク沈澱池ハ三箇瀘過池ハ六個ニシテ計畫水量二日分ヲ收容スルヲ得ヘシ取水唧筒ニ依リ沈澱池ニ入りタル漢江ノ水ハ瀘過池ヲ經テ淨清セラレ更ニ送水唧筒

筒ニ依リ延長三百四十間ノ送水管ヲ通シテ鷺梁津配水池ニ入ル配水池ハ吸水場ノ南方海拔約三百尺ノ高地ニ設ケラレ各面積約六百五十坪ノ二池ヨリ成リ計畫水量半日分ヲ容ルルニ足ル之ヨリ延長約八里十四町ノ間ニ孔徑二十吋ノ鐵管ヲ通シ仁川東北海拔約二百尺ノ高地ニ設ケタル仁川配水池ニ流入ス仁川配水池ノ設計ハ鷺梁津配水池ニ等シ之ヨリ更ニ幹枝ノ鐵管ヲ通シ市街各地ニ送水スル設計ナリ明治三十九年六月水源地送水路其他水道用地ノ實測ニ著手シ同十一月ヨリ用地ヲ買收シ工事ヲ開始セリ工費豫算ハ二百十七萬圓ニシテ内明治四十年迄ノ支出額七十五萬八千六百十六圓殘餘ハ同四十三年迄ニ支出シ工事完成ノ豫定ナリ

(二) 平壤水道

平壤水道ハ城内外市街地全部ニ於ケル日韓人並ニ軍隊營舎ニ給水スルヲ目的トシ計畫給水量ハ人口六萬人ヲ標準トシ一日六百八十萬リートルトス水源ハ大同江本流トシ牡丹臺下綾羅島附近中流ニ之ヲ設ケ綾羅島下端約五萬平方米突ヲ水道用地トシテ沈澄池、濾過池及唧筒所ヲ設ケ沈澄池ハ三箇、濾過池ハ六箇ニシテ計畫水量二日分ヲ收容スルヲ得ヘシ大同江本流

工事ト經

設計

工事ト經

ヨリ取水唧筒ニ依リテ綾羅島ノ沈澄池ニ入り更ニ濾過池ヲ經タル淨水ハ送水唧筒ニ依リテ徑四百ミリメートルノ鐵管ヲ通シ大同江支流ニ架スル鐵橋ヲ超エ乙密臺ニ設ケタル配水池ニ入ル配水池ハ綾羅島地盤ヨリ高キコト四十五米突ニシテ計畫水量半日分ヲ容ルルニ足ル之ヨリ徑五百ミリメートルノ鐵管ヲ通シ城壁ヲ入りテ城内外ニ給水スル設計ナリ明治三十九年十月實測ニ著手シ明治四十年春季ヨリ工事ヲ開始セリ工費豫算ハ一百三十萬圓ニシテ内明治四十年迄ノ支出額五十五萬五百六十八圓、殘餘ハ同四十二年迄ニ支出シ工事完成ノ豫定トス

(三) 釜山水道

釜山水道ハ釜山居留地及其附近佐須土原埋築地、草梁、古館、釜山鎮ニ給水スルヲ目的トシ計畫給水量ハ人口五萬五千人ヲ標準トス水源ハ居留地ノ西北一里高遠見谷ニアル舊水源貯水池ヲ擴張シテ一萬人分ヲ供給シ殘餘四萬五千人分ハ釜山鎮東北二里聖知谷ニ新貯水池ヲ築キ之ヨリ給水スルモノトス舊水源貯水池ハ容積二百五十萬立方尺、新水源貯水池ハ容積一千九百萬立方尺ナリ新貯水池直下ニ濾過池及配水池ヲ設ケ之ヨリ二里十六町

設計

餘ノ間ニ孔徑三百五十「ミリメートル」ノ送水本管ヲ敷設シ伏兵山後部ニ設ケタル市内配水池ニ至ラシム市街配水ノ大部分ハ此配水池ヨリシ一部ハ送水管ヨリ分岐セシメ更ニ一部ハ舊水道ヨリス舊水道ニ對シテハ上記ノ如ク水源貯水池ヲ擴張シ尙瀘過池及配水池ヲ改築シテ其効力ヲ増加セシム工事一切ハ舉ケテ水道局ニ委囑セラレ明治四十年四月起工シ三箇年半ニテ竣成スヘシ其工費豫算ハ一百十七萬圓ナリ協同約款ニ依ル韓國政府ノ出資額ハ三十五萬圓ニシテ内十萬圓ハ起業資金ノ支辨ニ係リ他ハ一般會計ヨリ之ヲ支出ス以上各工事ハ日本技師監督ノ下ニ主トシテ日本技師技手等之ニ當リ工學博士中島銳治及統監府技師中原貞三郎モ囑託ヲ受ケテ設計及工事ヲ輔ク

第三節 港 灣

韓國開港ノ現狀

韓國ノ各開港ハ從來殆ント全ク放任ノ狀態ニ在リテ人工ヲ加フルコト極メテ少ク天然ノ地形ヲ利用シテ僅ニ物貨積卸ノ用ニ充テ不完全ナル關稅

行政ヲ執行スルニ止レリ然レトモ韓國ノ地形タル東海岸ハ屈折極メテ少クシテ天然ノ良澳ニ乏シク西海岸ハ多ク遠淺ニシテ加フルニ潮汐ノ差三十尺ニ上リ大規模ノ港灣改修ヲ行フコト容易ニアラス明治三十九年以降五箇年繼續事業トシテ目下進捗中ノ各開港稅關工事ハ主トシテ海陸運輸交通ノ聯絡ニ關シ關稅行政上必要ノ設備ヲ加ヘントスルノミ大規模ノ築港事業ノ如キハ尙之ヲ他日ニ讓レリ

稅關工事

稅關工事ハ元總稅務司廳ニ於テ之ヲ計畫シ仁川、釜山、元山、木浦、群山、鎮南浦、新義州及清津ノ八開港ニ施行セラル其工費豫算ハ計畫以後數次ノ増加ヲ經テ隆熙二年度即チ明治四十一年豫算ニ計上スル總額三百六十四萬四千五百四十六圓、內明治四十年迄ノ支出額百三十二萬八千餘圓、同年以後ノ支出豫定額二百三十一萬六千餘圓トス今其設計大要ヲ舉クレハ左ノ如シ

仁川

仁川ニ於テハ現在稅關地先並英國領事館ノ丘角ヨリ仁川停車場附近ニ至ル海面約一萬八千坪ヲ埋築シ其水際延長約五百間ヲ物揚場トシ又ハ護岸石垣ヲ築造シ岸頭ニハ起重機ヲ据付ケ鐵造棧橋長六十間ノモノ一基、木造棧橋長四十間ノモノ四基ヲ附設シ埋立地ニハ稅關諸廳舍及約二千二百坪

ノ上屋及倉庫ヲ建設シ鐵道線ヲ導キ海陸連絡運輸ノ便ヲ計ルヲ目的トス
其工費豫算額八十三萬一千餘圓ナリ

釜山

釜山ニ於テハ新停車場ノ設備ト相待ツテ海陸連絡ヲ目的トシ停車場西側
地先一萬三千餘坪ヲ埋築シ其南端ヨリ延長約二百三十九間ノ突堤ヲ築造
シ其内側ニ並行シテ鐵脚片棧橋ヲ設ク棧橋附近ノ水深ハ四尋ニシテ三千
噸内外ノ船舶二隻ヲ同時ニ繫留シ得ルモノトス突堤中部ニハ約千八百坪
ノ上屋及倉庫ヲ建設シ其前面及背面ニハ停車場ト聯絡スル鐵道數線ヲ敷
設シ棧橋上ニ起重機ヲ据付ク又埋立地ノ水際延長三百間ハ物揚場及護岸
石垣ニシテ岸頭ニハ起重機ヲ備エ延長三百八十間ハ凸字形ノ船入場トシ
テ舢舨帆船ノ岸接荷役ヲ便ニシ別ニ在來稅關前面ノ船溜ヲ利用シ沿岸ヲ
物揚場トシテ上屋數棟ヲ建設シ稅關出張所ヲ設ケ水產物輸出入ノ設備ヲ
ナス其工費豫算額百四十萬六千餘圓ナリ

元山

元山ニ於テハ居留地先六千五百坪ヲ埋築シテ上屋倉庫ノ地區トシ一面ニ
ハ安全ナル船入場ヲ構成シ沿岸ニハ物揚場ヲ設ケ東北ノ風浪ヲ防壓スル
爲長德島附近ニ延長約二百五十間ノ防波堤ヲ築ク其工費豫算額四十八萬

三千餘圓ナリ

本浦

本浦ニ於テハ現在稅關構内並榮山江ニ面スル海岸地區合針二千三百餘坪
ヲ埋築シ海岸ニハ石造埠頭三基及棧橋ヲ設置シ上屋倉庫ヲ設ク其工費豫
算額十一萬六千餘圓ナリ

群山

群山ニ於テハ錦江河岸ニ稅關ヲ移シ必要ノ設備ヲ爲ス其工費豫算額八萬
三千餘圓ナリ

鎮浦

鎮南浦ニ於テハ新ニ大同江岸ヲ鑿平埋築シ諸廳舍並上屋倉庫ヲ新築シ河
岸ヲ整理シ埠頭附近ニ棧橋ヲ突出シ干潮時ニモ荷役ヲ便ニス其工費豫算
額十四萬四千餘圓ナリ

新義州

新義州ニ於テハ鴨綠江南岸ノ地區ニ棧橋ヲ突出シ干潮時ニモ荷役ヲ便ナ
ラシメ稅關諸廳舍ヲ新築ス其工費豫算額二萬三千餘圓ナリ

清津

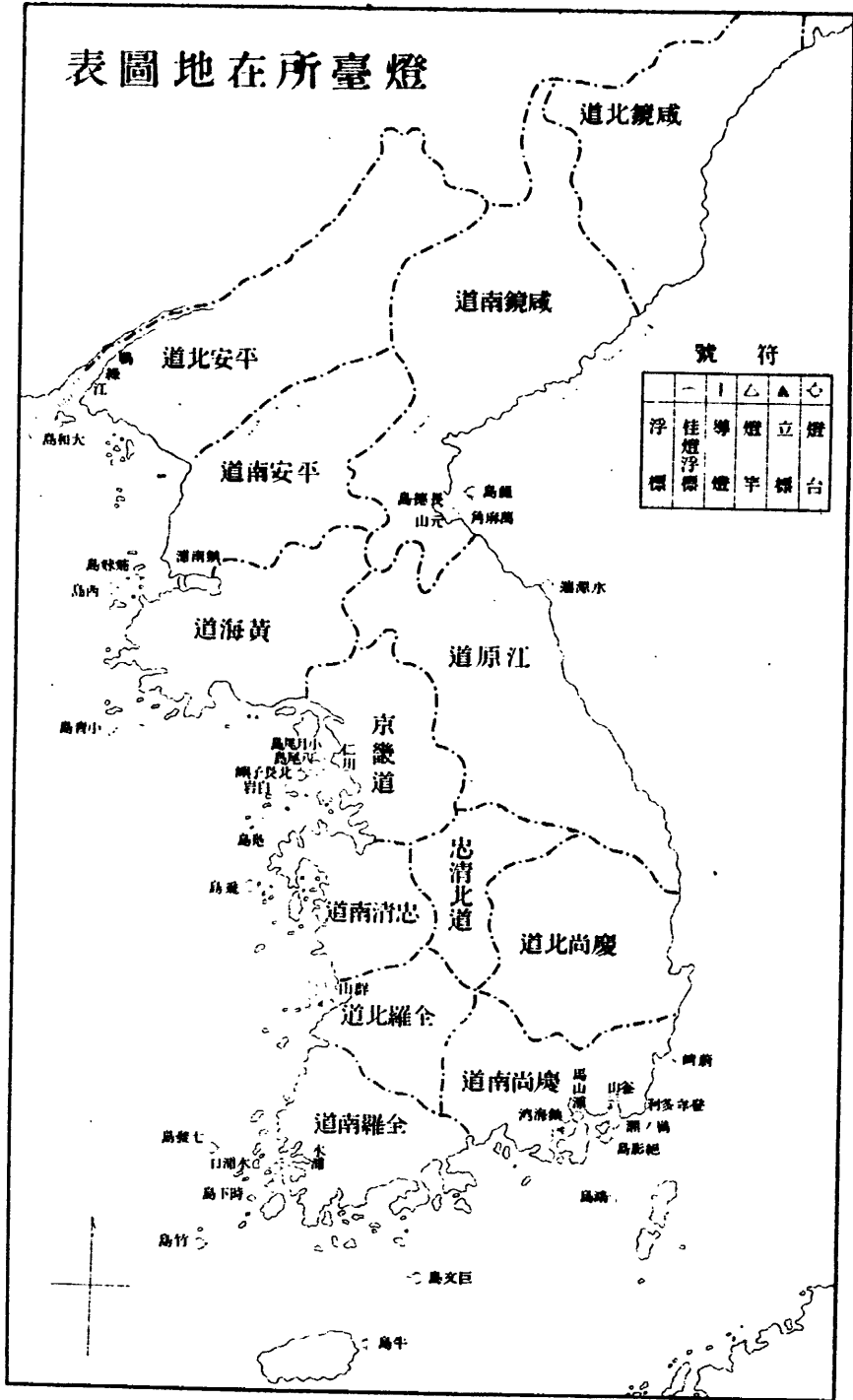
清津ニ於テハ總テ新ニ設備ヲ要ス其重ナルモノハ海面一千餘坪ヲ埋立テ
防波堤約百四十五間ヲ突出シ内部沿岸ニハ物揚場ヲ設置シ棧橋數基ヲ架
設シ其他稅關構内ニ廳舍及上屋倉庫數棟ヲ新築ス其工費豫算額四十六萬
一千餘圓ナリ

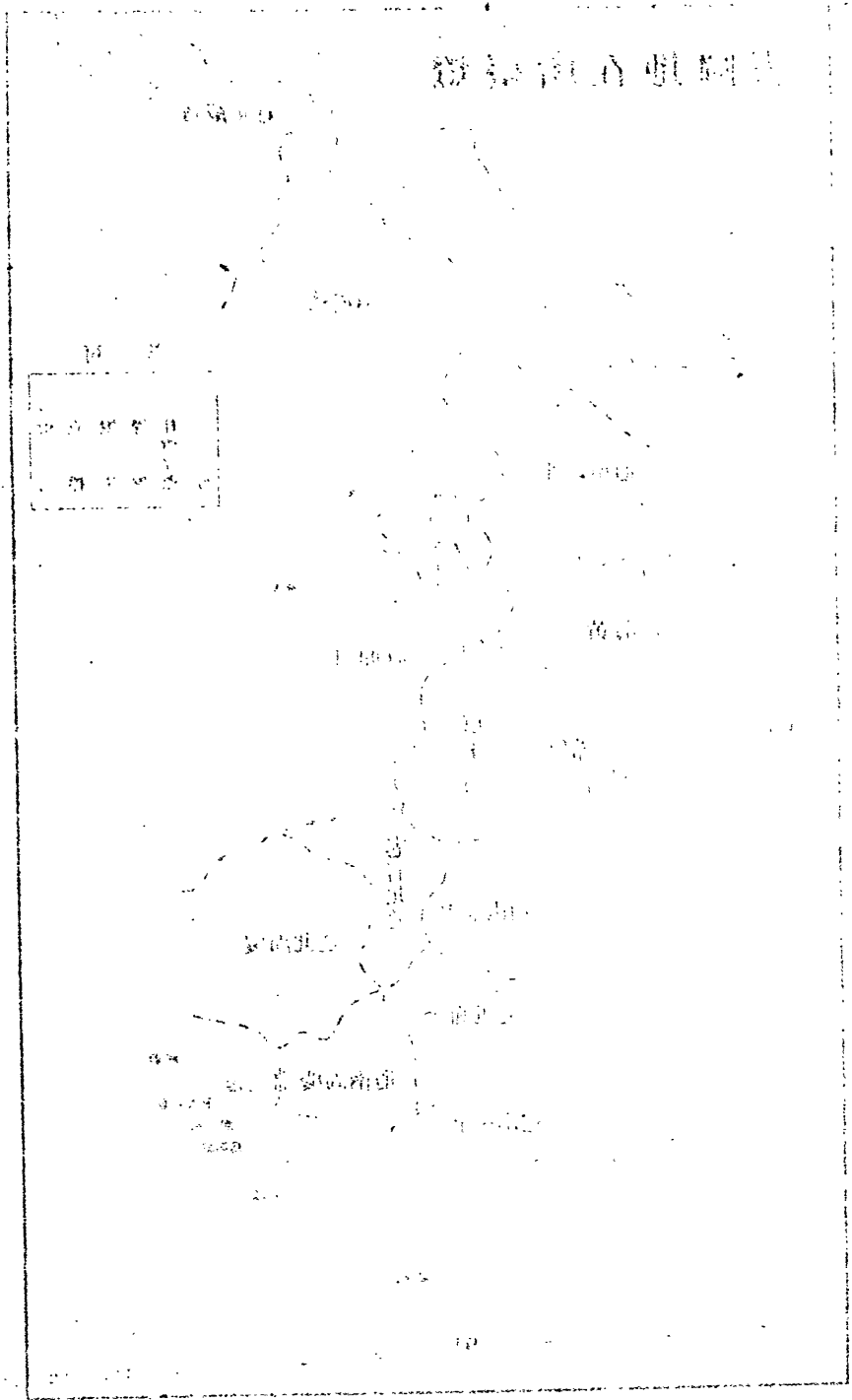
外ニ京城ニ於テ南大門驛附近ニ稅關出張所ヲ設置ス其工費豫算額九萬二千餘圓ナリ

以上各港諸設備ノ内明治四十年ノ支出ヲ以テ竣工スルハ新義州同四十一年ノ支出ヲ以テ竣工スルハ木浦群山京城及鎮南浦ニシテ他ハ同四十三年ノ支出ヲ以テ全部竣工スルモノトス以上ノ諸設備竣工ノ上ハ多少韓國各開港ノ面目ヲ一新スルヲ得ヘシ

第四節 燈 臺

韓國沿岸ニハ嶋嶼岩礁至ル所ニ散在シ潮汐干満ノ劇甚ナル海流ノ急激ナル海霧ノ多キ一トシテ航海者困難ノ原因ナラサルハナク隨テ海難モ亦甚タ多シ帝國政府ハ即チ明治三十四年五月韓國政府ト協定シ海關收入ノ一部ヲ割テ航路標識事業ヲ起サシム之ヲ韓國ニ於ケル同事業施設ノ嚆矢トス同三十五年總稅務司「ブラオン」監督ノ下ニ海關燈臺局ヲ仁川ニ置キ先ツ仁川航路ヨリ燈臺ノ建設ニ著手シ小月尾島八尾島北長子嶼白岩及鳧島ノ





戦役下燈

五燈臺相次テ竣成點火セリ幾モナク日露戦役起リ韓海ノ航路ハ戰地交通ノ要衝ニ當レルヲ以テ北鴨綠江ヨリ東元山ニ至ル韓國全岸ニ亘リ我陸海軍ニ於テ多數ノ燈臺浮標等ヲ設置シ戰役終ルニ及ンテ舉テ之ヲ韓國政府ニ引繼キタリ此ニ於テ韓海ノ航路標識事業較々其面目ヲ改ム

燈臺局

之ヨリ先キ財政顧問目賀田種太郎「ブラオン」ニ代リテ總稅務司トナルヤ通商ノ發達ニ伴ヒ航路標識急設ノ必要ナルヲ認メ明治三十九年以降五箇年繼續事業トシテ韓國全岸必要ノ地點ニ總數壹百餘ノ燈臺其他航路標識ヲ建設スルニ決シ稅關工事部燈臺局ヲシテ其工事ヲ掌ラシム即チ韓國全岸ヲ十航路ニ分チ最モ急設ヲ要スルモノヨリ漸次工事ニ著手シ明治四十年末迄ニ燈臺十三基、立標六基、浮標五十個、挂燈浮標五個、陸標十四個、所霧警號六個、所及瓦斯蒸造所ノ工事ヲ竣工セリ而シテ尙將來建設スヘキ航路標識ハ燈臺二十三基、浮標九個、霧警號八個、所ニシテ總計四十餘個、所トス即チ全部竣工ノ上ハ當初ノ計畫ニ比シ更ニ其數ヲ加フヘシ是レ通商航海ノ發達ニ伴ヒ當初設置ノ必要ヲ認メサリシ地點ニ於テモ漸次増設ヲ要スルカ故ナリ其工費總額ハ百二十六萬六千二百七十二圓ニシテ内、明治四十年迄ノ

工費

公共事業

現在ノ航路標識
 支出額四十六萬五千八百二十八圓、明治四十三年ニ至ル支出豫定額八十萬
 四百四十四圓トス而シテ明治四十年末現在航路標識ハ燈臺十七基、燈竿四
 基、導燈二基、掛燈立標四個、掛燈浮標二個、浮標四十九個、立標五個、陸標十四個、
 霧笛六個、合計百三個所ニシテ其内燈臺、浮標、立標及陸標ノ位置名稱ヲ舉ク
 レハ左ノ如シ

(一) 燈 臺

地方別	位 置	燈臺數	初 點 年 月	名 稱
韓國 西岸	鴨綠江水道	一	明治四十年六月	鴨綠江浮標
同	宜川灣沖	一	同 三十七年六月	大 和 島
同	大同江口	二	同 四十年十二月	西島、姉妹島
同	大青群島ノ中(大同江入口)	一	未點燈	小 青 島
同	仁川港口	五	同 三十六年六月乃至三十七年四月	小月尾島、八尾島、北長子嶼立標、白岩立標、堯島
同	瓮 島(仁川南西六十海里)	一	同 三十七年四月	瓮 島
同	羅州群島西方	一	同 三十八年十一月	七 發 島
同	木浦港口	三	同 四十年九月乃至十月	木浦口、木浦浮標、時下島
同	竹 島(孟骨群島中ノ一)	一	同 年 十二月	竹 島

(二) 浮標、立標及陸標

地方別	位 置	浮標數	立標數	陸 標
韓國 南岸	巨文島港口	一	明治三十八年四月	巨 文 島
同	濟州島東方	一	同 三十九年三月	牛 島 燈 竿
同	巨濟島南方	一	同 上	鴻 島 燈 竿
同	馬山附近	一	同 四十年十二月	馬 山 立 標
同	釜山附近	四	同 三十七年八月乃至三十九年十二月	總影島、鶴ノ瀨立標、釜山低燈、釜山高燈
韓國 東岸	蔚山港口	一	同 三十九年三月	蔚 島 燈 竿
同	長箭洞附近	一	同 三十九年十二月	水 源 端
同	元山附近	三	同 三十九年四月乃至四十年二月	麗島、葛麻角燈竿、長鏡島
韓國 西岸	鎮南浦附近	二	同 二	一
同	群山附近	六	同 六	三
同	鴨綠江水路	三九	同 三九	一〇
韓國 東岸	元山附近	二	同 二	一
韓國 南岸	鎮海灣附近	一	同 一	一
同	釜山附近	一	同 一	一



第十二章 通信

第一節 日韓通信機關合同

(一) 韓國通信事業ノ沿革

郵便制度ノ略史
 韓國ニ於テ近世の郵便制度ノ採用セラレタルハ明治二十九年我前大坂郵便電信局長山田雪助カ郵政顧問ニ聘セラレ日本ノ制度ニ倣ヒテ郵政ヲ經理シタルニ始マル幾ナラスシテ同顧問ハ解備セラレ事業亦隨ツテ廢退ニ歸セリ明治三十一年韓國政府ハ更ニ佛國ヨリ顧問ヲ聘シテ郵便制度ヲ施設セシメ三十三年一月萬國郵便聯合ニ加盟シ直接外國ト郵便物ヲ交換シ同時ニ内國郵便ノ制度モ大體ニ於テ萬國郵便條約ニ準據シ較々其體ヲ爲スニ至リタリ然レトモ事業ノ經營ハ尙極メテ幼稚ニシテ局所ノ數取扱事務ノ種類郵便線路ノ延長等ニ於テ甚タ不充分ナルハ勿論其處務ノ放漫無規律ナル到底通信機關トシテノ信用ヲ置クニ足ラス加フルニ年々多額ノ缺損ヲ生シ政府ノ財計ニ對スル一重荷ヲ爲セリ電信ノ如キモ其創設ハ明

電信

治十八年ニ在リテ京城ヨリ釜山、義州、仁川、鏡城等ニ至ル幹線ノ外若干ノ枝線ヲ建設セルモ其工事ハ拙劣幼稚ヲ極メ一朝風水ノ災ニ遭遇スレハ全線忽不通トナルノミナラス回線計畫ノ如キモ亦頗ル杜撰ニシテ迂廻複雑幾多ノ中繼所ヲ經由シ到底通信ノ敏活ヲ期スヘカラサル状態ニアリ若シ夫レ電話ニ至リテハ京城、仁川等ノ地ニ設備セルモ微々殆ント云フニ足ルモノナシ

韓國ニ於ケル帝國ノ通信事業

郵便

翻ツテ韓國ニ於ケル帝國通信事業ノ施設ヲ見ルニ其創始ノ古キ點ニ於テ將々秩序的發達ヲ爲シ來レル點ニ於テ素ヨリ韓國ノ施設ト日ヲ同フシテ語ルヘカラス其起源ハ別項官制中ニ略記シタル如ク實ニ明治九年釜山ニ郵便局ヲ置キタルニ始マル次テ十三年元山ニ、十六年仁川ニ、二十一年京城ニ各郵便局ヲ置キ爾後在留邦人ノ發展ニ伴ヒ加フルニ日清、日露兩戰役ノ刺撃ヲ以テシ獨リ沿岸貿易港ノミナラス遠ク内地ノ市邑ニ至ルマテ機關ノ配置ヲ見ル又取扱事務ノ種類ノ如キモ最初ハ單ニ通常郵便ノミナリシカ十三年爲替貯金ノ取扱ヲ、三十三年小包郵便ヲ開始シ漸次各種ノ業務ヲ加ヘテ全ク内地ト異ラサルニ至レリ電信ニ於テモ亦帝國ノ施設ハ韓國ニ

電信

先チ明治十七年二月丁抹大北電信會社海底線ノ釜山ニ揚陸スルト同時ニ釜山郵便局ニ電信事務ヲ開キタルヲ以テ韓國ニ於ケル此種通信事業ノ濫觴トス次テ韓國政府トノ間ニ締結セル海底電線設置條款續約ノ規定ニ依リ釜山京城仁川間ニ電線ヲ建設シタルモ不通斷線等故障ノ多キコト殆ント意想外ニシテ一年ノ四分ノ一ハ空シク通信杜絶ノ不便ヲ免レス二十年日清兩國ノ間事アラントスルニ臨ミ我政府ハ到底韓國電線ノ頼ムヘカラサルヲ認メ臨機ノ措置トシテ釜山京城仁川間ニ軍用電線ヲ架設スルニ至レリ是レ即チ帝國カ韓國内ニ電線ヲ設備セルノ始メニシテ軍用ノ傍ラ公衆電報ノ取扱ヲモ開始シ乃チ電信ニ於テモ亦郵便ト等シク日韓兩國機關ノ併存ヲ見ルコトナレリ又電話ハ明治三十五年六月京城及仁川郵便電信局ニ交換事務ヲ開始シ次テ各地ニ電話交換及通話事務ヲ開始シタリ

軍用電信

電話

此等通信事業ノ施設タルヤ敢テ條約上ノ權利トシテ韓國政府ヨリ認識セラレタルニアラス只韓國ノ通信設備全ク缺如シ若シクハ幼稚不完全ヲ極メ到底信賴スヘカラサルヲ以テ帝國政府及在留民ノ權利利益ヲ保護スル

通信機關

爲我ヨリ進ンテ相當ノ施設ヲナシ韓國政府又自ラ省ミル所アリテ之ヲ默認シタルノミ事情斯ノ如キヲ以テ政局ノ轉變外交上ニ於ケル日本ノ地位ノ推移ニ伴ヒ數次韓國政府ヨリ我郵便局ノ撤退ヲ要求シ來レコトアルモ我ハ無論之ニ應セス而シテ遂ニ三十八年ニ至リ兩國機關合同ノ約成リ韓國ハ通信事業ノ全部ヲ舉ケテ我ニ管理ヲ委託スルコトナリタリ是レ素ヨリ時運ノ變遷ニ依ルト雖、又帝國カ三十年來孜孜トシテ在韓通信機關ヲ設備シ能ク受托ノ素ヲ爲セルニ因ルト云フヘシ

(二) 通信機關引繼

通信事業
上韓國ノ
負擔

韓國政府カ通信事業經營ノ爲ニ被レル損失ハ一箇年少クモ十四萬元多キハ二十九萬元ニ上レリ假ニ其經營ニ依リテ斯業ノ發達ヲ期シ得ヘシトスルモ之カ爲ニ生スル損失ハ必一層増大シ益々財政ノ負荷ヲ加フヘシ若シ又韓國政府ノ爲ス所ニ放任セハ事業ノ刷新果シテ幾年ノ後ナルヤヲ期シ難ク其間内外公衆ノ利便ヲ増進スルヲ得サルハ勿論帝國カ依テ以テ韓國ヲ扶掖保護スヘキ軍事上及經濟上ノ設備ヲ完全ナラシメント蓋シ不能タルヲ疑ハス然カモ既往ニ於ケル如ク兩國ノ機關ヲ併存スルハ經濟上

合同ノ必
要ノ必

其他諸般ノ經營上、兩者共ニ不便不利ヲ感スヘキハ理數ノ最モ親易キ所ニシテ又決シテ完全ナル機關ノ普及ヲ期スル所以ニアラス此間ニ處シテ帝國カ兩國ノ爲ニ畫策スヘキ最良方法ハ唯一アルノミ即チ韓國政府ヲシテ通信事業ノ管理ヲ擧ケテ帝國政府ニ委託セシメ帝國政府カ自己ノ責任ヲ以テ帝國ノ通信事業ト合同經營シ兩者共通ノ一組織ヲ構成スルコト是ナリ此趣意ニ基キ帝國政府ハ韓國政府ト商議ヲ重ネ韓國政府亦自國ノ現狀ニ省ミテ帝國ノ要求ニ應シ遂ニ明治三十八年四月一日ヲ以テ彼我代表者間ニ韓國通信機關委託ニ關スル取極書ノ調印交換ヲ了スルニ至レリ

合同取極
書

同取極書ハ同年四月二十八日官報ヲ以テ發表セラレ帝國政府ハ同日附ヲ以テ遞信書記官池田十三郎ニ韓國通信事務引繼委員長ヲ命シ引繼要項ヲ授ケテ一切ノ事ヲ專決セシム之ヨリ先、池田遞信書記官ハ既ニ韓國ニ在リ敏速ニ引繼ヲ執行セン爲、各般ノ準備ニ著手シタルモ韓國政府ハ委違、徒ニ時日ヲ送り引繼委員ノ任命ヲスラ爲サス時恰モ「ボール」チツク「艦隊」ノ來航ニ當リ竊ニ形勢ノ轉變ヲ期スルモノノ如ク一意曠日彌久ヲ事トセリ此ニ於テ我委員ハ五月十八日ヲ以テ韓國政府カ此上荏苒シテ委員ヲ任命セサ

引繼ノ實
行

ルニ於テハ我ハ協約ノ實行上、已ムヲ得ス保管行爲ヲ取ルヘキヲ通告シ斷乎トシテ引繼ヲ實行スルコトトセリ即チ同日ヲ以テ各地帝國郵便局所長ニ引繼代務者ヲ命シ同日先ツ漢城郵遞總司及同電報總司ヲ引繼キタルニ始マリ七月一日江界郵遞司ヲ引繼タルヲ最後トシ在來日本郵便局又ハ出張所アル地方ニテハ之ト併合シ其存在セサル地方ニ在リテハ引繼ト同時ニ日本郵便局所ヲ新設シタリ此ニ於テ韓國ニ於ケル通信機關ハ總テ帝國政府ノ管理ニ歸シ舊韓國官署ノ吏員及用人ハ總テ現給ノ儘之ヲ採用シタリ此際韓國吏員使用人ニシテ或ハ増給ヲ迫リ或ハ採用辭令ヲ拒斥シ又ハ同盟罷業ヲ企テムトスル等多少ノ波瀾ナキニアラサリシモ概シテ引繼事務ハ平穩且圓滿ニ結了セリ

引繼キテ
受ケタル
通信機關

韓國ヨリ引繼キタル通信機關ハ郵遞司四十四、同支司四、領受所二、電報司三十一、同支司四、計八十五並各府郡臨時郵遞所三百三十五、合計四百二十箇所ニシテ之ヲ繼承シタル帝國郵便局所ハ在來ノ分、郵便局九、同出張所四、新設ノ分、郵便局三、同出張所三十三、新舊計四十九、並ニ臨時郵遞所三百三十五、合計三百八十四箇所ナリ即チ引繼ノ爲、新ニ開設シタル帝國局所ノ數ハ合セ

引繼後ノ
信及電話

テ三百六十七箇所トス、
 次ニ引繼ヲ受ケタル電信及市外電話線ハ亘長五百二十里餘、延長七百七十
 里餘ニシテ内亘長百九十三里餘、此延長三百五十八里餘即チ京城ヨリ平壤
 元山方面ニ至ル大部分及釜山馬山間ノ加キ軍事上必要ノ線路ハ當時我軍
 隊ノ收容使用ニ係レリ此等ハ韓國駐劄電信隊ニ於テ一時的ノ修理ヲ加ヘ
 テ維持シ來レルモ其他ノ韓國專用線路ハ概ネ腐朽頽廢シ殆ント年々ノ改
 修工事ヲ加ヘタル形跡ナク其材料薄弱建設粗雑、加フルニ設計及作業計畫
 ノ杜撰ヲ以テシ殆ント見ルニ足ルモノナシ又市内電話交換線路ハ亘長三
 里餘、延長二十二里餘ニシテ電話交換取扱局ハ漢城電報總司及仁川、水原、永
 登浦ノ三電報司アルノミ通話ノ狀況モ極メテ不完全ナリ尙軍隊ノ占有使
 用中ニ係ル電信線路、郵遞司又ハ電報司所屬ノ土地建物及器具機械等ハ同
 年六月遞信大臣ノ令達ニ依リ軍隊占有ノ儘、單ニ之カ存在ヲ確メ引繼ヲ受
 クルコトトシタリ

第二節 引繼後ノ施設

軍隊占有
中ノ電線

(二) 通信機關ノ擴張

引繼後ノ
通信機關

韓國政府ヨリ引繼キタル通信官署ハ上記ノ如ク合計四百二十箇所ニシテ
 之ヲ繼承シタル帝國郵便局所ハ三百八十四箇所ナルカ引繼ニ關係ナキ新
 局所ノ設置其他通信機關ノ擴張ニ依リ引繼終了ノ當日、即チ明治三十八年
 七月一日ニ於ケル帝國郵便局所ノ數ハ郵便局十二、同出張所四十一、郵便電
 信受取所一、郵便受取所四十六、電信取扱所十、臨時郵遞所三百三十五、合計四
 百四十五箇所ニ上レリ但シ合同當時ニ於ケル日韓兩國通信官署ハ日本側
 七十四、韓國側四百二十、合計四百九十四箇所ニシテ合同後較々減少シタル
 ノ觀アルモ一方ニ於テ引繼ノ際、重複ノ機關ヲ廢シタルヲ以テ事實ハ却テ
 其ノ擴張セラレタルヲ示セリ其後ニ於テモ必要ニ應シテ通信機關ノ廢置
 改定ヲ怠ラス且三十八年九月乃至十一月ノ間ニ野戰郵便事務ヲ繼承シ之
 カ爲郵便局出張所四、其他四十六箇所ヲ増設スル等ノ事アリ三十九年一月
 十日統監府通信管理局設置當時現在局所數ハ合計四百九十八箇所、即チ引
 繼終了日現在ニ比シ五十三箇所ノ増加ヲ示セリ其内譯ヲ舉ケレハ郵便局
 十六、同出張所四十六、郵便電信受取所一、郵便受取所四十六、電信取扱所十五、

野戰郵便
事務ノ總

臨時郵便所三百三十五、郵便繼立所十六、郵便交換所十六、郵便受渡所七箇所ナリ

郵便局所ノ數既ニ此ノ如ク多數ニ上リ且向後諸般事務ノ統一整理ヲ期セシカ爲ニハ勢直接管理ノ機關ヲ設置スルノ必要アリ追テ其機關ノ設置セシムル迄便宜韓國通信事務引繼委員部ヲシテ之ヲ攝行セシムルニ決シ三十八年五月遞信大臣ヨリ之ヲ令達セリ是レ則チ統監府通信管理局ノ前身ナリ

(二) 取扱事務ノ擴張

引繼委員部ハ一方ニ於テ引繼事務ヲ進捗セシムルト同時ニ在韓通信官署ノ準據スヘキ法規ヲ定メ從業吏員ニ對スル各般ノ訓諭ヲ發シ事業經營ノ方針ヲ示ス等著々施設ヲ怠ラズ今合同前後ニ於ケル通信事業ノ狀況ヲ比較セシニ其機關ニ關スルモノハ上述ノ如ク而シテ取扱事務ノ擴張ニ至リテハ更ニ一層顯著ナルモノアリ即チ韓國政府ノ郵便事務カ單ニ普通郵便及書留郵便ノ取扱ニ限りシニ對シ引繼後ノ我郵便局所ニ於テハ其當日ヨリ全然内地ノ郵便局同様各種ノ郵便事務並爲替貯金事務ヲモ取扱フコト

取扱事務ノ擴張

郵便線路

トセリ但臨時郵便所ニ於テハ過渡ノ際新規事務ノ取扱方ヲ習得セシムル餘裕ナク且急速ノ必要ヲ認メサルニ依リ從來ノ通り普通及書留郵便物ノ取扱ニ止メシム又韓國電報司ノ取扱ヘル電報ノ種類ハ從來諺文電報、漢文電報、歐文電報及海外電報ノ四種ナリシカ引繼ト同時ニ漢文電報ノ取扱ヲ廢止セリ是レ其必要ヲ認メサルニ依ル其代リニ和文電報ノ取扱ハ事情ノ許ス限リ引繼ト同時ニ之ヲ開始シ次テ各局所ヲ通シ其取扱ヲ開始セリ

郵便線路モ亦逐次延長シタリ今合同當時ノ現在ト明治三十九年一月十日通信管理局設置當時ノ現在トヲ對照スレハ左ノ如シ

郵便線路

種別	區別	管理局設置當時	合同當時	比較増(△)印減(○)
鐵道遞送線	單哩程	六四六	二九九	三四七
	平均一日延哩程	二二〇八	一四四六	七六二
道路遞送線(日人郵送人配置ノ分)	單里程	七八八	九三	六九五
	單里程			

水路遞送線	同		平均一日延里程
	上 (韓人遞送人 配置ノ分)		
平均一日延里程	單里程	平均一日延里程	單里程
一、五三八	五、三二五	二、〇六〇	二、七八八
一、九七五	六、六二九	三、一三五	三、八五九
△	△	△	△
四三七	一、三〇四	一、〇七五	一、〇七一
			七〇〇

(備考) 日人遞送人ヲ配置セル道路遞送線ニ於テ劇進シ韓人遞送人ヲ配置セル道路遞送線ノ減少セルハ從來韓國施設線ノ單ニ名義ノミニ止リ實際ニ無効ナルモノヲ整理シタル結果ニ外ナラス而シテ日人遞送人ヲ配置セル線ノ増進シタル理由ハ野戰郵便ヲ繼承シタルト從來韓國郵遞司所在地ニ郵便局又ハ同出張所ヲ設置シ日人遞送人配置ノ線ヲ以テ此等ノ各郵便局所ヲ連絡シタルト日本人ノ來往日々ニ増加シ一般ノ通信力自然ニ長足ノ進歩ヲ爲シタルニ伴フモノニ外ナラス

電信電話ノ修置

引繼當時ニ於ケル韓國電信及電話線路ノ狀態ハ頗ル脆弱ニシテ到底信賴シ難キノミナラス線路ノ新設、増設及回線ノ開廢變更ヲ要スルモノ亦多シト雖、一時ニ之カ改築新營ヲ行フハ經費豫算ノ許ササルモノアリ緩急ヲ斟

酌シテ主要ナル幹線路ノ改築、其他幹枝線路ノ補修、軍用線ニ併行スル舊韓國線路ノ撤廢轉架、回線ノ増設整理等ヲ主トシ三十九年一月十日マテニ工事ヲ施行シタル里程三百八十七里餘、新增設線條延長里程三百一十一里餘ニ上レリ又市内電話交換線路ニ就テハ回線方式ヲ改メ電話機ヲ取換ヘ鎮南浦、元山、大邱及馬山ニ交換事務ヲ開始シ加入者八百五十名ヲ加ヘ、タル等、著々改善ニ著手セルモ氣候、材料ノ供給其他ノ關係ヨリ工事ノ竣成ハ較々豫定ニ後レタリ之ヲ要スルニ引繼後ニ於ケル通信事業ノ整理ハ頗ル錯雜多岐ニ亘リシモ幸ニ施設其功ヲ奏シ統監府通信管理局設置當時ニ於テハ各般ノ事略々其緒ニ就キ漸次擴張ノ方針ヲ實ニスルヲ得ルニ至レリ

第三節 管理局設置後ノ施設

(一) 管理機關ノ設置

在韓通信機關ノ管理ハ引繼後取敢ス引繼委員部ニ於テ之ヲ攝行シタルモ素ヨリ永久ノ制ニアラス即チ遞信省ニ於テ特別監督官廳官制案ヲ立テ閣

通信管理局



議ニ提出シタル際、三十八年十一月日韓新協約ノ締結アリ其結果トシテ同年十二月二十日公布ノ勅令ヲ以テ韓國ニ統監府ヲ置カルコトトナリ同時ニ統監府通信官署官制公布セラレ越エテ三十九年一月十日ヨリ實施セラル此ニ於テ韓國ノ通信事業ハ統監管理ノ下ニ統監府通信官署ニ於テ之ヲ掌理スルコトトナリ幾多地方現業廳ノ外京城ニ通信管理局アリテ管理事務ヲ執行シ韓國通信事業ノ基礎此ニ愈々確立スルニ至レリ

通信法規

韓國ニ於ケル通信法規ノ施行ニ關シテハ統監府設置以後ト雖、府令ノ定ムル所ニ依リ特ニ規定スルモノノ外、總テ遞信省令及告示ニ依リ又事業ノ執行並之ニ關聯スル諸般ノ事務ニ關シテモ特ニ規定スルモノノ外、當分ノ內總テ遞信省ノ規程令達及通牒ニ準據スルコトトシ事情己ヲ得サルモノヲ除キ成ルヘク本邦内地ノ制度ト一致セシメンコトヲ期セリ然カモ國情民俗ヲ異ニシ且草創ノ際ニ當リ必スシモ内地ノ例ニ依リ難キモノハ必要ニ應シ特別ノ規程ヲ設ケテ其宜ヲ失セサルニ努メ會計事務ノ取扱ニ關シテモ遞信省令以下ノ規程ヲ準用シタリ又通信官署ノ豫算ハ統監府設置後モ當分其舊ニ依リ遞信省ノ所管ニ屬セシメラル是レ別項記述ノ如ク却テ事

業經營上ノ便宜アルカ爲ニ外ナラス抑モ通信ノ事業タルヤ頗ル繁雜多岐ニ亘リ隨ツテ吏員使用人ノ數モ亦甚多シ之ニ對シテ嚴重周密ナル監督ヲ加ヘ其事業ヲ監察スルハ最必要トスル所ナルヲ以テ一方ニ於テハ事業ニ關スル法規ノ整備ヲ計ルト同時ニ他ノ一方ニ於テハ此等監督監察ノ機關ヲ整ヘ規程ヲ具シ以テ公衆利便ノ増進及事務ノ統一整理ニ資センコトヲ期セリ之ト同時ニ内外公衆ヲシテ通信事業ノ内容ヲ周知セシムルハ事業ノ圓滿ナル運轉及其發展ノ爲、極メテ緊要ノ事ナルヲ以テ或ハ各種印刷物ヲ配布シ或ハ新聞紙記事ヲ利用スル等公衆ノ通信利用ヲ誘導啓發スルニ力ヲ致シタリ

(二) 現業機關ノ増設

各地方現業機關タル郵便局所ハ韓國内各地ノ發展及通信力ノ増進ニ伴ヒ漸次之ヲ増設シ若クハ小規模ノモノヲ順次大規模ニ改ムル等、銳意通信機關ノ擴張普及及其整理ヲ計リ且明治三十八年陸海軍電信ヲ受繼キタル結果北韓方面各地其他巨濟島、巨文島、鬱陵島等ニ郵便局出張所ヲ設ケ電信事務ヲ開始シ又明治三十九年十月一日以後通信官署ニ於テ韓國國庫金ノ取

郵便局所
ノ増設及
整理

扱ヲ開始シ之カ爲新ニ多數ノ郵便電信及郵便取扱所其他ヲ設置シ以テ舊來ノ臨時郵便所ニ代エ更ニ監督ノ必要上郵便局出張所ヲ廢止シテ其一部ハ之ヲ郵便局ニ他ハ之ヲ管理局直轄ノ郵便取扱所ニ改定シ又四十年四月ヨリ從來ノ郵便及電信受取所ヲ廢シ之ニ代フルニ組織完全ナル郵便所ヲ設置シタル等ニ依リ今ヤ韓國現時ノ通信力ニ對シテ略々遺憾ナキ設備ヲ見ルニ至レリ

明治三十九年一月十日統監府通信管理局設置ノ當時ニ於ケル郵便局所ノ數ハ前節記スル所ノ如シ進シテ其後ニ於ケル局所數ノ増減ヲ見ルニ三十九年度上半季末(九月三十日)ニ於テハ總數五百二十五箇所三十九年度末(四十年三月三十一日)ニ於テハ五百二十六箇所四十年度末(四十一年三月三十一日)ニ於テハ四百八十六箇所ヲ算ス引繼以來漸ク以テ増加セラレタル局所數ハ最近ニ至リテ較々減少シタルカ如シト雖詳ニ其内容ヲ察スレハ決シテ其然ラサルヲ知ル今左ニ四十年度末現在郵便局所ノ種別ヲ擧ク

韓國郵便局所種別表

(明治四十一年三月三十一日現在)

	明治四十一年三月末日	明治四十年三月末日	明治三十九年九月末日	明治三十九年一月十日
郵便局	五一	五〇	三〇	一六
郵便局出張所	二七	一七	四一	四六
郵便電信取扱所	一一四	二六	一	一
郵便取扱所	六六	四〇	一五	一五
電信取扱所	五一	一七	一四	一
郵便電信受取所	一六八	二〇四	三三九	三三五
臨時郵便所	一	五四	五七	四六
郵便遞立所	一	四	一〇	一六
郵便交換所	六	一一	一七	一六
郵便受渡所	三	三	二	七
計	四八七	五二六	五二五	四九八

(備考) 明治三十九年一月十日ハ統監府通信管理局設置ノ日ナリ其他ハ年度末又ハ上半年度末ヲ取ル

即チ現業機關トシテ最完全セル郵便局ハ四十年末ニ於テ管理局設置當時ノ三倍以上ニ當リ郵便電信取扱所郵便取扱所及郵便所ノ如キ郵便局ニ次ケル組織モ亦大ニ増加シ之ニ反シテ臨時郵便所郵便所其他一部ノ事務ヲ掌理スル郵便局所ハ漸チ以テ減少セルヲ見ルヘシ更ニ進ンテ郵便局所ニ於ケル取扱事務ノ種類ヲ對比スレハ一層明瞭ニ在韓通信官署ノ活動漸次ニ其歩ヲ進メツツアルヲ知ルニ足ル

郵便局所取扱事務種別表

取扱事務種別	局		比較増(△)減(○)
	明治四十一年三月末日	明治三十九年一月十日	
通 常 郵 便	四三六	四八三	△
小 包 郵 便	二六八	一四八	△
爲 替 貯 金	二五八	一〇九	△
韓 國 國 庫 金	一五〇	一五〇	〇
電 報 (和 文)	一四六	四〇	△
電 報 (歐 文)	九五	三三	△
電 報 (諺 文)	四〇	三二	△
電 話 (交換 通話)	一五	七	△
電 話 (通 話)	二四	六	△
			一八

電 話 (交換 通話)	電 話 (通 話)
一五	二四
七	六
八	八

(備考) 明治三十九年一月十日ハ統監府通信管理局設置ノ日ナリ

即チ事務種別ニ依リ郵便局所ノ延數ヲ算スレハ管理局設置當時ニ於テハ八百五十七局所ナリシモノ四十年末ニ於テハ一千二百八十二局所ニ増加セリ但シ國庫金取扱事務ハ除キテ計數ニ入レス之ヲ加算スレハ延局所數ハ更ニ一千四百三十二箇所ニ増加スヘシ

機關上事

通信機關ノ整備普及稍々完備ノ域ニ近クト同時ニ通信事業實際ノ發動タル郵便ノ遞送集配及電信回線ニ就テモ諸種ノ整理改善ヲ加ヘ又新ニ施設セシモノ少カラス之カ爲内外郵便物遞送ノ迅速正確ヲ加ヘタルハ勿論小包郵便物ノ如キハ特ニ韓國總稅務司ト交渉シ從來小包郵便ノ關稅手續ヲ取扱ヘル釜山木浦群山仁川元山及鎮南浦ノ外新ニ馬山京城平壤新義州及城津ノ五局ニ於テモ亦關稅取扱ヲ開始シ且其遞送ヲ鐵道ニ依ラシムルコトトシ爲ニ著シク速達ノ度ヲ増スヲ得タリ而シテ郵便線路ノ狀況ハ三十九年度末及四十年末ニ於テ左ノ如クニシテ之ヲ上記通信管理局設置當

郵便線路

通信

時ニ比スレハ多大ノ延長ヲ見ルノミナラス實際上幾多ノ改廢變更ヲ加ヘタル結果、線路ノ分布及遞送回數等ニ於テモ亦益々其宜ヲ得タリ

郵便線路

種 類	區 別		比較増(△)印減(○)
	明治四十一年三月末日	明治四十年三月末日	
鐵道遞送線	單 哩 程	六四八	六四八
	平均一日延哩程	二六二七	二五五八
道路遞送線 (日人配達人)	單 里 程	一、五五七	一、五〇五
	平均一日延里程	一、三九四	一、二七七
同 上 (韓人配達人)	單 里 程	九三七	一、一六九
	平均一日延里程	一、二四五	一、〇八九
水路遞送線	單 哩 程	八二五四	八四五三
	平均一日延哩程	二四三九	一、七五七

引用電信

統監府通信管理局設置以前ニ於テ韓國國內電信電話ノ大部分ハ韓國駐劄電信隊之ヲ統轄經營シタルカ日露戰役終了後ニ至リ最早、軍ノ經營ニ俟ツ必要ナク且韓國ニ於ケル通信事業ハ舉テ之ヲ統監府ニ繼承スルコトトナリタルヲ以テ乃チ釜山ヨリ義州ニ至ル間及之ヨリ分岐セル電信電話線路竝ニ之ニ附屬スル軍用通信所二十箇所ハ明治三十九年三月二十日ヲ以テ又咸鏡南北道及義州ヨリ江界ニ至ル線路及之ニ附屬スル軍用通信所三十二箇所ハ同月三十一日之カ引續テ了シ尙當時電信隊ニ於テ施工中ニ屬セル江界ヨリ長津、惠山鎮ヲ經テ茂山ニ至ル線路ハ同年四月二十日竣工ヲ俟ツテ之ヲ繼承セリ其線路亘長併セテ八百二十九里二十五町餘、線條延長一千五百九十七里二十四町餘及曩ニ韓國政府ヨリ通信管理局ニ引繼テ了シ爾後舊ニ依リテ軍隊ノ收容使用ニ任セタル線路延長百七十一里九町餘、線條延長三百六十一里二十六町餘アリ即チ陸軍ヨリ繼承シタル陸上線路亘長一千三百三十四町餘、線條延長一千九百五十八里十五町餘ニ及フ尙此外、水底線四哩餘、心線延長十三哩餘アリ越テ同年七月二十日ニ至リ韓國國內ニ於テ海軍ノ經營ニ屬スル軍用電信線七里九町餘及軍用通信所ノ繼承ヲ了セリ

海軍ヨリノ引繼

通信

此ニ於テ韓國ノ電信電話線路全ク統一セラレ隨テ管理局管理ノ下ニ在ル
 電信電話線路ハ遽ニ其延長里程ヲ増加セリ此ノ加ク各方面ヨリ繼承シタ
 ル電信電話線路ニ對シ其重複セルモノハ其一ヲ撤廢スルト同時ニ必要ノ
 改良補修工事ヲ施シ一方ニ於テハ各回線及各地相互間ニ於ケル通信力ノ
 緩急ヲ調査シ距離ノ遠近ニ拘ラス通信繁多ナル地區間ニハ爲シ得ル限リ
 中繼ヲ減シテ直通線ヲ設ケ回線ヲ整理シ音響機ヲ採用スル等專ラ通信ノ
 快速ヲ期セリ今三十九年度末及四十年末現在電信電話線路里程ヲ舉ク
 レハ左ノ如シ

區別	四十年三月末日		四十一年三月末日	
	互	長	互	長
電信線路	一、二四七	二、六三六	一、三二六	二、八二二
市外電話線路	一四	三二五	一四	三四七
市内電話線路	三八	九三四	五〇	一、三二八
合計	一、三〇〇	三、八八五	一、三八一	四、四八七

電話ハ三十九年度末ニ於テ交換事務取扱局十箇所加入者二千三百六十二

人ナリシカ四十年末ニ至リテ交換事務取扱局十五箇所加入者三千二百
 九十六人トナリ尙同四十年六月一日京城平壤間ニ同年七月十六日龍山平
 壤間ニ長距離電話ヲ開始セリ

第四節 通信事業ノ發達

(二) 事業ノ發達

韓國人ノ通信力ハ漸次發達ノ傾向ヲ示スト雖尙甚幼稚ナルヲ免レス明治
 四十年末ノ統計ニ據レハ引受通常郵便物三千二百萬通ノ内、日人二千七百
 萬通、韓人三百九十萬通、同配達三千三百萬通ノ内、日人二千八百七十萬通、韓
 人四百三十萬通ニシテ即チ韓人郵便物ハ日人郵便物ノ約七分ノ一ニ過キ
 ス而シテ在留日本人ノ數カ韓國總人口ノ百分ノ一強ニ過キサルヲ思ヘハ
 更ニ日韓人通信力ノ差甚シキニ驚カサルヲ得サルナリ小包郵便物ニ至リ
 テハ其差更ニ顯著ナリト幸ニシテ最近數年間在留帝國民ノ増加年々止
 ムコトナク且一方ニ於テハ通信機關ノ普及漸ク完備セルヲ以テ事業ノ成



績ハ年ト共ニ發達ノ氣勢ヲ失ハス今通信事業ノ進歩ヲ見ルヘキ二三ノ統計ヲ舉ク

一、郵便物累年比較表

年次	通常郵便物		小包郵便物	
	引受	配達	引受	配達
明治三十七年度	六、〇一八、五七七	六、三二九、〇二六	二九六、六四四	一〇一、三三三
同三十八年度	二〇、四五四、五九二	二二、四四七、八四二	七七六、〇四四	二〇九、一三〇
同三十九年度	三一、一七三、七二〇	三二、四五二、九六二	一五七、〇五六	二五五、一七四
同四十年年度	三一、六四一、六九〇	三三、〇一九、七七〇	二二八、〇三五	四三八、五一六

備考) 合同前韓國郵便局所ノ取扱ニ係ルモノヲ含マス

二、爲替貯金累年比較表

年次	爲替		貯金	
	口振	金額	口拂	金額
明治三十七年度	二〇、二二一、二一六	四、一七八、七六六	四七、〇八〇	一、八四九、七九八
同三十八年度	三一、五〇五、一	六、二九七、四二二	九四、〇六三	三、六〇六、六七四
同三十九年度	四八、一、二二二	一〇、六六八、三六四	一八四、六二八	六、三二二、三三三
				年度未現在貯金額
				預入金
				金額

同四十年年度 六、一三九、四〇〇 一四、四〇三、九八八 二、六三三、九二六 九六、二八二、六五五 五九、八三八 一、二五九、五五七

(備考) 明治四十年年度末現在郵便貯金中韓人預ケ人四千二百八十四人預金額三萬七百十圓アリ

三、電報通數累年比較表

年次	發信		著信		中繼信	
	和歐文	文	和歐文	文	和歐文	文
明治三十七年度	二九七、〇一一	—	二六三、七二九	—	四五三、五一五	—
同三十八年度	七四五、八四四	五九、〇一九	七〇六、二二五	五九、二二〇	一、三三三、六三三	五四、二九二
同三十九年度	九六五、〇四六	七五、三五二	九一九、一〇一	七五、八五七	一、八五二、二七五	六四、五三二
同四十年年度	一一、一四二、二六	七九、七八三	一〇、六九八、〇七	七九、七五一	一、八五三、二六七	六九、二六九

(備考) 合同前韓國郵便局所ノ取扱ニ係ルモノヲ含マス

四、電話加入者累年比較表

年次	加入者	加入申込者
明治三十七年度	七七〇	二一九
同三十八年度	一、〇六五	一、〇二四



同	三十九年度	二二六二	八九九
同	四十年年度	三二九六	二〇六

(備考) 合同前韓國電報局所ノ取扱ニ係ルモノヲ含まス

事業ノ困

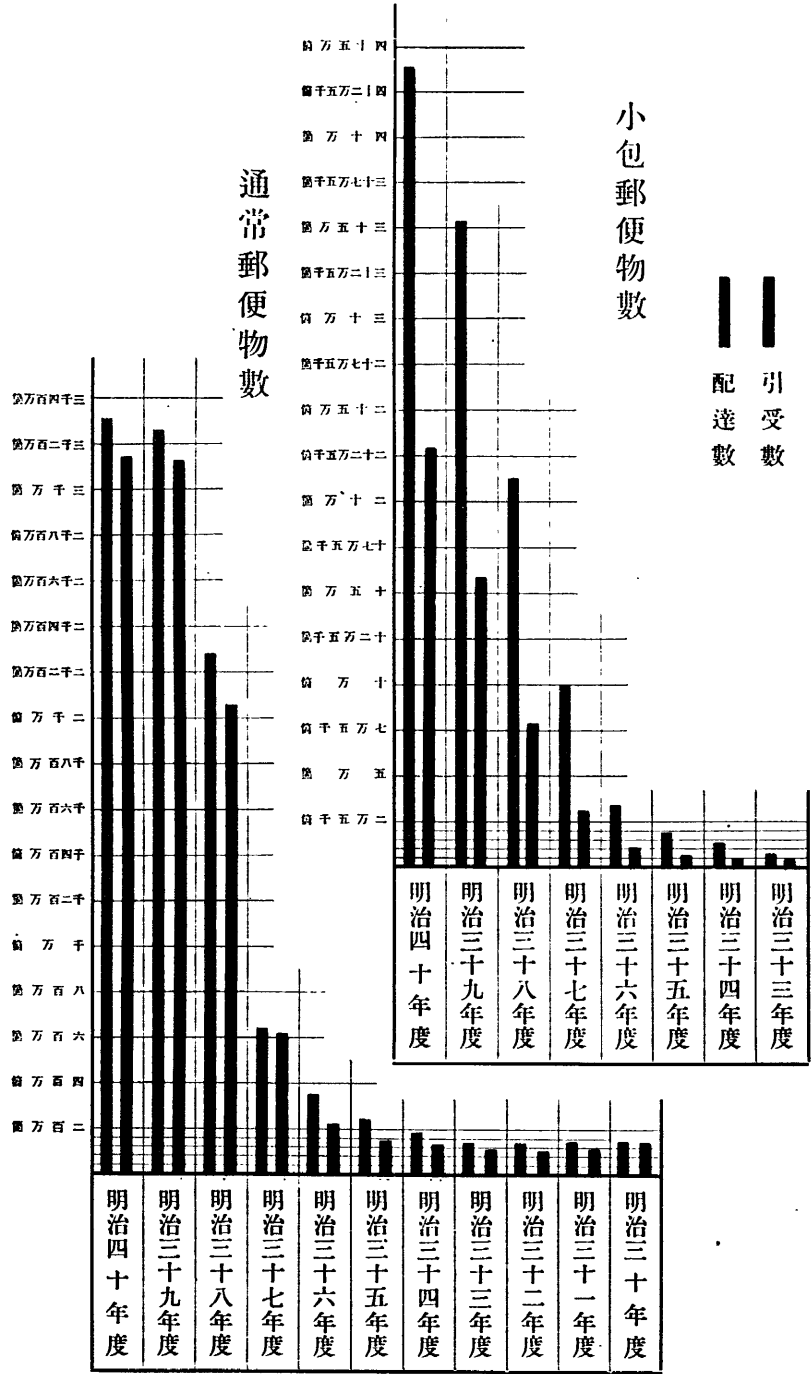
吏員ノ疾

以上ノ如ク通信事業ノ發達年々ニ著シキモノアリト雖吏員以下勤務ノ困難ニ至リテハ實際其狀況ヲ視察シタルモノニアラサレハ到底想像タモ爲シ能ハサルヘシ今ヤ郵便局所ハ韓國ヲ通シテ普遍的ニ設置セラレ郵遞所ヲ除クノ外ハ總テ日人吏員ノ勤務セサルモノナシ而カモ郵便局所ノ多數ハ鐵道線路ヲ距ルコト甚々遠ク概ネ僻陬不便ノ地ニ位置シ一般日本人ノ會テ來往セサル地方ノ如キ亦實ニ少カラス隨テ生活ノ物資ヲ得ルノ困難ハ勿論慰籍歡樂ヲ求ムルノ方法全ク缺如シ特ニ衛生上ノ顧慮ニ至リテハ全ク醫療機關ヲ缺ケル韓國内地ニ於テ最重大ナルモノアリ依テ管理局ニ於テハ衛生治療心得ナル小冊子ヲ各局所官吏ニ配付スルト同時ニ主要ノ郵便局ニ囑託醫ヲ配置シ遠隔地方ノ局所員ヲシテ通信治療ヲ受ケシムルノ途ヲ啓ク等必要ノ處置ヲ取レリ此ノ如キ狀態ナルニ拘ラス吏員一般其職務ニ盡瘁シ通信機關ノ運轉ニ支障ナキヲ得ルハ特記スルノ價値アリト

小包郵便物數

■ 引受數
■ 配達數

通常郵便物數



信ス

(二) 韓國國庫金取扱ノ成績

國庫金取扱事務ノ成績

通信官署ニ於テ國庫金取扱事務ヲ兼掌スルハ内外ニ先例ナキ所ニシテ當初頗ル其成績ヲ憂悞シタルモ爾後漸次佳良ノ趨向ニ在ルヲ認ム最モ同事務開始當時ニ於テハ韓國政府側ノ取扱手續未タ能ク整頓セス一般民衆モ亦之ニ對シ種々ノ誤解ヲ懷抱スルモノノ如ク動モスレハ納稅ヲ躊躇スル傾向アリ加フルニ稅務官ノ派遣十分ナラスシテ納入告知書ノ發行遲延シタル等ノ結果郡守ニシテ納稅ニ關涉スルモノアリシコト葉錢騰貴ノ爲メ納稅ニ當リテ公定相場ト時價トノ差益ヲ收メントスルモノ續出シタルコト等ニ依リ多少納稅ノ成績ニ影響シタレトモ其後韓國側ニ於ケル諸般ノ手續モ漸ク整理シ人民ノ誤解モ次第ニ釋ケ明治四十年下半年ノ如キ各地暴徒蜂起ノ影響ヲ受ケタルコト少カラサルニ拘ラス取扱口數及金額トモ漸次増加シツツアリ今三十九年十月一日同事務開始以後ニ於ケル取扱口數及金額ヲ擧ケレハ左ノ如シ

韓國國庫金取扱額

通信

區別	明治三十九年		明治四十年	
	口數	金額	口數	金額
歲入金	一、一〇三	一九五三〇	四五四九四	六一〇五四五〇
歲出金	三四九	二九八二二	二七二二六	一五九九七〇七

(備考) 明治三十九年八月一日事務開始ヨリ十二月末日マテノ合計トス但取扱局所ノ多數ハ同年十二月一日ノ開始ニ係ルヲ以テ實際ノ取扱期間ハ極メテ短少ナリ

韓國金庫及通信官署國庫金取扱所ノ管轄ニ屬スル各徵稅額如何ハ今遽ニ之ヲ知リ難キヲ以テ彼此對照シテ其成績ヲ見ル能ハサルモ右ノ如ク明治四十年中即チ韓國ノ一會計年度間ニ於ケル取扱歲入金約六百萬圓ニ及フニ徵スレハ同國經常歲入ノ約四分三ハ通信官署ノ手ヲ經テ國庫ニ納入セラレタルヲ知ルヘシ

貯金管理事務

韓國國庫金出納保管事務ハ通信管理局出納課ニ於テ之ヲ掌理ス又從來韓國ニ於ケル郵便爲替郵便貯金及郵便取立金管理事務ハ郵便爲替貯金管理所ニ於テ執行シ來レリト雖官制ノ規定ヨリスルモ事務執行上及監督上ノ便宜ヨリスルモ宜シク之ヲ通信管理局ニ於テ掌理スヘキモノト認メ遞信

現金取扱ノ困難

省ト協議ノ上明治四十年三月三十一日ヲ區切りテ右等事務ヲ繼承シ同シク出納課ヲシテ之ヲ掌理セシムルコトトシタリ
 韓國ニ於ケル資金ノ受授上特ニ國庫金事務取扱上最モ困難ヲ感スルハ現金ノ計算及其運搬ニ在リ通信官署ニ受入ルル貨幣ハ其地方僻遠ノ境ニ在ルタケ新貨少クシテ葉錢又ハ舊白銅貨多キヲ以テ之カ計算ニ手數ト時間ヲ要スルハ勿論其運搬ニ多大ノ費用ヲ要シ時トシテ危險ノ虞ナキニアラス特ニ江原道忠清南道ノ一部及慶尙道ノ如キ葉錢地方ニ於テ其困難最モ甚シトス思フニ貨幣整理ノ進行ハ漸次此種ノ困難ヲ輕減スヘシト雖當分ノ間未タ全ク之ヲ免ルルヲ得サルヘシ

(三) 事業ノ收支

韓國通信事業ノ收支

韓國政府ノ通信事業收入ハ明治三十七年度即チ同政府經營ノ最終年ニ於テ二十二萬元ニ過キス最多額ノ收入アリシ同三十六年度ニ於テモ僅ニ二十六萬元ニ上レルノミ又通信事業ノ支出ハ同三十七年度ニ於テ五十二萬元同三十六年度ニ於テ四十八萬元ニシテ即チ收入ハ支出ノ半額内外ニ止レリ更ニ帝國政府カ韓國ニ於テ經營セル通信事業ノ收支ヲ調査スルニ明

日本通信事業ノ收支

通信

治三十四五兩年度ニ於テ經常歳入各十九萬餘圓、三十六年度三十六萬餘圓、三十七年度四十九萬餘圓ニシテ之ニ對スル經常歳出ハ三十四年度ノ十七萬餘圓ヨリ遞次増加シ三十七年度ニハ四十九萬餘圓ヲ示セリ即チ年ニ依リ收支ノ過不足アリト雖、右ノ計數ハ内地ニ於テ支拂ヒタル在韓國郵便局所在勤者ノ俸給及内地ニ於テ購入シタル物品ノ代價等ヲ含マサルヲ以テ此等ヲ計上スレハ是又多少ノ損失ヲ免レサリシモノトス以上日韓兩國ノ通信事業費ヲ合計スレハ明治三十四年度乃至同三十七年度ニ於テ經常收支ノ上ニ一箇年少クモ十萬餘圓多キハ實ニ二十九萬餘圓ノ損失ヲ見ル通信機關合同後ニ於ケル韓國通信事業ノ收支ハ共ニ急激ノ増加ヲ示セリ是レ通信機關ノ普及及其施設ノ改善ニ努メ隨テ經費ノ多端ヲ致スト同時ニ收入モ亦漸次増加ヲ示セル爲ニ外ナラス然モ收支共ニ増加シタリトハ云ヘ其不足金額モ亦隨テ増大シタルヤ無論トス今後通信事業ノ擴張、公衆通信力ノ發展ニ伴ヒ漸次收支相償ヒ進ンテ歳入超過ヲ來スノ日アルヘキヲ疑ハスト雖當分ノ間ハ尙常ニ多少ノ損失ヲ免レサルヘシ此損失ハ全然帝國政府ノ負擔ニ屬シ韓國政府ハ其委託セル國庫金取扱ノ特別事務ニ對

合同後ノ收支

シ一箇年金二十五萬圓ヲ支拂フ外、全ク此負擔ヲ分ツコトナシ今明治三十八年度即合同以後ニ於ケル韓國通信事業ノ歳入出ヲ舉クレハ左ノ如シ

韓國通信事業歳入出

區別	明治三十八年度決算	同三十九年度決算	同四十年度(歳入ハ現計、歳出ハ豫算)	同四十一年度豫算
歳入	七四〇、一〇一	一、一三二、八一	一、五九〇、六三〇	一、六五〇、一五九
臨時部	三三三	八〇七	二〇九九	一、一三三
經常部	七四〇、一〇一	一、一三二、八一	一、五九〇、六三〇	一、六五〇、一五九
計	七四〇、四一四	一、一三三、〇八八	一、五九二、七二九	一、六五一、二八二
歳出	二、一五一、五三三	一、四七九、九七五	一、八四八、四二四	二、〇一七、一〇五
臨時部	四三九、八〇五	八一六、一〇三	三六四、五八七	二五九、五九〇
經常部	二、一五一、五三三	一、四七九、九七五	一、八四八、四二四	二、〇一七、一〇五
計	二、五九一、三三七	二、二九六、〇七八	二、二二三、〇二一	二、二七六、六九五

三十八年度歳出ノ理由

明治三十八年度歳出經常部ノ激增ハ通信事業ノ合同ニ對スル創業費及通信業務ノ擴張ニ巨額ノ費用ヲ要シタル爲ニシテ之ヲ前年度ニ於ケル日韓兩國通信事業經費ノ合計ニ比スレハ倍額以上ニ當ル又同年度臨時部歳出

ノ増加ハ同シク通信事業合同ノ爲、廳舎ノ新營修繕ヲ要シタルヲ以テナリ
 今年度ノ歳入出ヲ比較スレハ經常收支ニ於テ百四十一萬餘圓ノ收入不
 足ヲ示シ爾後漸減ノ傾向アリト雖、尙明治三十九年度ニ於テ三十六萬餘圓
 同四十五年度ニ於テ二十五萬餘圓ノ不足ヲ見ル外ニ歳出臨時部ニ屬スル
 經費明治三十八年度四十三萬餘圓、同三十九年度八十一萬餘圓、同四十年
 三十六萬餘圓アリ通算シテ帝國カ韓國通信事業ノ爲ニ負擔スル所一箇年
 六十一萬圓乃至百八十五萬圓ニ上レリ

帝國ノ負

歳入内譯

歳入經常部ノ最重ナル收入ハ無論郵便電信收入ニシテ海外電報ノ繁閑其
 他ノ爲、節目ニ増減アリト雖、大體ニ於テ増加ノ傾向顯然タリ其他ハ印紙收
 入及雜收入等ニシテ金額何レモ多カラス又歳入臨時部ハ官有物拂下代等
 ニシテ金額更ニ少シ今歳入ノ大宗タル郵便電信收入ノ趨勢ヲ見ルニ三十
 八年度決算額七十二萬二千三百三十六圓、三十九年度決算額百四萬十六圓、四
 十年度現計額百四十八萬七千八百六圓ニシテ三十九年度ノ收入急ニ増加
 シタルハ同年度ニ於テ始メテ韓國々庫金取扱料十五萬餘圓ノ收入アリシ
 ニ因ル爾後年々ノ定額二十五萬圓ハ郵便電信收入中ニ包含セララルヲ以

郵便收入

臨時費

テ純粹ニ郵便電信收入ヲ見ントスルニハ之ヲ控除スルヲ要ス次ニ歳出經
 常部ハ舉テ遞信費ノ一科ニ包含セララルヲ以テ重テ記スルノ必要ナシ歳
 出臨時部ニ至リテハ營繕費及電信電話營繕費ヲ重ナルモノトシ營繕費ハ
 三十九年度決算額九萬八百五十圓、四十年年度豫算額十萬九千五百九十圓、電
 信電話營繕費ハ三十九年度決算額十一萬一千六百六十五圓、四十年年度豫算
 額十二萬四千九百九十七圓ニ上リ外ニ三十七年度乃至三十九年ニハ臨時
 事件費支辨ニ係ル又四十年年度ニハ韓國事件費支辨ニ係ル韓國通信事業費
 アリ臨時事件費ハ三十九年度決算額二十八萬六千九百三十一圓ニシテ韓
 國事件費ハ四十年年度豫算額十三萬圓ナリ

(四) 通信事業ト事變

暴徒暴起
ト通信官署

地方保安ノ機關備ハラサル韓國ニ於テ火賊其他ノ盜匪出沒シ良民ヲ苦ム
 ルハ殆ント連年ノ常弊ニシテ特ニ多數ノ通信官署ハ交通最不便ナル僻遠
 ノ地方ニ散在シ我軍隊又ハ警察官ノ保護ヲ受クルニ由ナキヲ以テ最モ其
 殃ヲ受ケ易キ地位ニ在リ明治三十九年五月洪州匪亂當時ニ於ケル郵便局
 員ノ遭難ヲ始トシ同年度下半年ニ於テハ郵便局所及吏員ノ被害遭難三十

八件内、局所ノ一時閉鎖三箇所ニ上リタリ然レトモ其影響未タ大ナリトスルニ足ラサリシカ同四十年七月ノ政變後全國各地暴徒蜂起シ地方ノ秩序全ク破壊セラレ排日ノ氣運一般ニ彌蔓スルニ當リテ最深酷ナル影響ヲ受ケタルモノ實ニ通信事業ヲ措テ他ニアラス今年七月ヨリ翌四十一年三月末日ニ至ル通信官署ノ被害狀況ヲ見ルニ遭難閉鎖ノ局所九十九箇所、内二回閉鎖三十箇所、三回閉鎖五箇所ニ上リ遭難死亡セル吏員備人十九名、同家族五名、負傷者二十五名、同家族二名、死傷者合計四十四名、同家族七名ニシテ官舎官物ノ損害二萬七百圓餘、私有品ノ損害二萬八百圓餘、郵便物損害三千二百餘通、其他證書類ノ損害モ亦少カラス若シ夫レ電信線路ノ被害ニ至リテハ亘長二十二里三十一町餘、延長五十三里三町餘、電柱一千二百九十六本、此復舊費二萬二千六百餘圓ヲ要シ郵便線路ノ被害モ亦線路數七十六、被害回數百二十八回、延長里程七百二十二里餘ニ上レリ其内最モ甚シカリシハ京城忠州間電信線ノ損害五里餘ニ亘リ復舊ニ二十三日ヲ費シタル如キ長津惠山鎮間電線ノ斷線十里餘ニ及ヘル如キ又郵便ニ在リテハ江原道方面最モ甚シク一時殆ント四面ノ交通斷絶シ數十日ニ亘リテ尙連絡ヲ得ス

通信事業ノ被害

吏員ノ遭難

若クハ非常ノ迂回線ニ依リテ漸ク一縷ノ交通路ヲ保持セル如キ要スルニ通信ノ敏活ヲ害シ收入ヲ妨ケ事業ノ發達ヲ阻碍シタルコト勝テ數フ可カラズ之カ爲、巨額ノ復舊費用ヲ要シタルハ已ムヲ得ストスルモ全ク防衛力ヲ缺ケル通信事業従事員若クハ其家族カ猛惡ナル匪徒ノ毒手ニ墮ルルモノ上記ノ如ク多數ナリシニ至リテハ眞ニ酸鼻ノ極ニシテ其間接ノ影響トシテ従事員ノ精神上ニ及シタル危惧不安ノ情ハ又斯業ニ對スル重大ノ損失ト云ハサル可カラス而シテ暴動ハ最初江原道地方ニ勃發シ延テ京畿、忠清、慶尙各道ニ及ヒ遂ニ全國ニ波及シ軍隊憲兵若クハ警察官護衛ノ下ニ郵便物ノ遞送ヲ爲セル所極メテ多シ

第十三章 鐵道

第一節 韓國鐵道ノ沿革

(一) 京釜線

京釜鐵道
會社ノ特
典

京釜線ハ明治二十七年八月日韓兩國間ニ協定セラレタル暫定合同條款及三十一年九月締結ノ京釜鐵道合同條約ニ基キ且三十三年九月發布ノ法律及勅令ニ準據シ三十四年六月ヲ以テ成立シタル元京釜鐵道株式會社ニ於テ同八月工ヲ起シ三十七年十一月全線竣成三十八年一月一日營業ヲ開始セリ本線布設ニ關シ日韓兩國政府ヨリ會社ニ與ヘタル特典ヲ舉クレハ

日本政府ヨリ與ヘタル特典ハ左ノ如シ

一、會社設立ヨリ十五箇年間ハ運輸開始前ニ在リテハ株金拂込登記ノ翌月ヨリ一箇年六分ノ利子ヲ下附シ且運輸開始後ハ其利益一箇年六分ニ達セサルトキ其不足額ヲ補給スルコト

一、社債金ハ其拂込登記ノ翌月ヨリ十五箇年間ハ本社ノ社債ニ附スル利子

ト同一ノ利子ヲ下附スルコト但社債利子ノ補給ハ一箇年六分ヲ以テ限度トス

速成命令

明治三十六年十二月日露兩國間ノ形勢切迫セルニ當リ政府ハ京釜鐵道速成ニ關スル命令ヲ發シ京釜鐵道會社總裁及常務理事ヲ官選トスルト同時ニ更ニ左ノ特典ヲ與ヘタリ

一、社債金一千萬圓ニ對シ元利ノ支拂ヲ保證スルコト

一、特別補助金トシテ金二百二十萬圓ヲ下附スルコト

然ルニ精査ノ結果尙工費ニ不足ヲ生スルヲ以テ更ニ會社ヨリ特別補助金ノ下附ヲ請願シ政府ハ其已ムヲ得サルヲ認メ金百五十萬圓ヲ無利子年賦償還法ニ依リ貸與シタリ

次ニ韓國政府ヨリ與ヘタル特典ハ左ノ如シ

一、線路、停車場、倉庫、工作場等ニ要スル用地ハ無代ヲ以テ供給スルコト

一、鐵道ニ要スル器械及各種物件ニシテ外國ヨリ輸入スルモノ、海關稅及鐵道用地ニ係ル地稅ヲ免シ尙鐵道營業ニ係ル種々ノ利益ニ課稅セサルコト

一、各地方ニ於テ支線ヲ建設スルニ當リ韓國政府及韓國民力之ヲ建設スル
場合ノ外、別國臣民ニ之ヲ許可セサルコト

(二) 京仁線

京仁線ハ明治二十九年米國人「モールス」ナルモノ韓國政府ヨリ建設ノ特許
ヲ得テ線路工事中、三十一年十一月澁澤榮一外十五名ニ於テ京仁鐵道引受
組合ヲ組織シ「モールス」トノ間ニ工事竣成後同線ヲ引受クルノ契約ヲ締結
シ翌三十二年一月更ニ右契約ヲ變更シ工事竣成ヲ俟タスシテ組合ニ引受
ケタリ同五月組合ヲ變更シテ京仁鐵道合資會社トナシ引續キ工事ヲ進メ
同九月仁川鷺梁津間二十一哩ノ運轉ヲ開始シ三十三年七月鷺梁津南大門
間四哩餘ノ工事竣成シテ京仁線全部開通セリ

京釜京仁
線合併

明治三十六年十月京釜鐵道會社ハ金六十四萬圓ヲ以テ京仁鐵道一切ヲ買
收シテ其營業ヲ合併シ韓國ニ於ケル鐵道統一ノ端ヲ啓ケリ

(三) 京釜鐵道買收

京釜鐵道
買收法

明治三十九年鐵道國有ノ議決スルヤ政府ハ併セテ京釜鐵道ヲ買收スルノ
必要ヲ認メ同三月帝國議會ノ協賛ヲ經テ京釜鐵道買收法ヲ發布シタリ同

法ニ依リ政府ハ買收ノ日ニ於テ會社ノ現ニ有スル權利義務ヲ繼承スルモ
ノトシ買收價格ノ算定法ハ同法ニ於テ左ノ如ク規定セリ

一、拂込金額ノ六分ニ相當スル金額ヲ二十倍シタル金額

二、京仁線ニ就テハ明治三十五年後半期乃至明治三十八年前半期ノ六營業
年度間ニ於ケル建設費ニ對スル益金ノ平均割合ヲ買收ノ日ニ於ケル建
設費ニ乘シタル額ヲ二十倍シタル金額

即チ同年七月一日ヲ以テ京釜京仁鐵道ヲ買收シ同日統監府鐵道管理局ノ
事務ヲ開始シタリ此ニ於テ韓國ノ鐵道ハ凡テ國有ニ歸ス

(四) 軍用線

統監府鐵道管理局設置當時ニ於ケル韓國ノ鐵道ハ右京釜京仁兩線ノ外、陸
軍ノ管理經營ニ係ル軍用鐵道アリ京義馬山兩線ヨリ成リ其線路延長少シ
ク統監府所管ノ鐵道ニ超ユ

臨時軍用
鐵道監部

明治三十七年二月戰役開始後、兵站總監ノ下ニ臨時軍用鐵道監部ヲ置キ先
ツ京城開城間ニ鐵道ヲ敷設スルノ任務ヲ授ケラル即チ同監部員ハ三月韓
國ニ渡リ直ニ工兵隊及鐵道隊ヲ役シテ工事ニ着手セリ次テ同四月開城平

壤間同六月平壤義州間鐵道敷設ノ命アリ八月更ニ馬山三浪津間鐵道ノ敷設ヲ命セラル當時兵馬倥傯ノ際諸種ノ困難アリタルニ拘ラス速成ヲ旨トシテ工事ヲ急施シ翌三十八年二月開城ニ至ル線路先ツ開通シ超エテ同四月ニ至リ清川大寧ノ兩江ヲ除キ開城以北京義本線全部碧瀾渡支線及兼二浦支線ノ工事竣成シ三十九年三月右兩江ノ假橋成リ京義線ヲ通シテ汽車ヲ運轉スルニ至リタリ又馬山線ハ三十八年五月全部開通セリ
京城元山間ノ線路ハ明治三十七年九月兩端數哩ノ工事ニ着手セシモ工事困難ノ割ニ軍事上其他ノ必要大ナラサルニ鑑ミ之ヲ中止セリ

(五) 韓國鐵道ノ統一

京義馬山兩線ノ建設ハ戰時急施ノ必要上陸軍ニ於テ之ニ任シタリト雖平和既ニ克復セラレ且統監府鐵道管理局ノ設置ニ依リ韓國鐵道經營ノ機關成レルニ當リ之ヲ其所管ニ移スハ素ヨリ當ニ然ルヘキ所トス即チ明治三十九年九月一日ヲ以テ軍用鐵道全部ヲ舉ケテ統監府鐵道管理局ニ引繼キ管理局ニ於テハ臨時鐵道建設部ヲ增置シ同部ヲシテ專ラ舊軍用鐵道線ノ建設及改良工事ヲ掌ラメタリ此ニ於テ韓國ノ鐵道ハ全部國有タルノミナ

統監府鐵道管理局

ラス其管理經營モ亦同一機關ニ委セラレ鐵道ノ統一始メテ完全ヲ得ルニ至レリ

買收當時韓國鐵道

買收當時ニ於ケル京釜鐵道線路ハ二百九十三哩六分(京仁線ヲ含ム)又引繼當時ニ於ケル京義線ハ三百十九哩三分(兼二浦支線ヲ含ム)同馬山線ハ二十五哩總計六百三十七哩九分ニシテ京仁兼二浦馬山三支線ヲ除キ南草梁ヨリ北新義州ニ至ル縱貫幹線ノ延長ハ實ニ五百八十二哩ニ上レリ

第二節 建設及改良

(一) 京釜線復舊工事

京釜線大

明治三十九年七月買收當時ニ於ケル京釜鐵道線路ハ工事竣成後日尙淺ク諸般ノ設備未タ全カラサルノミナラス偶々同八月九月ノ交稀有ノ豪雨アリ全義驛釜山起點二百二哩五附近ヲ中心トシ南ハ金烏山驛同上百五哩附近北ハ水原驛同上二百四十八哩五附近ニ至ル區間ノ損害最モ甚シク築堤ノ缺潰切取ノ崩落橋梁溝橋ノ倒壞流亡等舉ケテ數フ可カラス之カ爲前後二

水害復舊

旬間全ク南北ノ連絡ヲ絶テ九月二十一日ニ至リテ漸ク應急修理ヲ終ヘ列車ヲ運轉スルヲ得タリ然レトモ水害ノ實況ニ顧ミレハ單ニ復舊工事ヲ施スノミニテハ永ク將來ノ安全ヲ保ス可カラズ依テ築堤ノ増嵩橋梁及溝橋ノ延長若クハ新設並被害最大ナル箇所ニ於テ適度ノ改良ヲ施スノ計畫ヲ立テ之ニ要スル經費ハ別ニ國庫ノ支出ヲ仰ケリ

三十九年度ニ於テハ氣候其他ノ關係上豫定ノ工事ヲ進ムル能ハス豫算ノ大部ヲ次年度ニ繰越シ四十年年度ニ於テ全部竣工シタリ

(二) 京釜線建設及改良工事

京釜線

京釜線草梁釜山間ハ施工區域僅ニ一哩ニ過キサルモ線路ノ殆ント全部海ニ沿ヘルヲ以テ埋築其他施工ノ困難一方ヲラス買收後元京釜鐵道會社ノ計畫ヲ踏襲シテ工事ヲ進メ明治四十年年度ニ於テ釜山停車場構内ヲ除クノ外全部竣成セリ即チ四十一年度ノ初ヨリ草釜間ニ運輸營業ヲ開始シ始メテ完全ニ京城釜山間ヲ連絡スルヲ得タリ其他建設費支辨事業ノ重ナルモノハ各驛設備ノ充實ト諸建物ノ増設工事等ニシテ水害復舊工事ノ進捗ト相俟チ漸次京釜線ノ輸送力ヲ増加スルヲ得ントス

京仁線改

京仁線ハ營業開始後比較的年所ヲ經タリト雖線路橋梁其他改良ヲ加フ可キ點少カラズ即チ明治三十九年度ニ於テ右ニ關スル計畫ヲ立テ四十年年度ニ於テ梧桐洞永登浦間線路改良及橋梁改築工事等ヲ竣工シ爾後引繼キ施工中ニ在リ

(三) 舊軍用線建設及改良工事

軍用線改

京義馬山兩線ハ軍事上ノ急需ニ應ジ急速施工セルモノナルヲ以テ工事ノ概シテ薄弱ナルハ言ヲ俟タズ即チ所ニ依リ最急勾配三十分一、最小半徑十鎖ノ極限ヲ使用シ成ル可ク土工ヲ減スル爲路盤ヲ素地ニ沿ハシメ橋梁ハ凡テ木造假橋トシ停車場其他ノ建造物モ亦應急工事ニ過キサルカ如キ是レナリ線路ノ狀況右ノ如クナルヲ以テ元軍用鐵道監部ニ於テ既ニ改良工事ニ着手シ京義線ハ明治三十七年十二月馬山線ハ三十九年五月各改良工事ヲ起セリ同年九月引繼後ニ於テ統監府鐵道管理局ニ臨時建設部ヲ置キ專ラ舊軍用線ノ改良ニ任セシメ銳意工事ヲ督勵シテ今日ニ至ル

京義線改

京義線ニ在リテハ明治三十九年度ニ於テ前年度以來ノ工事ヲ繼續スル外線路ノ狀況其他緩急ヲ稽查シテ線路ノ各區ニ工事ヲ起シ其内同年度中ニ

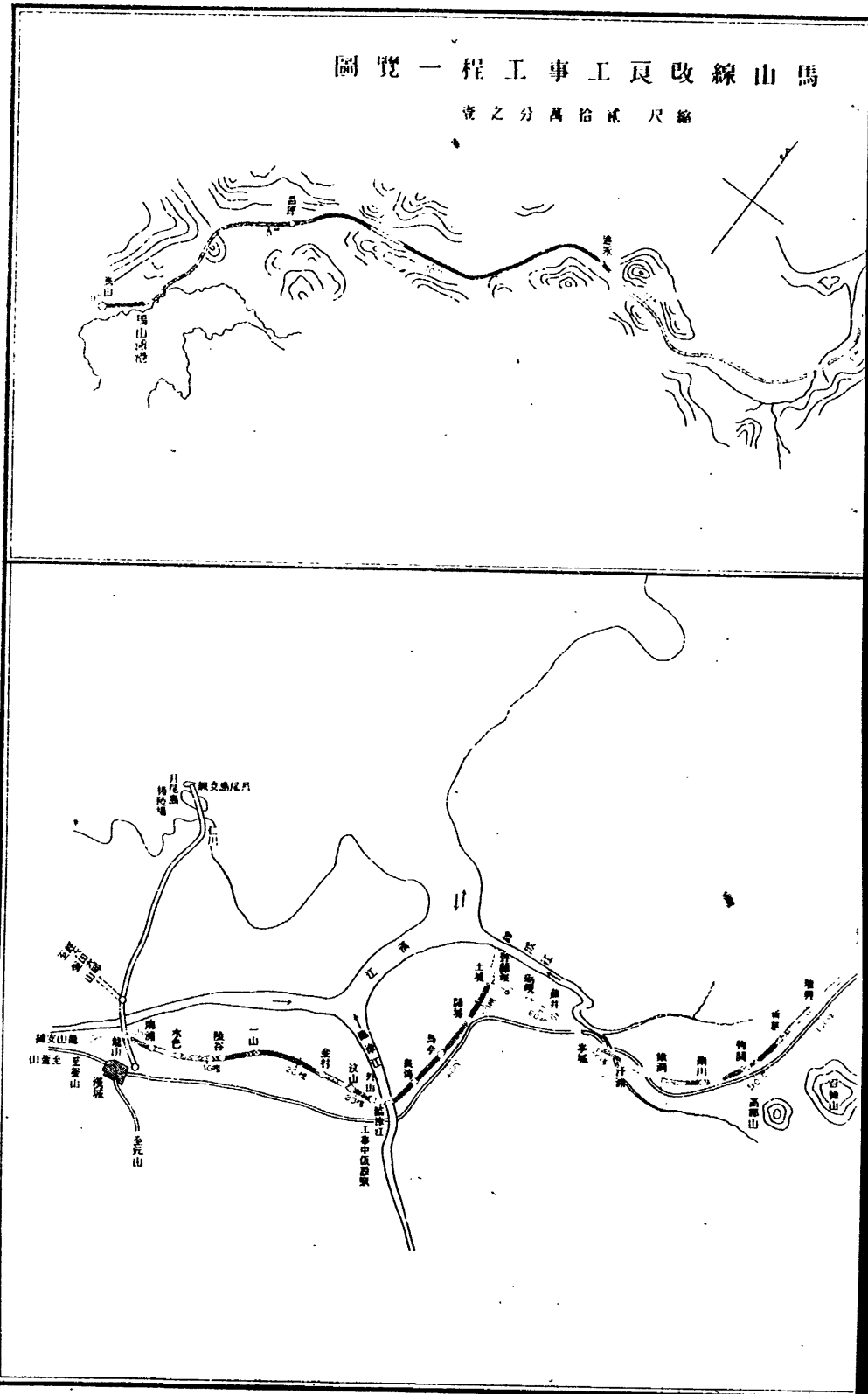
竣工シタルハ七城汗浦間ニ於テ龍津江本橋梁並避溢橋汗浦新幕間ニ於テ車輪嶺隧道等トシ又各驛官舎工事モ一部ヲ竣成セリ

四十年度

四十年度ニ於テハ工事次第ニ進捗シ汶山土城間ニ於テ馬尾川橋梁汶山及開城隧道汗浦新幕間ニ於テ南川架橋及葱秀嶺隧道竣成シ新幕黃州間ニ於テ架橋及線路勾配緩和ヲ主トセルハ八哩餘黃州平壤間ニ於テ架橋及土工ヲ主トセル約十三哩平壤定州間ニ於テ十一哩餘並定州附近ニ於ケル漁波五山ノ兩隧道及多數ノ架橋工事ヲ主トセル改良成リ又定州新義州間ニ於テ多數ノ架橋及隧道ヲ含メル十六哩餘並長策新義州間ノ工事竣工セリ右改良工事ノ結果線路ハ幾分短縮シ且四十一年度ニ亘リ繼續施工中ノ區間及近ク起工サル可キ二三ノ工事ニシテ竣成セハ土城汗浦間及東林長策間ヲ除キ全部最急勾配百分一、最小半徑二十鎖ノ長線タルヲ得ヘシ而シテ從來ノ六十封度軌條ニ代ヘ七十五封度軌條ヲ敷設シタルモノ龍山新幕間ニ於テ延長約十七哩半、新幕新義州間ニ於テ約二十八哩半、合計約四十六哩ニ上レリ又建家工事ニ在リテハ龍山新幕間各驛ノ工事ヲ竣リ龍山ニ於ケル多數ノ官舎モ殆ント其全部ヲ竣成シ新幕新義州間ニ於テハ第一期計畫ニ屬

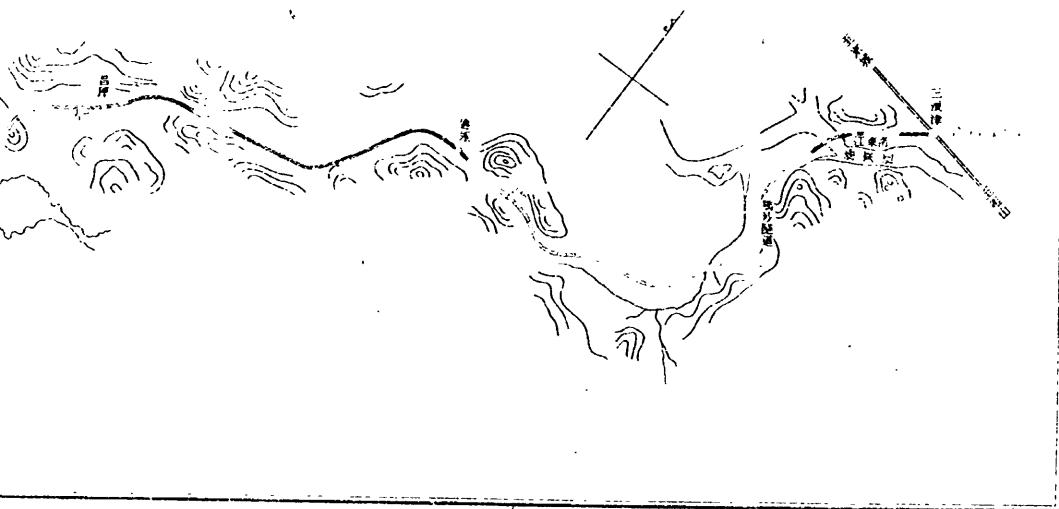
馬山線改良工事工程一覽圖

縮尺 貳拾萬分



馬山線改良工事工程一覽圖

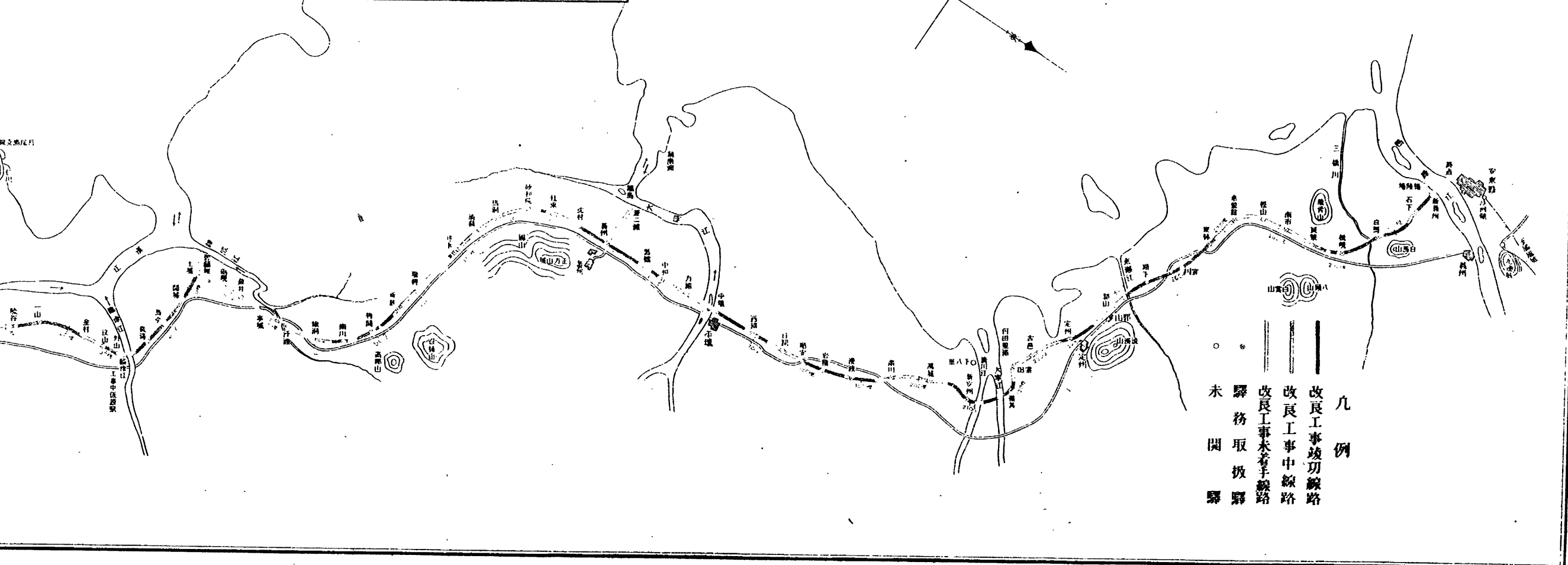
縮尺貳拾萬分之一



京義線改良工事工程一覽圖

縮尺百萬分之一

明治十四年度未現在

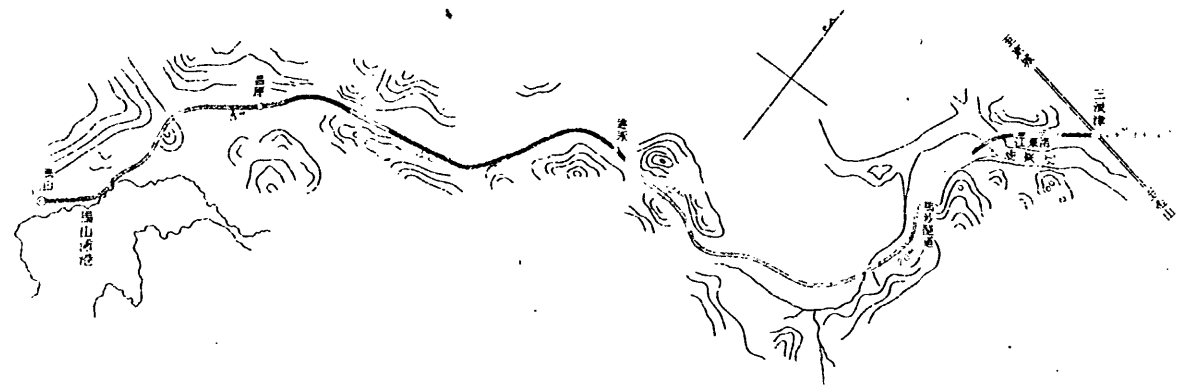


除キ全部最急勾配百分一、最小半徑二十鎖ノ良線タルヲ得ヘシ而シテ從來ノ六十封度軌條ニ代ヘ七十五封度軌條ヲ敷設シタルモノ龍山新幕間ニ於テ延長約十七哩半、新幕新義州間ニ於テ約二十八哩半、合計約四十六哩ニ上レリ又建家工事ニ在リテハ龍山新幕間各驛ノ工事ヲ竣リ龍山ニ於ケル多數ノ官舎セ殆ント其全部ヲ竣成シ新幕新義州間ニ於テハ第一期計畫ニ屬



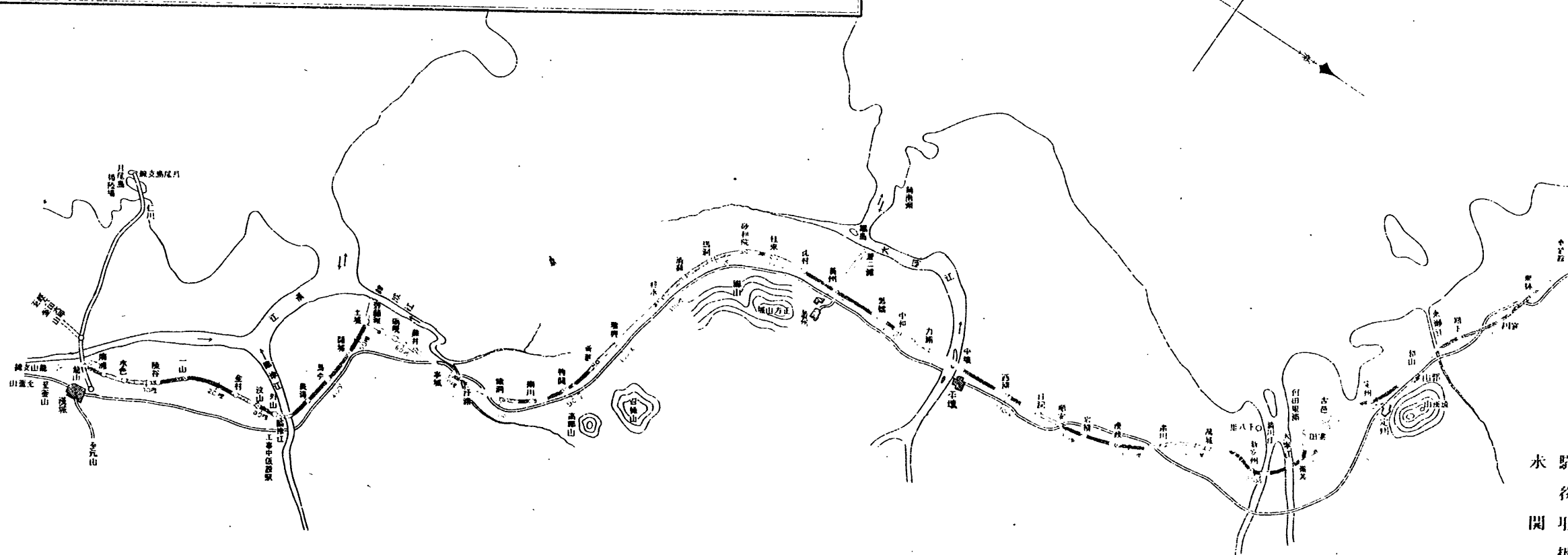
馬山改線工程一覽圖

縮尺 萬分之二



義線改線工程一覽圖

縮尺 百萬分之一
明十四年度未現在



驛
拔
取
後
水

裏面白紙

一 開 闢
 二 舊 車 庫 改 築
 三 舊 車 庫 改 築
 四 舊 車 庫 改 築
 五 舊 車 庫 改 築
 六 舊 車 庫 改 築
 七 舊 車 庫 改 築
 八 舊 車 庫 改 築
 九 舊 車 庫 改 築
 十 舊 車 庫 改 築

馬山線

スル各驛官舎ヲ竣工シタリ
 馬山線ニ在リテモ明治三十九年度ニ於テ元軍用鐵道監部ノ事業ヲ繼續シ
 テ改良ニ着手シ同年度中一部ノ建築工事ヲ了シ四十年ニ於テ本線中ノ
 最大工事タル洛東江架橋ノ九分通ヲ了シ各驛官舎新築工事ハ其大部ヲ竣
 レリ

京義馬山兩線改良工事ノ工程ハ明治四十年度末ニ於テ左ノ如シ
 舊軍用線改良工事功程

線名及區間	改良工事竣工	同 工 事 中	同 未 着 手	合 計
龍山新幕間	四五五二	一九七四	三〇一一	九五五九
新幕新義州間	八八五七	四七六一	七六六八	二二三二七
京義本線合計	一三四三〇	六七五六	一〇七〇〇	三〇九〇六
碧瀾渡支線			三六〇	三六〇
兼二浦支線			八七一	八七一
馬山線	八三九	一二五四	三六五	二四七九

(備考) 鎖以下ハ切捨ツ

(四) 復舊建設及改良費

明治三十九年七月京釜鐵道買收ニ際シ元京釜鐵道會社ノ計畫ニ基キ建設及改良工事ヲ經營スル爲、韓國鐵道建設及改良費トシテ百二十七萬三千餘圓ヲ豫定シ次テ京釜線水害復舊費トシテ同年度ニ百四十二萬二千餘圓ノ追加支出ヲ受ケタリ即チ同年度ニ於ケル豫算及決算額左ノ如シ

三十九年度韓國鐵道建設及改良費

科 目	豫 算 額	決 算 額	次 年 度 繰 越 額
韓國鐵道建設改良費	一二七三、八〇〇	六九一、九四七	五八一、八五三
韓國鐵道水害復舊費	一四二、九九六	二九四、一一五	一二二、八八一
計	二六九六、七九六	九八六、〇六二	一七一〇、七三四

(備考) 水害復舊費ハ二箇年度繼續費ニシテ四十年年度年割額ハ二十四萬四千餘圓、即チ三十九年度分ト併セテ百三十萬三千餘圓トス

四十年以後
ノ建設及
改良費

舊軍用線建設及改良事業ニ關スル臨時軍事費豫算殘額ハ總計一千三百六十九萬四千餘圓ト定メラレ別ニ第二十三回帝國議會ニ於テ八百十七萬九千餘圓、第二十四回帝國議會ニ於テ七十萬圓合計八百八十七萬九千餘圓ノ

追加協賛ヲ得以上總計二千二百五十七萬三千餘圓ヲ以テ韓國鐵道建設及改良費(繼續費)ノ總額トシ舊軍用線ノミナラス併セテ京釜線ノ建設及改良事業ニ充當シ特ニ改良費ハ專ラ京釜線中ノ京仁間改良事業ニ充當セララルモノトス其明細左ノ如シ

韓國鐵道建設及改良費繼續費

建設及改良費	臨時軍事費豫算殘額	追 加 額	總 費 額	四十年年度年割額	年割最終年次
建設費	一三六、九四一	八三、五三七	二二〇、四七九	一〇、二九四	四十二年
總係費	五二、三五七	—	五二、三五七	二、四三八	四十二年
京釜線	—	九七、四二八	九七、四二八	八、三七五	四十一年
京義線	—	三、七〇〇	三、七〇〇	八、二八〇	四十二年
馬山線	—	七、二八九	七、二八九	三、五七二	—
車輪費	—	三六〇、六五〇	三六〇、六五〇	六、四七五	四十三年
改良費	—	五、二二三	五、二二三	五、〇五二	四十一年
計	一三六、九四一	八、八七九	二二五、八二〇	一〇、八〇〇	四十三年

四十年以後
ノ建設及
改良費

明治三十九年度建設及改良費並水害復舊費豫算殘額ハ四十年年度ニ繰越サレ又上記ノ如ク四十年年度ニ於テ水害復舊費ノ支出アルヲ以テ同年度ニ於

ケル韓國鐵道建設及改良費ノ豫定現額ハ前表年割額ヨリモ較々増加ス今右豫定現額並之ニ對スル決算額並豫定殘額ヲ舉クレハ左ノ如シ此殘額ハ次年度ニ繰越使用スルモノトス

四十年年度建設及改良費決算額

	豫定額	前年度繰越額	豫定現額	決算額	豫定殘額
建設費	一〇、二九四、七九〇	五八一、八五三	一〇、八七六、六四三	一〇、七六五、四六三	一一、一八〇
改良費	五〇五、二三〇	—	五〇五、二三〇	八三八、五五六	四二、三七四
建設及改良費計	一〇、八〇〇、〇二〇	五八一、八五三	一一、三八一、八七三	一〇、八四九、三一九	五三二、五五四
水害復舊費	二四四、三六九	一、二八八、八一	一、三七三、二五〇	一、三一六、二八〇	五六、九七〇
合計	一一、〇四四、三八九	一、七〇七、三三四	一二、七五五、一二三	一二、一六五、五九九	五八九、五二四

(備考) 建設費ノ前年度繰越額ハ即チ三十九年度韓國鐵道建設及改良費水害復舊費ヲ含マズノ殘額ナリ

平南線建設費
別ニ第二十四回帝國議會ノ協賛ヲ經テ決定シタル韓國鐵道建設及改良費アリ其總額百八十八萬六千四百圓ニシテ明治四十一年度乃至四十三年度ノ繼續費トシ平壤鎮南浦間ニ鐵道ヲ敷設セントス

(五) 工 作

工場
草梁仁川兩工場ハ明治三十九年七月一日元京釜鐵道株式會社ヨリ又龍山兼二浦兩工場ハ同年九月一日臨時軍用鐵道監部ヨリ引繼キ爾後各種物件ノ製作修繕又ハ試驗ニ任セシム

第三節 作 業

(二) 線路車輛附建設費

線路延長
韓國ノ鐵道ハ目下整理改良ノ時期ニ屬スルヲ以テ買收引繼以來線路ノ延長ハ殆ント増減ナク明治四十年年度末ニ於ケル各線延長ハ左ノ如シ

京釜線	本線 (西大門草梁間)	二七四・二
	京仁線 (永登浦仁川間)	一九四
計		二九三・六
京義線	本線 (龍山新義州間)	三〇・六
	碧瀾渡支線 (土城碧瀾渡間)	三・六
	兼二浦支線 (黃州兼二浦間)	八・七
鐵道		三三・五

鐵道

計

三三六

馬山線

本線 (三浪津馬山間)

三三二九

三線合計

六四一

右ノ内、京釜線二百九十三哩六分ハ營業線ニシテ他ノ京義馬山兩線ハ準營業線(便乘載線)トス而シテ全線ニ於ケル停車場ノ數ハ百一箇所ニシテ内乗客ノミヲ取扱フ驛二箇所ナリ
 明治四十年年度末及三十九年度末ニ於ケル現在車輛數ハ左ノ如シ

車輛現在數

車輛種類	明治四十年年度末		明治三十九年度末		比較
	京釜線	京義馬山線	京釜線	京義馬山線	
小形タンク	四	一	四	一	
機關車	一八	五三	一八	五二	
タンク	二九	一	一八	一	
客車	八七	七二	八七	六八	
貨車	四六五	四九〇	二七三	三六三	
合計	九五四	一五八	六三六	三二九	五〇

今之ヲ營業哩程ニ割當ツレハ明治四十年年度末ニ於テ京釜線ハ平均一哩ニ付機關車〇・一七、客車〇・三三、貨車一・五九、京義馬山線ハ機關車〇・一五、客車〇・二四、貨車一・四一輛ノ割トナル
 別ニ釜山港内用小蒸汽船二隻アリ其一ハ總噸數五十五噸、他ハ同二十五噸ナリ

明治四十年年度末ニ於ケル韓國鐵道ノ建設費ハ京釜線三千五百五十九萬餘圓、京義線三千八百六十一萬餘圓、馬山線二百七十六萬餘圓、總計七千六百九十七萬餘圓ニシテ其内譯ハ左ノ如シ

各線現在建設費

京釜線

明治三十九年度末迄支出額

三三三、三一九、一九〇、五二九

同 四十年中支出シタル建設及改良費

二、一六五、一四二、八八九

同 年度中買收價格更正増加

一〇七、三〇〇、〇〇〇

計

三五、五九一、六三三、四一八

京義線

明治三十九年八月迄陸軍省ヨリ支出ノ分

二、三八〇、三二七、一七六、四

鐵道

四七

鐵道

同 三十九年度末迄鐵道管理局ヨリ支出ノ分 五、三二七、三八三、七五六
 同 四十年中支出シタル建設及改良費 九、四九九、二五〇、〇六三
 計 三、八六一九、九〇五、五八三

馬山線

明治三十九年八月迄陸軍省ヨリ支出ノ分 一、五九四、〇八七、四五九
 同 三十九年度末迄鐵道管理局ヨリ支出ノ分 六、六八八、四七二、五九四
 同 四十年中支出シタル建設及改良費 五〇一、二〇五、六九三
 計 二、七六三、七六五、七四六

三線合計

七、六九五、三〇四、七四七

(備考) 京釜線建設費中明治三十九年度末迄支出額ハ京釜鐵道買收價格ヨリ買收ノ際ニ於ケル元同社現存ノ資金及元同社物品賣拂代金等ヲ控除シタル殘額ニ加フルニ三十九年度中ニ於ケル建設及改良費ヲ以テシタルモノトス即チ舊京釜鐵道會社カ實際ニ鐵道建設ノ爲ニ支出シタル費額ニアラス

以上ノ建設費ヲ既成鐵道哩數ニ割當ツレハ一哩ノ建設費京釜線ハ十二萬一千一百餘圓、京義線ハ九萬八千一百餘圓、馬山線ハ十一萬五百餘圓ニ當ル更ニ右建設費ノ各年度支出割ヲ舉クレハ左ノ如シ
 各線建設費各年度支出額

線路名	三十七年度	三十八年度	三十九年度	四十年年度	計
京釜線	三、三三〇、〇〇〇	四、五〇〇、〇〇〇	二、九五九、一九一	二、二七二、四四三	三、五五九、一六三
京義線	九、四八三、八一七	九、五三九、五六八	一〇、〇九七、二七一	九、四九九、二五〇	三、八六一九、九〇六
馬山線	五、八六九、四四六	六、三九九、九一六	一、〇三五、六九八	五〇一、二〇六	二、七六三、七六六
計	一、三、四〇〇、七六三	二〇、六二九、四八四	四〇、六七二、二五九	一一、二七二、八九八	七、六九五、三〇五

(備考) 京釜線三十七八兩年度ノ支出ハ速成命令ニ伴フ補助及貸下金ニシテ又三十九年度ハ買收代價支拂額ナリ

(二) 運輸上ノ施設

開業線
 京釜線ハ買收當時現ニ運輸營業ヲ爲セルヲ以テ當分元京釜鐵道株式會社所定ノ運輸規程ヲ襲用シテ營業ヲ繼續シ明治三十九年八月元鐵道作業局及元山陽鐵道株式會社ト連帶シテ割引往復乘車券ヲ發賣シ十二月京釜間發着大貨物噸扱ヲ開始スル等、漸次改善整理ニ努メ十二月ニ至リ統監府令ヲ以テ運輸營業規程、大貨物運賃及小手荷物運賃規定ヲ制定シ翌四十年一月一日ヨリ之ヲ實施シタリ

總便線
 京義線及馬山線ハ引繼當時未タ開業ニ至ラス前者ハ三十八年七月ヨリ後

鐵道

者ハ三十八年十月ヨリ貨客ノ便乘便載ヲ許可シ準營業ヲ爲シ來レルノミ
即チ引繼後ニ於テモ當分其舊ニ依リ便乘便載取扱ノ停車場ヲ増加シ其他
運輸ノ改善ニ關シ多少ノ施設ヲ加フルニ止メタリ

全線直通
輸送

明治四十年度ニ至リ京義馬山兩線ノ施設漸次整備セルヲ以テ現ニ京釜線
ニ施行中ノ各種規程ヲ右兩線ニ準用シ且同線各驛ト京釜線各驛トノ直通
輸送取扱ヲ爲スコトトシ四月一日ヨリ之ヲ施行セリ九月局線各驛ト安東
縣相互間ノ連絡荷物輸送ヲ開始シ安東縣ニ新義州驛派出所ヲ設ケ以テ兩
地間ニ於ケル旅客貨物ノ連絡ヲ便ニシ又京義線碧瀾渡支線ヲ公開シテ貨
物ノ特約便載ニ供用シ日本郵船大阪商船兩會社ト特約シテ北韓地方ノ貨
物ヲ吸取スル爲メ大貨物連絡輸送ヲ開始シ運送業者ノ改善ヲ圖ル爲メ保證金
ヲ徵シ主要驛ニ貨物取扱人ヲ置キ且出荷獎勵策トシテ納金割戻ノ制ヲ設
ケ其他運輸ノ改善ニ關シ施設シタル所多シ而シテ列車ノ運轉ニ關シテハ
京釜線及馬山線ハ四月京義線ハ七月各運轉時刻ヲ改定シ發着回數ヲ増シ
急行列車ノ速力ヲ加ヘ各地トノ連絡ヲ便ニスル等是レ亦改善ノ蹟少カラ
ス

京義馬山
兩線開業

明治四十一年四月一日ヨリ京義馬山兩線ニ於テ一般運輸營業ヲ開始シ即
チ三月三十一日限り右兩線ノ便乘便載ヲ廢止シ尙四十年三月以降釜山港
内ニ於テ營業シタル小蒸汽船ノ運航モ四月一日釜山驛開始ノ爲メ年度末日
限り之ヲ廢止シタリ

(三) 運輸ノ成績

三十九年
度京釜線

明治三十九年度(三十九年七月一日ヨリ四十年三月末日ニ至ル)ニ於ケル京
釜線(京仁線ヲ含ム)運輸營業哩程ハ二百九十三哩六分ニシテ前年同期ニ比
シ増減ナク列車走行哩數ハ六十一萬九千餘哩ニシテ前年同期ニ比スレハ
六萬千餘哩ヲ増加セリ旅客人員ハ百二十九萬六千餘人貨物噸數ハ十九萬
七千餘噸ニシテ前年同期ニ比シ旅客ハ二割六厘貨物ハ六割四分五厘ヲ増
加シ運輸收入ハ客車收入九十三萬六千餘圓貨車收入五十六萬七千餘圓合
計百五十萬四千餘圓ニシテ前年同期ニ比シ客車收入ハ二割一分貨車收入
ハ七割三分四厘合計三割四分二厘ヲ増加シタリ三十九年九月各地ノ出水
ハ非常ノ慘害ヲ及シ二旬餘ニ亘リテ列車ノ運轉ヲ中斷シタルニ拘ラス此
成績ヲ收ムルヲ得タルハ寧ロ意料ノ外ニ在リ

同京義馬
山兩線

京義馬山兩線ニ於テハ前年度ニ比較スルヲ得サルモ其成績漸次良好ナルヲ認ム即チ三十九年度(三十九年九月一日ヨリ四十年三月末日ニ至ル)ノ便乗載取扱哩程ハ京義線三百十九哩三分馬山線二十五哩ニシテ京義線ニ於テハ列車走行哩數三十五萬六千餘哩旅客人員二十四萬七千餘人貨物噸數二萬四千餘噸馬山線ニ於テハ列車走行哩數二萬九百餘哩旅客人員六萬二千餘人貨物噸數千七百餘噸ニ上リ而シテ其收入ハ兩線ヲ合シ客車收入三十八萬五千餘圓貨車收入十二萬三千餘圓合計五十萬九千餘圓ヲ算ス

京四十年度
京釜線

明治四十年度ニ於ケル京釜線運輸營業哩程ハ前年度ニ比シ増減ナク旅客人員ハ二百十四萬六千餘人貨物噸數ハ三十四萬五千餘噸ニシテ前年度明治三十九年四月ヨリ四十一年三月末日ニ至ルニ比シ旅客ハ二割五分一厘貨物ハ三割九分四厘ヲ增加シ運輸收入ハ客車收入一割一分九厘貨車收入一割八分六厘合計一割四分三厘ヲ增加セリ

同京義線

京義線旅客運輸營業哩程ハ前年度ニ比シ増減ナク貨物運輸噸數ハ三百二十哩八分ニシテ前年度ニ比シ一哩五分ヲ增加セリ旅客人員ハ四十八萬八千餘人貨物噸數ハ六萬七千餘噸ニシテ前年度ニ比シ旅客ハ一割三分六厘

同馬山線

馬山線運輸營業哩程ハ前年度ニ比シ増減ナク旅客人員ハ十六萬八千餘人貨物噸數ハ九千餘噸ニシテ前年度ニ比シ旅客ハ七割四分二厘貨物ハ二十九割三分ヲ增加シ運輸收入ハ客車收入五割八分二厘貨車收入十五割六分四厘合計六割七分八厘ヲ增加セリ

全線合計

以上營業線及便乘便載線ヲ合シ全線旅客運輸平均哩程六百三十七哩九分貨物運輸平均哩程六百三十九哩四分ニシテ列車走行哩數ハ百七十二萬五千餘哩ニ上リ旅客人員二百六十二萬五千餘人貨物噸數三十九萬千餘噸運輸收入ハ客車收入二百一十一萬九千餘圓貨車收入百十四萬三千餘圓合計三百二十六萬餘圓ニシテ前年度ニ比シ何レモ多大ノ進步ヲ示セリ蓋シ四十年七月以後各地ニ蜂起セル暴徒ノ騷擾ハ大ニ産業上及交通上ニ影響ヲ與ヘタリト雖列車時刻ノ改定發車回数ノ增加京城博覽會ノ開催連帶區域ノ擴張連絡荷物ノ速達保稅倉庫ノ新設通關手續ノ簡捷並同年度ヲ通シ二三貨物ノ出荷多カリシコト等ハ何レモ收入増加ノ原因ヲ爲セルモノトス之

韓國鐵道
運輸狀況

ヲ要スルニ韓國ノ鐵道ハ其事業ノ創始ニ屬スルタケ運輸ノ發達増進モ亦極メテ顯著ナルヲ認ム今以上ヲ概括シテ運輸ノ狀況ヲ表示スルコト左ノ如シ

韓國鐵道運輸狀況

京 釜 線	區 間	明 治 四 十 年 度		明 治 三 十 九 年 度	
		數 量	前年度比較(△印減)	數 量	前年度比較(△印減)
年度中平均哩程		二九三六		二九三六	
列車走行哩程		一〇〇三、〇四四		六一九五八三	
旅客乘車人員		二、四六六、一〇三	四三〇、一三一	一、二九六、六一二	二二、四四七
小手荷物輸送斤量		六、二二二、五六一	一、〇三八、五二二	三、九八〇、〇八一	一七四、九〇八
貨物輸送噸數		三四五、九五六	九七八、五九九	一九七、八一〇	七七、五二五
客車收入(圓)		一四一九、一六七	一五一、三三六	九三六、六三一	一六二、三八六
貨車收入(圓)		八五六、一五一	一三四、〇九二	五六七、六三七	二四〇、三〇〇
運輸收入 雜收入(圓)		二二七五、三一八	二八五四、二二八	一、〇五四、二六八	一九六八一
計				三八三、〇〇五	

同上 一日一哩平均(圓)	二〇八七九	二、三二〇	一八六九九	四七六一
旅客人哩平均貨率(錢)	一七五	〇〇二	一七六	〇〇四
貨物噸哩平均貨率(錢)	三八七	〇〇四	三九七	〇二五

京 義 線	同 上 (貨車)	年 度 中 平 均 哩 程 (客 車)	
		數 量	前年度比較(△印減)
年度中平均哩程(客車)		三一九三	一五
列車走行哩程		三三〇八	
旅客乘車人員		六三七、八二三	一五五、二二八
小手荷物輸送斤量		四八八、八五〇	五八、四四一
貨物輸送噸數		一、二五九、七〇六	三〇九、五三〇
客車收入(圓)		六五、四〇二	三三、〇五五
貨車收入(圓)		二七、八七四九	八、二七一
運輸收入 雜收入		九三、二七五一	一一、二二六九
計		七、八三五	一一〇、五四〇
同上 一日一哩平均(圓)		二九六	〇、七五六
旅客人哩平均貨率(錢)			〇、一一五

鐵道

馬山線

年度中平均哩程(客車)	貨物噸哩平均賃率(錢)		營業哩程		列車走行哩程		旅客乘車人員		小手荷物輸送斤量		貨物輸送噸數		運輸收入		雜收入		全線合計
	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	
六三九九	四二〇	一七二	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	六三九九
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	

三四六

五七九

年度中平均哩程(客車)	貨物噸哩平均賃率(錢)		營業哩程		列車走行哩程		旅客乘車人員		小手荷物輸送斤量		貨物輸送噸數		運輸收入		雜收入		全線合計
	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	客車收入(圓)	貨車收入(圓)	
六三九九	四二〇	一七二	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	六三九九
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	
	△	△	二五〇〇	一八八三四	二〇九七四	六二、八四三	五二、七二一	一七六三	一八、二二三	二二、二二二	三三	五九、五七	一八四	二二、〇九五	二、三九〇	一〇八	

(備考) 明治三十九年度ハ京釜線ニ在リテハ三十九年七月一日ヨリ京義馬山兩線ニ在リテ

ハ同九月一日ヨリ年度末ニ至ル期間トス

前年度比較ハ四十年度ニ在リテハ三十九年度全年度分ヲ取リ三十九年度ニ在リテハ三十八年七月一日ヨリ三十九年三月末日ニ至ル期間ヲ取リテ之ニ對比ス即チ比較ノ時日

鐵道

三四七

ハ共ニ同一トス又前年度比較中一印ハ増減ナキヲ示シ何等ノ記號ナキハ比較スヘキモノナキヲ示ス
 各線ノ乘車人員貨物噸數其他ヲ合算シテ全線合計ノ數量ニ符合セサルハ二線以上ヲ通スル場合ニ各線各別ニ計算シ全線合計ニ在リテハ重複ノ分ヲ控除シタルニ由ル

(四) 收支

三十九年度

明治三十九年度ニ於ケル韓國鐵道ノ作業收支ハ出入畧々相當リ百七十九圓ノ收入超過ヲ見ル豫算ナリシカ決算ニ於テ收入ノ豫算ニ超過シタルト支出ノ豫算ヨリ減少シタルトニ依リ結局二十一萬九千二百六十圓ノ益金ヲ生シタリ

四十年年度

明治四十年年度ニ於テハ一般ニ收入ヲ増加スルモ支出モ亦大ニ増加シ即チ四十八萬五千餘圓ノ缺損ヲ見ル豫算ナリシカ決算ニ至リ前年度同様收支ノ狀況意外ニ良好ナリシヲ以テ結局損失額ハ豫算ヨリ遙ニ下リテ約七萬七千圓ニ止マルヲ得タリ

今右兩年度ニ於ケル收支ヲ舉クレハ左ノ如シ

韓國鐵道作業收支表

收 入	四十年年度	三十九年度	比 較 増
	客車收入	二,二九八,八九九,九五八	
貨車收入	一,一六六,二七〇,四七〇	六〇一,三〇二,八五〇	五六四,九六七,六二〇
小計	三,四六五,一七〇,四二八	一,七四七,〇〇三,三五二	一,七一八,一六七,〇七六
雜收	四〇一,六〇七,〇〇〇	二,二八九,一二二,九	一七,二六九,四七一
合計	三,五〇五,三三三,一二八	一,七六九,八九四,五八一	一,七三五,四三六,五四七
缺損補填受入	七六,九八八,三三八		七六,九八八,三三八
用品資金益金繰入	一七三,八九一,一八		一七三,八九一,一八
總計	三,五九九,七〇八,五八四	一,七六九,八九四,五八一	一,八二九,八一四,〇〇三
支 出			
俸給諸給	三〇九九,〇〇六,〇	一一九,二七四,五〇	一九〇,七二六,一〇
諸拂戻及缺損補填金	三〇〇,五三七,四八〇	二三五,二二三,二九	六五,三〇五,一五一
總係費	一八五,一九八,四五一	六四六,九九五,八八	一,二〇,四九八,八六三



總計	豫備金	合計	事業費			
			小計	補充費	運輸費	保費
三、五九九七〇八五八四		三、五九九七〇八五八四	一、〇三二六四九六九四	三三三六五八二六四	六九八九九一五三〇	
			九四四三三八四〇二	四三四〇四六二八三	五一〇三〇二二一九	
			七七〇三九一八七六	三二〇九四二二三六	四五〇一九七六四〇	
			五六七八二六二一	四九〇一六二九九	七七六六三二二	
			二、九八九二七一〇四四	一、二〇一五一四一五七〇	一、七八七七五六四七四	
			三、五九九七〇八五八四	一、五五五八七四三四九	二、〇四三三八四二三五	
				一、五五五八七四三四九	二、〇四三三八四二三五	
				一、五五五八七四三四九	二、〇四三三八四二三五	

(備考) 本表客車收入及貨車收入ノ前表運輸收入ト符合セサルハ諸拂戻金ヲ控除セサルコト其他運輸經理兩部計算ノ方式ヲ異ニスル點アルニ依ル

(五) 事故

京釜線大
明治三十九年度中ニ於ケル線路上及運轉上事故ノ重ナルモノハ豪雨ノ爲同年八月三十一日以後京釜線秋風嶺太田間不通トナリ九月一日以後更ニ太田水原間モ亦不通トナリ同十八日ヨリ一部分建築列車便ニ依リテ接續ノ上、全線旅客ノ直通輸送ヲ行ヒ二十一日ヨリ運轉時刻ノ小變更ヲ爲シテ

増若太田
間ノ樁事

線列車ノ運轉ヲ開始シ十月二十五日ニ至リ舊時刻ニ復活運轉スルニ至リシ稀有ノ事故ヲ始メトシ又四十年中ニ於テハ同年九月二十九日増若太田間ニ於テ客車二輛脱線、三輛顛覆シ乗客五名即死、同五十二名及車掌一名負傷シ數時間線路ヲ閉塞シタル樁事ヲ始メトシ其他大小事故ノ統計左ノ如シ

韓國鐵道事故調

事故件數	明治四十年		明治三十九年度	
	京釜線	京義線	京釜線	京義線
脱線回數	九五七	四二二	七二一	一五二
脱線車數	六二	二八	三三	一八
接觸車數	八五	五五	三〇	二二
顛覆回數	六五	六六	一三	九
顛覆車數	一	一	一	一
列車分離	三六	二三	一七	四
異線進入	一〇	六	五	一

鐵道

車輛不良回数	線路障礙	列車妨害	火災	其他
五五〇	二二	二六	五	一三六
二二六	二五	一八	九	七三
一	五	三	一	一四
四九九	二	四五	四	六三
六一	三	四	一	三六

三五二

(備考) 三十九年度ハ買收引繼後ノ調査トス

死傷
鐵道ニ依ル死傷者ハ三十九年度ニ於テ京釜線死者二十一、傷者三十三人、京義線死者十四人、傷者十四人、合計死者三十五人、傷者四十七人ニシテ内乗客ハ傷者五人、職員ハ死者三人、傷者十二人トス又四十年ニ於テハ京釜線死者五十三人、傷者九十四人、京義線死者二十四人、傷者十一人、馬山線死者三人、傷者九人、合計死者八十人、傷者百十四人ニシテ内乗客ハ死者九人、傷者六十五人、職員ハ死者八人、傷者二十五人トス

第十四章 教育

第一節 教育制度

從來ノ教育制度ニ於ケル教育機關ハ京城ニ成均館及東西南中ノ四學アリ各道郡ニ郷校アリ各面洞(村里)ニ書堂又ハ書房アリト雖、何レモ儒學ヲ中心トシ經義ヲ教フルニ過キス開國五百四年即チ明治二十八年百般制度ノ改革ニ伴ヒ教育ノ制度モ亦始メテ範ヲ文明國ニ取リ小學校令其他教育ニ關スル法規ヲ制定シ師範學校、中學校、外國語學校、醫學校、農工商學校、高等小學校、尋常小學校等ノ官立學校ヲ京城ニ設ケ各道樞要ノ地ニ公立小學校ヲ置キ大ニ新學ヲ興サントシタルモ其制度ノ國情ニ適セサル施設ノ宜シキヲ得サル實際ニ於テ殆ント効果ノ見ルヘキナシ

臨時學事
明治三十九年三月起業資金債成立スルヤ其收入金五十萬圓ヲ割テ臨時學事擴張費ニ充ツルニ決ス韓國政府ハ即チ先ツ教育制度ヲ整備センコトヲ期シ日本人參畫ノ下ニ教育ニ關スル左記法令ヲ制定シ同年八月之ヲ發布

教育關係
法令ノ制定

教育

三五三

セリ

- 一、學部直轄學校及公立學校官制及直轄學校職員定員令
- 二、師範學校令及同施行規則
- 三、高等學校令及同施行規則
- 四、外國語學校令及同施行規則
- 五、普通學校令及同施行規則

學制改革ノ方針

韓國教育界ノ現状ハ複雑ナル學制ト修業年限ノ長期ニ亘ル學校ヲ設立スヘキ場合ニアラス寧ろ學制ヲ單純ニシ課程ヲ簡易ニシ專ラ實用ニ適セシムルノ必要アルヲ以テ今次ノ施設ニ於テハ主トシテ整理ノ基礎ヲ普通教育ニ置キ兼テ其他各學校ニ及ホシ且漸次普通教育ノ擴張ヲ計ルヲ主眼ト爲セリ

新教育令

在來ノ諸學校ハ學年學期ノ觀念ヲ缺キ入學卒業ニ一定ノ規律ヲ設ケス學科目ノ選定其當ヲ失シ教授ハ各人別ニ之ヲ行ヒ生徒ノ年齡學力ノ不平均ヲ意トセス體育ノ如キハ學校ノ關與スヘキ所ニアラスト爲セルモノノ如シ新教育令ハ先ツ此等ノ舊弊ヲ打破スルニ努メ各學校ヲ通シ毎年四月ヲ

儒學教育

以テ學年開始ノ時期トシ修業年限學科目學級制ノ採用教員ノ配置其他教授管理ノ改善教員ノ待遇等ニ亘リテ改正スル所多シ且新學制ヲ施行スルニ當リ依然之ヲ韓國人ニ放任スルハ實績ヲ舉クル所以ニアラサルヲ以テ必要ニ應シ各學校ニ邦人ヲ配置シ自ラ教鞭ヲ取リテ實地ニ指導セシム

儒生ノ專ラ擔任スル儒學教育ノ組織ハ韓國ノ現状ニ於テ強テ之ヲ改廢スルノ得策ニアラサルヲ認メ此系統ニ屬スル全國ノ郷校書堂ニ就テハ何等干渉スル所ナク自然ノ趨勢ニ放任スルノ方針ヲ取レリ唯輓近教育熱ノ勃興ニ伴ヒ各地相競フテ學校ヲ開設セントスルノ傾向ヲ生シ其間往々弊害ヲ免レス乃チ之ニ對シテ相當ノ規程ヲ設クルヲ必要トシ明治四十一年九月私立學校令ヲ發布シタリ

第二節 初等教育

(一) 從來ノ初等教育

舊小學校令

開國五百四年即チ明治二十八年始メテ頒布セラレタル小學校令ハ大體ニ

於テ日本當時ノ小學校令ヲ摸倣シタルモノニシテ修業年限ハ尋常小學校三箇年、高等小學校二箇年又ハ三箇年トシ學科課程ノ如キハ全然我國當時ノ小學校令ニ倣ヒ且義務教育ノ精神ヲ採用シタルヲ以テ單ニ法令ノ上ヨリ見レハ甚々整頓セルカ如キモ所規多クハ空文ニ屬シ唯漢籍ノ素讀ニ全力ヲ注キ傍ヲ習字ヲ教授スルニ止マリ學級ノ編成、校舍ノ設備等ニ至リテハ殆ント之ヲ念頭ニ置カサルモノノ如シ加フルニ學校ノ數甚々少ク京城ニ官立高等小學校一、同尋常小學校八、地方ニ公立尋常小學校五十七アリシノミ學部ハ公立小學校ニ對シ每校月額十五圓乃至二十二圓五十錢ノ補助金ヲ下附スルモ教員ハ大抵一校一人ニシテ單級組織トシ生徒數多キモ五十名、少キハ十數名ニ過キス私立小學校ニ至リテハ其數ニ於テ公立小學校ヨリモ遙ニ多ク漢城府内ノミニテ約三十校ヲ算スルモ其大多數ハ純然タル私塾ニシテ机サヘモ備付ケサルモノ多シ

外國人ノ設置セル私立學校中、小學程度ノモノ少シトセス米國派耶穌教會及佛國派耶穌教會ハ各一百以上ノ宗教的小學校ヲ私設シ日本佛教徒モ各地ニ此種ノ學校ヲ新設セリ又從來邦人ノ經營セル日語學校中、十ノ八九ハ

小學校數

外國人經營ノ小學校

小學程度ノ語學校ニシテ我小學校令ノ學科程度ニ近キモノ多カリシモ校舍ノ不完全、設備ノ不整頓等、韓人ノ經營ニ比シ深ク誇ルニ足ラス

以上開國五百四年改革ノ新學系統ニ屬スル小學校並諸外國人ノ經營ニ屬スル初等教育機關ノ外、全國書堂ノ數ハ殆ント一萬ニ上ルト稱セラル然レトモ此等書堂ニ於テハ謂ユル村夫子カ附近ノ子弟ヲ集メテ童蒙先習、千字文、小學、孟子等ノ素讀、暗誦並習字ヲ教フルノミ其教育ハ徒ニ兒童ノ腦力ヲ消糜スル外、何等ノ實効アルナシ

書堂

(二) 改正初等教育令

普通學校令

明治三十九年ノ改制ニ於テ小學校ヲ普通學校ト改稱シ普通學校令及同施行規則ヲ發布セリ其要項左ノ如シ

一、普通學校ハ官立、公立、私立ノ三種トス

二、普通學校ニハ尋常高等ノ區別ヲ置カス其組織ヲ單一ニシ修業年限ヲ四箇年トシ地方ノ狀況ニ依リ必要ニ應シ三箇年以内ノ補習科ヲ置クヲ得セシム

三、學齡ヲ定メ強制教育ヲ施スハ尙其時期ニアラスト認メ入學年齡ノ範圍

ヲ擴メ多數ノ希望者ヲ満足セシムル爲メ滿八歲以上十二歲迄ノ兒童ヲ初年級ニ收容シ當分ノ内尙十四歲迄ノ兒童ニモ入學ヲ許シ滿八歲以下ノ者ハ暫ク從來ノ書堂又ハ家庭ノ教習ニ委ス

四、生徒ハ一學級凡五十人、一校二百人ヲ以テ定員トス但地方ノ狀況ニ依リ増加スルコトヲ得

五、教科目ハ主トシテ日本ニ於ケル高等小學校ノ教科目ニ倣ヒ殊ニ日語ノ一科ヲ加フ教科目ノ程度ハ從來ニ於ケル我尋常小學校ヨリ稍々高尙ニシテ尋常高等ノ中位ニ在リ

六、各學級ニ教員一人ヲ配置シ尙一學校必一人ノ日本人教師ヲ置キ主要ノ教科ヲ擔任セシメ併セテ一般教授法ノ指導及學校管理ニ任セシム

明治四十一年一月普通學校令改正ニ依リ日本人教師ハ之ヲ教監ト改稱セリ

(三) 普通學校ノ經營

普通學校ノ校舍ヲ新營シ設備ヲ完成シ新法令ニ據リテ完全ナル經營ヲ爲サントスル

普通學校ハ當初ノ計畫ニ於テ全國ヲ通シテ五十校トシ内京城ニ十箇ノ官

立學校、地方ニ四十箇ノ公立學校ヲ設ケントスルニ在リ明治三十九年先ツ京城及觀察府所在地ノ官公立普通學校ヨリ著手シ明治四十年爾餘各地公立普通學校ノ設備ヲ完成セリ今左ニ所在地名ヲ擧ク但シ在京城官立普通學校ハ其後或ハ合併シ又ハ師範學校ノ附屬ニ移シタル等ノ爲、現在八校トナレリ

官公立普通學校所在地 (明治四十年末現在)

京城	校洞	齋洞	於義洞	水下洞	貞洞
梅洞	仁洞	漢洞		外ニ漢城師範學校附屬普通學校	

計官立普通學校九

京畿道	水原	開城	仁川	安城
忠清北道	忠州	清州		
忠清南道	公州	江鏡	洪州	
慶尙北道	大邱	星州	慶州	尙州
慶尙南道	晋州	東萊	馬山	蔚山

全羅北道	全州	南原	群山
全羅南道	光州	木浦	羅州
江原道	春川	原州	江陵
黃海道	海州	黃州	
平安南道	平壤	鎮南浦	安州
平安北道	寧邊	定州	義州
咸鏡南道	咸興	元山	北青
咸鏡北道	鏡城	會寧	城津

計各地方公立普通學校四十一
總計五十

普通學校
設備

從來地方各道ニ存立セル公立尋常小學校ハ總テ公立普通學校ト改稱シタルモ設備ヲ加ヘ經營ヲ新ニシタルハ以上ノ四十一校ニ止マリ之ヲ甲種公立普通學校ト稱ス其以外ノ舊公立尋常小學校即チ現在ノ乙種公立普通學校ハ全國ニ三十六箇所ヲ算ス其經營概ネ舊ニ依リ多ク改ムル所ナシ

教科書

經費

ノ取リテ用ユヘキモノ殆ント之アルヲ見ス依テ學事擴張費ノ内三十二萬圓ヲ以テ普通學校四十校ヲ新築シ七千三百餘圓ヲ以テ殘部十校ヲ修繕スルノ計畫ヲ立テタルモ實際ニ於テ新築シタルモノ三十二校修繕ヲ加ヘタルモノ十七校トス校舍ハ一二ヲ除クノ外定員二百名ヲ以テ標準トスルヲ以テ普通四教室トシ事務室附屬室等ヲ備ヘ付ケ生徒ノ机腰掛黑板器械標本等モ亦一切新ニ之ヲ調製シ其費用ノミニテ五萬三千餘圓ヲ要シタリ教科書モ亦漢學ニ屬スル書籍ノ外一モ使用ニ適スルモノナキヲ以テ學制ノ改革ト同時ニ新ニ編纂ノ必要ヲ生シ學部内ニ編輯機關ヲ特設シ明治四十年四月以來一般普通學校ニ使用セシメ尙漸次進捗中ニ在リ

經費ニ關シテハ官立普通學校ハ總テ國庫支辨トシ公立普通學校ハ本來道府郡ニ於テ之ヲ負擔スルヲ相當トスルモ目下地方財源ヲ缺クニ由リ甲種公立普通學校經費ノ内職員俸給旅費手當ニ限リ補助ノ名義ヲ以テ國庫ヨリ支出シ其他ノ經費ハ最高年額三百六十圓ノ範圍ニ於テ財產其他ヨリスル收入ヲ差引キ殘額ヲ國庫ヨリ補助スル方法ヲ取レリ乙種普通學校ニ對シテハ各年額百八十圓宛ヲ補助シ明治四十一年ヨリハ右範圍内ニ於テ補

助額ニ差等ヲ設ク初等教育ニ要スル經費ハ官立普通學校費明治四十一年豫算二萬七千餘圓甲乙種公立普通學校補助費十四萬四千餘圓ナリ外ニ私立學校中較々設備ノ完全ナリト認ムルモノニハ多少ノ補助ヲ與ヘ日本人ノ經營ニ係ル私立口語學校中比較的設備完全セル釜山開成學校ニモ年額千四百餘圓ヲ給ス此等ヲ合シテ私立學校ニ對スル補助費ハ明治四十一年豫算ニ於テ八千四百圓ヲ計上セリ

普通學校ニ於ケル學徒ノ募集ハ官立ト公立トヲ論セス頗ル困難ナリ各學校トモ一切授業料入學料ノ如キヲ徵收セス教科書ノ如キ亦無代給與スルニ拘ハラズ開校當時ニ於テ一學級五十人ノ生徒ヲ得ルコトスラ尙頗ル困難ヲ感シタリ蓋シ地方人民未タ新教育ノ何タルヲ解セス唯教授時間ノ短カクシテ而カモ漢文ニ多クノ時間ヲ與ヘサルヲ難シ又新教科目ノ價值ヲ疑フモノ多ク加フルニ時勢ニ疎キ儒生若クハ附近私立學校ノ中傷妨害ニ惑ハサレ其子弟ノ入學ヲ躊躇シ若クハ退學セシムル者少カラズ明治四十年下半年ノ如キハ各地暴徒蜂起ノ爲少カラサル影響ヲ被レリ

普通教育擴張事業ハ明治四十年末迄ニ略々豫定ノ計畫ヲ了シタルヲ以テ

明治四十一年更ニ公立普通學校増設ノ計畫ヲ立テ其設立地ヲ左ノ如ク選定セリ

- | | | |
|------|----|----|
| 京畿道 | 驪州 | 江華 |
| 忠清南道 | 溫陽 | |
| 慶尙南道 | 密陽 | |
| 全羅南道 | 靈巖 | |
| 全羅北道 | 古阜 | |
| 平安南道 | 平壤 | |
| 平安北道 | 宣川 | |

但平壤ニ於テハ學校ヲ新設セス從來ノ公立普通學校ヲ擴張ジテ一學年二學級組織トシ其他設備ヲ倍加スルニ止ム

(四) 修學院

貴族學校 教育制度ヲ刷新シテ一般國民ニ新教育ヲ施スト同時ニ皇族及貴族ノ子弟ヲ教育スルハ素ヨリ必要ノ事ニ屬シ兼テ一般向學心ヲ促進スル所以タルヘシ即チ特ニ修學院ヲ創設シ專ラ皇族及貴族ノ子弟ニ對スル教育機關ト

シ明治三十九年十月官制ヲ發布セリ
 修學院ハ之ヲ宮内府大臣管理ノ下ニ置クト雖、教育ニ關スル重要ノ事項ハ
 學部大臣ト協議決定ス生徒定員ハ二十名トシ皇族貴族中ヨリ、之ヲ選定シ
 裁可ヲ經テ入學セシム學科課程、學年ノ始終等ハ大體ニ於テ一般ノ普通學
 校ト異ルコトナシ

第三節 高等教育

(一) 師範學校

從來ノ師範學校
 師範學校ハ開國五百四年即チ明治二十八年漢城師範學校官制ニ依リ始メ
 テ之ヲ京城ニ設置セリ當時修業年限ハ本科二箇年ノ規定ナリシモ實際ニ
 於テハ或ハ一箇年ニシテ出ルアリ又ハ一箇年半ニシテ卒業スルアリ入學
 年齡ノ如キモ滿二十歲以上二十五歲以下ニ制限セルニ拘ハラズ實際ニ於
 テハ往々二十歲以下ノモノヲモ入學セシメ學則ノ規定ハ畧々備ハレルモ
 各種學科ヲ擔任スヘキ教員ヲ缺クヲ以テ漢籍ノ素讀ヲ主トスルノミ曾テ

師範學校令

實地授業ノ練習ヲナシタルコトナク學校ノ設備不完全ニシテ校舍ハ狹隘
 ナル一教室ヨリ成レリ
 普通教育ノ改善ニ伴ヒ教員養成ノ機關タル師範學校ヲ擴張スヘキハ素ヨ
 リ論ヲ俟タス乃チ明治三十九年舊漢城師範學校官制ヲ廢シ師範學校令及
 同施行規則ヲ制定セリ其要項左ノ如シ
 一、師範學校ハ官立、公立ノ二種トシ私立學校ノ設立ヲ許サス
 二、本科ノ外、豫科、速成科及講習科ヲ置クコトヲ得、本科ハ修業年限三箇年ト
 シ他ハ各一箇年以内トス
 三、本科ニ入學スルコトヲ得ルモノハ普通學校卒業以上ノ學力ヲ有シ又本
 科、豫科、速成科トモ入學試験ニ合格シタル者タルコトヲ要ス
 四、一學級ノ生徒ヲ四十人トシ一學年一學級ナルヲ以テ本科ノ定員ヲ百二
 十人トス
 五、日本ノ制度ニ倣ヒ學費給與ノ制ヲ採リ本科及速成科ノ生徒ニハ在學中
 食費、被服及雜費ヲ給與ス
 六、本科及速成科ノ生徒ハ在學中監督ノ爲、總テ寄宿舍ニ入ラシメ私費生ハ

特ニ通學ヲ許ス

七、給費卒業生ニハ日本ノ例ニ倣ヒ服務義務ヲ負ハシム即チ本科卒業生ハ六箇年、速成科卒業生ハ二箇年間學部大臣ノ指定スル普通學校ニ在職スルコト是ナリ

漢城師範學校

右規定ニ據リ先ツ官立漢城師範學校ヲ置クニ決シタルモ舊漢城師範學校ハ校舍極メテ不完全ナルノミナラス敷地狹隘ニシテ擴張ノ餘地ナキヲ以テ明治三十九年新ニ敷地ヲ選定シ校舍及附屬舎ヲ新築シタリ敷地ハ四千四百餘坪ニシテ校舍ハ木造二階建二百四十坪、其他物理化學教室、寄宿舎、食堂、雨天體操場等ヲ合スレハ建坪六百十餘坪、附屬普通學校校舍八十餘坪、此工費總額六萬二千五百餘圓ヲ要シ尙器具、機械、標本、書籍等モ使用ニ堪ユルモノナキヲ以テ四千五百餘圓ヲ投シテ之ヲ新調セリ明治四十年十二月新校舍落成シ此ニ移轉スルト同時ニ官立安洞普通學校ヲ廢シテ附屬普通學校ト爲シ構内ノ新校舍ニ移轉セシム

臨時教員養成科

官公立普通學校學制改正ノ結果通譯教員ノ必要ヲ認メ漢城師範學校内ニ短期卒業ノ臨時教員養成科ヲ設ケ既ニ三回ノ卒業生ヲ出シ之ヲ各普通學

校ノ副教員トシテ通譯ニ從事セシメ居レリ

(二) 高等學校

官立中學

從來中學校官制ニ依リ設立セラレタルモノハ京城ニ唯一ノ官立中學校アリシノミ其修業年限ハ尋常科四箇年、高等科三箇年ニシテ入學者ノ年齢ハ滿十七歳以上二十五歳以下ノ規定ナルモ會テ高等科ノ設置ナク學級ノ編成亦亂雜ヲ極メタリ校舍ハ煉瓦造ニシテ規模大ナラサルモ他ノ官立學校ニ比シ較々見ルヘキモノアリ然カモ其設備ニ至リテハ尙極メテ不完全ヲ免レス

高等學校令

韓國ニ於ケル最高ノ普通教育機關ハ則チ右ノ中學校ニ外ナラサルヲ以テ學制改革ニ際シテ之ヲ高等學校ト改稱シ高等學校令及同施行規則ヲ制定シタリ其要項左ノ如シ

- 一、高等學校ハ官立、公立、私立ノ三種トス
- 二、從來ノ尋常科、高等科ノ區別ヲ廢シ修業年限ヲ四箇年トシ必要ニ應シ一箇年以内ノ豫科及補習科ヲ置クヲ得セシム
- 三、一學級ノ生徒數ヲ五十人トシ一學年一學級トシ二百人ヲ以テ本科ノ定

員トス

四、普通學校トノ連絡上、滿十二歳以上ノモノヲ入學セシム
 五、普通學校卒業生ハ直ニ入學ヲ許シ、其他ハ同程度ニ依リ入學試験ヲ行ヒテ之ヲ採用ス

漢城高等學校ノ分立

右規定ニ據リ、從來ノ官立中學校ヲ官立漢城高等學校ト改稱シ、同時ニ敷地ヲ取擴ケ、舊校舍ニ接近シテ教室二棟及附屬舍等坪數合計百九十餘坪ヲ新築シ、工費總額二萬二千九百餘圓ヲ要セリ

(三) 外國語學校

外國語學校ノ分立

明治二十八年發布ノ外國語學校官制ニ依レハ、外國語學校ハ一校内ニ數箇國語ヲ教授スルカ如キモ、實際ニ於テハ日語、漢語、英語、法語、德語、俄語六箇國ノ各語學各別ニ敷地校舍ヲ有シ、職員ハ勿論、經濟モ亦各別ニ分立シ、俄語學校ハ日露戰役中閉校シ、學制改正當時ニ於テハ他ノ五校並立シタリ、學則ニ於テハ何レモ修業年限ヲ規定スルモ、生徒ハ一通リノ通譯ニ差支ナキニ至レハ退學スルヲ常トシ、成規ノ學科ヲ履ミ卒業ヲ完了スルモノ殆ント稀ナリ

京城學堂

日語學校

外國語學校令

右官立各外國語學校ノ外、京城ニ日本海外教育會ノ設置ニ係ル京城學堂アリシモ、明治三十九年ノ初、韓國政府ニ寄附シ、爾來學部管理ノ下ニ之ヲ第二日語學校ト稱セリ、其他仁川ニ官立日語學校ノ支校アリ、又平壤ニモ日本人ノ經營ニ係ル日語學校アリタリ

從來ノ外國語學校官制ニ代ヘ新ニ制定シタル外國語學校令及同施行規則ノ要項左ノ如シ

一、各語ヲ通シテ本科ヲ三箇年トシ、必要ニ應シテ二箇年以内ノ研究科ヲ置ク

二、普通學校卒業生トノ連絡ヲ取り、高等學校同様、滿十二歳以上ノ者ヲ入學セシム

三、普通學校ノ階梯ヲ經スシテ直ニ語學ヲ修得セントスル者ノ便ヲ圖リ、入學資格ヲ單ニ相當學力ヲ有スル者トシ、入學試験科目ヲ定ム

四、一學級生徒ノ定員ヲ五十人以下トス

右學制ノ改革ト同時ニ、當分各語學校簡々ノ存立ヲ認メ、官立日語學校、官立英語學校、官立法語學校、官立德語學校及官立漢語學校ノ五校ニ分チ官立日

語學校ハ京城内ニ二校ヲ存スルノ不得策ナルヲ認メ之ヲ合併シテ一校トナスト同時ニ日語學校ニ限リ一學年二學級ノ編成ニ改正シ又仁川ノ官立日語學校支校ハ之ヲ獨立セシメテ官立仁川日語學校トシ明治四十年ニ至リ平壤日語學校ヲモ官立ニ移シ官立平壤日語學校ト稱ス此等各學校從來ノ設備モ亦見ルニ足ルモノナキヲ以テ相當費用ヲ以テ増築修繕及諸設備ヲ加ヘタリ

外國語學校ノ合併

在京城各外國語學校ハ之ヲ併セテ一學校ト爲スノ利益ヲ認メ明治四十一年一月一日以後改メテ官立漢城外國語學校ト稱シ而シテ同三月官立日語學校ノ隣接地ヲ購入シテ各語學科ノ教場ヲ此ニ移シ名實トモニ一學校タルノ觀ヲ全フスルニ至レリ

(四) 農商工學校

實業教育機關

學制改革以前、實業教育ノ機關トシテハ京城ニ微々タル官立農商工學校アリシノミ同校ハ農商工ノ實業ニ必要ナル學術及技能ヲ授クルヲ目的トシ光武八年即チ明治三十七年ノ設立ニ係ル學科ハ農商工ノ三科ニ分チ修業年限ハ各豫科一箇年、本科三箇年トシテ生徒數ハ多キモ一科三十人ヲ出テ

實業學校ノ所管

ス少キハ十人ニ滿タス最モ不振ノ狀態ニ在リタリ然カモ此等ノ實科的教育ハ他ノ官立學校ト同シク學部ノ所管トスルヨリモ寧ロ農商工部ニ移スノ便宜ナルヲ認メ從來ノ官立農商工學校ヲ廢シ農科及工科ハ之ヲ農商工部所管ニ移シ官立農林學校及工業傳習所トナシ商科ハ偶々大倉喜八郎ノ金二十萬圓ヲ寄附シ財團法人トシテ京城ニ善隣商業學校ヲ設立スルニ際シ敷地校舍ヲ寄附シテ學部所管ノ下ニ商業教育ヲ擔任セシムルコトトシ尙同學校ニ對シ年額二千二百八十圓ヲ補助ス

成均館

右ノ外、韓國儒學者ノ總本山ヲ以テ目スヘキ成均館ハ從來ノ儘トシテ何等

醫學教育

ニ移セリ別ニ明治四十一年四月高等女學校令及同施行規則ヲ制定シ同年七月官立漢城高等女學校ヲ設立シタルモ其詳細ヲ畧ス

第四節 臨時學事擴張ノ成績

(一) 臨時學事擴張費ノ使途

臨時學事擴張事業ノ豫算總額ハ五十萬圓ニシテ明治三十九年ヨリ同四十年ニ至ル繼續費トシ明治三十九年ニ於テ十萬千五百餘圓同四十年ニ於テ三十七萬六千六百餘圓合計四十七萬八千餘圓ノ支出ヲ了シ殘額二萬一千八百餘圓ハ工事ノ進行豫期ノ如クナラザリシヲ以テ之ヲ明治四十一年ニ繰越シタリ然ルニ右擴張事業中普通學校新設ノ費用ハ當初ノ豫算以外ニ支出ヲ要スルモノアルヲ以テ明治四十一年更ニ三萬九千三百餘圓ヲ追加シ臨時擴張費ノ總額ハ五十三萬九千三百餘圓トナレリ今各種學校ノ新設及擴張ニ要シタル費額ヲ舉レハ左ノ如シ

學校別	豫算額	支出額(明治四十一年迄)	支出豫定額(明治四十一年)	總費額
師範學校	七二,九四〇.〇〇	六二,一七九.六九五	一三,一九八.二二三	七五,三七七.九一八
高等學校	七二,七三〇.〇〇	七六,五〇六.三〇	六〇,〇〇〇.〇〇	八二,五〇六.三〇
商工學校	一一,七五六.〇〇	一四,三六九.八〇		一四,三六九.八〇
農林學校	五二,〇五〇.〇〇			
漢城日語學校	九三,三七〇.〇〇	八六,九四三.五〇	九三,三五九.三三	一八〇,三〇二.八三
仁川日語學校	三八,七八〇.〇〇	三七,三二一.五〇		三七,三二一.五〇

學校別	豫算額	支出額	支出豫定額	總費額
漢城漢語學校	一五〇,〇〇〇.〇〇	一五〇,〇〇〇.〇〇		一五〇,〇〇〇.〇〇
漢城英語學校	四〇〇,〇〇〇.〇〇	四二四,二六〇.〇〇		四二四,二六〇.〇〇
漢城法語學校	一五〇,〇〇〇.〇〇			
漢城德語學校	一五〇,〇〇〇.〇〇	一一二,五五〇.〇〇		一一二,五五〇.〇〇
臨時教員養成科	一六八,〇〇〇.〇〇	三二四,八六〇.〇〇		三二四,八六〇.〇〇
普通學校	三五九,三四三.六八〇	三五九,三四三.六八〇	三五九,三四三.六八〇	四〇〇,八五四.六三三
工事監督費	八,四八六.〇〇〇	六,六三三.二二一	一一,七五〇.〇〇〇	七七九,八二二.一
普通學校教師舍宅費	五〇〇,〇〇〇.〇〇	八,六九三.三七五	一一,二五〇.〇〇〇	九九一,八三七.五
豫備費	七三九,六〇〇.〇〇			
計	五三九,三四三.六八〇	四七八,一九二.八九三	六一,二五〇.七八七	五三九,三四三.六八〇

(備考) 商工學校ハ實際設立ニ至ラス之カ爲設計シタル校地校舍ヲ善隣商業學校ニ寄附シタルモノトス
豫算額ハ明治四十一年追加ノ分ヲモ併算ス又支出額ハ明治三十九年同四十年トモニ決算額トス

(二) 官公立學校ノ現狀

以上ノ計畫及費額ヲ以テ經營シタル各種官公立學校ノ狀況ハ最近明治四

官立學校
現況

十一年六月末日ニ於テ左ノ如シ但經費ハ明治四十一年豫算額ヲ舉ク

一、官立學校職員學徒數並經費額

學校別	學校數	職員		學徒數	卒業者數	經費
		人	日			
漢城高等學校	一	一〇	〇	一八八	八	一三〇六〇
漢城外國語學校	一	二九	〇	五七六	七〇	四一五八七
仁川日語學校	一	五	〇	五六	七	六三四四
平壤日語學校	一	四	〇	六〇	七	五四〇九
漢城師範學校	一	八	〇	三七五	二九	三一八〇四
普通學校	九	五五	〇	一、八四七	一八〇	二七七三六
官立學校計	一四	一一一	〇	二、九三八	三三六	一二五九四〇

(備考) 職員中「外」ハ日本人以外ノ外國人ヲ云フ

經費ハ凡テ歳出經常部學部所管官立諸學校ノ款項ニ據ル右ノ外臨時部ニ於テ教員養成費一千一百八十五圓アリ

成均館ニ關スル統計ハ總テ之ヲ除ク又漢城高等女學校ハ明治四十一年七月ノ開校ニ係ルヲ以テ同シク之ヲ除ク

二、公立普通學校職員學徒數並經費額

地方別	學校數	職員		學徒數	一校最多	一校最少	經費
		人	日				
京畿道	六	二五	八	七三三	一六五	一〇〇	
忠清南道	四	一三	四	五一二	一八三	一三七	
忠清北道	二	七	二	二五五	一五〇	一〇五	
慶尙南道	五	一八	五	五六五	一四九	七〇	
慶尙北道	五	二一	七	六一五	二二五	七二	
全羅南道	五	一九	五	五八七	一六〇	一一七	
全羅北道	四	一五	五	六二三	二五六	一六六	一三七八七〇
江原道	三	九	三	二九八	一一二	七八	
黃海道	二	九	二	二二二	一三〇	一〇二	
平安南道	三	一四	四	四三七	二四九	九一	
平安北道	四	一四	四	三三三	一一三	八四	
咸鏡南道	三	九	三	四〇三	一四四	一二七	
咸鏡北道	四	二二	五	四七一	二五六	一〇二	
公立學校計	五〇	一九五	五七	六、〇六四	二五六	七〇	

(備考) 學校數ハ明治四十一年新設ノ九校ヲ含ム

各道乙種公立普通學校ヲ含マス

學徒數一校最少ハ新設學校ヲ除ク

經費ハ學部所管歲出臨時部教育補助費甲種公立普通學校補助費ヲ舉ク

三、官公立普通學校職員學徒數並經費總計

官立	公立	計	職員數			學徒數			經費
			人	日	人	總數	一校最多	一校最少	
九	五〇	五九	五五	一九五	一〇	一、八四七	三三三	一五二	二七、七三六
						六〇六四	二五六	七〇	一三、七八七〇
						七九一	三三三	七〇	一六、五六〇六

(備考) 各道乙種公立普通學校ヲ含マス

第五節 學部所管以外ノ教育機關

(二) 農林學校

明治三十九年ノ學制改革ニ當リ實業教育ノ機關ハ寧ロ當該部ヲシテ之ヲ

管理セシムルノ形便ヲ認メ農商工部所管ノ下ニ農林學校及工業傳習所ヲ
 設立シ商業教育機關トシテ大倉喜八郎ノ設立ニ係ル善隣商業學校ヲ學部
 監督ノ下ニ置クニ止メタルコト上ニ述フル所ノ如シ

農林學校官制ハ光武十年即チ明治三十九年勅令ヲ以テ公布セラレ同九月
 舊農商工學校農科生徒及私立京城學堂農業速成科生徒ヲ一學年ニ編入シ
 在京城舊農商工學校ニ於テ授業ヲ開始セリ次テ地ヲ京畿道水原勸業模範
 場ノ隣地ニトシテ校舍ヲ建築シ同四十年一月工事落成移轉ス其用地總面
 積三萬七千五百余坪、內四千三百坪ヲ校舍敷地ニ宛テ其他ハ田畑桑園植物
 園、果樹園、山林、官舎敷地等トシ建物總坪數五百五十七坪餘、新營費及設備費
 トシテ三十九年ニ五萬三千三百三十六圓ヲ四十年ニ設備費千二百六十七
 圓餘ヲ支出シ四十一年豫算ニ於テ新營費及設備費一萬三千四百十圓ヲ追
 加計上セリ又經常費ハ三十九年二千六百餘圓、四十年二萬三千餘圓、四十一年
 年二萬六千餘圓トス

農林學校ノ教科

農林學校ノ教科ハ本科二箇年、研究科一箇年トシ本科ニ於テハ農業及林業
 ニ關スル必須ノ科目ヲ併セ教授シ本科卒業後、更ニ研究ヲ希望スル者ハ研



速成科

究科ニ入りテ農學或ハ林學ヲ專攻セシム別ニ政府施設事業ニ從事スル技術官ヲ養成スル目的ヲ以テ一箇年以内ノ修業年限ヲ定メ臨時農業、林業或ハ獸醫ニ關スル科目ヲ教授ス現在生徒數ハ明治四十一年四月ニ於テ本科生四十三名、第二回林學速成科生七名、計五十名ニシテ卒業生ハ第一回林學速成科生十二名アリ林學速成科ハ韓國政府模範造林事業ニ採用スル技術者ヲ養成スル爲、三十九年九月之ヲ開始シ第一回卒業生ハ全部農商工部技手トシテ之ヲ採用シタリ以上各科トモ學術ノ外、凡テ實習ヲ課シ生徒ハ勞働ヲ厭フノ風ナク成績良好ナリ

(二) 工業傳習所

工業教育機關

韓國ノ現状ハ未タ工業國タルノ域ニ達セスト雖、簡易低度ノ工業教育機關ヲ設置シ國民ノ技術ヲ上進セシムルノ産業啓發上、必要ナルヲ認メ明治三十九年工學博士平賀義美ヲ聘シテ韓國政府工業顧問トナシ農商工部所管ノ下ニ工業傳習所設立ノ計畫ヲ依囑シ同四十年工業傳習所官制ヲ發布ス同三月京城梨花洞ニ於ケル廳舍竣成シ同年四月第一期生徒七十四名ヲ收容シテ直ニ授業ヲ開始シタリ其用地面積ハ五千一百餘坪、建物ハ本館二百

二十餘坪、實習場七棟五百餘坪、寄宿舍、附屬官舍其他ヨリ成リ外ニ實習用機械器具ノ設備ヲ要シ新營及設備費總額十四萬六千五百餘圓ニ上リ尙四十年豫算ニ於テ教室、實習場其他ノ建築並機械器具購入費トシテ臨時費四萬一千七百餘圓ヲ計上セリ右ノ内、十四萬九千餘圓ハ起業資金ノ支辨ニ係ル而シテ經常費ハ明治四十年三萬一百餘圓、四十一年四萬一千七百餘圓ヲ支出若クハ計上セリ

工業傳習所ノ教科習

工業傳習所ノ教科ハ染織、陶器、金工、木工、應用化學及土木ノ六科ニ分チ修學年限各二箇年トシ別ニ一箇年ノ專攻科ヲ置ク現在傳習生徒數ハ明治四十年六月ニ於テ第一學年八十人、第二學年五十人、專攻科五人、計百三十五人ニシテ其科目別ハ染織科二十八人、陶器科二十四人、金工科二十八人、木工科十七人、應用化學科十五人、土木科二十三人トス其教育ハ必要ナル學術ヲ授クル外、相當ノ實習工場ヲ設ケテ技術ヲ修練セシムルコト各科皆同シ傳習生徒ハ一般ニ手工業ニ對スル趣味ヲ有シ手指ノ發達良好ニシテ熱心ニ實技ヲ練習セリ

第十五章 衛生

第一節 大韓醫院

從來ノ衛生行政

韓國ニ於ケル衛生上ノ施設ハ從來殆ント絶無ト云フヲ妨ケス内部ニ衛生局ヲ置キ後警務局ノ一課トシ官制上衛生行政ノ機關ヲ存スト雖種痘ノ普及ニ就テ多少寄與スル所アリタル外一トシテ其實績ノ見ル可キモノナシ蓋國民一般ノ衛生思想ニ乏シキ醫師ノ缺乏セル其他各般衛生機關ノ具備セサル獨リ行政上ノ施設ヲ以テ其進歩ヲ期シ得ヘキニアラス先ツ治療醫育衛生検査等ノ機關ヲ整理シ以テ行政上ノ施設ヲ完カラシムルノ途ヲ講スルハ韓國ノ現状ニ於テ最モ急務トスル所ナリ

廣濟院

京城醫學

之ヨリ先キ京城ニ於ケル衛生機關トシテハ廣濟院京城醫學校及附屬病院並韓國赤十字病院アリ廣濟院ハ明治三十二年ノ創設ニ係リ内部ニ屬シ廣ク民衆ノ病苦ヲ濟ヒ兼テ種痘ノ普及ヲ目的トシ毎年一萬餘圓ノ經費ヲ支出シ來レルモ其成績毫モ見ルヘキモノナシ京城醫學校ハ明治三十六年ノ

赤十字病

衛生機關ノ合一

創設ニ係リ學部ニ屬シ醫學教育ヲ掌リ是レ亦毎年經費一萬餘圓ヲ要シタルモ從來教授ノ任ニ當レル者日本教官一名ニ過キスシテ卒業生徒ハ僅々數十名ニ止マレリ附屬病院ノ如キハ全ク有名無實ニシテ曾テ患者ヲ收容シタルコトナシト云フ又赤十字病院ハ明治三十八年秋始メテ創設セラレ宮内府ニ屬シ貧民治療ヲ目的トセルモ是レ亦功程ノ記スヘキナシ要スルニ其何レモ規模狹少以テ中央ノ衛生機關トナスニ足ラス且一々其配屬ヲ異ニシ隨テ無益ニ力ヲ割クノ弊モ亦大ナリ即チ寧ロ之ヲ合同シテ完全ナル一大機關ヲ構成シ衛生ニ關スル各般ノ事項ハ總テ之ヲ管理施行セシムラシム佐藤總監ハ明治三十九年七月以來設計其他萬般ノ事務ニ執掌シ且委員ヲ設ケ審議ノ結果上記ノ三醫院一醫學校ヲ廢シ更ニ治療醫師養成及衛生事務ノ執行ニ當ルヘキ一大醫院ヲ設置スルニ決シ明治四十年三月大韓醫院官制ノ發布ヲ見ルニ至レリ

大韓醫院

當初ノ官制ニ於テ大韓醫院ハ議政府ニ直隸シ衛生醫育及治病ノ事ヲ掌ルモノトシ韓國皇族ヲ總裁ニ推戴シ内部大臣院長ヲ兼テ院ニ衛生部治療部

敷地建
物

及教育部ヲ置ク而シテ佐藤總監顧問トシテ實際ノ指導ニ當リ明治四十年春敷地ヲ京城東小門内馬登山ニトシ建築ニ著手セリ建物ハ二階建本館煉瓦平家建病室七棟及附屬諸建築物ヨリ成リ丘上翠樹ノ間ニ隱見スル莊麗ナル洋風建築ハ以テ京城ノ一偉觀トスルニ足レリ其建築費二十九萬三千五百六十六圓設備費六萬四千十一圓併セテ三十五萬七千五百七十七圓ヲ要シ別ニ明治四十一年支出豫定ノ建築費五萬二千餘圓ヲ以テ校舍ノ一部分ヲ設備スル筈ナリ

事務開始

之ヨリ先キ官制ノ發布セラレルヤ取敢ヘス廣濟院以下ノ舊建物ヲ利用シテ事務ヲ開始シ明治四十一年十一月一部工事ノ落成ニ從テ移轉シ始メテ各部合同ノ實ヲ舉ク當時日本人五十三人韓人三十八人ヲ以テ院内全般ノ事務ヲ處理セリ次テ官制ヲ改正シ明治四十一年一月以後所管ヲ内部ニ移ス治療部、醫育部及衛生試驗部ヲ置クコト舊制ニ同シク院長ニハ佐藤陸軍軍醫總監自ラ之ニ當リ外ニ副院長二名、醫官十名、教授六名、技師四名、藥劑官一名、學生監、翻譯官、囑託教授各一名、囑託醫官二名、事務官一名並ニ主事、技手助手其他多數ノ雇員備入ヲ置ク醫官及教授ノ多數ハ無論日本人ナリ其經

官制改正

經費

治療部

醫育部

衛生試驗部

痘苗

及種痘ノ普

常費ハ明治四十年六萬七千餘圓明治四十一年豫算十五萬六千餘圓トス治療部ハ内科、外科、眼科、婦人科及耳鼻咽喉科ニ分チ各主任ヲ置キ病室七棟及藥局ヲ附屬セシメ患者ハ私費ト治療トニ別チ治療患者ハ外來一日二百人入院患者二十人ヲ以テ定限トシ私費患者ニ就テモ韓人ノ生活程度ニ鑑ミ韓國人ト他國人トヲ區別シテ藥價入院料等ニ等差ヲ付ス其後ノ經過ニ徴スルニ韓人モ亦漸次信賴ノ念ヲ増シ來リ今ヤ診療ヲ請フモノ日本人患者ノ數ニ讓ラス尙益々多カラントスル狀況ナリ醫育部ハ日本ノ醫學專門學校程度ヲ標準トシ日下官費生三十人、私費生三十人ノ生徒アリ以後毎同年數ヲ募集セントス衛生試驗部ハ細菌検査所及痘苗製造所ニ分チ病原ノ檢索、其豫防、消毒及治療方法ノ研究、血精製造、氣水飲食物等ノ検査、藥品及賣藥ノ鑑定、其他理化學的検査及痘苗製造ノ事ヲ行フ痘苗製造ハ十數年前ヨリ韓國ニ行ハレタルモ製苗純良ナラス往々播害ノ媒ヲ爲セリ大韓醫院之ニ代リテヨリ製造精良ニシテ今ヤ全ク日本ヨリノ輸入ヲ仰カサルニ至リタリ

因ニ種痘ニ關シテハ韓國政府モ比較的早クヨリ注意ヲ拂ヒ明治三十年日

本醫古城梅溪カ種痘醫養成所ヲ京城ニ開キテ種痘術ヲ傳ヘタルヲ始メトシ同三十四年各道ニ種痘事務委員ヲ置キ其下ニ認許員ヲ各府郡ニ配置シテ種痘ノ普及ヲ計ルノ制度ヲ取レリ近時警務顧問部ヨリ警察醫ヲ各地方ニ配置スルニ及ヒ種痘委員ヲ督勵シテ一層其効果ヲ舉クルニ努メ一方痘苗ノ改良ト相俟ツテ漸次濟民ノ實ヲ見ルニ至ラントス

第二節 明治四十年防疫

京城ノ流

大衆防疫

防疫部署

明治四十年秋我皇太子殿下韓國渡御ノ旨仰出サレ日韓兩國國民等シク空前ノ盛儀ヲ欽仰シタルニ偶々虎列刺患者ノ韓國各地ニ發生スルアリ伊藤統監ハ一舉之ヲ撲滅スルノ急務ヲ認メ十月四日京城及仁川ノ防疫事務ヲ舉テ長谷川駐劄軍司令官ニ一任シ且防疫事務ノ執行ニ當リテハ苟モ人權ヲ害セサル限リ戒嚴令的ニ之ヲ行フモ妨ケス費用ノ如キ亦惜ム所ニアラス要ハ京城仁川間ノ虎疫ヲ全滅シ以テ皇太子殿下ヲ安全ニ奉迎シ得ンコトヲ期スヘキ旨ヲ傳フ軍司令官ハ則チ第十三師團長陸軍中將男爵岡崎生三

防疫事務

ヲ防疫總長ニ軍醫監藤田嗣章及韓國政府警務局長松井茂ヲ副總長ニ陸軍軍醫總監佐藤進ヲ顧問ニ其他統監府及駐劄軍ノ文武官數名ヲ委員ニ推薦シ即時ニ統監ヨリ命課又ハ囑託シタリ同日軍司令部ニ防疫本部ヲ置キ防疫部署ヲ定メ各部ニ委員長及委員ヲ置キ丸山警視總監ヲ京城韓人町三浦理事官ヲ同日本人居留地及龍山信夫理事官ヲ仁川ノ各防疫委員長トシ在京城及龍山ノ文武官衛ニモ各委員長及委員ヲ置キ防疫方針及防疫規程ヲ制定シ之ニ據リテ迅速果敢ニ防疫事務ヲ執行ス即チ惡疫流行ノ虞アル地區ニハ消毒の大清潔法ヲ勵行シ不潔ト認ムル井水ハ一時閉鎖シ若クハ石灰乳ヲ投シテ使用ヲ禁シ一定ノ期間公費ヲ以テ善良ノ飲用水ヲ供給シ最非衛生的ナル生活ヲ營ミ到底自力ヲ以テ之ヲ改善スル能ハスト認ムル者ニハ公費ヲ以テ衣食ヲ給シ群集密居若クハ不潔ナル生活ヲナシ全ク改善ノ見込ナキモノハ一時公費ヲ以テ他ニ移轉セシメ危險ト認ムル飲食物ノ販賣ヲ禁シ不潔ノ飲食店ニシテ防疫上危險ト認ムルモノハ一時其營業ヲ停止スル等是レナリ各部委員長委員以下所屬員ハ勿論民團吏員名譽職等ニ至ル迄防疫事務關係者ハ殆ント眠食ヲ廢シ晝夜ノ別ナク精勵シテ一意

唯實効ノ舉ランコトヲ期シ別ニ本部ニ防疫監視員ヲ置キ駐劄軍武官ヲ以テ之ニ充テ數班ニ分レテ晝夜間斷ナク巡視シ以テ成績ヲ考察セシム防疫總長以下本部員モ亦巡閱監督ヲ怠ラス此ノ如クニシテ京城龍山及仁川ノ街衢ハ一時殆ント戰場ノ如ク混雜ヲ極メタレトモ其奏功著々トシテ現ハレ數日ナラスシテ新患者ノ發生全ク終熄スルニ至レリ

平壤ノ防疫

十月九日平壤ニ虎列刺發生ノ報アリ此方面ヨリ更ニ病毒ヲ輸入センコトヲ恐レ同地ノ防疫事務モ亦防疫總長ノ指揮下ニ屬セシメ同地駐屯小野寺旅團長ニ委員長ヲ囑託シ是レ又一舉剿絶ノ方針ヲ取ル

十月十六日皇太子殿下ニハ御豫定ノ通り仁川御上陸直ニ京城ニ入ラセラレ京仁間ノ奉迎歡呼未曾有ノ盛ヲ極ム之ヨリ先キ京城仁川ニハ既ニ數日間新患者ノ發生ナク御滞在ノ間モ絶テ其事アラス官民相與ニ至大ノ慶賀ヲ表セリ同二十日殿下御退京仁川ニ於テ御乘艦遊ハサル即チ翌二十一日ヨリ大ニ防疫事務ヲ縮小シ十月下旬防疫本部事務ヲ撤セリ釜山及新義州方面ニ於テモ京仁防疫事務ノ開始以前ヨリ相當方法ヲ以テ防疫ニ努メ釜山ハ後平壤ト同シク防疫本部ノ指揮ニ屬シタリ

防疫本部撤去釜山及新義州ノ防疫

經費ト結

今次ノ大舉防疫ハ當初約十萬圓ノ豫算ヲ以テ開始セラレ其決算額九萬七千九百十圓三十四錢ニ上レリ而シテ直接該事務ニ關係シ賞ヲ受ケタル者二千二百八十五人ニ及フ蓋シ此ノ如モ大仕掛ノ防疫ハ韓國ニ於テ曾テ有ラサル所ニシテ其結果直接ニハ皇太子殿下渡御ノ盛儀ニ當リ京城市街ノ清潔ヲ回復シテ當初ノ目的ヲ達シタルノミナラス間接ニ韓國ニ於ケル衛生ノ進歩ニ貢獻スル所甚々大ナルモノアリ依テ其大要ヲ錄スルコト此ノ如シ

漢城衛生會

京城ノ衛生狀態ハ此次ノ大舉防疫ニ依リ遽ニ面目ヲ一新シタリト雖將來適當ニ之ヲ維持シ且益々改善ノ歩ヲ進メンカ爲ニハ又別ニ施設スル所アルヲ要ス然カモ雜居地タル京城ニ於テ日韓兩國ノ施設互ニ相依リ相補フニアラサレハ到底其成功ヲ期ス可カラサルヤ明白ニシテ此次大舉防疫ノ實例亦實ニ之ヲ證シテ餘アリ即チ京城及其附近ノ地域内ニ於ケル衛生狀態ノ改善ヲ圖ル爲統監府及韓國政府ニ於テ規約ヲ協定シ同地區ニ於ケル衛生施設ノ機關トシテ漢城衛生會ヲ起シ十二月二十七日之ヲ發表セリ今漢城衛生會規則ノ梗概ヲ舉クレハ左ノ如シ

- 一、漢城衛生會ハ漢城及附近ノ地域内ニ於ケル衛生状態ノ改善ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 二、漢城衛生會ノ事業ニ必要ナル費用ハ韓國政府ノ補助金及漢城在住者ヨリ徴收スル金額ヲ以テ之ニ充ツ
- 三、漢城衛生會ニ會長及評議員ヲ置キ會長ニハ内部次官ヲ評議員ニハ内部警務局長、韓國駐劄軍軍醫部長、警視總監、京城理事廳理事官、漢城府尹、京城居留民團民長、漢城府民總代ヲ以テ之ニ充テ會長之ヲ必要ト認ムルトキハ右ノ外、評議員ヲ囑託スルヲ得
- 四、漢城衛生會ニ實行委員若干名ヲ置キ委員長ニハ警視總監ヲ以テ之ニ充テ委員ハ警視、技師又ハ漢城在住者中ヨリ會長之ヲ囑託ス
- 五、評議員ハ事業ノ計畫及費用ノ徴收ニ關スル事項ヲ決定ス
- 六、委員ハ評議員ノ決議ヲ執行ス

第十六章 居留帝國民ニ對スル施設

第一節 施設

(一) 居留民團法ノ施行

居留帝國民ノ發展
在韓帝國臣民ノ數ハ日清戰役後、劇ニ増加シ日露戰役前後ニ至リテ更ニ多大ノ増加ヲ示セリ隨テ商業、貿易其他各般産業上ニ於ケル邦人ノ發展亦大ニ見ルヘキモノアリ統監府設置セラレルニ及ヒ一面韓國ニ對シテ保護ノ權義ヲ實行スルト同時ニ居留帝國民ニ對スル行政モ亦漸時改善ヲ期シ新ニ施設スル所少カラス若シ利害ノ相關スル點ヨリ云ハハ韓國ニ於ケル各般ノ施設一トシテ然ラサルハナシト雖今唯其專ラ居留帝國民ニ對スルモノニ就テ大要ヲ叙セントス爾餘各般施設ニ至リテハ之ヲ他各章ニ讓リ再說ヲ須ヒサルナリ

居留民團ノ自治團體

居留帝國民ニ對スル施設
帝國民ニ對スル行政事項ハ居留民團法ノ施行ヲ以テ最重要ナリトス可シ從來居留帝國民ハ各地ニ團體ヲ組織シ公課ヲ徵シテ共同ノ事務ヲ處理シ

宛然内地ニ於ケル下級自治躰ノ觀ヲ爲セリト雖此等ノ團體ハ元來法律上ノ根據ヲ有セス法人格ヲ認メラレサルカ故ニ公課ヲ強制スルノ手段ヲ缺キ又公債ヲ募集スル權能ヲ各居留地區ノ發展ハ爲ニ著大ナル障害ヲ被レリ即チ明治三十八年三月公布居留民團法ニ伴フ施行規則制定ノ急ヲ認メ明治三十九年七月府令ヲ以テ同規則ヲ發布シ京城仁川釜山群山鎮南浦及平壤ニ於テハ同年八月十五日馬山及元山ニ於テハ九月一日木浦ニ於テハ十月十五日大邱ニ於テハ十一月一日各居留民團ヲ設立シ明治四十年九月十五日ヨリ龍山ニ同四十年二月十五日ヨリ新義州ニモ之ヲ設立シタリ而シテ日本人ノ團集尙小ニ未タ民團ヲ設立セサル地方ニ於テハ日本人會又ハ居留民會等ノ名義ヲ以テ事實上公共事務ヲ處理スルノ機關略々成ル將來此等ノ相當程度ニ發達スルト共ニ民團設立地區ノ數ハ漸次其多キヲ加フヘシ

一、居留民團

居留民團、日本人會若クハ居留民總代役場ヲ設置セル重ナル地區ハ最近ニ於テ左ノ如シ

京城理事廳管内	京城	龍山
仁川理事廳管内	仁川	
釜山理事廳管内	釜山	
平壤理事廳管内	平壤	
鎮南浦理事廳管内	鎮南浦	
群山理事廳管内	群山	
木浦理事廳管内	木浦	
馬山理事廳管内	馬山	
元山理事廳管内	元山	
大邱理事廳管内	大邱	
新義州理事廳管内	新義州	
計十二箇所		
二、日本人會、居留民會其他ノ團體		
京城理事廳管内	永登浦	開城
	鳥山	平澤
		太田
		水原
		鳥致院

仁川理事廳管内	海州	龜浦	洛東	金海	三浪津
釜山理事廳管内	東萊	蔚山	蔚陵島	安州	新安州
平壤理事廳管内	密陽	兼二浦	新幕		
群山理事廳管内	沙里院	公州	全州		
木浦理事廳管内	江景	光州	濟州島		
馬山理事廳管内	榮山浦	統營	三千浦	入佐村	昌原
元山理事廳管内	固城	北青			
城津理事廳管内	咸興				
清津理事廳管内	清津	鏡城			
大邱理事廳管内	金泉	永同	尙州	慶山	秋風嶺
新義州理事廳管内	清道	慶州	車輦館	義州	龍岩浦
	定州	宣川			

計五十一箇所

總計日本人團體數六十三個所

(二) 教育事業ノ獎勵

教育機關ノ不備
 京城、仁川、釜山等ニ於テハ從來教育ノ機關略々備ハレリト雖其他各地ノ小民團乃至日本人會等ノ經營ニ係ルモノハ草創ノ際未タ施設ノ宜シキヲ得ス或ハ相當數ノ日本人集團地ニシテ全ク學校ノ設置ヲ缺クモノアリテ著實ナル家族的移住者ヲシテ甚シク不便ヲ感セシメタリ此ニ於テ一面補助金ヲ下附シテ學校ノ新設又ハ完備ヲ促シ一面在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ學校ヲ指定シテ職員優遇ノ途ヲ啓キ銳意教育事業ノ發達ヲ期セリ

補助金ハ一時補助金及經常補助金ノ二種ニ分チ前者ハ學校建築費又ハ設備費ニ充テ後者ハ教員ノ給與費ニ充ツルモノトス補助金明細左ノ如シ

年次	一時補助		經常補助		補助金總額
	校數	金額	校數	金額	
明治三十九年度	一九	五四一〇円	二五	九五九〇円	一五〇〇〇円

居留帝國民ニ對スル施設

三九四

同 四十年 度	1	四五	二〇五〇〇	二〇〇〇〇
同 四十一年 度	二五	四七〇〇	二五三〇〇	三〇〇〇〇

(備考) 明治三十九年度及同四十年 度ハ決算同四十一年 度ハ豫算額ヲ掲ク

指定學校ハ明治四十一年二月末日現在調ニ於テ中等學校二、小學校十二、合計十四トス

(三) 金融機關ノ監督

中央銀行
ノ監督

明治三十八年三月勅令第七十三號ノ規定ニ據リ株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ハ京城支店ヲ以テ韓國總支店ト爲シ各支店出張所及代理店ヲ統轄シ又同行ノ韓國ニ於テ營業業務ノ爲テ獨立セル資本金額ヲ定メタルヲ以テ京城總支店ノ地位ハ本店ト分離シ韓國ニ於ケル中央銀行タルノ地位ヲ保ツニ至リ而シテ統監府開設セララルニ及ヒ統監ニ於テ其業務ノ監督權ヲ執リ新ニ監理官ノ任命ヲ見ル爾來京城總支店ニ對シ嚴重ナル監督ト細密ナル検査ヲ爲シ以テ兌換ノ基礎ノ確立ヲ期スルト同時ニ韓國ニ於テ中央銀行タルノ態度ヲ維持セシメ爾來第一銀行ハ韓國ニ於ケル十八、五十八兩銀行各支店出張所及韓國側各銀行トノ關聯ヲ保チ專ラ金融市

銀行法規

場ノ調和ヲ計レリ

超エテ明治四十年三月勅令ヲ以テ韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル件ヲ公布セラレ次テ同五月ニ至リ府令第二十號ヲ以テ韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル規則ヲ發布シ銀行業務ニ對スル監督ノ方法ヲ定メ一層營業ノ確實ヲ期セシム該規則ハ二十條ヨリ成リ韓國ニ於テ銀行業務ヲ營メントスル者ハ簡人ト會社ト將々韓國外ニ本店ヲ有スル銀行タルトナ問ハス總テ統監ノ認可ヲ受ケシメ銀行ヲ營業會社ノ合併及組織變更ニ就テモ同様ノ手續ヲ必要トシ其他會社ノ成立營業ノ開始營業ノ狀況等必要ノ事項ニ關シ統監ニ届出又ハ報告スヘキコトヲ規定シ韓國外ニ本店ヲ有スル銀行ニ就テハ韓國ニ於ケル代表者ヲ定メシメ其他一般營業上ノ準則並監督ノ方法ヲ規定シタリ而シテ該規則施行ノ際現ニ韓國ニ於テ銀行業ヲ營ムモノハ一箇月以内ニ規定ノ認可事項ヲ統監ニ届出ツルヲ以テ足レリトシ之ヲ以テ認可ヲ受ケタルモノト見做スノ便方ニ從フ此ニ於テ中央銀行タル第一銀行總支店ニ對スル監督ト相待ツテ一般銀行ノ監督モ亦始メテ周密ヲ期スルヲ得ルニ至レリ

居留帝國民ニ對スル施設

三九五

(四) 布教ノ取締

韓國ノ布教ニ關シテハ從來何等取締ノ方法ナク之ニ伴フ弊害亦少カラス
依テ此等ノ弊害ヲ匡正シ教化ノ目的ヲ達セシメンカ爲、現在韓國ニ於テ布
教ノ中心タル東西兩本願寺及淨土宗ノ各代表者トモ商義ノ上、明治三十九
年十一月府令ヲ以テ宗教ノ宣布ニ關スル規則ヲ制定公布セリ其要項ヲ擧
クレハ(一)韓國ニ布教セントスル神道、佛教其他宗教ニ屬スル教宗派ハ當該
管長又ハ之ニ準スヘキ者韓國ニ於ケル管理者ヲ選定シ布教ノ方法及布教
者ノ監督方法ヲ具シテ統監ノ認可ヲ受ク可シ(二)右以外ノ帝國臣民ニシテ
宗教ノ宣布ニ從事セントスル時ハ必要ノ事項ヲ具シ理事廳經由統監ノ認
可ヲ受クヘシ(三)寺院、會堂其他宗教ノ用ニ供スル營造物ノ設立ハ理事官ノ
認可ヲ要ス等ノ事項是レナリ目下本令ニ依リテ認可ヲ受ケ布教ニ從事ス
ルモノハ佛教各派即チ眞宗、淨土宗、眞言宗、曹洞宗、臨濟宗、法相宗、日蓮宗、法華
宗等ヲ始メ神道ニテハ金光教、天理教等アリ耶蘇教ニテハ米國、メソヂスト
派、日本組合教會等何レモ認可ヲ得テ布教ヲ爲ス

(五) 保安規則ノ制定

日露戰役ノ際及其以後ニ於テ急劇ニ増加シタル居留民中、或ハ無賴浮浪ノ
徒ナキニアラス動モスレハ韓國人又ハ他ノ外國人ト事端ヲ醸生シ獨リ帝
國民ノ地位面目ヲ傷クルノミナラス一般居留民間ノ治安ヲ害スルコト亦
甚ク大ナリ此等浮浪ノ徒ニ對シテハ明治二十九年法律第八十號清國及朝
鮮國在留帝國臣民取締法ノ適用ヲ怠ラスト雖、一般治安ノ維持ノ爲、特別ノ
規則ヲ制定スル必要ヲ認メ明治三十九年四月府令第十號ヲ以テ保安規則
ヲ發布セリ

保安規則

保安規則ハ十三條ヨリ成リ無定住無產業者ニ對スル取締、訴訟事項ニ關ス
ル取締、金品ノ募集及團體加入ノ勸誘ニ關スル取締、不法手段ニ依リ他人ノ
業務又ハ行爲ヲ妨害シ又ハ他人ノ進退意見ニ干涉スル者ニ對スル取締、財
物賣買又ハ勞力需給ニ關シ不法手段ヲ用ウル者ニ對スル取締、財物ノ貸借
又ハ其周旋ニ關シ不當高利又ハ報酬ヲ要求スル者ニ對スル取締、債務ノ辨
濟ヲ受クル爲、不法手段ヲ用キ又ハ身體ノ自由ヲ拘束スル者ニ對スル取締、
公職ヲ得ルノ周旋ヲ爲ス爲、金錢其他ノ報酬ヲ受ケ又ハ之ヲ約スル者ニ對
スル取締ヲ規定シ一年以下ノ禁錮又ハ罰金二百圓以下ノ罰則ヲ付ス

邦人非違
ノ取締

保安規則
改正

明治四十年七月政變ニ當リ治安保持ノ爲新聞紙ニ對シ相當ノ取締ヲ加フルヲ必要トシ新聞紙其他印刷物ノ記事外交及軍事ノ機密ニ涉リ又ハ安寧秩序ヲ妨害スト認ムルトキハ其發賣領布ヲ禁止シ之ヲ差押ヘ其發行ヲ停止若クハ禁止スルノ權ヲ理事官ニ付與シ尙理事官ハ統監ノ命ニ依リテ新聞紙ノ原稿ヲ檢閲シ外交及軍事ノ機密ニ涉リ又ハ安寧秩序妨害ノ悞アル事項ノ記載ヲ禁スルヲ得ルコトトシ保安規則ニ此等ノ條項ヲ添入シタリ明治四十一年五月新聞紙取締規則發布セララルニ及ヒ之ニ抵觸スル條項ハ當然廢止セラル

(六) 居留帝國國民ニ對スル裁判事務

居留國民ニ
對スル裁判

從來居留帝國國民ニ對スル裁判事務ハ領事館ニ於テ之ヲ取扱ヒ長崎訴訟院及大審院其控訴上告審ヲ管轄シタルカ明治三十九年法律第五十六號韓國ニ於ケル裁判事務ニ關スル法律ニ依リ理事官ハ其管轄區域内ニ於ケル訴訟事件ノ始審及非訴事件ノ事務ヲ行ヒ別ニ統監府法務院ヲ設置シ終審トシテ理事官ノ裁判ニ對スル上訴ヲ管轄セシメ次テ同年勅令第六十六號ヲ以テ韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則ヲ發布シ刑事及民事手續ヲ定メラ

レタリ即チ居留帝國國民ニ對スル裁判ハ條約上ノ權利ニ基キ帝國ノ法權ヲ及スノ點ニ於テ舊ニ異ラスト雖其制度ハ舊領事裁判ニ比シテ一進シタルモノトス

京城仁川釜山其他裁判事務繁劇ナル各理事官ニ於テハ法律事務專任ノ副理事官ヲ置キ事務執行ノ完全ヲ期セリ

第二節 現 況

(一) 戸口及分布

居留國民ノ
増加

居留帝國國民ノ戸口ハ日露戰役ノ前後特ニ明治三十九年ニ於テ最モ急激ノ増進ヲ示シ爾後韓國各居留地ヲ通スル不景氣ニ引續キ地方暴動等ノ爲較々其勢ヲ減シタリト雖大體ニ於テ依然増加ノ趨向ニ在リ今明治三十六年以來各年末現在戸口ヲ對照スレハ左ノ如シ

韓國居留日本人戸口現在表 (各年末現在)

居留帝國國民ニ對スル施設

居留帝國民ニ對スル施設

四〇〇

年次	戸數	人	口
明治三十六年末			二九一九七
同三十七年末			三一〇九三
同三十八年末			四二、四六〇
同三十九年末	二、五三一		八一七五四
同四十年末	二八、一八九		九八、二一五
同四十一年	三三、二六九		一、一六、四三七

(備考) 明治四十一年ハ同年六月末現在ニ依ル

理事廳所
管別戸口

更ニ明治三十九年以來ニ於ケル各理事廳所管地方別戸口ヲ舉クレハ左ノ如シ

各理事廳所管別日本人戸口表

地方別	戸數			人			口
	明治四十一年	明治四十年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十年	明治三十九年	
京城	八、八六六	六、四三二	四、八三三	二九、四七四	二一、七二〇	一七、二一四	一七、二一四
仁川	三、三三二	三、二九五	三、二五九	一、二八八九	一、二四三三	一、三、五七九	一、三、五七九

郡縣	戸數			人			口
	明治四十一年	明治四十年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十年	明治三十九年	
群山	一、五八六	一、四五三	一、〇一八	五、五四四	四、九四八	三、五九四	三、五九四
木浦	一、五三七	一、三〇九	八〇八	六、二八二	五、一四八	三、七三九	三、七三九
馬山	一、六七五	一、五一四	九五〇	五、九九二	五、三一九	三、六五二	三、六五二
釜山	六、〇一九	五、二〇四	四、五九九	二、三、三〇二	一、九、七三四	一、八、三三六	一、八、三三六
大邱	一、七三一	一、三、八四	一、〇五五	五、二四八	四、一四七	三、三三五	三、三三五
元山	一、六六六	一、五九三	一、三二八	六、二六一	六、〇四二	六、〇八六	六、〇八六
清津	一、〇六七	五七四		三、四〇五	一、七三二		
平壤	三、一七一	二、九六九	一九一三	一〇、二七一	九、五三三	五、九六一	五、九六一
鎮南	八三三	八五三	八〇七	二、八一九	二、八六四	二、九九六	二、九九六
新義州	一、五五四	一、四九二	七六四	四、五五九	四、一四五	二、九一三	二、九一三
合計	三三、一六九	二八、一八九	二一、五三二	一一、六四三	九、八二五	八、一七五	八、一七五

(備考) 明治四十一年ハ同六月末日、明治四十年及同三十九年ハ各年末現在ニ依ル
明治三十九年末清津ノ戸口ハ城津ノ項ニ含マル

日本入集
此等日本人ノ重ナル集團地名並各戸口數ハ明治四十一年六月末ニ於テ左ノ如シ

居留帝國民ニ對スル施設

四〇一

居留帝國民ニ對スル施設

慶	金	清	慶	大	寧	延	興	內	長	禮	鶴	鬱	蔚	密	三	金
				○												
				海	日	海		生								浪
山	泉	道	州	邱	郡	郡	郡	海	浦	林	谷	島	山	陽	津	海
同	同	同	同	大	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	釜
				邱												山
同	同	同	日	民								同	同	同	同	日
			本													本
			人													人
			會	團												會
三二	一三九	四六	三五	八五九	一八	六九	一三	三三	一七	三三	五九	二二三	六一	六〇	一七二	四七
				二八八三	一三五	三三五	一五七	二〇八	四七	一一〇	二二五	七二三	一六八	一七二	五五七	一五〇
四〇五	一〇五	四一九	一三七	八九	同	同	慶	同	同	同	同	同	同	同	同	慶
							尙									尙
							北									南
							道									道

居留帝國民ニ對スル施設

洛	龜	東	釜	知	熊	大	三	固	晉	入	昌	統	馬	南	羅	突
			○									○				
			世		山	千				佐						
東	浦	萊	山	浦	川	面	浦	城	州	村	原	營	山	平	州	山
同	同	同	釜	同	同	同	同	同	同	同	同	同	馬	同	同	同
			山										山			
同	同	日	民				同	同	同	同	同	日	民			
		本										本				
		人										人				
		會	團									會	團			
詳	五三	五三	四七六	一四	五一	四二	三一	四二	一三九	六七	四七	一六七	九一〇	三一	八七	四〇
			一八七〇	二四	一九五	一一一	八八	一四五	四八〇	三一	一四七	六〇八	三三五	一〇二	二二四	一五六
詳	二〇八	一八六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	慶	同	同	同
													尙			
													南			
													道			

居留帝國民ニ對スル施設

定州	車館	義州	龍岩	宜川	郭山	白馬	嶺美	中鎮	寧邊	雲山
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
日 本 人 會	同	同	居 住 民 會	日 本 人 會						
一四五	三一	七三	一三五	七九	一〇四	三七	四一	三九	六六	六七
四七一	一〇一	一九四	五六一	二三四	二九三	一一四	一三三	一〇四	一六四	一七六
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

四〇八

(備考) 民間所在地ハ〇印ヲ以テ區別ス

平澤、烏山及鳳山ハ最近調査ヲ缺クニ依リ明治四十年末現在ヲ以テ之ニ充當ス

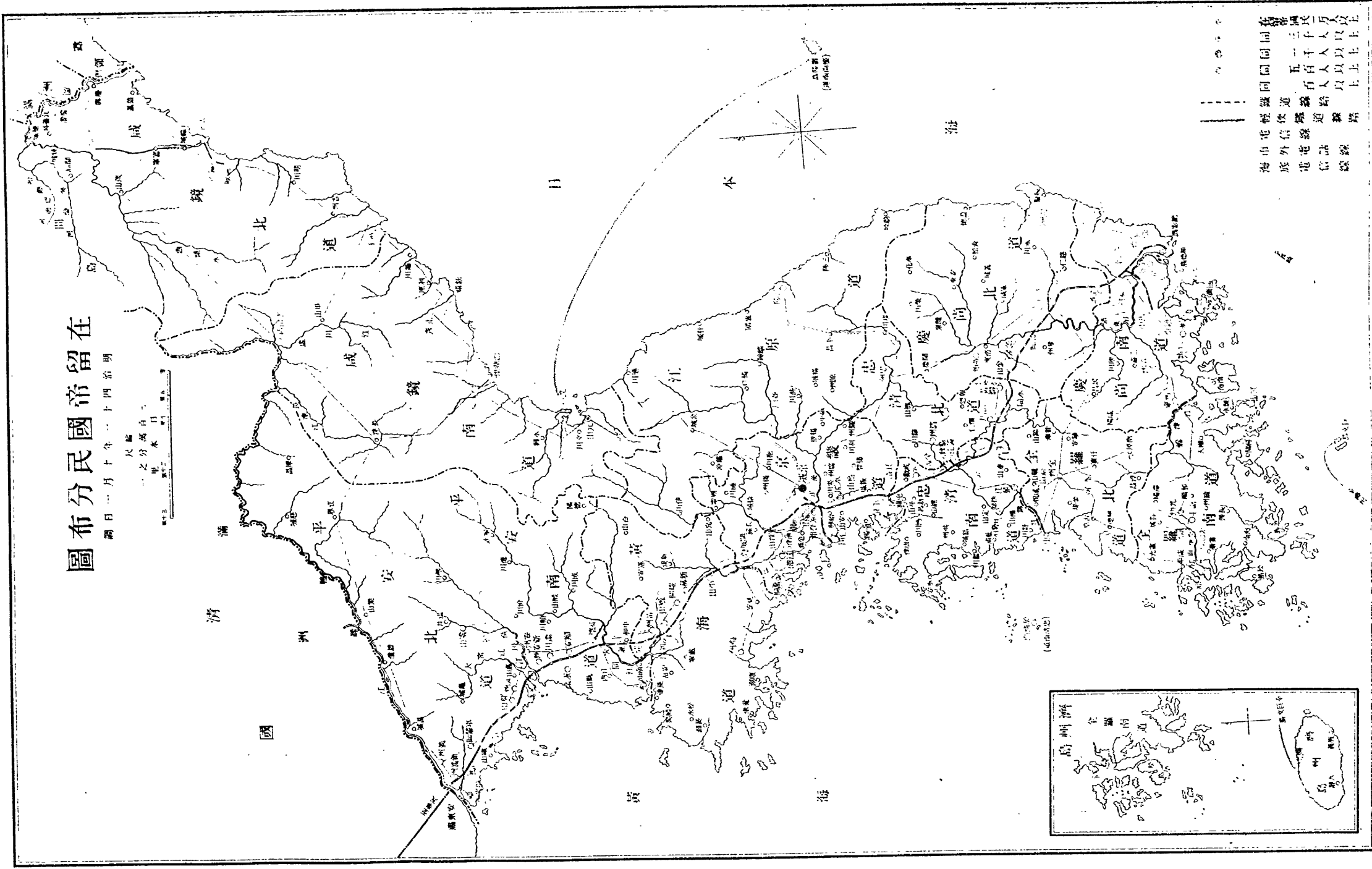
日本人ノ
韓國ニ於ケル日本人ノ移住地ハ從來主トシテ開港市場ニ限ラレタルモ交通上ニ於テハ鐵道ノ貫通アリ政治上ノ關係トシテハ理事廳、通信管署其他日韓官衙ノ増設、新置若クハ日本人官吏ノ韓國地方官衙ニ就職スルアリ又

●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
在籍國民二万人以上	同 一千人以上	同 五百人以上	同 百人以上	同 五十人以上	同 二十人以上	同 十人以上	同 五人以上	同 二人以上	同 一人以上	同 一人以上
電報線	郵便線	鐵道線	輕便鐵道線	踏切	踏切	踏切	踏切	踏切	踏切	踏切

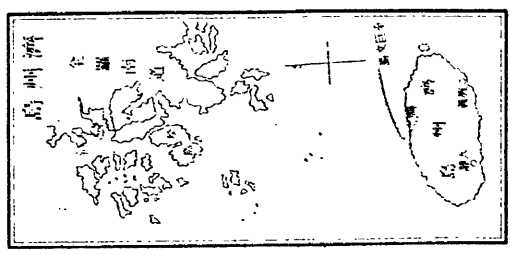
在留帝國國民分布圖

民國十四年十一月十四日

比例尺
 一公分代表一百里



在留帝國國民
 同 三萬人以上
 同 一萬人以上
 同 五千人以上
 同 一千人以上
 同 五百人以上
 同 一百人以上
 同 以上
 輕便鐵道
 電信線
 市外電話線
 海底電信線



裏面白紙



居留帝國國民ニ對スル施設

計	歲		計	歲	
	臨時部	經常部		臨時部	經常部
九七七、一〇二	四〇五、五二九	五七一、五七二	四一七、八六七	一五三、七〇五	二六四、一六二
四一〇、五二九	一七二、六八〇	二三八、八四九	一七二、六八〇	二三八、八四九	二三八、八四九
五九〇、五四七	一七二、六八〇	四一七、八六七	一七二、六八〇	四一七、八六七	四一七、八六七

四一〇

(備考) 明治四十年年度ハ京城、仁川、釜山、平壤、鎮南浦、群山、木浦、馬山、元山、大邱ノ十民團ニシテ明治四十一年年度ハ其ノ外龍山、新義州ノ二民團ヲ加フ但新義州民團歲入出ハ材料未着ノ爲之ヲ除ケリ

右ハ一般會計本豫算額ニシテ特別會計歲入出ヲ含マズ

民團歲入ノ主ナルモノハ經常部ニ在リテハ居留民團稅ヲ第一トシ使用料及手數料、財產ヨリ生スル收入、雜收入之ニ次キ又臨時部ニ在リテハ民團債前年度繰越金、寄附金、財產ヨリ生スル收入等之ニ次ク而シテ居留民團稅ハ戶別稅、營業稅、土地稅、雜種稅等ヲ普通トシ間々所得稅、家屋稅、釀造稅等ヲ課スルモノアリ

民團歲出ノ重ナルモノハ經常部ニ在リテハ役所費、教育費、衛生費、警備費等又臨時部ニ在リテハ民團債費、土木費、教育費等ヲ最トス而シテ民團ノ歲出

ハ各民團ノ施設ニ依リ其額非常ノ差アリ今、明治四十年年度各民團歲入出豫算ヲ表示スレハ左ノ如シ

民團別歲入出豫算 (明治四十一年度)

民團	歲入		歲出	
	經常部	臨時部	經常部	臨時部
京城	一七九、一三五	四一、一九八	一四二、三三八	七八、〇九五
仁川	九三、一〇三	一五六、八五六	八八、五九六	一六一、三六三
釜山	一五五、一四〇	三六、九三二	一一八、三六四	七三、七〇八
鎮南浦	一八、〇八七	一四一	一四、八八四	三、三四四
群山	二二、七〇九	一八、九七〇	一九、七三二	二、一九五七
平壤	三七、六〇六	三、〇〇五	三四、三二〇	六、二九〇
木浦	一七、二七四	一、〇〇〇	一六、四四三	一、八三一
元山	八三、二〇二	三一、四八九	六六、七四六	四七、九四五
馬山	一七、〇五〇	五〇〇	一五、〇一四	二、五六三
大邱	一六、一六九	!	一一、〇一九	四、一五〇
龍山	四四五、〇九	三〇〇〇	四三、二二六	四、二八三
計	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇

居留帝國國民ニ對スル施設

四一一

居留帝國民ニ對スル施設

仁川	仁川尋常高等小學校	仁川居留民團	明治十八年	明治三十九年八月十七日
群山	群山尋常高等小學校	群山居留民團	明治三十二年五月	明治三十九年十月十一日
木浦	木浦尋常高等小學校	木浦居留民團	明治卅一年十二月十二日	明治四十年二月七日
馬山	馬山尋常高等小學校	馬山居留民團	明治三十五年十一月	明治三十九年十月十七日
釜山	釜山高等小學校	釜山居留民團	明治十年	明治四十年一月二十四日
釜山	釜山尋常小學校	釜山居留民團	明治十年	明治四十年一月二十四日
釜山	釜山尋常小學校	釜山居留民團	明治三十八年四月	明治四十年一月二十四日
大邱	大邱尋常高等小學校	大邱居留民團	明治三十八年十月二日	明治四十一年一月十九日
元山	元山尋常高等小學校	元山居留民團	明治十五年	明治三十九年十月廿三日
平壤	平壤尋常高等小學校	平壤居留民團	明治三十五年五月	明治三十九年十月十二日
鎮南浦	鎮南浦尋常高等小學校	鎮南浦居留民團	明治三十一年五月	明治四十年二月二十四日

指定以外之部

理事廳名	學校名	管理者名	設立年月日
京	中等及中等以上學校		
城	東洋協會京城分校		

同	京城女學校		明治三十九年四月
釜	山私立成錦女學校		

京	城	龍山尋常高等小學校	龍山居留民團	明治三十六年二月
同	同	開城尋常高等小學校	開城居留民團	明治三十五年九月
同	同	永登浦尋常小學校	永登浦日本人會	明治三十八年十月一日
同	同	太田尋常高等小學校	太田日本人會	明治三十九年四月一日
同	同	水原尋常高等小學校	水原日本人會	明治三十九年八月三十一日
同	同	鳥致院尋常小學校	鳥致院日本人會	明治三十九年九月二十五日
同	同	鳥山尋常高等小學校	鳥山日本人會	明治三十九年九月十日
仁	川	江海州學堂	淨土宗布教師生野善龍	明治三十八年六月十五日
群	山	江景尋常高等小學校	江景日本人會	明治三十八年四月
同	同	公州尋常小學校	公州在留日本人會	明治四十年四月二十九日
同	同	日勢村尋常小學校	高折茂一郎	明治三十九年十一月
同	同	全州日本人小學校	全州日本人會	明治三十七年九月
木	浦	榮山浦尋常小學校	榮山浦日本人會	明治三十九年七月

居留帝國民ニ對スル施設

居留帝國民ニ對スル施設

四二八

大元	邱山	大邱婦人會附屬大邱幼稚園	大邱婦人會	明治三十九年五月
元	山幼	稚園	明山居留民團	明治二十五年

(四) 銀行

韓國ニ於ケル日本人ノ金融機關ハ明治十一年五月第一國立銀行カ釜山ニ支店ヲ置ケルニ其端ヲ發シ爾後日韓貿易ノ發達ニ伴ヒ同行ハ支店出張所ヲ開港市場其他樞要ノ地ニ配置シ後更ニ長崎十八銀行及大阪第五十八銀行ノ各支店出張所ヲ開設スルアリ明治四十年末ニ於ケル右三銀行ノ營業所ハ左ノ二十七箇所ニ上レリ

第一銀行	京城	仁川	釜山	元山	平壤
十八銀行	京城	仁川	釜山	元山	木浦
第五十八銀行	京城	仁川	釜山	鎮南浦	平壤

(計五箇所)

各銀行ノ資本金
 明治四十年末ニ於ケル第一銀行ノ資本金ハ一千萬圓同拂込額七百萬圓ニシテ金三百萬圓ヲ韓國支店元金トシ十八銀行ハ資本金三百萬圓同拂込額百二十五萬圓ニシテ韓國支店元金百十五萬圓トシ第五十八銀行ハ資本金百五十萬圓同拂込額百萬圓ニシテ韓國支店資本額ヲ定メ本店勘定ニ包含セリ別ニ日本興業銀行ハ明治三十九年十月以來支店初出張所ヲ京城ニ設置スルモ其業務ハ一般銀行ト同シカラス依テ今暫ク之ヲ省キ他三銀行ニ付明治三十五年以來各年末現在預金並貸出金統計ヲ左ニ表示シテ對照ニ便ス

一、銀行諸預金現在額累年比較表

年次	第一銀行	十八銀行	第五十八銀行	合計
明治四十年末	一一三、〇八五	二〇七、七五七	一九一、〇六八	一五二、八八〇
同三十九年末	一〇八、〇九一	一五三、一六〇	一六〇、三〇八	一三九、三九一
同三十八年末	八四、一四七	九五、〇六三	七〇、六五三	一〇〇、七三六
同三十七年末	七四、五二七	八九、〇五一	八四、〇八一	九一、九〇四

居留帝國民ニ對スル施設

四一九

居留帝國民ニ對スル施設

四二〇

明治三十六年末	四六八三〇七五	三一四、〇八四	四五三、〇八四	五四五〇、二四三
同 三十五年末	三八八五、二四六	二五〇、四三三	二八三、五二五	四四一九、二〇三

二、銀行諸貸出金現在額累年比較表

年次	第一銀行	十八銀行	第五十八銀行	合計
明治四十年末	七、〇三、五五七 <small>円</small>	二、九二、四六七 <small>円</small>	四、四九、一六七 <small>円</small>	一四、五一、九〇二 <small>円</small>
同 三十九年末	四、三八三、三九二	二、〇八七、三七八	三、八一七、二四九	一〇、二八八、〇一九
同 三十八年末	三、四八八、〇二〇	一、八五一、〇九六	一、五七六、六八九	六、九一五、八〇五
同 三十七年末	二、五二一、八四五	一、四五〇、七六六	一、一一七、四四五	五、〇九〇、〇五六
同 三十六年末	二、一五六、七四〇	一、一三〇、九四〇	九三七、三七六	四、二二五、〇五七
同 三十五年末	一、九四五、一七五	一、一六七、三七九	七四七、六一六	三、八六〇、一七二

即チ略々銀行事業發達ノ經路ヲ見ル可ク此等ノ預金及貸出金ハ專ラ日本人ノ取引ニ係ルモノニアラスト雖一般日本人ノ經營スル商工業ノ發達モ亦略々之ヲ窺フニ足ル可シ

皇朝帝國銀行附録

明治三十六年末	四六八、七七五	三、四、〇八四	四五三、〇八四	五四五〇、二四二
同三十五年末	二八八、五四六	二、五〇、四三三	二八三、五二五	四四一九、二〇二

一、銀行諸貸出金現在額累年比較表

年次	第一銀行	十八銀行	第五十八銀行	合計
明治四十年末	七、二〇、五五七	二、九二、四六三	四、四九、六七〇	一、四五、一九九〇
同三十九年末	四、八、三九二	二、八七、三七八	三、八一、七二四九	一〇、二八、〇一九
同三十八年末	四、八、八二〇	一、八五、一〇九六	一、五七、六六八九	六、九、一五、八〇五
同三十七年末	二、五、二、八四五	一、四九、七六六	一、二一、七、四四五	五、〇、九〇、〇五六
同三十六年末	二、五、六、七四〇	二、三、〇、九四、	九三、七、三、七六	四、二、三、五、〇、五七
同三十五年末	一、九、四、九、一七五	一、二、六、七、三、七九	一、七、四、七、六、一、六	三、八、六、〇、一、七二

即チ略々銀行事業發達ノ經路ヲ見ル可ク此等ノ預金及貸出金ハ專ラ日本人ノ取引ニ係ルモノニアラスト雖、一般日本人ノ經營スル商工業ノ發達モ亦略々之ヲ窺フニ足ル可シ

附 録

附録目次

(一) 條約及取極書	一
日韓議定書	一
日韓協約(明治三十七年)	一
日韓協約(明治三十八年)	二
日韓協約(明治四十年)	二
在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ關スル取極書	三
韓國通信機關委託ニ關スル取極書	三
(二) 官制	五
統監府及理事廳官制	五
統監府法務院官制	七
統監府營林廠官制	七
統監府通信官署官制	八
統監府鐵道管理局官制	九
統監府陸海軍武官官制	一〇
韓國駐劄憲兵ニ關スル制	一〇

目

次

目次

(三)

外事……………一

外國旅券規則……………一

(四)

居留民團……………二

居留民團法……………二

居留民團法施行規則……………三

(五)

裁判……………九

韓國ニ於ケル裁判事務ニ關スル制……………九

韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則……………九

(六)

銀行……………二

韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル制……………二

韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル規則……………三

株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ニ關スル制……………四

(七)

土地……………六

土地建物證明規則……………六

土地建物證明規則ニ依リ證明又ハ查證ヲ受ケタル典書ノ執行ニ

付韓國勅令土地家屋典當執行規則及同國法部令土地家屋典當執

(八)

韓國法令……………七

行規則施行細則ノ規定準用……………七

鑛業法……………七

砂鑛採取法……………〇

土地建物證明規則……………一

土地建物典當執行規則……………二

國有未墾地利用法……………三

目次



附 錄

(一) 條約及取極書

日韓議定書 二十七年

議 定 書

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款ヲ協定ス

第一條 日韓兩帝國間ニ恆久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲大韓帝國政府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シ其忠告ヲ容ル、事

第二條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ヲ確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムル事

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及領土保全ヲ確實ニ保證スル事

第四條 第三國ノ侵害ニ依リ若ハ内亂ノ爲大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルヘシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル爲十分便宜ヲ與フル事

附 錄 條約及取極書

大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲軍略上必要ノ地點ヲ臨機收用スルコトヲ得ル事

第五條 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ後來本協約ノ趣意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルコトヲ得サル事

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣トノ間ニ臨機協定スル事
明治三十七年二月二十三日

特 命 全 權 公 使 林 權 助 印
光武八年二月二十三日
外部大臣臨時署理陸軍參將 李 址 鎔 印

日韓協約 三十七年 八月

一 韓國政府ハ日本政府ノ推薦スル日本人一名ヲ財務顧問トシテ韓國政府ニ備聘シ財務ニ關スル事項ハ總テ其意見ヲ詢ヒ施行スヘシ

一 韓國政府ハ日本政府ノ推薦スル外國人一名ヲ外交顧問トシテ外部ニ備聘シ外交ニ關スル要務ハ總テ其意見ヲ詢ヒ施行スヘシ

一 韓國政府ハ外國トノ條約締結其他重要ナル外交案件即外國人ニ對スル特權讓與若ハ契約等ノ處理ニ關シテハ豫メ日本政府ト協議スヘシ



附錄 條約及取極書

明治三十七年八月二十二日

特命全權公使 林 權 助印

光武八年八月二十二日

外部大臣署理 尹 致 吳印

日韓協約 三十八年十一月

日本國政府及韓國政府ハ兩帝國ヲ結合スル利害共通ノ主義ヲ鞏固ナラシメシムコトヲ欲シ韓國ノ富強ノ實ヲ認ムル時ニ至ル迄此目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一條 日本國政府ハ在東京外務省ニ由リ今後韓國ノ外交ニ對スル關係及事務ヲ監理指揮スヘク日本國ノ外交代表者及領事ハ外國ニ於ケル韓國ノ臣民及利益ヲ保護スヘシ

第二條 日本國政府ハ韓國ト他國トノ間ニ現存スル條約ノ實行ヲ全フスルノ任ニ當リ韓國政府ハ今後日本國政府ノ仲介ニ由ラスシテ國際的性質ヲ有スル何等ノ條約若ハ約東ヲナサハルコトヲ約ス

第三條 日本國政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ閣下ニ一名ノ統監(レジデント、ゼネラル)ヲ置ク統監ハ專ラ外交ニ關スル事項ヲ管理スル爲京城ニ駐在シ親シク韓國皇帝陛下ニ内謁スルノ權利ヲ有ス日本國政府ハ又韓國ノ各開港場及其他日本國政府ノ必要ト認ムル地

ニ理事官(レジデント)ヲ置クノ權利ヲ有ス理事官ハ統監ノ指揮ノ下ニ從來在韓國日本領事ニ屬シタル一切ノ職權ヲ執行シ並本協約ノ條款ヲ完全ニ實行スル爲必要トスヘキ一切ノ事務ヲ掌理スヘシ
第四條 日本國ト韓國トノ間ニ現存スル條約及約束ハ本協約ノ條款ニ牴觸セサル限總テ其効力ヲ繼續スルモノトス
第五條 日本國政府ハ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルコトヲ保證ス
右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ
明治三十八年十一月十七日
特命全權公使 林 權 助印
光武九年十一月十七日
外部大臣 朴 齊 純印

日韓協約 四十年

日本國政府及韓國政府ハ速ニ韓國ノ富強ヲ圖リ韓國國民ノ幸福ヲ増進セムトスルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ
第一條 韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受ケルコト
第二條 韓國政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政上ノ處分

ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコト

第三條 韓國ノ司法事務ハ普通行政事務ト之ヲ區別スルコト

第四條 韓國高等官吏ノ任免ハ統監ノ同意ヲ以テ之ヲ行フコト

第五條 韓國政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ韓國官吏ニ任命スルコト

第六條 韓國政府ハ統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ僱聘セサルコト

第七條 明治三十七年八月二十二日調印日韓協約第一項ハ之ヲ廢止スルコト

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十四日

統 監 侯爵 伊 藤 博文

光武十一年七月二十四日

内閣總理大臣勳二等 李 完 用

在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ關スル取極書

在韓國帝國臣民ニ對スル警察事務ノ執行ニ關シ統監府及

附錄 條約及取極書

韓國政府ハ左ノ取極ヲ爲シタリ

取極書

統監府及韓國政府ハ日本政府カ明治四十年七月二十四日締結日韓協約第五條ニ依リ任命セラレタル韓國警察官ヲシテ當該日本官憲ノ指揮監督ヲ受ケ在韓國日本臣民ニ對スル警察事務ヲ執行セシムルコトヲ約ス
明治四十年十月二十九日
統 監 公爵 伊 藤 博文

隆熙元年十月二十九日
内閣總理大臣 李 完 用

韓國通信機關委託ニ關スル取極書 三十八年四月

取極書

日韓兩國政府ハ韓國ノ通信機關ヲ整備シ日本國ノ通信機關ト合同聯絡シテ兩國共通ノ一組織ヲナスヲ以テ韓國ノ行政上並經濟上得策ナリトシ且之カ爲韓國ノ郵便電信電話事業ヲ日本國政府ノ管理ニ委託スル必要ヲ認メ大日本帝國特命全權公使林權助及大韓帝國外部大臣李夏榮ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ取極ヲナス

第一條 韓國政府ハ其國內ニ於ケル郵便電信及電話事業(宮内府專屬ノ電話ヲ除ク)ノ管理ヲ日本國政府ニ委託

附錄 條約及取極書

スヘシ

第二條 韓國政府ノ既設通信事業ニ關聯スル土地建物品具機械其他一切ノ設備ハ本協約ニ依リ日本國政府ノ保管ニ移ルモノトス

前項土地建物其他ノ設備ニ關シテハ兩國ノ官憲會同ノ上財產目錄ヲ調製シ以テ他日ノ證トスヘシ

第三條 韓國ノ通信機關擴張ノ爲日本國政府ニ於テ必要トスル場合ニハ國有ノ土地及建物ハ無償ニテ之ヲ使用シ及一私人ノ土地建物ハ之ヲ有償ニテ收用スルコトヲ得

第四條 通信機關ノ管理及財產ノ保管ニ關シテハ日本國政府ハ自己ノ計算ヲ以テ善良ナル管理人ノ責ニ任スヘシ

通信機關ノ擴張ニ要スル費用モ亦日本國政府ノ負擔タルヘシ

日本國政府ハ通信機關ノ管理ニ關スル財政狀況ヲ韓國政府ニ公示スヘシ

第五條 日本國政府カ通信機關ノ管理若ハ擴張上必要トスル設備並物件ハ一切ノ課稅ヲ免除セラルヘシ

第六條 日本國政府ノ管理權及業務擴張ニ抵觸セサル範圍ニ於テ現在ノ通信院ヲ存置スルハ韓國政府ノ任意タルヘシ

日本國政府ハ管理及擴張ノ業務ニ關シ可成多クノ韓國

官吏又ハ使用人ヲ用ユヘシ

第七條 郵便電信及電話ニ關シ從前韓國政府カ外國政府ト協定シタル事項ニ付テハ日本國政府代テ其權利ヲ行使シ其義務ヲ履行スヘシ

通信機關ニ關シ將來新ニ韓國政府ト外國政府トノ間ニ協定ノ必要アル場合ニ於テハ日本國政府ハ韓國政府ニ代テ其協定ノ責ニ任スヘシ

第八條 日本國政府ト韓國政府トノ間ニ從來成立セル通信機關ニ關スル各種ノ協定ハ本協約ニ依リ當然改廢變更セラレタルモノトス

第九條 後來韓國通信事業發達ノ爲日本國政府カ既設設備ノ管理保管及新事業擴張ニ費シタル出費ニ對シ十分ノ收益ヲ生スルニ至ルトキハ日本國政府ハ收利ノ内相當ノ部分ヲ韓國政府ニ交付スヘシ

第十條 將來韓國政府ノ財政ニ十分ノ餘裕ヲ生シタル場合ハ兩國政府協議ノ上通信機關ノ管理ヲ韓國政府ニ還付スヘシ

明治三十八年四月一日
特命全權公使 林 權 助印
光武九年四月一日
外部大臣 李 夏 榮印

(一) 官制

統監府及理事廳官制

三十八年十二月
勅令第二百六十七號
改正 四〇年勅令一五號、六五號、二九五號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府及理事廳官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府及理事廳官制

第一條 韓國京城ニ統監府ヲ置ク

第二條 統監ハ親任トス

統監ハ天皇ニ直隸シ外交ニ關シテハ外務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ其ノ他ノ事務ニ關シテハ内閣總理大臣ヲ經テ上奏ヲ爲シ及制可ヲ受ク

第三條 統監ハ韓國ニ於テ帝國政府ヲ代表シ條約及法令ニ基キ諸般ノ政務ヲ統轄ス

第四條 統監ハ韓國ノ安寧秩序ヲ保持スル爲必要ト認ムルトキハ韓國守備軍ノ司令官ニ對シ兵力ノ使用ヲ命スルコトヲ得

第五條 削除

第六條 削除

第七條 統監ハ統監府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

附錄 官制

第八條 統監ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ條約若ハ法令ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第九條 統監ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス

第十條 統監ハ内閣總理大臣ヲ經テ所部官吏ノ敘位叙勳ヲ上奏ス

第十一條 統監ハ親任トス

副統監ハ統監ヲ補佐シ統監事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

第十二條 統監府ニ左ノ職員ヲ置ク

總務長官	勅任
參與官	專任二人
秘書官	專任二人
書記官	專任六人
技師	專任四人
通譯官	專任九人
屬	奏任
技手	專任四十三人
通譯生	判任

附錄 官制

前項ノ外韓國宮内府及各部ノ次官タル者ハ之ヲ參與官トス
 統監府又ハ其ノ所轄官廳ノ事務ヲ囑託セラレタル韓國人ハ高等官又ハ判任官ノ待遇ト爲スコトヲ得
 第十二條 總務長官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ總理ス
 第十三條 參與官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ掌理ス
 第十三條ノ二 削除
 第十四條 削除
 第十五條 削除
 第十六條 祕書官ハ上官ノ命ヲ承ケ機密ニ關スル事務ヲ掌ル
 第十七條 書記官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ掌ル
 第十八條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル
 第十九條 通譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ文書翻譯及通譯ヲ掌ル
 第二十條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス
 第二十一條 統監ハ統監府技師、通譯官及技手ヲシテ理事應ニ在勤セシムルコトヲ得
 前項ノ職員ハ其ノ職務ノ執行ニ付當該理事官ノ指揮監督ヲ承クルモノトス
 第二十二條 韓國内須要ノ地ニ理事應ヲ置ク
 理事應ノ位置及管轄區域ハ統監之ヲ定ム
 第二十三條 各理事應ニ左ノ職員ヲ置ク

理事官 奏任
 副理事官 奏任
 屬 判任
 看守長 判任
 通譯生 判任
 副理事官二人以上ヲ置ク理事應ニ於テハ其ノ一人ハ主トシテ法律事務ヲ掌ルモノトス
 理事應職員ノ定員ハ別ニ之ヲ定ム
 第二十四條 理事官ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ從來韓國在勤領事ニ屬シタル事務並條約及法令ニ基キ理事官ノ執行スヘキ事務ヲ管掌ス
 第二十五條 理事官ハ安寧秩序ヲ保持スル爲緊急ノ必要アリト認ムル場合ニ於テ統監ノ命ヲ請フノ違ナキトキハ當該地方駐在帝國軍隊ノ司令官ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得
 第二十六條 理事官ハ韓國ノ施政事務ニシテ條約ニ基ク義務ノ履行ノ爲必要アルモノニ付事緊急ヲ要シ統監ノ命ヲ請フノ違ナキトキハ直ニ韓國當該地方官憲ニ移牒シ之ヲ執行セシムル後之ヲ統監ニ報告スヘシ
 第二十七條 理事官ハ理事應令ヲ發シ之ニ罰金十圓以内、拘留又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得
 第二十八條 副理事官ハ理事官ノ命ヲ承ケ職務ヲ掌リ理事官事故アルトキハ臨時其ノ職務ヲ代理ス

第二十九條 削除
 第三十條 統監府及理事應屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
 第三十一條 削除
 第三十二條 統監府及理事應通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ文書翻譯及通譯ニ從事ス
 第三十三條 削除
 第三十四條 看守長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監獄事務ヲ掌ル
 第三十五條 理事應ニ看守ヲ置ク判任官ノ待遇トス
 看守ニ關スル規定ハ統監之ヲ定ム

統監府法務院官制

三十九年六月勅令第百六十四號

朕統監府法務院官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 統監府法務院官制
 第一條 統監府ニ法務院ヲ置ク
 第二條 統監府法務院ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル司法事務ヲ掌ル
 第三條 統監府法務院ニ左ノ職員ヲ置ク
 院長 奏任 内一人ヲ勅任トス
 評定官 專任四人
 檢察官 專任一人 奏任
 書記 專任五人 判任
 附錄 官制

第四條 法務院長ハ勅任評定官ヲ以テ之ニ充ツ統監ニ屬シ院務ヲ總理ス
 第五條 法務院長ハ司法事務ニ關シテハ理事官ヲ指揮監督ス
 第六條 評定官ハ司法事務ヲ管掌ス
 法務院長事故アルトキハ上席ノ評定官臨時其ノ職務ヲ代理ス
 第七條 檢察官ハ法務院長ノ命ヲ承ケ檢察及監獄ニ關スル事務ヲ掌ル
 第八條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ院務ニ從事ス
 附則
 本令ハ明治三十九年六月二十七日ヨリ之ヲ施行ス

統監府營林廠官制

四十年三月勅令第七十二號

朕統監府營林廠官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 統監府營林廠官制
 第一條 統監府營林廠ハ統監ノ管理ニ屬シ協約ニ基キ鴨綠江及豆滿江沿岸ニ於ケル森林經營ニ關スル事務ヲ掌ル
 第二條 統監府營林廠ニ左ノ職員ヲ置ク
 廠長 勅任又ハ奏任
 事務官 專任五人 奏任
 附錄 官制

附錄 官制

技師 專任二人
技師 專任二十五人 判任

第三條 廠長ハ統監ノ命ヲ承ケ廠中一切ノ事務ヲ掌理ス
第四條 事務官ハ廠長ノ命ヲ承ケ廠務ヲ掌ル
第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル
第六條 廠ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
第七條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス
第八條 通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ翻譯及通譯ニ従事ス
第九條 統監ハ必要ト認ムル地ニ營林支廠ヲ設クルコトヲ得
支廠長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

統監府通信官署官制

改正 三十九年勅令三二號、一〇五號
四〇年三三〇號、四一一年七八號
統監府通信官署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
朕統監府通信官署ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信及電話ニ關スル事務ヲ掌ル

務ヲ掌ル
統監府通信官署ハ統監ノ指定ニ依リ韓國國庫金ノ出納保管ニ關スル事務ヲ掌ル
第二條 統監府通信官署ハ通信管理局、郵便局及郵便所トス

通信管理局ハ之ヲ京城ニ置キ韓國ニ於ケル郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信及電話ノ事務ヲ管理ス
郵便局及郵便所ハ郵便、郵便爲替、郵便貯金事務ヲ掌ル
電信又ハ電話事務ハ郵便局又ハ郵便所ヲシテ之ヲ兼掌セシムルコトヲ得
第三條 統監ハ郵便局ヲ指定シ區域ヲ定メテ管理事務ヲ分掌セシムルコトヲ得
第四條 郵便局及郵便所ノ名稱及位置ハ統監之ヲ定ム
第五條 統監ハ必要ナル地ニ郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信又ハ電話ノ取扱所ヲ設クルコトヲ得
第六條 統監府通信官署ニ左ノ職員ヲ置ク
通信管理局長 一人
通信管理局事務官 專任三人
通信事務官 專任七人
通信事務官補 專任十三人
通信技師 專任六人
郵便局長

通信 專任二百九十四人

通信技師 專任三十七人

通信手 專任三百五十二人

第七條 通信管理局長ハ勅任又ハ奏任トシ統監ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理ス
第八條 通信管理局事務官、通信事務官及通信事務官補ハ奏任トシ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第九條 通信技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル
第十條 郵便局長ハ通信事務官、通信事務官補又ハ通信屬ヲ以テ之ニ充ツ上官ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理ス

第十一條 通信屬及通信手ハ判任トシ上官ノ指揮ヲ承ケ事務ニ従事ス
第十二條 通信技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス
第十三條 郵便所長ハ判任トシ上官ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

附則
本令ハ明治三十九年一月十日ヨリ之ヲ施行ス

統監府鐵道管理局官制

改正 四〇年勅令五五號、四一年五七號
朕統監府鐵道管理局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

附錄 官制

第一條 統監府鐵道管理局ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル鐵道ノ建設、改良、保存、運輸及附帶ノ業務ヲ掌ル

第二條 統監府鐵道管理局ニ左ノ職員ヲ置ク
局長 一人 勅任
事務官 專任十一人 奏任
事務官補 專任九人 奏任
技師 專任二十九人 奏任
通譯官 專任二人 奏任
書記 專任二百五十三人 判任
技師 專任百七十三人 判任
通譯生 專任三人 判任

第三條 長官ハ統監ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理ス
第四條 長官ハ韓國駐劄軍司令官ノ要求ニ應ジ軍事輸送其ノ他軍事上所要ノ設備ヲ爲スヘシ

第五條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌ル
第六條 事務官補ハ上官ノ命ヲ承ケ事務官ノ事務ヲ助ク
第七條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第八條 通譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ文書翻譯及通譯ヲ掌ル
第九條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
第十條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス
第十一條 通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ文書翻譯及通譯ニ

附錄 官制

從事ス

第十二條 統監府鐵道管理局ニ左ノ三部ヲ置キ事務官又ハ技師ヲ以テ部長ニ充テ上官ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理セシム

- 總務部
- 工務部
- 運輸部

各部事務ノ分掌ハ統監之ヲ定ム

第十二條ノ二 韓國鐵道ノ建設及改良ノ爲鐵道管理局ニ臨時建設部ヲ置キ左ノ職員ヲ増置ス

- 事務官 專任三人
- 事務官補 專任五人
- 技師 專任十七人 内一人ヲ勲任ト爲スコトヲ得
- 書記 專任五十一人
- 技手 專任七十三人

臨時建設部ニ部長ヲ置キ技師ヲ以テ之ニ充テ上官ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理セシム

第十三條 統監ハ必要ニ應シ地方ニ事務所ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

統監附陸海軍武官官制 三十九年二月勅令第十五號

朕統監附陸海軍武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一〇 統監附陸海軍武官官制

第一條 統監ニ陸海軍武官各一名ヲ附シ陸海軍少將又ハ佐官ヲ以テ之ニ補ス

第二條 統監附陸海軍武官ハ統監ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス

第三條 統監附陸海軍武官ノ人事ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ管轄ニ屬ス

韓國駐劄憲兵ニ關スル制 四十年十月勅令第三百二十三號

朕韓國ニ駐劄スル憲兵ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 韓國ニ駐劄スル憲兵ハ主トシテ治安維持ニ關スル警察ヲ掌リ其ノ職務ノ執行ニ付統監ニ隸シ又韓國駐劄軍司令官ノ指揮ヲ承ケ兼テ軍事警察ヲ掌ル

第二條 憲兵隊本部ノ位置並分隊ノ配置及其ノ管區ハ統監之ヲ定ム

第三條 統監ハ必要ニ際シ一時憲兵隊ノ一部ヲ其ノ管區外ニ派遣スルコトヲ得

第四條 憲兵ノ服務ニ關スル規定ハ統監之ヲ定ム但シ其ノ軍事警察ニ係ルモノハ韓國駐劄軍司令官之ヲ定ム

第五條 前諸條ノ規定ノ外韓國ニ駐劄スル憲兵ニ付テハ憲兵條例ニ依ル

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(三) 外事

外國旅券規則 四十年四月統監府令第十六號

第一條 韓國ニ在ル帝國臣民及韓國臣民ニシテ外國ニ旅行スル者ニ下付スル旅券ハ統監之ヲ發給ス

第二條 旅券ノ下付ヲ請フ者ハ書面ニ左ノ事項ヲ記載シ之ニ戶籍謄本又ハ其ノ氏名、本籍地及身分ヲ證明スヘキ文書ヲ添付シ理事廳又ハ理事廳支廳ニ出願スヘシ但シ理事官又ハ副理事官ノ認定ニ依リ戶籍謄本又ハ其ノ他ノ文書ノ添付ヲ省察セシムルコトヲ得

- 一 氏名 (帝國臣民ニ在リテハ片假名ヲ以テ、韓國臣民ニ在リテハ片假名又ハ該文ヲ以テ傍訓ヲ附スヘシ)
- 二 本籍地 (リテハ住所)
- 三 所在地
- 四 身分 (戶主、家族ノ別、家族ナルトキハ戶主ノ氏名及戶主トシテノ摺摺ヲ記載スヘシ)
- 五 年 齡 (滿何年若ハ何年何月何日生)
- 六 職業
- 七 旅行地名
- 八 旅行ノ目的

附錄 外事

第三條 官命ニ依リ外國ニ旅行スル者ハ其ノ所管官廳ヲ經由シテ統監府ニ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得但シ

第二條第一號、第七號及第八號ノ事項ヲ開申スヘシ家族又ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ係ル第二條第一號乃至第五號ノ事項ヲ併セテ開申スヘシ

第四條 移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依リ移民又ハ保證人ヲ要スル移民ニシテ第二條ノ出願ヲナストキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第五條 第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受クル者ハ一枚ニ付金一圓ニ相當スル收入印紙ヲ旅券領收證ニ貼付スヘシ

第六條 旅券ノ下付ヲ受クル者ハ其ノ券面ニ署名スヘシ若シ署名スルコト能ハサルトキハ代署セシメ本人之ニ實印ヲ捺捺スヘシ但シ韓國臣民ニ在リテハ實印ノ捺捺ヲ省略セシムルコトヲ得

第七條 旅券面ニ查證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ノ定ムル所ニ依リ查證ヲ受クヘシ

第八條 濟國在留禁止命令中ノ者ハ該國ニ旅行スル場合ニ限リ旅券ノ下付ヲ受クルコトヲ得ス

第九條 第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル後六箇月以内ニ出發セサル者ハ旅券ヲ返納スヘシ

第十條 旅行者歸國若ハ歸著シタルトキハ旅券ヲ返納スヘシ

附錄 居留民團

旅券ノ下付ヲ受ケタル者死亡シタルトキハ其ノ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十條 商業、漁業其ノ他ノ職業ノ爲特定ノ地ニ數次往復スル者ハ歸國又ハ歸著者ニ其ノ旅券ヲ返納スルコトヲ要セス但シ旅券領收ノ日ヨリ三箇年ヲ過キテ歸國若ハ歸著シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

前項特定ノ地ハ統監之ヲ告示ス

第十一條 旅券ノ下付ヲ受ケタル者第二條第一號乃至第四號、第七號及第八號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十二條 旅券ヲ紛失シタルトキハ直ニ届出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第十三條 韓國ニ於テ旅券ノ返納又ハ其ノ紛失若ハ發見ノ届出ヲ受クヘキ官廳ハ統監府、理事廳及理事廳支廳トス

第十四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ沒收シ二十五圓以下ノ罰金又ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

一 第二條各號ノ事項ヲ詐稱シ又ハ第七條ノ事實ヲ申告セス其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幫助シタル者

二 他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメ其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者

及之ヲ幫助シタル者

三 本令ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者

第十五條 舊規則ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル者ニ對スル第八條ノ期間ハ該旅券面ニ記載シタル下付ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第十六條 本令ハ明治四十年五月一日ヨリ之ヲ施行ス明治三十九年九月統監府令第三十四號韓國人外國旅券規則ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

(四) 居留民團

居留民團法 三十八年三月 法律第四十二號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル居留民團法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

居留民團法

第一條 專管居留地、各國居留地、雜居地其ノ他ニ住居スル帝國臣民ノ狀態ニ依リ外務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ地區ヲ定メ其地區内ニ住居スル帝國臣民ヲ以テ組成スル居留民團ヲ設立スルコトヲ得

居留民團ノ廢置分合又ハ其ノ地區ノ變更ニ關スル事項

ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 居留民團ハ法人トシ官ノ監督ヲ受ケ法令又ハ條約ノ範圍内ニ於テ其ノ公共事務及法令、條約又ハ慣例ニ依リ之ニ屬スル事務ヲ處理ス

第三條 居留民團ニ吏員及居留民會ヲ置ク

第四條 居留民會ノ組織、居留民團吏員又ハ居留民會議員ノ任免、選舉、任期、給與及職務權限等ニ關スル事項並居留民團ノ財産、負債、營造物、經費ノ賦課徵收及會計ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 居留民團ハ領事、公使及外務大臣順次ニ之ヲ監督ス但シ土地ノ情況ニ依リ第二次ノ監督ヲ省略スルコトヲ得

前項監督ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 居留民團設立ノ際其ノ地區内ニ住居スル帝國臣民ノ共同財産及負債ノ處分其ノ他本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

居留民團法施行規則

三十九年七月 統監府令第二十一號

居留民團法施行規則

第一章 總則

第一條 居留民團ノ廢置分合又ハ其ノ地區並名稱ノ變更

附錄 居留民團

ハ統監之ヲ定ム

前項ノ處分ニ付財産處分ヲ要スルトキハ關係居留民會又ハ之ニ準スヘキモノノ意見ヲ徵シ理事官之ヲ定ム

第二條 居留民團ノ地區内ニ住居スル者ハ其ノ居留民トス

居留民ハ居留民團ノ財産及營造物ヲ使用スル權利ヲ有シ其ノ負擔ヲ分任スル義務ヲ負フ

第三條 居留民團ハ法令ノ定ムル所ニ依リ其ノ地區内ニ住居スル外國人ヲ保護スル義務ヲ負フ

第四條 居留民團ハ居留民ノ權利義務及居留民團ノ事務ニ關シ居留民團規則ヲ設クルコトヲ得

第二章 居留民團吏員

第五條 居留民團ニ民長一名ヲ置ク

民長ハ統監之ヲ任免ス

第六條 民長ハ居留民團ヲ統轄シ之ヲ代表シ及其ノ行政事務ヲ擔任ス

第七條 民長ハ居留民團吏員ヲ指揮監督シ及ヒ之ニ對シ懲戒ヲ行フ其ノ懲戒處分ハ十圓以下ノ過怠金及譴責トス

第八條 居留民團ニ助役及會計役各一名ヲ置ク但シ居留民團規則ヲ以テ之ヲ置カサルコトヲ得

助役及會計役ノ任期ハ三箇年トス

助役及會計役ハ民長ノ推薦ニ依リ居留民會之ヲ選定シ

理事官ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 助役ハ民長ヲ補助シ民長事故アルトキ之ヲ代理ス

第十條 會計役ハ居留民團ノ會計事務ヲ掌ル

會計役ヲ置カサル居留民團ニ在リテハ前項ノ事務ハ理事官ノ定ムル所ニ依リ民長、助役又ハ書記之ヲ兼掌ス

第十一條 居留民團ハ會計役又ハ前條第二項ノ規定ニ依リ會計事務ヲ掌ル者事故アルトキ之ヲ代理スヘキ吏員ヲ選定シ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

第十二條 居留民團ニ書記ヲ置キ民長之ヲ任免ス

書記ノ定數ハ居留民團規則ヲ以テ之ヲ定ム

第十三條 書記ハ民長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

助役ヲ置カサル居留民團ニ於テ民長事故アルトキハ會計役、會計役ナキトキハ首席書記之ヲ代理ス

第十四條 居留民團吏員ハ有給トス但シ官吏ニシテ民長ニ任命セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第三章 居留民會

第十五條 居留民會議員ノ定數ハ八人以上二十四人以下ニ於テ理事官之ヲ定ム

第十六條 居留民ニシテ公權ヲ有スル滿二十五年以上ノ男子一年以來其居留民團額年額五回以上ヲ納ムル者ハ選舉權ヲ有ス但シ禁治產者及準禁治產者ハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 居留民會議員ノ選舉ハ有效投票ノ多數ヲ得タル者ヲ當選者トス但シ其ノ得票ノ數五票ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ規定ニ依リ當選者ヲ定ムルニ當リ得票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取り年齡同シキトキハ民長抽籤シテ之ヲ定ム

民長ハ當選者ニ當選ノ旨ヲ告知スヘシ

當選者其ノ當選ヲ辭セントスルトキハ當選ノ告知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ民長ニ之ヲ申立ツヘシ

當選者其ノ當選ヲ辭シタルトキハ第一項及第二項ノ規定ニ依リ之ヲ補フヘキ當選者ヲ定ム

第二十三條 民長ハ選舉錄ヲ調製スヘシ

選舉ヲ終リタルトキハ民長ハ直ニ選舉錄ノ謄本ヲ添ヘ之ヲ理事官ニ報告スヘシ

第二十四條 居留民會議員中關員ヲ生シ其ノ關員ノ數議員定數ノ三分ノ一以上ニ至リタルトキハ補關選舉ヲ行フ

補關議員ハ前任者ノ殘任期間在任ス

第二十五條 居留民會ハ民長ノ提出スル議案ヲ議決ス

左ノ事項ハ居留民會ノ議決ニ付ス

一 居留民團規則

二 居留民團費ヲ以テ支辨スヘキ事業

第十七條 選舉權ヲ有スル居留民ハ被選舉權ヲ有ス但シ左ニ掲クル者ハ此ノ限ニ在ラス

一 理事官ノ官吏及居留民團吏員

二 神官、神職、僧侶其ノ他諸宗教師

三 學校教員

第十八條 居留民會議員ハ名譽職トス

居留民會議員ノ任期ハ二箇年トス

第十九條 民長ハ選舉ノ期日五日前ヲ期トシ其ノ日ノ現在ニ依リ選舉人名簿ヲ調製スヘシ

選舉人名簿ニ登錄セラレサル者及登錄セラレタルモ選舉權ヲ有セサル者ハ選舉ニ參與スルコトヲ得ス

選舉人名簿調製後ニ於テ選舉ノ期日ヲ變更スルコトアルモ其ノ名簿ヲ用フ

選舉人名簿ハ其ノ調製ノ日ヨリ一箇年以内ニ於テ行フ選舉ニ之ヲ用フ

第二十條 民長ハ選舉ノ期日ヨリ少クモ七日日前ニ選舉會場、投票ノ日時及議員數ヲ告示スヘシ

民長ハ選舉事務ヲ統轄シ及選舉會場ノ取締ニ任ス

第二十一條 選舉ハ投票ニ依リ之ヲ行フ投票ニハ議員定數ノ二分ノ一ノ被選舉人ノ氏名ヲ記載シ選舉人自ラ民長ニ之ヲ差出スヘシ

投票ニハ選舉人ノ氏名ヲ記載スルコトヲ得ス

投票用紙ハ一定ノ式ニ依リ民長之ヲ調製シ及配付スヘシ

三歳入出豫算
四歳入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外義務ノ負擔及權利ノ拋棄
五 財產及營造物ノ管理方法
六 不動産ノ取得及處分
七 基本財產及積立金ノ設置及處分
八 居留民團ニ係ル訴訟及和解

第二十六條 居留民會ハ議員中ヨリ議長一名ヲ選舉スヘシ

議長事故アルトキハ臨時ニ議員中ヨリ假議長ヲ選舉スヘシ

第二十七條 議長ハ會議ヲ統轄シ議場ノ取締ニ任ス

第二十八條 居留民會ハ民長之ヲ召集シ及開閉ス

召集及會議ノ事項ハ開會ノ日ヨリ少クトモ三日前ニ之ヲ居留民會議員ニ告知スヘシ但シ急施ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 居留民會成立セス、召集ニ應セス又ハ會議規則ノ規定ニ依リ會議ヲ開クコト能ハサルトキハ民長ハ理事官ノ指揮ヲ請ヒ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スルコトヲ得居留民會ニ於テ其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セサルトキ亦同シ

居留民會ノ議決スヘキ事件ニ關シ其ノ閉會中ニ於テ臨時急施ヲ要スルモノアルトキハ民長ハ之ヲ專決處分ス

附錄 居留民團

前二項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ居留民會ニ報告スヘシ

第二項ノ處分ニ付異議アルトキハ居留民會ハ理事官ニ之ヲ申立ツルコトヲ得

第三十條 居留民會ハ會議規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

會議規則ニハ其ノ規則ニ違反スル議員ニ對シ居留民會ノ議決ニ依リ五日以内出席ヲ停止シ又ハ五圓以下ノ過怠金ヲ科スル規定ヲ設クルコトヲ得

第四章 財産及收入

第三十一條 居留民團ハ不動産又ハ積立金ヲ以テ基本財産ヲ設置スヘシ

第三十二條 居留民團ハ其ノ公益上必要アル場合ニ於テハ寄附又ハ補助ヲ爲スコトヲ得

第三十三條 居留民團ハ居留民團稅、使用料、手数料及夫役現品ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第三十四條 居留民ニ非スト雖居留民團ノ地區内ニ於テ土地、家屋、物件ヲ所有シ使用シ若ハ占有シ又ハ營業ヲ爲シ又ハ特定ノ行為ヲ爲ス者ハ其ノ土地、家屋、物件、營業若ハ其ノ收入ニ對シ又ハ行為ニ對シテ賦課スル居留民團稅ヲ納ムル義務ヲ負フ其ノ法人タルトキ亦同シ

第三十五條 數箇人又ハ居留民團ノ地區内ノ一部ニ對シ特ニ利益アル事件ニ關シテハ特別ノ負擔ヲ爲サシメ又ハ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ得

第三十六條 居留民團稅、使用料、手数料、過料、過怠金其ノ他居留民團ノ公課ヲ定期内ニ納付セサル者アルトキハ民長ハ期限ヲ指定シテ之ヲ督促スヘシ其ノ指定ノ期限内ニ之ヲ納付セサルトキハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ處分ス

前項ノ場合ニ於テ國稅徵收法第三十二條ニ當ル者ハ一年以下ノ輕禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

民長ハ納稅者中特別ノ事情アル者ニ對シ會計年度内ニ限り納稅延期ヲ許スコトヲ得其ノ年度ヲ越ユル場合ハ居留民會ノ議決ヲ經ヘシ

第三十七條 本則ニ依ル徵收金ノ追徵、還付及時效ニ付テハ國稅ノ例ニ依ル

第三十八條 居留民團稅、使用料、手数料及營造物又ハ財産ノ使用方法ニ關スル事項ハ居留民團規則ヲ以テ之ヲ定ム其ノ規則ニハ二十五圓以下ノ過料ヲ科スル規定ヲ設クルコトヲ得

民長ハ過料ニ處シ及之ヲ徵收ス其ノ處分ニ異議アル者ハ理事官ニ之ヲ申立ツルコトヲ得

第三十九條 居留民團稅ノ賦課ヲ受ケタル者其ノ賦課ニ付違法又ハ錯誤アリト認ムルトキハ納稅告知書交付ノ日ヨリ二箇月以内ニ民長ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

使用料、手数料若ハ夫役現品ノ賦課及財産又ハ營造物ヲ使用スル權利ニ關シ異議アル者ハ民長ニ之ヲ申立ツルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ民長ノ爲シタル決定ニ異議アル者ハ理事官ニ之ヲ申立ツルコトヲ得

第四十條 居留民團ハ居留民會ノ議決ヲ經テ居留民團債ヲ起スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ同時ニ起債ノ方法、利率及償還ノ方法ニ付議決ヲ經ヘシ

居留民團ハ豫算内ノ支出ヲ爲ス爲居留民會ノ議決ヲ經テ一時ノ借入金ヲ爲スコトヲ得此ノ借入金ハ其ノ會計年度内ノ收入ヲ以テ償還スヘシ

第五章 豫算及決算

第四十一條 歳入出豫算ハ民長之ヲ調製シ會計年度開始ノ日ヨリ少トモ一箇月前ニ之ヲ居留民會ニ提出スヘシ

民長ハ居留民會ノ議決ヲ經テ既定豫算ノ追加又ハ更正ヲ爲スコトヲ得

附錄 居留民團

居留民團ハ豫備費ヲ設クヘシ豫備費ハ居留民會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

居留民團ハ繼續費ヲ設クルコトヲ得

居留民團ハ特別會計ヲ設クルコトヲ得

豫算ノ要領ハ之ヲ告示スヘシ

第四十二條 會計役ハ民長ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得又民長ノ命令アルモ支出ノ豫算ナキトキ又ハ豫備費支出其ノ他財務ニ關スル規定ニ依ラサルトキ亦同シ

前項ノ規定ハ第十條第二項ノ規定ニ依リ會計役ノ事務ヲ兼掌スル吏員ニ之ヲ準用ス

第四十三條 居留民團ノ出納ハ毎會計年度四回以上検査ヲ爲スヘシ

前項ノ検査ハ居留民會ニ於テ互選シタル二名以上ノ委員之ヲ行フ

第四十四條 決算ハ居留民會ノ認定ニ付シ其ノ認定ヲ經タルトキハ之ヲ理事官ニ報告シ及其ノ要領ヲ告示スヘシ

第四十五條 居留民團ノ會計年度、支拂金ニ關スル時效及出納閉鎖期限ハ國庫ノ例ニ依ル

第六章 居留民團行政ノ監督

第四十六條 本則ニ規定スル異議ノ申立ハ處分又ハ決定ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ爲スヘシ但シ本則中別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

異議ノ申立アルモ處分ノ執行ハ之ヲ停止セス但シ理事官ニ於テ必要ト認ムルトキハ之ヲ停止スルコトヲ得

附錄 居留民團

第四十七條 理事官ハ居留民團ノ議決若ハ選舉其ノ權限ヲ越エ法令若ハ會議規則ニ違反シ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ其ノ議決又ハ選舉ヲ取消スコトヲ得

第四十八條 理事官ハ居留民團行政ヲ監督スル爲必要ナル命令ヲ發シ處分ヲ爲スコトヲ得

第四十九條 居留民團ニ於テ法令ニ依リ負擔シ又ハ理事官ノ職權ニ依リ命スル費用ヲ豫算ニ載セサルトキハ理事官ハ理由ヲ示シテ其ノ費用ヲ豫算ニ加フルコトヲ得

第五十條 統監ハ居留民團ノ解散ヲ命ス此ノ場合ニ於テハ二箇月以内ニ更ニ議員ヲ選舉スヘシ

理事官ハ期間ヲ定メ居留民團ノ停會ヲ命スルコトヲ得

第五十一條 左ニ掲クル事項ハ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

一 居留民團規則

二 居留民團費ヲ以テ支辨スヘキ事業

三 基本財産ノ設置處分及管理方法

四 特別負擔及不均一賦課ノ方法

五 第三十二條ニ依ル寄附又ハ補助

六 居留民團ノ起債及其ノ方法、利率及償還方法

七 歲入出豫算

八 繼續費

九 特別會計

十 歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外義務ノ負擔及權利ノ拋棄

第五十二條 居留民團行政ニ關シ理事官ノ認可ヲ要スル事項ニ付テハ理事官ハ申請ノ趣旨ニ反セサル範圍内ニ於テ之ヲ更正シテ認可スルコトヲ得

第五十三條 理事官ハ居留民團吏員ニ對シ懲戒ヲ行フ其ノ懲戒處分ハ解職、二十五圓以下ノ過怠金又ハ譴責トス但シ民長ニ對スル解職ハ統監之ヲ行フ

附則

第五十四條 居留民團設立ノ場合ニ於テ理事官ハ助役及會計役ノ選任アル迄臨時ニ其ノ代理ヲ命ス

第五十五條 居留民團設立ノ場合ニ於テ居留民團ノ議決スヘキ事項ニシテ急施ヲ要スルモノハ其成立ニ至ル迄理事官ノ認可ヲ得テ民長之ヲ行フ

第五十六條 居留民團ハ其ノ設立ノ日ヨリ二箇月以内ニ居留民會議員ノ選舉ヲ行フヘシ此ノ場合ニ於ケル選舉人及被選舉人ノ資格ニ付テハ第十六條及第十七條ノ規定ヲ準用ス

第五十七條 居留民團設立前居留民團體ニ於テ有シタル一切ノ權利義務ハ之ヲ居留民團ニ承繼シタルモノト看做ス

第五十八條 居留民團設立前居留民團體ニ於テ定メタル豫算アルトキハ居留民團ノ理事官ノ認可ヲ得テ當該會計年度限り其ノ豫算ニ依ルコトヲ得

第五十九條 本則ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(五) 裁判

韓國ニ於ケル裁判事務ニ關スル制

三十九年六月 法律第五十六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル韓國ニ於ケル裁判事務ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 理事官ハ其ノ管轄區域内ニ於ケル訴訟事件ノ始審及非訟事件ノ事務ヲ行フ

第二條 統監ハ一ノ理事官ノ管轄ニ屬スル裁判事務ノ一部ヲ他ノ理事官ニシテ取扱ハシムルコトヲ得

第三條 理事官ハ理事官又ハ副理事官單獨ニ審問裁判ス

第四條 統監府法務院ハ終審トシテ理事官ノ裁判ニ對スル上訴ヲ管轄ス

第五條 統監府法務院ハ評定官三人ヲ以テ組織シタル部ニ於テ審問裁判ス

評定官中上席ノ者ヲ以テ裁判長トス

第六條 五年以上判事、檢事、帝國大學法科大學教授、理事官、副理事官又ハ辯護士タル者ニ非サレハ評定官又ハ檢察官タルコトヲ得ス

第七條 理事官ハ理事官職員ヲシテ其ノ應ノ檢察事務ニ付檢事ノ事ヲ行ハシム

第八條 統監府法務院ノ檢察事務ハ檢察官之ヲ行フ但シ

附錄 裁判

檢察官事故アルトキハ法務院長ハ評定官中ノ一人ヲシテ之ヲ代理セシム

第九條 裁判所構成法中法律上ノ共助ニ關スル規定ハ理事官及統監府法務院ト裁判所トノ間、裁判所及臺灣總督府法院共助法ノ規定ハ理事官及統監府法務院ト臺灣總督府法院トノ間ニ於ケル法律上ノ共助ニ之ヲ準用ス

外國裁判所ノ囑託ニ因リ共助法ノ規定ハ外國裁判所ノ囑託ニ因リ理事官及統監府法務院ニ於テ行フ法律上ノ補助ニ之ヲ準用ス

第十條 本法ニ規定アルモノノ外裁判事務ニ關シ韓國ニ於テ適用スル法律ニ付テハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行前受理シタル訴訟事件及非訟事件ニ關シテハ總テ從前ノ例ニ依ル

(明治三十九年勅令第六十號ヲ以テ同年六月二十七日ヨリ施行ス)

韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則

三十九年六月 勅令第六十六號

朕韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布

セシム

韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則

第一章 總則

第一條 裁判事務ニ關スル法令中主務大臣ノ職務ニ屬スルモノハ統監之ヲ行フ

第二條 理事廳ニ在リテハ書記ノ職務ニ屬スルモノハ其ノ應ノ屬ヲシテ之ヲ行ハシム

第三條 執達吏ノ職務ニ屬スルモノハ理事廳屬又ハ警察官吏ヲシテ之ヲ行ハシム

第四條 忌避又ハ回避ニ關スル規定ハ理事廳及法務院職員ニ之ヲ適用セス

第二章 刑事手續

第五條 刑事事件ノ取扱ハ理事廳ニ於テ刑事訴訟法中地方裁判所ニ關スル規定ヲ準用シ法務院ニ於テハ同法中控訴裁判所ニ關スル規定ヲ準用ス

第六條 官吏、公吏ノ作ルヘキ書類ニシテ刑事訴訟法第二十條、第二十一條其ノ他同法規定ノ形式ニ瑕疵アルモノニ付テハ理事廳又ハ法務院ハ當該吏員ヲシテ之ヲ補正セシムルコトヲ得

第七條 檢事ノ職務ヲ行フ職員ハ急速ノ處分ヲ要スルモノト思料スルトキハ公訴提起前ニ限リ檢證、差押、搜索又ハ被告人、證人、鑑定人ノ訊問等豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ拘留狀ヲ發シ罰金及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

第八條 刑事訴訟法第七十八條第一項及同法第四百條第二項中市町村長立會ニ關スル規定ハ之ヲ適用セス但シ此ノ場合ニ於テハ立會人二名アルヲ要ス

第九條 理事廳又ハ法務院ハ證據蒐集ヲ要スルトキハ警察官ヲシテ檢證、差押、搜索又ハ證人ノ訊問ヲ爲シ及鑑定ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ警察官ハ罰金及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

第十條 受命官又ハ受託官ハ臨檢ノ場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ理事廳又ハ法務院ノ決定ヲ俟タズ差押、搜索又ハ被告人、證人ヲ訊問シ及鑑定ヲ命スルコトヲ得

第十一條 被告人、證人又ハ鑑定人ヨリ期日ニ出頭スヘキ旨ヲ記載シタル書面ヲ差出シ又ハ口頭ヲ以テ次回ノ出頭ヲ命シタルトキハ呼出狀又ハ召喚狀ヲ發シタルト同一ノ效力ヲ生ス但シ口頭ニテ出頭ヲ命シタルトキハ其ノ旨ヲ調書又ハ公判始末書ニ記載スヘシ

第十二條 理事廳又ハ法務院ハ公判開廷前ト雖檢證、差押、搜索又ハ證人、鑑定人ノ呼出ヲ決定スルコトヲ得

第十三條 重罪事件ニ付テハ刑事訴訟法第二百三十七條及第二百六十四條第三項ノ規定ハ之ヲ適用セス但シ無

期流刑、無期徒刑又ハ死刑ニ該當スヘキ事件ハ此ノ限ニ在ラス

理事廳又ハ法務院ニ於テハ重罪、輕罪ヲ問ハス被告事件ノ模様ニ因リ辯護人ヲ付スルコトヲ得

第十四條 證據ト爲ス書類ハ當事者異議ナキトキハ其ノ要旨ヲ告知シテ朗讀ニ代フルコトヲ得

主刑一年以下ノ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ該當スヘキ事件ニシテ被告人自白シタルトキハ他ノ證據ノ取調ヲ爲ササルコトヲ得

第十五條 再審ノ訴及非常上告ハ法務院ヲ以テ上告裁判所トス

前項ノ場合ニ於テハ刑事訴訟法中之ニ關スル規定ヲ準用ス但シ再審ノ原由タルコトヲ認メタルトキト雖破毀、移送ノ手續ヲ爲サスシテ直ニ裁判ヲ爲スコトヲ得

第三章 民事手續

第十六條 民事事件ノ取扱ハ理事廳ニ於テハ民事訴訟法中區裁判所ニ關スル規定ヲ準用シ法務院ニ於テハ同法中控訴裁判所ニ關スル規定ヲ準用ス

第十七條 辯護士ノ在ルトキト雖當事者ハ理事廳又ハ法務院ノ許可ヲ得テ訴訟能力者ヲ代理人ト爲スコトヲ得

前項ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第十八條 辯護士ヲ訴訟代理人ニ選任スヘキ場合ニ於テ辯護士ノ在ラサルトキハ理事廳又ハ法務院ニ於テ適當

ト認メタル訴訟能力者ヲ選任スルコトヲ得

第十九條 書記ノ職務ヲ行フ者其ノ所屬廳内ニ於テ送達ヲ受クヘキ者ニ書類ヲ交付シ受取證ヲ差出サシメタルトキハ送達ヲ爲シタルト同一ノ効力ヲ生ス

第二十條 期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ハ當事者合意ノ場合ニ於テモ相當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ許サス

第二十一條 訴訟關係人カ期日ニ出頭スヘキ旨ヲ記載シタル書面ヲ差出シタルトキハ期日呼出ヲ爲シタルト同一ノ効力ヲ生ス

第二十二條 再度ノ關席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ルコトヲ得

第二十三條 受命官又ハ受託官カ檢證ヲ爲ス場合ニ於テハ當事者ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ理事廳若ハ法務院ノ決定ヲ俟タズ檢證事項ニ關シ證人ヲ訊問シ及鑑定ヲ命スルコトヲ得

第二十四條 證人及鑑定人ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二十五條 法務院ニ於テ事件ヲ原審ニ差戻スヘキ場合ニ於テモ當事者合意ノ申立アルトキハ直ニ本案ノ辯論及判決ヲ爲スコトヲ得

附則

本令ハ明治三十九年六月二十七日ヨリ之ヲ施行ス

附錄 銀行 (六) 銀行

韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル制

四十年三月 勅令第三十一號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 韓國ニ於テ銀行業ヲ營ムトスルモノハ統監ノ定ムル規定ニ從ヒ統監ノ定ムル事項ヲ具シテ認可ヲ受クヘシ
前項ノ認可ヲ受タル事項ヲ變更セムトスルトキハ統監ノ認可ヲ受クヘシ
銀行業ヲ營ム會社カ韓國ニ於テ合併シ又ハ組織ヲ變更セムトスルトキハ統監ノ認可ヲ受クヘシ
第二條 銀行業ヲ營ム爲設立スル會社ハ金錢以外ノ財産ヲ以テ出資ノ目的ト爲スコトヲ得ス
第三條 銀行業ヲ目的トスル株式會社ノ發起人、取締役又ハ株式合資會社ノ無限責任社員ハ第一條ノ認可ヲ受ケタル後ニ非サレハ株式ノ引受又ハ株主ノ募集ヲ爲スコトヲ得ス
第四條 銀行カ第一條第一項ノ認可ヲ受ケタル後一箇年內ニ營業ヲ開始セザルトキハ認可ノ効力ヲ失フ
第五條 銀行ハ毎月ノ營業實際報告、每半年ノ營業報

告書及貸借對照表ヲ統監ニ差出し且貸借對照表ヲ公告スヘシ
第六條 銀行ノ營業時間及休日ニ付テハ統監之ヲ定ム
第七條 統監ハ統監府又ハ其ノ所屬官署ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務及財産ノ狀況ヲ検査セシムルコトヲ得
第八條 統監ハ銀行カ法令、定款若ハ本令ニ基キテ發シタル命令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スル行爲アリト認ムルトキハ役員ノ更任ヲ命シ韓國ニ於テ營業業務ノ全部若ハ一部ノ停止ヲ命シ又ハ認可ヲ取消スコトヲ得
第九條 左ノ場合ニ於テハ營業主、發起人、業務執行社員、取締役又ハ韓國ニ於ケル代表者ヲ五十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス
一 第一條又ハ第三條ニ違反シタルトキ
二 第五條ノ報告若ハ公告若ハ其ノ報告若ハ公告中ニ於テ虛偽ノ事實ヲ記載シ若ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ
三 第七條ニ依ル検査ヲ避ケ又ハ之ヲ拒ミタルトキ
前項ノ過料ニ關シテハ非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス
第十條 本令ニ定ムルモノノ外必要ナル規定ハ統監之ヲ定ム

附則

本令施行ノ際現ニ韓國ニ於テ銀行業ヲ營ムモノ一箇月以內ニ第一條第一項ノ認可事項ヲ統監ニ届出タルトキハ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

韓國ニ於ケル銀行業ニ關スル規則

四十年五月 改正 四一一年 統監府令第二十號 統監府令七號

第一條 個人ニシテ銀行業ヲ營ムトスル者ハ左ノ事項ヲ具シ統監ノ認可ヲ受ヘシ
一 商號
二 本店及支店ノ所在地
三 資本金額
四 營業科目
第二條 銀行業ヲ目的トスル會社ヲ設立セムトスル者ハ定款、營業科目及株式ヲ募集スルトキハ其ノ方法ヲ具シ統監ノ認可ヲ受クヘシ
前項ノ會社カ成立シタルトキハ之ヲ統監ニ届出ツヘシ
第三條 韓國外ニ本店ヲ有スル銀行ニシテ韓國ニ於テ其ノ業務ヲ營ムトスルトキハ前二條ノ規定ニ準シ統監ノ認可ヲ受クヘシ
前項ノ認可ヲ受ケタル銀行ハ韓國ニ於ケル代表者ヲ定ムヘシ
第四條 銀行ハ其ノ商號中ニ銀行ノ文字ヲ用ウヘシ
銀行ニ非サルモノハ其ノ名稱中ニ銀行ノ文字ヲ用井ルコトヲ得ス
第五條 銀行ハ銀行券其ノ他何等ノ名稱ヲ用ユルニ拘ラズ通貨ニ類似スル無記名式一覽拂ノ證券ヲ發行スルコ

トヲ得ス

第六條 會社ニシテ合併ヲ爲サムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ統監ノ認可ヲ受クヘシ
一 合併ニ關スル總會ノ決議錄
二 合併ニ關スル契約書
三 合併ニ依リ存続スル會社又ハ新ニ設立スル會社ノ定款
四 各會社ノ貸借對照表
五 其ノ他合併ニ關シ必要ナル書類
第七條 會社カ其ノ組織ヲ變更セムトスルトキハ組織變更ニ關スル決議書、貸借對照表及定款ヲ添ヘ統監ノ認可ヲ受クヘシ
第八條 明治四十年勅令第三十一號第五條ノ半箇年ハ一月ヨリ六月迄及七月ヨリ十二月迄トシ之ヲ銀行ノ營業年度トス
營業報告及貸借對照表ハ附屬甲號様式ニ依リ調製シ七月及一月中ニ之ヲ差出スヘシ但シ株式會社及株式合資會社ニ在リテハ商法第九十二條及第二百三十六條ニ依リ總會ノ承認ヲ得タル日ヨリ三週間以內ニ之ヲ差出スヘシ
貸借對照表ノ公告ハ前項ノ期間內ニ二日以上銀行ノ本店及支店ヲ管轄スル理事廳所在地ノ新聞紙ニ掲載スヘシ

每月營業實際報告ハ附屬乙號様式ニ依リ調製シ翌月十五日迄ニ之ヲ差出スヘシ

第二項及第四項ノ外銀行ハ統監ノ命スル所ニ從ヒ何時ニテモ其ノ業務ニ關スル報告ヲ爲スヘシ

第九條 銀行ノ營業時間ハ左ノ如シ
五月ヨリ十月迄 午前九時ヨリ午後三時ニ至ル
十一月ヨリ四月迄 午前十時ヨリ午後四時ニ至ル
但シ土曜日ハ午後一時ニ至ル

銀行ハ統監ノ認可ヲ受ケ前項ノ營業時間ヲ變更スルコトヲ得

第十條 銀行ノ休日ハ帝國ノ祭日、祝日、韓國ノ乾元節、開國紀元節及日曜日並其ノ營業地ニ於ケル一般ノ休日トス但シ已ムヲ得サル事故アルトキハ理事官ノ認可ヲ受ケ豫メ第八條ノ新聞紙ニ公告シタル上休業スルコトヲ得

第十一條 銀行ハ其ノ營業主、業務執行社員、取締役及代表者ノ氏名住所及履歷ヲ統監ニ届出ツヘシ

第十二條 銀行カ其ノ營業ヲ開始シタルトキハ之ヲ統監ニ届出ツヘシ其ノ支店ノ業務ヲ開始シタルトキ亦同シ

第十三條 第二條第二項、第十一條及第十二條ニ依ルノ外銀行ハ其ノ登記スヘキ事項ヲ統監ニ届出ツヘシ

第十四條 銀行カ解散シ支拂ヲ停止シ又ハ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ營業主、業務執行社員、取締役、代表者、清算人又ハ破産管財人ヨリ之ヲ統監ニ届出ツヘシ

第十五條 銀行カ認可ヲ受ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ其ノ事由ヲ具シ統監ノ認可ヲ受クヘシ

第十六條 銀行ハ其ノ届出タル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ之ヲ統監ニ届出ツヘシ

第十七條 本令ニ依リ統監ニ差出スヘキ書類ハ理事官ヲ經由スヘシ

第十八條 第四條及第五條ノ規定ニ違反シタルトキハ營業主、業務執行社員、取締役又ハ代表者ヲ五十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス

附則

第十九條 本令ハ明治四十年五月十日ヨリ之ヲ施行ス

第二十條 本令施行ノ際現ニ韓國ニ於テ銀行業ヲ營ムモノ一箇月以内ニ本令ニ規定シタル認可事項ヲ統監ニ届出タルトキハ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ニ關スル制

三十八年三月
勅令第七十三號

株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ハ外務大臣及大藏大臣ノ監督ニ屬ス

第二條 株式會社第一銀行ハ韓國貨幣整理事務、韓國官

金取扱及銀行券發行ニ關スル業務ニ付テハ韓國京城ニ設置シタル支店ヲ以テ韓國總支店ト爲シ韓國各支店、出張所及代理店ヲ總轄セシムヘシ

第三條 株式會社第一銀行ハ支店、出張所若ハ代理店ヲ韓國ニ設置シ又ハ之ヲ廢止セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ株式會社第一銀行ニ命シテ韓國ニ支店又ハ出張所ヲ設置セシムルコトヲ得

第四條 株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ營業業務ノ爲ニ資本金額ヲ定メテ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 株式會社第一銀行ハ韓國各支店及出張所ニ於テ營業ヘキ業務ノ種類及方法ヲ定メテ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 株式會社第一銀行ハ每營業年度韓國各支店及出張所ノ損益勘定ヲ集計シ其ノ總益金ヨリ總損金ヲ差引タル利益金ノ二十分ノ一以上ヲ少クトモ韓國ニ於ケル營業資本金ノ半額ニ達スル迄積立テ特別準備金トシテ京城支店ニ備ヘ置クヘシ

第七條 株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ公私一切ノ取引ニ無制限ニ通行スヘキ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第八條 株式會社第一銀行カ韓國ニ於テ發行シタル銀行券ハ韓國各支店及出張所ニ於テ營業時間中何時ニテモ通貨ヲ以テ引換フヘシ但シ京城以外ノ支店及出張所ニ

於テハ京城支店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其ノ引換ヲ延期スルコトヲ得

第九條 株式會社第一銀行京城支店ハ韓國ニ於ケル其ノ銀行券發行總高ニ對シ同額ノ金貨、金銀地金及日本銀行兌換銀行券ヲ置キ其ノ引換準備ニ充ツヘシ但シ銀地金ハ引換準備總額ノ四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

前項準備ニ依ルノ外株式會社第一銀行ハ一千萬圓ヲ限リ國債證券、商業手形、其ノ他確實ナル證券ヲ保證トシテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ準備價格ハ主務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムヘシ

經濟上ノ景況ニ依リ必要アル場合ニ於テハ主務大臣ノ特ニ指定スル條件ニ依リ前二項ノ外更ニ銀行券ノ發行ヲ爲スコトヲ得

主務大臣ハ韓國貨幣整理ノ經過又ハ金融ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ銀行券ノ種類及發行高ヲ制限スルコトヲ得

第十條 銀行券ノ様式及種類ニ關シテハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十一條 銀行券ノ所有者ハ韓國ニ於ケル株式會社第一銀行ノ財産ニ付先取特權ヲ有ス

第十三條 主務大臣ハ株式會社第一銀行カ韓國ニ於テ營業業務ニ關シ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ其ノ韓國各支店、出張所及代理店ノ金庫、券書庫、帳簿其ノ他ノ文書ヲ檢査シ又ハ諸般ノ景況及計算ニ關スル報告書ヲ差出サシムルコトヲ得

第十四條 主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ株式會社第一銀行カ韓國ニ於テ營業貸付、割引ノ金額及方法又ハ其ノ利子歩合其ノ他爲換料等ニ關シ相當ノ制限ヲ爲スコトヲ得

第十五條 主務大臣ハ株式會社第一銀行監理官ヲ置ク監理官ハ主務大臣ノ指揮ヲ承ケ株式會社第一銀行韓國各支店、出張所及代理店ノ業務ヲ監視ス

第十六條 株式會社第一銀行監理官ハ何時ニテモ株式會社第一銀行韓國各支店、出張所及代理店ノ金庫、券書庫、帳簿其ノ他ノ文書ヲ檢査シ又ハ諸般ノ景況及計算ニ關スル報告書ヲ差出サシムルコトヲ得

第十七條 株式會社第一銀行ハ銀行券ノ發行額及引換準備ニ關スル平均高表ヲ公告スヘシ公告ノ方法ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 株式會社第一銀行ノ定款ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第十九條 株式會社第一銀行ハ認可ヲ受ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ更ニ認可ヲ受クヘシ

第二十條 主務大臣ハ株式會社第一銀行カ法令又ハ定款ニ背戾シ若ハ本令ニ基キテ發行シタル命令ニ違反シ其ノ他公益ヲ害スル行爲アリト認ムルトキハ役員ノ更任ヲ命シ、認可ヲ取消シ又ハ韓國ニ於テ營業業務ノ全部若ハ一部ノ停止ヲ命スルコトヲ得

附則

本令施行前株式會社第一銀行カ韓國ニ於テ發行シタル銀行券ハ本令ニ依リテ發行シタルモノト看做ス

(七) 土地

土地建物證明規則 三十九年十二月 統監府令第四十二號

土地建物證明規則

第一條 土地又ハ建物ヲ賣買、贈與、交換シ又ハ典當ト爲シタル場合ニ於テ其ノ當事者ノ一方カ韓國臣民ニ非スシテ韓國勅令土地家屋證明規則ニ依リ郡守又ハ府尹ノ證明ヲ受ケタルモノハ更ニ理事官ノ查證ヲ受クヘシ 當事者ノ雙方カ韓國臣民ニ非サルトキハ理事官ノ證明ヲ受クルコトヲ得

第二條 前條ノ查證及證明ニ付テハ別ニ定ムルモノノ外韓國勅令土地家屋證明規則及法部令土地家屋證明規則施行細則ノ規定ニ從フ但シ認證及手数料納付書ニ關ス

(八) 韓國法令

鑛業法 光武十年即明治三十九年七月 法部律 第一一三號

第一條 鑛業トハ鑛物ノ採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ 鑛物ノ種類ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 未タ採掘セサル鑛物、廢鑛及鑛滓ハ國ノ所有トス

第三條 鑛業ヲ爲サントスル者ハ願書ニ採掘セントスル鑛物ノ種類ヲ明記シ鑛區圖ヲ添ヘ農商工部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第四條 鑛業出願人ハ出願地ニ其ノ採掘セントスル鑛物ノ存在スルコトヲ證明スヘシ

第五條 鑛區ノ境界ハ直線ヲ以テ之ヲ定メ地表境界線ノ直下ヲ限トス其ノ面積ハ石炭ニ在リテハ五萬坪以上其ノ他ノ鑛物ニ在リテハ五千坪以上トシ共ニ百萬坪ヲ超ユルコトヲ得ス但シ鑛利保護上又ハ鑛區ノ分合上已ムヲ得サル場合ニハ百萬坪ヲ超ユルコトヲ得

第六條 皇城及離宮ノ周圍三百間以内又ハ皇陵園墓ノ火巢以內ノ場所ハ鑛區ト爲スコトヲ得ヌ又所轄官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ鑛業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス

陸海軍所轄ノ城堡、要港、火藥庫及各官廳ノ周圍三百

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

土地建物證明規則ニ依リ證明又ハ查證ヲ受ケタル典當ノ執行ニ付テハ韓國勅令土地家屋典當執行規則及同國法部令土地家屋典當執行規則施行細則ノ規定ニ從フ

附則

四十年二月 統監府令第三號

ルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條 查證手数料ハ五十錢トス

第四條 理事官カ查證ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ郡守又ハ府尹ニ通知スヘシ

理事官カ證明ヲ爲ス場合ニ於テハ土地建物證明臺帳ニ記載スヘキ事項ヲ先ツ郡守又ハ府尹ニ通知スヘシ

附則

本規則ハ明治三十九年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

間以内ノ場所ハ所轄官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ鑛區ト爲シ又ハ鑛業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス

第六條 鐵道、軌道、道路、運河、河湖、沼池、堤塘、社寺境内地、公園地、墳墓及建物ヨリ地表地下トモ其ノ周圍五十間以内ノ場所ニ於テハ所轄官廳ノ許可又ハ所有者若ハ關係人ノ承諾ヲ受クルニ非サレハ鑛物ヲ採掘シ又ハ鑛業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス

正當ノ理由ナクシテ前項ノ承諾ヲ拒ミタルトキハ鑛業權者ハ農商工部大臣ハ公益上其ノ事由ニ依リ必要アリト認ムルトキハ鑛業ヲ許可セシ

第七條 農商工部大臣ハ公益上其ノ事由ニ依リ必要アリト認ムルトキハ鑛業ヲ許可セシ

第八條 鑛業ヲ出願スル者同一ノ地ニ就キ二人以上アルトキハ願書到達ノ日ノ先ナル者ニ之ヲ許可ス同日ニ到達シタルモノニ付テハ農商工部大臣ニ於テ適當ト認ムル者ニ之ヲ許可ス

第九條 鑛業權者鑛區ノ合併分割又ハ訂正ヲ爲サントスルトキハ農商工部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

鑛區ノ位地形狀鑛利ヲ害スル場合ニハ農商工部大臣ハ其ノ訂正ヲ命スヘシ

第十條 鑛業權ハ農商工部大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ賣買讓與シ又ハ抵當ト爲スコトヲ得ス

鑛業權ハ相續ヲ爲スコトヲ得

第十一條 相當ノ鑛業ヲ爲サス又ハ危險ノ虞アリ若ハ公

益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ農商工部大臣ハ其ノ改良若ハ豫防ヲ命シ又ハ鑛業ノ停止ヲ命スヘシ

第十二條 農商工部大臣ハ左ノ場合ニ於テ鑛業ノ許可ヲ取消スコトヲ得

一 詐偽又ハ錯誤ニ依リ許可ヲ與ヘタルコトヲ發見シタルトキ

二 正當ノ理由ナクシテ一箇年以上休業シ又ハ許可ヲ得タル日ヨリ一箇年以内ニ事業ニ著手セザルトキ

三 第九條第二項又ハ第十一條ノ命令ニ從ハザルトキ

四 鑛業公益ヲ害スト認ムルトキ

五 鑛業ニ供用スヘキ土地ヲ其目的外ニ利用シタルトキ

六 納稅期限内ニ鑛產稅又ハ鑛區稅ヲ納付セザルトキ

七 (削除)

八 指定シタル期限内ニ罰金ヲ納付セザルトキ

第十三條 鑛業ノ許可ヲ取消サレ又ハ鑛業權消滅シ又ハ廢業シタルトキ農商工部大臣ニ於テ地表又ハ坑内ノ安全ヲ保ツ爲必要ト認ムル構築物ハ之ヲ除去スルコトヲ得ス

第十四條 鑛業出願又ハ鑛業ノ爲他人ノ土地ニ立入り測量又ハ調査ヲ必要トスル者ハ農商工部大臣ニ其ノ認可ヲ請求スルコトヲ得

認可書ヲ携帶スル者ニ對シテハ其ノ土地所有者又ハ關係人ノ拒ムコトヲ得ス但シ測量若ハ調査ノ爲ニ損害

及ホシタルトキハ請求者ハ其ノ賠償ヲ爲スヘシ

第十五條 鑛業權者鑛業上ノ必要アルトキハ土地所有者又ハ關係人ニ土地ノ貸渡ヲ強要スルコトヲ得但シ毎年借地料ヲ前拂スルニ非サレハ其ノ土地ヲ使用スルコトヲ得ス

土地ノ使用ノ爲ニ所有者又ハ關係人ニ損害ヲ及ホシタルトキハ鑛業權者ハ其ノ賠償ヲ爲スヘシ

第十六條 鑛業權者ニ於テ貸渡ヲ受ケタル土地ヲ三箇年以上使用スルノ目的アルカ又ハ三箇年以上ノ使用シタルトキハ土地使用者ハ鑛業權者ニ其ノ土地ノ買取ヲ強要スルコトヲ得

土地ノ一部ノ買取ニ依リテ殘地ヲ從來用キタル目的ニ供スルコト能ハザルトキハ土地所有者ハ其ノ全部ノ買取ヲ強要スルコトヲ得

第十七條 第十四條乃至第十六條ノ規定ニ依ル土地貸渡、借地料、土地買取、賣買價格又ハ損害賠償ニ付協議調ハザルトキハ農商工部大臣ニ其ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

判定ニ要スル費用ノ負擔者及負擔額ハ農商工部大臣之ヲ定ム

第十八條 鑛業ニ關スル出願、請求又ハ届出ヲ爲ス者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ手数料ヲ納付スヘシ

第十九條 鑛業權者ハ鑛產稅及鑛區稅ヲ納付スヘシ

鑛產稅ハ鑛產物ノ價格ノ百分ノ一トシ鑛區稅ハ鑛區一千坪毎ニ一箇年五十錢トス但シ一千坪未滿ハ之ヲ一千坪ト看做ス

許可後滿一箇年間ニ係ル鑛區稅ハ前項ノ金額ノ半額トス

第二十條 鑛產稅ハ前年分ヲ毎年三月中ニ納付スヘシ但シ鑛業權ノ消滅若ハ讓渡ノ場合ニ於テハ即納スヘシ

鑛區稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ前納スヘシ但シ許可ノ年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ即納スヘシ

既納ノ鑛區稅ハ之ヲ還付セシ

第二十一條 農商工部大臣カ本法又ハ施行細則ニ基キ爲シタル處分ニ關シテハ政府ハ損害賠償ノ責ニ任セシ

第二十二條 鑛業權ヲ有セスシテ鑛物ヲ採掘シタル者又ハ詐偽ノ所爲ヲ以テ鑛業權ヲ得タル者ハ五十圓以上一千圓以下ノ罰金ニ處シ採掘シタル鑛物ハ之ヲ沒收ス既ニ之ヲ讓渡シ又ハ消費シタルトキハ其ノ代金ヲ追徵ス

第二十三條 第五條、第六條第一項及第十三條ノ規定ニ違背シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 前二條ノ處分ハ農商工部大臣之ヲ行フ

第二十五條 (削除)

第二十六條 本法ヲ施行スルニ必要ナル命令ハ農商工部大臣之ヲ定ム

第二十七條 第三條第一項第七條第十一條第十二條及第

附錄 韓國法令

二十九條ノ處分ハ日本統監ノ同意ヲ經ルコトヲ要ス
第二十八條 本法發布前ニ許可ヲ受ケ現ニ鑛業ニ從事ス
ル内國人ハ本法施行後二箇月以内ニ本法ニ依リ出願ス
ヘシ
前項ノ出願ニ關シテハ事業ノ程度ニ依リ本法第八條ノ
規定ニ拘ラス特ニ許可ヲ與フルコトアルヘシ
第二十九條 本法ノ規定ニ依ル處分ノ爲ニ本法發布前ニ
現ニ鑛業ニ從事スル内國人ニ損害ヲ與フルト認ムルト
キハ農商工部大臣ハ鑛業權者ヲシテ相當ノ補償ヲ爲サ
シムヘシ
第三十條 本法發布前ニ鑛業權ノ特許ヲ得現ニ鑛業ニ從
事スル外國人ハ其ノ特許條件ニ抵觸スルモノヲ除外
本法ノ規定ヲ遵守スヘシ
附則
第三十一條 本法ハ光武十年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス
第三十二條 本法ニ抵觸スル法令ハ總テ之ヲ廢止ス

砂鑛採取法

光武十年即明治三十九年七月
法律 第二十九號

第一條 砂鑛トハ砂金、砂錫及砂鐵ヲ謂フ
第二條 砂鑛ヲ採取セントスル者ハ農商工部大臣ノ許可
ヲ受クヘシ
第三條 砂鑛採取區ニ付テハ鑛業法第五條ノ規定ヲ準用

第四條 鐵道、軌道、道路、運河、堤塘、社寺境内地、
公園地及建物ノ周圍五間以内及墳墓ノ周圍三十間以内
ノ場所ニ於テハ地表地下ヲ區別セス所轄官廳ノ許可又
ハ所有者若ハ關係人ノ承諾ヲ受クルニ非サレハ砂鑛ヲ
採取シ又ハ砂鑛採取業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス
正當ノ理由ナクシテ前項ノ承諾ヲ拒ミタルトキハ砂鑛
採取權者ハ農商工部大臣ノ判定ヲ請求スルコトヲ得
第五條 砂鑛採取出願ノ許否ニ付テハ鑛業法第七條及第
八條ノ規定ヲ準用ス
第六條 砂鑛採取權ノ移轉又ハ抵當權設定ニ付テハ鑛業
法第十條ノ規定ヲ準用ス
第七條 砂鑛採取業ノ停止、改良及危險ノ豫防ニ付テハ
鑛業法第十一條ノ規定ヲ準用ス
第八條 砂鑛採取權ノ取消ニ付テハ鑛業法第十二條ノ規
定ヲ準用ス
第九條 砂鑛採取業ニ關シ他人ノ土地ヲ使用シ又ハ買取
スル場合ニ付テハ鑛業法第十四條乃至第十七條ノ規定
ヲ準用ス
第十條 砂鑛採取業ニ關スル出願、請求又ハ届出ヲ爲ス
者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ手数料ヲ納付スヘシ
第十一條 砂金採取權者ハ採取稅ヲ納付スヘシ砂錫又ハ
砂鐵ニ付テハ採取稅ヲ課セス

採取稅ハ採取許可區一千坪若ハ河床延長一町毎ニ一箇
年一回トス但シ一千坪未滿又ハ一町未滿ハ一千坪又ハ
一町ト看做ス
採取稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ納付スヘシ但シ許可
ノ年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ即納スヘシ
既納ノ採取稅ハ之ヲ還付セス

シ行フヘキ處分ハ日本統監ノ同意ヲ經ルコトヲ要ス
附則
第十七條 本法ハ光武十年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス
第十八條 本法ニ抵觸スル法令ハ總テ之ヲ廢止ス

土地建物證明規則

光武十年即明治卅九年十月
勅令 第六十五號

第十二條 農商工部大臣カ本法又ハ施行細則ニ基キ爲シ
タル處分ニ關シテハ政府ハ損害賠償ノ責ニ任セス
第十三條 採取權ヲ有セスシテ砂鑛ヲ採取シタル者又ハ
詐僞ノ所爲ヲ以テ採取權ヲ得タル者ハ五十圓以上五百
圓以下ノ罰金ニ處シ採取シタル砂鑛ハ之ヲ沒收ス既ニ
之ヲ讓渡シ又ハ消費シタルトキハ其ノ代金ヲ追徵ス
第三條及第四條第一項ノ規定ニ違背シタル者ハ二十圓
以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
前二項ノ處分ハ農商工部大臣之ヲ行フ
第十四條 (削除)
第十五條 本法施行ニ必要ナル命令ハ農商工部大臣之ヲ
定ム
第十六條 鑛業法第二十八條乃至第三十條ノ規定ハ砂鑛
採取業ニ之ヲ準用ス
第十六條ノ二 第二條、第七條、第八條ノ處分及第五條
ノ規定ニ依リ鑛業法第七條ノ規定ニ準シ行フヘキ處分
並第十六條ノ規定ニ依リ鑛業法第二十九條ノ規定ニ準

第一條 土地又ハ建物ヲ賣買、贈與、交換シ又ハ典當ト
爲シタルトキハ其ノ契約書ニ統首又ハ洞長ノ認證ヲ經
タル後郡守又ハ府尹ノ證明ヲ受クルコトヲ得
第二條 前條ノ證明ヲ受ケタル契約書ハ完全ノ證據トナ
リ且其ノ正本ニ依リ當該官廳ニ於テ直ニ執行スルノ力
ヲ有ス
第三條 郡守及府尹ハ土地建物證明臺帳ヲ備ヘ第一條ノ
證明ヲ爲シタルトキハ直ニ其ノ要項ヲ記載スヘシ
土地建物證明簿ノ一部又ハ全部滅失シタルトキハ所有
者又ハ典當權者ハ法部大臣ノ定メタル期限内ニ更ニ郡
守又ハ府尹ノ證明ヲ受クルニ非サレハ證明ノ効力ヲ失
フ但シ期限後ト雖其權利ト抵觸スヘキ證明ノ申請ナキ
間ハ再次證明ヲ受ケテ其ノ權利ヲ保存スルコトヲ得
第四條 何人ト雖郡守又ハ府尹ニ申請シテ土地建物證明
臺帳ノ閱覽ヲ求ムルコトヲ得
第五條 第一條ノ認證、證明及前條土地建物證明臺帳ノ

附錄 韓國法令

閱覽ヲ申請スル者ハ別ニ定ムル所ノ手数料ヲ納ムヘシ
 第六條 統首洞長郡守及府尹カ故意若ハ過失ニ因リ權利ヲ有セサル者ノ請求ニ基キ認證若ハ證明ヲ爲シタルトキ又ハ故ナク認證若ハ證明ヲ拒ミ之ヲ怠リタルトキ又ハ土地建物證明臺帳ニ不實ノ記載ヲ爲シタルトキ又ハ土地建物證明臺帳ノ閱覽ヲ拒ミタルトキハ之ニ因リテ損害ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ損害ヲ賠償スル責ニ任ス
 第七條 統首、洞長、郡守及府尹ノ處分ニ付キ異議アル者ハ其ノ監督官廳ニ遲滞ナク之ヲ申立ツヘシ
 第八條 當事者ノ一方カ外國人ニシテ本則ニ依リ證明ヲ受ケタル場合ニ於テハ日本理事官ノ查證ヲ受クヘシ若シ受ケサルトキハ第二條ノ効力ヲ生セサルモノトス
 當事者ノ雙方カ外國人ニシテ證明ヲ受ケムトスルトキハ日本理事官ニ申請スヘシ日本理事官ハ先ツ當該ノ郡守又ハ府尹ニ通知シ土地建物證明臺帳ニ記載ノ後證明スルモノトス

附則

第九條 本令ハ光武十年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス
 第十條 本令施行ニ關スル細則ハ法部大臣之ヲ定ム

土地建物典當執行規則

光武十年即明治三十
 九年十二月
 勅令第八十號

第一條 此ノ規則ハ土地建物證明規則ニ依リ證明ヲ受ケ

タル典當ニ付テ之ヲ適用ス
 第二條 土地建物ヲ目的トスル典當ノ執行ニ付テハ流質契約ヲ結フコトヲ得

第三條 土地建物ヲ目的トスル典當ニ在テハ債務者カ債務履行ノ期日ヲ經過スルモ其ノ債務ヲ償還セサルトキハ別段ノ契約ナキ限ハ債權者ハ其ノ典當ノ目的タル土地及建物ヲ競賣スルコトヲ得

第四條 競賣ヲ行フトキハ左ノ條件ヲ遵守スヘシ
 一 競賣前少クトモ三週日前ニ競賣ヲ行フヘキ旨ヲ債務者ニ通知シ且其ノ立會ヲ求ムヘキコト
 二 競賣ノ目的タル土地又ハ建物ノ所在地ニ於テ少クトモ二週日以上競賣ノ目的物及其ノ日時ヲ揭示及公告スルコト

三 競賣ハ目的タル土地又ハ建物ノ所在地ニ於テ之ヲ行フヘキコト但シ債務者ノ同意ヲ得タルトキハ他ノ場所ニ於テ競賣ヲ行フトコトヲ得ルコト
 四 競賣ニハ統首、洞長、面長等ノ公吏ノ立會ヲ求ムヘキコト若此等ノ者ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ丁年以上ノ男子二人ヲシテ立會ハシムヘキコト

五 債權者ハ競賣ノ始末書ヲ調成スヘキコト
 第五條 債務者カ前條第一號ノ請求アリタルニ拘ラス立會ヲ爲サザリシトキハ競賣ニ關シ何等ノ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第六條 債權者ハ第四條第一號ノ通知ヲ爲スト同時ニ其ノ典當ノ證明ヲ爲シタル官廳ニ競賣ヲ行フ旨ヲ届出ヘシ
 前項ノ届出ヲ受ケタル官廳ハ土地建物證明臺帳及其ノ保存セル契約書ニ付キ調査ヲ爲シ競賣ヲ許スヘカラスト認メタルトキハ直ニ其ノ競賣ヲ停止スヘシ

第七條 競賣ヲ終リタルトキハ債權者ハ其ノ競賣代金ヨリ債權額及競賣ノ實費ヲ控除シタル後其ノ殘金ヲ計算書ト共ニ債務者ニ還付スヘシ
 當事者ノ一方カ本國人ナル場合ニ於テ競賣代金カ債權額及競賣ノ實費額ニ達セサルトキハ債權者ハ其ノ差額ヲ債務者ニ請求スルコトヲ得ス但シ當事者ノ雙方カ外國人ナルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條 競賣ニ際シ競買ヲ申出ルモノナキトキ又ハ競買ノ申出アルモ其ノ金額カ債權額及競賣ノ實費額ニ達セサルトキハ債權者ハ其ノ債權ノ辨償ニ代テ競賣ノ目的タル土地又ハ建物ヲ取得スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ競賣ノ費用ハ債權者之ヲ負擔ス

第九條 左ノ場合ニ於テ債權者又ハ競買人ハ典當ノ證明ヲ爲シタル官廳ニ對シ認證ヲ求ムルコトヲ得
 一 債權者カ流質契約ニ依リ典當ノ目的タル土地又ハ建物ノ所有權ヲ取得シタルトキ
 二 競賣ニ依リ其ノ目的タル土地又ハ建物ヲ競落シタル

トキ
 三 債權者カ前條ニ依リ競賣ノ目的タル土地又ハ建物ヲ取得シタルトキ
 第十條 前條ノ認證ハ土地建物證明規則ニ依リ爲シタル證明ト同一ノ効力ヲ有ス

第十一條 此ノ規則ニ依リ典當ノ執行ニ關シ爭アルトキハ其ノ目的タル土地又ハ建物ノ所在地ヲ管轄スル郡守又ハ府尹之ヲ裁定ス
 債務者カ本國人ニシテ債權者カ外國人ナルトキハ當該日本理事官ノ同意ヲ得テ之ヲ裁定スヘシ
 債務者カ外國人ニシテ債權者カ本國人ナルトキハ當該郡守又ハ府尹ノ同意ヲ得テ日本理事官之ヲ裁定ス
 債務者及債權者ノ雙方カ外國人ナルトキハ日本理事官之ヲ裁定シ當該郡守又ハ府尹ニ通知スヘキモノトス

第十二條 此ノ規則ノ施行ニ關スル細則ハ法部大臣之ヲ定ム
 第十三條 此ノ規則ハ光武十一年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則

國有未墾地利用法

光武十年即明治四十年七月
 法律 第四號

第一條 國有未墾地トハ民有ニ非サル原野、荒蕪地、草

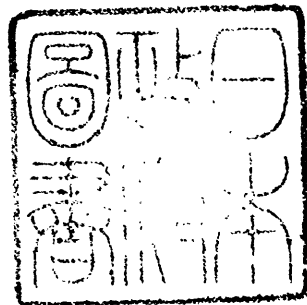
生地、沼澤地及干潟ヲ謂フ
 第二條 國有未墾地ハ本法ノ規定ニ依リ之ヲ貸付スルコトヲ得
 貸付期間ハ十箇年ヲ超ユルコトヲ得ス
 第三條 貸付ヲ受ケタル者豫定ノ事業ヲ成功シタルトキハ農商工部大臣ハ其ノ貸付ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ土地ヲ拂下又ハ付與スルコトヲ得
 第四條 貸付ヲ受ケムトスル者ハ農商工部大臣ニ出願シ許可ヲ受クヘシ
 第五條 貸付ヲ受ケタル者ハ農商工部大臣ノ定ムル所ニ依リ貸付料ヲ納付スヘシ
 農商工部大臣ハ公益其ノ他ノ事由ニ依リ必要ト認ムルトキハ貸付料ヲ減免スルコトヲ得
 第六條 貸付ヲ受ケタル者ハ農商工部大臣ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ其ノ權利ヲ賣買、讓與シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ス
 貸付ヲ受ケタル者ノ權利ハ之ヲ相續スルコトヲ得
 第七條 國有未墾地利用ノ方法公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ農商工部大臣ハ其ノ改良又ハ停止ヲ命スヘシ
 第八條 農商工部大臣ハ左ノ場合ニ於テ貸付ノ許可ヲ取消スコトヲ得
 一 詐偽又ハ錯誤ニ依リテ許可ヲ與ヘタルコトヲ發見シ

タルトキ
 二 貸付ヲ受ケタル日ヨリ一箇年以内ニ事業ニ著手セサルトキ又ハ著手後相當ノ事由ナクシテ豫定ノ進行ヲ爲ササルトキ
 三 前條ノ命令ニ從ハサルトキ
 四 貸付ノ許可ノ條件ニ違背シタルトキ
 五 法定又ハ指定ノ期間内ニ貸付料又ハ罰金ヲ納付セサルトキ
 第九條 本法ニ依リ拂下又ハ付與シタル土地ノ稅率ハ其ノ翌年ヨリ五箇年間ハ其ノ土地所在ノ道ニ於ケル最下級ニ屬スル土地ノ負擔ノ三分ノ一トス
 第十條 自己ノ便宜ニ依リ貸付ヲ受ケタル土地ヲ返還シタル場合又ハ第八條ノ規定ニ依リ貸付ノ許可ヲ取消シタル場合ニ於テ其ノ土地ニ存在スル構築物其ノ他ノ物件アルトキハ所有者ハ農商工部大臣ノ指定スル期間内ニ之ヲ除去スヘシ其ノ期間内ニ除去セサルトキハ其ノ物件ハ國ノ所有ニ歸ス
 第十一條 本法ノ規定ニ依ラスシテ國有未墾地ヲ利用シタル者ハ五圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十二條 本法ヲ施行スルニ必要ナル命令ハ農商工部大臣之ヲ定ム
 第十三條 本法及施行細則ノ規定ニ依ル處分ハ統監ノ同

意ヲ經ルヲ要ス
 第十四條 三町步(九千坪)ヲ超ヘサル國有未墾地ノ利用ニ付テハ當分ノ間舊慣ニ依リ本法ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

附 則

第十五條 本法發布前ニ國有未墾地ノ利用ノ許可ヲ受ケ其ノ效力尙存續スルモノニ付テハ本法施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ農商工部大臣ノ認證ヲ請フヘシ其ノ認證ヲ受ケタルトキハ第四條ノ許可ヲ受ケタルモノト見做スル認證ヲ受ケタル者其ノ事業ヲ成功シタルトキハ農商工部大臣ハ其ノ認證ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ土地ヲ拂下又ハ付與ス
 第十六條 本法ニ牴觸スル法令ハ之ヲ廢止ス
 第十七條 本法ハ光武十一年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス



明治四十一年十二月二十三日印刷
明治四十一年十二月二十五日發行

統 監 官 房

印刷者 高島幸三郎
東京市京橋區高代町四番地

印刷所 高島活版所
東京市京橋區高代町四番地